

---

# 変わらなくちゃね

りふえいる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変わらなくちゃね

### 【Nコード】

N6712S

### 【作者名】

りふえいる

### 【あらすじ】

日本の女子中学生、折笠華葉は……目覚めた時に、巨人の国ヨツンヘイムに誘われていた。

華葉は巨人の城砦ガストロプニルにある館で、医師のメングラッドとエイルの世話になり、おてんばなゲルズと魔犬のリーダーであるギフに出逢う。

長のベルゲルミルを始めとした巨人達と触れ合い、華葉は『力と強さ』について悩み、戦い……そして、自らの答えを出して成長していく。

## プロローグ

あたしは自分の部屋から、窓越しに星空を眺めていた。

「なに、やってんだろ」

つくづく、そう思う。

あたしは、不登校をしてる。

どうしてこうなっているのか、理由は単純。

いじめられてたんだ。

いきなり殴られたり、しかとされ、上履きには画びょうを入れられ、靴は隠されるし、教科書には落書きされてさ。もう散々だよ。

ネットにある学校の裏サイトでもさ、あたしのことを悪く言う人ばかり。

誰がやったんだろうね。そこに、あたしの番号とメールアドレスが公開されてたよ。

両親があたしのケータイを買い替えてくれるまでは、無言電話や酷い内容のメールが届いてた。

もう、誰も信じられない。

クラスメイトも、先生も、親だってどうでもいい。

誰も、あたしと本気で向き合ってくれないもの。

「はあ」

いじめっ子に立ち向かう勇気がない。そう言われれば、それまでだよ。

あたしは、弱虫だし、泣き虫だもん。ひとりじゃ、何もできない。ない。

「はあ」

溜息をついて、あたしはベッドの上で横になる。

「どうしたら、いいのかな」

高校受験を控えているのに、あたしは何をやってるんだろう。引きこもってはいるけどさ、勉強はできる。

公立高校ぐらいなら、楽に受かるはず。

ふう。どうせ高校に行けたって、小中とあたしをいじめてた人と  
出くわしちゃったら、もうおしまいだよね。

もっと、強くなりたいよ。

強くなって、どうするの？

いじめっ子を、この手で倒すの？ それじゃダメだよ。

暴力は、だいつきらいだもん。

「やめやめ」

横になつてると、自問自答しちゃう。

寝てたほうがマシだよね。

「ん？」

ふと、ケータイに着信があった。

あたしは枕元にあるそれを手に取り、開いてみる。

「っ」

メールだった。その内容は、見覚えがある。

『しねしねしねしねしねしね。一生引きこもって、親のすねを  
かじって死んじゃえよ』

ぎゅっ。あたしはケータイを強く握り締めた。

また、誰かがあたしのメアド調べて送信してきたんだ。

よくやるよね。引きこもっているあたしでストレス発散してさ、  
何がおもしろいの？

それに、どうやってあたしのメアド知ったの？

あたしは家において、両親としか連絡取り合っていないのに。

「なんでえっ!？」

あたしはケータイをゴミ箱へ投げ捨てた。外れたケータイは床に  
転がる。

また着信があった。両親に設定してある音じゃない。

「……っ」

怒りが込み上げてきた。

どうして、どうしてあたしだけこんな目に遭わなくちゃいけない

の？

あたしの、何が悪いの？ 弱いから？ 弱いから、あたしを傷つけるの？

「もう、いいよ」

考えても、つらいだけだよね。

もう、寝よう。こんな現実から逃げられるのは、夢ぐらいしかないんだから。

## 第1話

まぶしい。

あれ、カーテンを閉め忘れたのかな。

「あ、目が覚めましたね」

「ええ。一時はどうなることかと思いましたがよ」

ん？ ふたりの、女性の声がある。

ゆっくりとまぶたを上げたら。

「わ」

びっくりしたあ。

だって、見知らぬ女の子があたしの顔をのぞき込んでいたんだもん。

「驚かせてしまいましたね」

あたしの顔をじっと観察していたのは、銀髪の美少女。

手を唇に添えて微笑む。仕草がとっても上品だね。

その瞳も銀色で、くすみがなく輝いてる。あ、まつ毛長い。うらやましいなあ。

サラサラのながい髪はふたつの三つ編みにしてて、先端は白いリボンが留めてあった。

服装は白のワンピースで、その上に白のストールを羽織ってる。

どちらも肌が白いのもあって、よく似合ってるね。

「おはようございます」

「気分はどうでしょうか？」

ふたりは椅子に腰かけていて、あたしに微笑みをくれる。

「あ、こ、この通り元気です」

上半身を起こして、伸びをしながら答えた。

「ふうつ。それはよかったです」

「痛いところはありますか？」

こつ聞くのは、透き通った碧眼へきがんの女性。座ってるけど、隣の少女

より背が高いのが分かる。

しっとりまとめられたつややかな長い青髪は、普段からどいうケアをしているのか聞きたい。

服装は地味めな服と白のエプロン。ファッションとしてはそんなに目立つところはない。

こちらの方も肌が白く、どう手入れしているのか教えてほしいよ。

「だ、だいじょうぶです。あ、あの」

「はい？」

返事をしたのは、銀色の少女のほうだ。

「ここって、どこですか？」

「ヨツン Heimにある、ガストロプニルという城砦ですね。正確に言うなら、その敷地内にある私の館です」

「え、え？ ここって、日本じゃないの？」

えっと、あたしは部屋で寝てたはずだよ。

あ、これは夢か。夢なんだ。うん、なら納得できる。

「「にほん？」」

ありやりや。ふたりともきよとんとしてる。

「ん〜っと。あなたは、ミドガルズからやってきたのでは？」

「え、え？ な、なんですか。その、ミドなんとかってというのは銀色の少女が首を傾<sup>かし</sup>げてる。エプロンの女性もびっくりしてた。

あたしの返事がおかしい。みたいな感じだ。

「失礼ですが、お名前は？」

「あ、はい。あたしの名前は、折笠華葉<sup>おしかかながは</sup>って言います」

「かよ？」

「呼び捨てでどうぞ」

「そうですね。では、華葉。初めまして。私は、メングラッドと申します」

「めんぐらっど？」

外国人なんだあ。英語とか といっても、あたしの日本語通じ

てるし。

「はい。どのようにお呼びしても結構ですよ」

「ん〜。じゃあ、メグで」

「メグ？ ふふっ。いいですね、それ」

ポンっとな手を打ち合わせて、メグは満面の笑顔。

あっと思いつき出し、メグは隣のエプロンの女性を紹介してくれた。

「こちらはエイルです」

「わたくしはエイルと申します。以後、お見知り置きをお願いします」

「あ、はい。折笠華葉です。よろしくお願いします」

おたがいに頭をペコリ。その後、メグはエイルさんにこんなことを言った。

「エイル。私は王の間に報告へ向かいますね。華葉の世話をお願いします」

メグが腰を上げた時、エイルさんが彼女に声をかけた。

「承知しました。しかし、メングラッド様」

「はい？」

「最近は気が立っているようなので、あまり刺激なさらなくてくださいね」

「安心して。私に任せれば、だいじょうぶ」

胸を軽く叩いて、メグは自信あり気に微笑む。

それから軽やかに身を翻して、ここを退室した。

この部屋は石造りのようで、壁や天井もほとんど石だらけ。

床には赤いカーペットが敷いてあり、大きな窓もあるし、そこには白いカーテンがある。

部屋の出入口付近には、本や小瓶こびんが収納されている木製の棚、その脇に木箱に木の桶がいくつか置かれてた。

ベッドは、あたしが寝ているものも含めて三つある。

照明は小さな石で、テーブルの上とか、棚の上とか、あちこちに



ある。てか、よく分からないけど光ってるんだよね。どういう石なんだろう。ちょっと気になる。

「華葉さん。で、よろしいですか」

「あ、はい。なんででしょうか」

「あなたは昨日、城砦こぼろの南門の手前で倒れていたそうです。その番人であるフィヨルスヴィドが、あなたを見つけたのですよ」

「え？ は、はあ。そうなんですか」

「先日の天候は雨だったのですが、特に奇妙な点はありませんでした」

「そ、その……何を？」

「華葉さん。あなたは記憶喪失ではありませんか？」

え。マジで？ でもあたし、自分の名前だけでなく、いろいろなことを覚えてるんだよね。

断じて、記憶喪失ではないっ。

「ち、違います」

「然様うづらですか」

何となく、信じてもらえてないような気がする。

「ああ、そういえば言い忘れてました。あなたが倒れていた付近に珍しい品々があったそうです。それらは全部、巨人族の長であるベルゲルミル様が一時管理しています。メングラッド様は、それらの返却も申し出るはずですよ。少しお待ちくださいね」

「は、はい」

エイルさん、淡々（たんたん）と事をしゃべったらだんまりになった。

うーん。なんか気まずい。

「あの」

「なんですか？」

「その、ヨツン Heim とか言ってましたよね」

「ええ」

「ここは、どういいうところなんですか」

「そうですね。一言で言うなら、巨人の国でしょうか」

「巨人の、国？」

「疑問に思いましたか？ わたくしは見ての通り、人間と大差ない体格です。メングラッド様もそうです。巨人と一言で言っても、様々な種類の巨人がいるのです」

「聞いてもないのに、話し出しちゃったよ。」

「名の通り大きい者。普通の人間と大差ない者。狼などの獣の姿をした者。巨人族は大体、このような者達のことを差します」

「な、なるほど」

「ちなみに、わたくしは巨人族ではありません」

「え？」

「うふふっ」

笑ってごまかされた。

「その、え〜っと。ミドなんとかも」

「ミドガルズですね」

「はい。そこは、いったい？」

「ミドガルズは人間が住む世界です。けして穏やかな場所とは言えません。この近くにあるコーネイス地方の一部、ウアンティレズドという島国は別ですね。そこは巨人族が保護を約束した地なので、比較的治安もよろしいので、わたくし達はたまに買い物に出かけたりするんですよ」

「そ、そうですか」

「はい。その時は華葉さんも、ご一緒しましょうね」  
にこつと微笑むエイルさん。

そのお誘いを断ることはできそうにない。

「はあ。外出なんて、嫌だなあ。」

大勢の人がいるし、変な目で見られないかなあ。

「どうかなされましたか？ 具合でも悪いのですか」

「いえ、いろいろありすぎて。その、ちょっと混乱してるだけです」

「然様ですか。なら、少し横になっては」

「え、でも」

「無理はなさらぬように。メングラッド様がお戻りになったら起きますが……」

「あ、はい。それをお願いします」

「承りました」

しばらくして、部屋の扉が開いた。

「あら、メングラッド様」

「エイル。あ、華葉は……おやすみですか？」

意識はあるので、あたしは身を起こして伸びをする。

「ん。この通り、起きてるよ」

少し休んだことで、気分も落ち着いてる。

「うん。その、華葉？」

「え？ なに」

メグはあたしの傍そばに来て、申しわけなさそうに口を開いた。

「ベルゲルミルが、華葉を呼んでいます」

「あ、あたしを？」

「はい。預かっているものを返却すると言ってますから、王の間に参りましょう」

なんか、めんどくさそう。

「そっか。じゃあ、ここを出ないといけないね」

乗り気じゃないけど、あたしはベッドから出ようとした。

「あ、お待ちください」

エイルさんが手で制止する。

なんだろ？ 首を傾げてたら、サンダル一組を履かされた。

「あ、ありがとう」

「素足で石畳を歩いてはケガをします。その、サイズはだいじょうぶですか？」

「はい。歩きやすいです」

「然様ですか。何か不具合があったら、すぐにおっしゃってくださいね」

足にフィットしてる。木製で軽く、動きやすい。

「うえ？」

気づいた。ベッドから出て、ようやく。

あたし、私服で寝てたよね。なんでか今は、白のワンピースを着てる。

あゝ、まつ、しょうがないね。夢だもん。

「こほん。服なら、雨でぬれていましたので洗濯しておきました。

この部屋に華葉さんを運び入れた後、わたくしが着替えさせましたので心配無用です」

「あ、そ、そうなんだ。どうもすみません」

「いえいえ」

エイルさん、あたしの表情を見て何を考えてるか分かったんだ。すげえ。

「さ、華葉。一緒に王の間へ参りましょう」

「う、うん」

「いってらっしゃいませ。わたくしは食堂で、夕食の用意をしながらお待ちしています」

「よろしくね」

「はい」

緊張する。だって、ここのおえらいさんでしょう？

メグに手を引かれて、あたしは王の間へと案内された。

館と城をつなぐ渡り廊下を過ぎて、城内を歩いている。

あたしとメグが歩いているのは、人間用の通路。巨人用とは分けられているので、事故が起きる心配はないそうだ。

その巨人用の通路はかなり広く、石柱と天井が高い。巨人の影は見当たらないね。

扉も人間用と巨人用のがあって、細かいとこまで配慮がなされる。

あちこちと観察していたら、いつの間にか大きな門の前に辿り着いた。

「おや、メングラッド様ですか」

「はい。ちよつと声が大きいですね」

「すみません。ん？ そこにおられるのは」

「あわわわ」

本物の巨人を見て、あたしは腰を抜かしてしまつた。

「ふはははは。そこにいるのは、人間の娘か」

「どうやら、お目覚めになったらしい」

警備をしていた巨人が集まってきた。門の前にいるのと合わせて三人。

「お静かに。華葉はまだここに慣れていないのです。鼓膜こまくを痛めるので、声を小さめに」

メグが人差し指を立てて、しーくのポーズ。

巨人の方々は苦笑いしてた。

「これこれ。早く持ち場に戻るんだ。ベルゲルミル様に叱られるぞ」

「おう。そうだな」

「では、わしらはこれでおいとましよう」

ズシンズシンと大きな足音を立てて、巨人のふたりはここを離れた。

門番の巨人さんは、優しくていい人っぽいね。

「メングラッド様。そちらの娘さんは、だいじょうぶですか？」

屈んで、心配そうにあたしを見つめてる。その顔立ちはとても柔和にやで、目と目が合っただけでドキツとしちゃった。いわゆる優しいそ  
うなイケメン。

「スクラーミル。華葉が驚いています。どうか背筋を伸ばして」

「御意」

「さあ、華葉。ここが王の間です」

メグはあたしに手を差し伸べて、立ち上がるのを助けてくれた。彼女が指差したほうを見ると、門に比べたら小さい扉がある。

「こ、これを開けるの?」

「うん。失礼します」

コンコン。ガチャ。扉を開けて、あたしたちはそこにお邪魔した。  
「ベルゲルミル。華葉を連れて来ました」

「そうか。その小娘が、外で倒れていた……ほう?」

とつつつても声がでかい。両手で耳を塞いじやったよ。

「ふむ? どうした」

「声量です。もう少し下げてくださいませんか」

「悪かった。これぐらいでいいか」

耳が痛くない。ふう。ようやく安心できる。

なわきやないよ!

だって、だって、目の前に巨人が立ってるよ。本当に本物の巨人がねっ。

高さはどれくらいだろう。うん。

ここ王の間は、学校という体育館くらい広い。んで、その巨人は天井にはさまったバレーボールとかを軽々と取れそうなほど高いんだ。

あ、なんか首痛い。相手の目を見るだけで、見上げなくちゃいけないんだもん。

え〜っと。身体的特徴はね、髪が長い。ひげも長い。どっちも茶色くて長かった。

肌はこげ茶色で、筋肉がすごい。腕とか脚とか、毛むくじやらだあ。

服はどうやって作ったんだろう。何しか分かんない。洗濯とか大変そう。

目力めちからもとんでもないね。にらんではいけないと思うけど、見つめら

れただけでビクツてなつちやう。

「儂はヨツンヘイムを統治する者。名をベルゲルミル。呼び捨てでよいぞ。そなたの名は？」

「あ、はい。あたしは折笠華葉と申します」

ペコリ。礼儀正しく一礼する。

「ふ。震えておるのか」

う。見えるんだ。そういう細かいとこまで。

「ベルゲルミル。華葉をからかわないで」

「そういつつもりはない。さて、早速だ。そちらの小娘に聞かねばならないのだが」

ふと、メグが脇に置いてある大きな木箱を指差した。

「そこにあるものはなんだ？ フィヨルスヴィドが掻き集めたらしいのだが、見たことのない代物ばかりでな。実に興味深い」

あたしはメグに手招きされて、その中をのぞき込む。そしたら、見覚えのある物があつた。

「これ、お気に入りの傘じゃん」

チエック柄の雨傘。雨の日に外出する時、よく使ってたんだよね。でも、なんでか壊れてる。

「どうなされました？ もしや、その剣は破損しているんじゃない？」

「うん。まあ、そうだね」

剣じゃないよ。小学校に、これでチャンバラごっこしてる男子がいたけどさ。

「済まん。それはついさつき、儂が壊してしもつてな」

「え」

「べ、弁償はしよう。欲しい物があれば、何でも言う方がいい。応えられる限りの事は約束しよう」

バチンッ。手を合わせて謝罪するベルゲルミル。

その音だけで耳が痛くなる。でもって、少しクラクラしたよ。

「ベルゲルミル。今のは私でもめまいがしました」

「う。すまない。どうも人間相手だと、加減が難しくくてな」

「完全に忘れてましたね」

申しわけなさそうに、頭を下げるベルゲルミル。悪い人じゃなさそう。

「うーん。雨傘は直すの大変そうだね」

「あまがさ？ 珍しい武器ですね。華葉」

「うむ。細くて、やや頼りない剣だな。いったい誰がそんなものを創作したんだ」

皆して、これが何なのか知らないの？

傘を知らないって。ここらへんは、雨降らないのかなあ。

そんなわけないよね。だってちよつと前に、エイルさんが『先日  
の天候は雨』って言ってたもん。

「武器じゃないよ。これは、広げて雨を防ぐものなの  
説明しても、ふたりは首を傾げる。

「雨の日はさ、外出とかができないから困らない？」

「はあ。その場合は、外套がいとうを頭から羽織りますけど  
メグは納得してるみたいだけど、代わりの物があるから別に  
いっただ感じ。

「たかが雨に、そのようなものを使うのか？ 人間とは不思議な  
ものだ」

ベルゲルミルのほうは、全然理解できないみたいだね。

「えーっと、これは修理できないかな？」

何気なく言ったことが、とんでもないことになるなんて思わな  
かったよ。この時はね。

「修理、か。ふむ。ドヴェルグならば、直せるのではないか？」

「スヴァルトアルヴヘイムに？ 修繕しゅうぜんのためだけにおもむくのは、  
少し危険ではありませんか？」

「だとしても、だ。儂としては弁償せねばなるまい。儂の口添えが  
あれば、余計なことは言い出さぬだろう」

「私としては、あまり好ましいとは思えません」

「だからといって、このまま放置するのは忍びない。パワーストー



んのひとつでも土産にすれば、文句を言わずに引き受けてくれるだろっ」

ベルゲルミルとメグは何やら話し込んでる。

ふたりはうんうんとうなづいてた。結論が出たみたい。

「華葉。他には何があるの？」

メグに促されて、あたしは箱の中身を物色する。

うわっ。なんかいろいろと入ってるよ。

まずケータイ電話。雨でぬれてるから使えそうにない。メモリーカードは無事っぽいけど。

財布ねえ。大してお金ないし。そもそも円なんて通用しないよ。

スニーカーは、干せばどうにかなりそうだ。

他には何があるかな？

「ありゃ」

水筒だ。しかも、冷たいの専用。

中を確かめる。うん。使えそう。

「もう、ないね」

あつたのは破損している雨傘。壊れたケータイ電話。財布。運動靴。水筒の五点のみ。

ケータイ以外はとりあえず使えそう。雨傘は修理してくれるみたいだし、一安心。

「財布と靴は天日干しにしないと」

「へえ。それが華葉の財布なんですね」

「両親からもらったの。大事なものだし、ちゃんと乾かさないと」  
それらを腕に抱えて、あたしはペコリと頭を下げる。

「もうだいじょうぶです。ありがとうございました」

「そう急ぐな。もう少しそなたと話がしたい」

帰ろうとしたら、ベルゲルミルに引き止められる。

「は、はあ」

「華葉、といったか。そなたは、いったいどこからやってきたんだ？」

「日本です」

「にほん？　なんだ、それは」

「はあ。あたしはその島国の、埼玉県に住んでたんです」

「さ、さいたま？　よく解らない地名だな。冗談じゆだんはよせ」

「その、別にあたしは……」

メグが人差し指を唇に当てながら割り込んだ

「しっ。ベルゲルミル。まだ華葉は混乱しているんですよ」

「ふむ？　そうか。なら仕方があるまい」

混乱しているってわけじゃないんだけどね。

「まあ、落ち着いたらいつでも話すがよい。ただ、あまり外出はするなよ。ヨツンヘイムは巨人の国。この城砦内では下手なことはするなと、儂が同胞に言い聞かせてある。が、外に出ればそれは通じん。そなたのような人間を毛嫌いする巨人も一部にはいるからな。そこに注意するんだぞ」

「は、はい」

「いい返事だ。メングラッド。これで儂の用件は終わりだ」

ベルゲルミルはゆっくりと玉座に腰かけた。

ドスンッ。ただそれだけなのに、軽く地震が起きたよ。

「わつとと」

「あ、だいじょうぶ？」

「あ、ありがとう」

メグに支えられて、転ばずに済んだ。

「ベルゲルミル。もう少し加減をしてもらわないと」

「今ので精一杯だ。さて、そのの修繕に関してだが……使者を遣わそう」

ベルゲルミルは片目をつむりながら、肘かけに左腕を置いて頼杖を作る。

「え、でも」

「気にするな」

「いえ、そうじゃなくて。どうやってこれを修理するのか、分から

ないんじゃ?」

あたしがそう意見すると、ベルゲルミルとメグが同時に「あ」と声を上げる。

「そういえば、そうだな。見知らぬ物品を渡されても、ドヴェルグもどう直せばいいのか困るだろう」

「でも、華葉は知ってるのでしょうか?」

「ま、まあ、ちょっと自信ないけど。でも、どう使うべきなのかは分かっているから。そうなれば直ったってことになるし」

気まずい雰囲気。

ふと、ベルゲルミルは思い出したように言った。

「ふむ。ミーミルのところへおもむいてはどうだろう?」

「みいみる?」

「知恵の泉の番人だ。その泉の水を飲んだ者は、多くの知識を得る。その、カサとやらを修繕するに当たって、知恵を獲得していたほうが何かと都合がいいだろう。記憶障害も改善するかもしれないしな」

「ベルゲルミル。ミーミルが、泉の水を見知らぬ人間に飲ませるでしょうか」

「それは心配ない。儂が遣わした者だと知れば、ミーミルもそれを承諾するだろう」

「はあ。ここから知恵の泉までは、距離がありますよ?」

「そうだな。小娘ひとりでは不安だろう。ふむ。城砦内に放し飼いにしているギフを連れて行け。あの犬ところはそれなりにできた奴だからな」

「私も行きますよ」

「メングラッドもか? 何のために」

「最近、井戸水の量が減っているでしょう? 飲み水の確保ついでに、知恵を得たいんです。というのも、薬の調合に行き詰まって未知の疫病が発生する可能性も否定できませんので。何かと備えておかないといけないんですよ。医師としてはね」

「なるほど。だがもう今日は遅い。出発は明日以降にするとして、

ゆっくり休むといい」

「そうですね」

話はもう終わりかな。そう思った時。

くううううう。

「あ」

お腹の虫が騒いじゃった。

「うふふ。私も空腹です。もうそろそろ、エイルのおいしい夕食が  
できていると思います」

「そうだな。俺も腹が空いた。ほれ、館に戻るといい。腹が空いて  
は何とやらだ」

「は、はい」

恥ずかしくて、顔を伏せるあたし。

「じゃあ、帰りましょうか」

「あ、うん」

メグに手を引かれ、王の間を後にする。

荷物を片手に、あたしとメグは館のほうへ戻った。

渡り廊下を歩いている途中、メグが足を止めた。

「ぴゅ〜」

メグは指笛を吹いた。

すると、館の庭のあちこちから灰色のワンちゃんたちがやってく  
る。

「ガウウウウウウッ！」

「ウ〜ッ。ワンッ」

ありや。こっちに近づいてくるなり、あたしを警戒してるよ。

か、噛まれる？ てか、普通にでかいしさ。襲われたらやばいよ。  
命がないかも。

「ギフ、皆。お止めなさい」

「キャン」

「お座り」

「ワンッ」

「言うことを聞きなさいっ!」

「ウッ」

メグに叱られて、ワンちゃんたちは一斉にお座りのポーズ。

「この娘は華葉っていうの。噛みついたりしたら、怒るからね?」

「ワ、ワンッ」

「よしよし。いいこだね」

メグはワンちゃんにあれこれと言い聞かせてから、しゃがんで頭を撫でている。

「華葉も、触ってごらん」

「え?」

こ、怖いっ。だって、このワンちゃんたちはドーベルマンみたいな迫力があるし、何より大きい。目測だけど、どれも二メートルくらいはあるもん。

しかも、全員があたしをにらんでるっ。

「むっ。ダメですよ。華葉を傷つけたりしたら、ご飯の保障はしませんからね?」

メグの鶴つるの一声で、ワンちゃんの群れが舌を出して、尻尾を左右に振る。

ついさっきまで眼光が鋭かったのに、優しい眼差しであたしを見つめてるよ。

「えっつと、じ、じっ?」

「うん」

荷物を廊下に置いてから、一番近くのワンちゃんの頭を撫でてあげる。

「ギフ。うれしそうね」

「ワンッ」

うんうんとうなづいて、メグは満足そう。

この犬、ギフって言うんだ。ベルゲルミルが優秀だって言ってた

ね。

「華葉って、ワンちゃん好き？」

「ど、どうだろうね。嫌いではないけど……」

「そっか」

好き嫌いっていう問題じゃないよ。

だって、これらの犬はほとんどでっかいしさ。小犬のような可愛らしさがない。

って、そういうこと言うと噛まれそうだしさ。絶対に口には出さないよ。

「ウゝ、ワンツ」

どうやらこのギフって犬、リーダー格っぽいね。

吠えた瞬間、他のワンちゃんがそろって立ち上がったもん。

「そうね。ギフ以外は自由にさせていいですよ」

「ワンツ」

メグの指示もあって、ワンちゃんは解散した。

「ん。いいこいいこ」

残ったギフに抱きつくメグ。

もふもふとした毛並みを楽しんでいるね。

「キャン」

「え？ あ、だ、ダメ？」

「いえ、どうやら気持ちがいいみたいですよ」

「そ、そうなんだ」

頭の次に首を撫でてあげると、ギフは尻尾を左右に振ってる。ここが弱いんだね。

「どうして、あんなにワンちゃんがいるの？」

「ガストロプニルは、巨人だけで防衛するには難しいの。私達のように小さな人がいますからね。細かい場所に目が届き、臭いで追跡できて、迅速かつ統制が取れて、戦闘能力が高い。そんなワンちゃんて構成された機動隊が、ここガストロプニルを守っていると聞いても過言ではないのです」

「へえ」

にっこり笑顔で説明してくれるメグ。

「ペット感覚じゃないんだ」

「ワンッ！」

「わわ」

びっくりして、あたしは尻もちをついちゃった。

「ギフ。華葉を脅かしてはいけません」

「ウッッ」

「ペットと言われて傷ついたんですね？」

メグはちらりとあたしを一瞥する。

ギフはあたしを見つけた時よりは弱いけど、ギロツとにらみを利かしてる。

「ご、ごめんね」

「……。ワン」

少し間があったけど、ギフは返事をしてからあたしの手をぺろぺろとなめる。

「珍しい」

「え？」

「ギフが、こんなに早く懐くなんて」

メグにとっては、驚くべきことらしい。

転んだままのあたしの手をなめてたギフは、クンクンと鼻を動かす。

「キャン？」

首を傾げながら、あたしを見つめているギフ。

「ん？ どうしたの」

「ワンッ」

「ふうん。そうなんだ」

てかさ、メグってワンちゃんとか話できるの？

「もうちょっとでご飯ですからね。我慢して待ちましょね」

「クウン」

あ、困つてるところが可愛い。大きくても、やっぱりワンちゃんは愛くるしいよ。

あたしたちが館に戻ると、エイルさんが笑顔で迎えてくれた。

「あら、メングラッド様。それに華葉さん。おかえりなさいませ」

エイルさんは窓際で洗濯物を干していた。

あたしが着てた服まで　うわわっ。下着まで干してもらって、本当にありがたいです。

「どうしました？　入口に立っておられますけど」

物干しを終えて、エイルさんがこちらに歩み寄る。

エプロンで手の水気をふき取った後、不安そうにあたしを見た。

「うん。ちょっとね」

メグは額に手をやりながら、サンダルを脱いで、近くにあったベツドで横になった。

「お疲れのようですね。部屋でおやすみになられては？」

「だいじょうぶ」

「然様でございますか」

メグの態度に、エイルさんはちよつと困つてる。

「あら。華葉さん、その手にあるものは？」

「あ、その、この財布と靴も干してもらえますか」

「はい。他にはありませんか」

「いえ。雨傘は修理してくれるみたいだし、他はこのままでも使えます」

「然様ですか。では、お預かりします」

エイルさんは財布と靴を受け取り、財布を物干し竿にかけてくれる。靴は木箱の上に置いて、窓から差し込む光に当たるよう位置を調整してくれた。

それから竹ぼうきを手にして、部屋の掃除をするエイルさん。残ったものをどうしようかと、あたしはメグを見る。



「そこに木箱がありますよね。空いているので、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

それに収納して、ふうっと一息。

「はい？」

コンコン。扉がノックされた。

「メングラッド様。人間の少女が運ばれたと聞きました……が？」

扉が開いて、やってきたのは金髪の美少女。

うわ、瞳も金色だ。髪は長いし、少し焼けてるけど肌は白いほうだね。

服はちよつと地味め。でも素材がいいから、着てるものが悪いという印象はない。

「あら？ こちらの方は」

「ゲルズ。そちらが、折笠華葉さんです」

「……………」

無言で、ゲルズと呼ばれた少女はあたしに近づいて、ベタベタと全身を触り始める。

「な、なにいつ？」

びっくりして、あたしはその娘から飛びのいた。

「ふうん」

腕を組んで、何か企んでる様子。

うう。あたしの苦手そうな人だよ。

「ゲルズ。華葉をからかわないで」

「メングラッド様。もう治療を終えてしまったのですね」

「え？ ゲルズ、もしかして心配してたの？」

「はい。あたくしも駆り出されるのではないかと思い、ここに参上したのです。が、元気なら結構です。はあ」

お、落ち込んでる。

「ゲルズ。あなたは部屋で休息していたのでは？」

「ええ。目覚めてすぐにワンちゃんを遊んでいたら、その……かよ？でしたっけ。その娘の噂を耳にしたので。慌てて駆けつけたら、

すっかり元気みたいなので安心しました」

その娘はほつと胸を撫で下ろして、エイルさんと談話している。

「あ、あのう」

「あたくしの名はゲルズ。よろしくね」

手を差し伸べられたけど、あたしは握手するのをためらってしま  
った。

「あら？　どうかしたの」

「ゲルズが出会って早々、華葉さんの身体を触るからでしょう。何  
かされるんじゃないかと警戒するのもうなづけます」

「あ、ああ。その、ご、ごめんなさい」

エイルさんの指摘があつて、ゲルズは深々とおじぎをした。

「い、いいよ。あたしは、折笠華葉です。よろしくお願いします」  
ぎゅっ。手を出したら、ちよつと強めに握られた。

「ゲルズ。もうすぐ夕食です」

「然様ですか。メングラッド様、一緒にしてよろしいですよね？」

「ゲルズの方も用意してますよ」

「ありがとうございます。エイルさん」

悪い人じゃ、なさそう。

でも、雰囲気　あたしをいじめてた人に、似てる。

「……………」

「え、な、なに」

「あなた、可愛いわね」

「ええ？」

「特に頬っぺた。ぷにぷにしてる」

「ふみゅ〜」

「ゲルズっ！」

メグが怒ったので、ゲルズはあたしの頬から手を放した。

うう。やっぱりこの娘、苦手だよおつ。

「だ、だって、赤ちゃんみたい肌してるから。ついづらやましく  
て」

「うん？」

ゲルズの一言で、メグとエイルさんもじいつとあたしを凝視<sup>きやうし</sup>する。

「言われてみれば、確かに華葉さんの肌は白くて柔らかかそうですね」

「うん。ねえ、華葉。どういふ手入れをしているの？」

「ふむふむ。そのもち肌、秘訣を知りたいわっ」

メグはベッドから出て、エイルさんは部屋の掃除を切り上げ、ゲルズは頬をふくらませ、皆してあたしの傍に来た。

「そ、それは……食事しながらいいでしょ？」

メグの館にある食堂に移り、皆で食卓を囲む。

ふう。ようやく夕食にありつけるよお。

「……いただきます」「……」

四人同時に声と手を合わせ、一礼する。

直後、メグ、エイルさん、ゲルズがあたしへ目を光らせる。

「ま、まずは食べてからにしようよ」

「そうですね」

「はい」

「しようがないわねえ」

献立<sup>こんだて</sup>は、鮭のクリームシチュー、海藻サラダ、リンゴ、小さくて丸っこいパン。

ちよつと物足りない気もしたけど、文句は言えない。

まずシチューをスプーンですくい、一口する。

「あつっ」

「あら、華葉さん。猫舌ですか？」

「は、はひっ」

舌が熱い。呼吸を繰り返して、グラスに注がれた水を飲み干す。

「熱いのなら、ふうふうしたほうがいいわよ」

「ええ。私も猫舌なので、水が必須です」

「わたくし以外の皆さんは、猫舌なのですね」

「はあ。なぜかエイルさんは溜息ひとつ。」

「ふうふう」

舌を冷ましてから、息を吹きかけて一口。

「あ、おいしい。エイルさん、料理上手ですね」

「華葉さん。おほめいただき、とても光栄です」

「につこりと微笑むエイルさん。」

「ん〜。メングラッド様、肌の艶つやがいいですよね。髪もそうですし、普段からどのように手入れを？」

「それはゲルズにも聞きたいですよ」

「あたくしはよく食べて、運動して、よく寝て、規則正しく生活する。これに尽きると思います」

「半日眠っていたあなたがよく言えますね」

「エイルさん。あたくしは昨日、ワンちゃん全員の健康診断でいそがしかったんです。言うこと聞かずに逃げ回るんですもん」

ゲルズはふうつと溜息をついた。

「ワンちゃん全員を診るのは、本当に大変ですよ。エイルも解るでしょう？」

「わたくしの場合、そうでもありませんが……」

「エイルさんには、ワンちゃんはおとなしく従うのよね。メングラッド様もそうですし、あたくしはなめられているのかなあ」

「ワンちゃんにも好き嫌いはありますよ」

「メングラッド様。それは傷つきます」

「あ、ごめんなさい」

三人は他愛のないガールズトークに花を咲かせてる。

あたしが入り込む余地がない。

しょうがないので、黙々と食事をするしかなかった。

「華葉。もうそろそろいいでしょ」

そんなあたしを見透かしてか、ゲルズが声をかけてきた。

「え？ あ、その、ゲルズ」

「ん。秘密ってのはなしよ」

メグ、エイルさんにも視線で追い詰められる。

「ん〜っと。氷水で顔を洗うとか、軽い筋トレ。それぐらいしかしてなかったけど……」

「んっと、氷水で？」

「うん。一日に二回ぐらいそれをすると、身も心も引き締まるんだよね」

「へえ」

ゲルズは積極的にあたしに話しかけて、美容法を聞き出してくる。

「ふむふむ。氷水で洗顔する」

「わたくしもこれからやってみましょう」

メグもエイルさんも、満足したみたい。

「後はよく食べて、運動して、よく眠る。ゲルズの言う通りだと思います」

「おろ。華葉も同じことを言うのね。うんうん」

ゲルズはにんまり。とつてもうれしそうだ。

「最近私、よく眠れてないからね。医師として多忙だから……」

「長い休息が取ればよいのですが、そうもいきませんからね。わたくしはこの館の世話をしなくてはならないので、休暇きゅうかなんてとてもとても」

ふたりは苦笑い。

「ん〜。なら、あたくしが掃除しましょうか？」

「それはダメですっ」

ゲルズの申し出を、エイルさんはズバツと切り捨てる。

「はあ」

落ち込んでいるゲルズ。ふたりの反応を見ると、ゲルズは掃除が苦手みたいだね。

「ん〜」

左耳を指で触り、ゲルズは何か考えている様子。

「そつえばさ。華葉は、どこから来たの？」

「え？ ああ、その……日本です」

「にほん？　へえ、そんなところから来たんだ」

「え、え？　げ、ゲルズは日本を知っているの？」

「ううん」

真顔で首を振るゲルズ。もしかしてと思ったあたしがバカみたいじゃん。

「ゲルズ。華葉さんはまだ混乱しているんです。記憶が定かでないのに、余計に掻き回してはいけませんよ」

「エイルさん、まだあたしを病人だと思ってる。」

「じっくり観察してたけど、華葉に混乱している節はないわ。正常だと思っけど？」

「リンゴをひとつ手に取り、意見を述べるゲルズ。」

それを手で磨いた後で、一口かじりついでる。

「ゲルズ。それは私見でしょう。当人を前にして言うのは、失礼ではありませんか？」

「エイルさんこそ、華葉の言うことが信じられないの？」  
「信じる？　あたしを？」

「エイル。ゲルズ。少し黙ってて」

「め、メングラッド様？」

「いいから」

メグはふたりの口を閉じさせ、あたしを見つめながら口を開けた。

「ごめんなさい。華葉」

「いいよ。あたしは、皆とは違うんだから」

「何が違うのよ？」

頭を下げて謝るメグとは対照的に、ゲルズはあたしへ積極的に踏み込んでくる。

「華葉は、あたくし達と同じ女の子じゃない。何が違うのよ？」

正直、迷惑だよ。

「そ、そうだけど」

「住む世界が違ったからって理由だけで、特別扱いするなんてあたくしは嫌よ。メングラッド様もエイルさんも、華葉に対して遠慮し

てない？」

ゲルズの言葉に、メグもエイルさんも言葉を返さない。

メグはこめかみを指で引っかけて、少し困っている様子。

「華葉。にほんつてどういうところなの？」

「え、あ、その……」

「ねえねえ、教えてよ」

や、やめてよ。お願い。

「ゲルズ。食事中です。華葉の手が止まってるじゃないですか」

「あ、ご、ごめん。調子に乗っちゃったわ」

ペロツと舌を出して、ゲルズは両手を合わせて謝った。

「だ、だいじょぶ。うん」

やっぱり、あたしはゲルズが苦手だよ。

「この部屋を、自由に使ってくださいね」

「ごちそうさまをした後、あたしはメグに空き部屋へ案内された。

医務室の隣にあるここは、誰も使っていないらしい。

木製のタンスに本棚。棚には、多くの本が収められてる。字は読めないけど。

他にも木の桶、テーブルに椅子、ベッドがあった。

「ここが唯一空いている部屋なの。以前は医務室として活用していたのですが、隣へ移してからは誰も使わなくて。館の端っことで、日当たりがよくて、ワンちゃんがよく通りますから、ちょっとうるさいかもしれません」

「ううん。大事に使わせてもらうね」

「そうですか」

「ところで、エイルさんや……ゲルズは」

「医務室の隣と、その隣です。私は普段、医務室で生活しているの  
で、部屋に戻ることはそんなには。でも着替えや読書をする場合は、  
ゲルズの隣にある自分の部屋で過ごしますよ」

「ふうん」

ふと、メグは指先で髪をすきながら、あたしの顔をじっと見つめてる。

「あ、あのさ」

「はい？」

「この石、どうやって使うの？」

「ああ、灯石あかりせきですね。これはウァンティレズドでよく採掘される魔石で、このように使っんです」

テーブルに置かれていたそれを手にして、メグは明かりをつけたり消したりする。

「華葉もどうぞ」

「あ、うん。どういうふうにすればいいの？」

「ただ念じるだけです。明るくなれとか暗くなれとか言われてやってみても、まったく明かりが消えない。」

「あら。華葉は、魔力の扱いに不慣れなのですか？」

ま、まりよく？

「そ、それって……ま、魔法？」

「ええ。女性は魔力の扱いに長けているはずなのに、珍しいですね」「さ、さっき言われたみたいに念じてはいるけど、全然ダメだよ」

「はあ。知恵の泉の水で改善するかもしれないね。明日に水を飲んでから、もう一度試してみるといいでしょう」

メグはあたしからそれを受け取り、輝きを淡くした。

「あまり暗くすると見えませんかね。あ、華葉は暗くないと寝れないタイプですか？」

「ううん。ほんの少し明るいほうが、寝やすいかも」

「そうですね」

にっこりと微笑むメグ。

でもあたしを見る目が真剣なんだよね。な、なんだろう。

「め、メグ。何か言いたいことがあるの？」

「あ、その。ゲルズのこと、誤解しないでくださいね」



「え、え？ あ、あたしは……」

「ゲルズ。本当はうれしいんですよ」

「う、うれしい？」

「ええ。ゲルズは あつと、これは私から言うべきではありませんね。口が軽いと叱られてしまいます」

両手で口を押さえて、メグはいけないいけないと首を左右に振る。

「華葉。明日は知恵の泉へ旅立つので、ごゆっくり」

「その、メグ。お風呂に入りたいんだけど……」

「お風呂？ え、今から？」

な、なんでびっくりしてるの？

「明日に外出してどうせ汚れるのですから、今入ってもあまり意味はないのでは」

「そ、そう」

メグは本気で言ってる。日本と違って、お風呂に入る回数は少ないのかな。

「あ、もひとつ。な、何時に起きればいいの？」

「なんじ？」

目を丸くして、首を傾げるメグ。

あ、さっきから何を聞いてるんだろ。あたし。

どうせ夢だから、このまま寝ちゃえば元通りだもんね。

「じ、時間のことですか？」

「あ、うん」

「朝食を取ってからなので、別に急がなくてもだいじょうぶです。

私が起こしに参りますから、心配は無用ですよ」

「あ、ありがとう」

「いえいえ。何か必要な物があれば、医務室へどうぞ。大抵のものはそろっています」

「分かりました」

「うふふ。では、おやすみなさい」

「うん。おやすみなさい」

## 第2話

### 《館・医務室》

「メングラッド様。こんな真夜中にどうなされました?」

皆が寝静まった頃、メングラッドはエイルを医務室へ呼び寄せた。

「ごめんなさい。少し、話がしたくて」

ふたつの三つ編みをほつきながら、メングラッドはエイルを迎え入れる。

「然様ですか。このエイル、朝まで付き合いますよ」

「そんなに長くはありません。朝には知恵の泉へおもむくのですから」

「それは初耳ですね。確かに、井戸水は枯渇しているようですし。

どこかで補給しなくては感じておりました。しかし、わざわざ泉の水を?」

「それは置きましょう。私がエイルと話したいのは、別のことです」

「はい。してそれは?」

メングラッドは椅子を用意し、エイルをそこへ座らせる。

自身も椅子に腰かけて、机に肘をつく。

「話とは、華葉のことです」

「なるほど。何か、解ったことがあるのですね」

「ううん。余計に解らなくなったのが正しいかな」

「はあ。例外なく、魔犬である彼らに二オイを嗅かがせたのでしょうか?」

「それがね」

メングラッドは溜息をつく。

「華葉は、どこから来たか解らないの」

「解らない? 魔犬である彼らが、正確な場所を特定できなかったと?」

「ええ」

「まさか。そんなことが」

「本当なの。特に優れた感知能力を持つギフでさえ、華葉を不思議な存在だと断言したの」

「不思議な存在。ギフでさえも、華葉さんの存在が謎であると？」

「うん。それに加えて、華葉は生きている」

「生きている？ たまにあるという、ニヴルヘイムからもれた死者でもない？」

「そうなるの」

驚きで、言葉を失うエイル。

首を軽く振って、これが現実だと再認識する。

「一概には言えないけど、華葉の言動は全て正しいのかもしれない」  
「そんな」

「あながち、ゲルズの言っていたことも間違いじゃない。華葉は、錯乱状態ではないもの。正常ではあるけど、華葉が今まで過ごしていた環境と異なるせいかな。少し混乱している節は見えるんだよね」

「……………」

エイルは無言で、物干し竿にかけられた華葉の服を見た。

それは、今までに見たことのないものだった。

どの文明が作り上げたのかすら、彼女達には謎である。

最後に、ギフが気になることを言っただんだよね」

「それは、いったい？」

「華葉からは、とても濃い涙の二オイがしたって」

《館・借り部屋 折笠華葉》

「チュンチュン。カーテンからのぞく光がまぶしい。」

「うん」

上半身を起こして、伸びをする。

いつものように、目覚まし時計へ手を伸ばして〜って、ありっ？  
確か、ベッドから見える位置にあるはずなんだけど。

「う、うそ」

あたしの、部屋じゃない。

てか、え？ ま、まだ夢は終わりじゃないの？

「あひゅ」

ぐに。頬っぺたをつねったら、すっごく痛かった。

「うう」

夢、じゃない？ ど、ど〜ゆ〜こと？

あたしはベッドから降りて、サンダルを履く。

それから白のカーテンを開け放つ。

「あ」

「わ」

朝日が顔を出して間もないのに、外にある花だんに水をあげている人がいた。

あいさつをしないのは失礼だと思いつつ、ゆっくりと窓を開けようとしたけど、どうやったらいいのかわからない。

「おはよう。ところで、何やってんの？」

「あ、そうやって開けるんだ」

「？」

ゲルズだ。彼女は窓を上を引いて、それから下を指差す。

「近くに棒があるはずよ。それで引っかけるの」

「あ、そうなんだ」

木の棒をふたつ引っかけて、どうにか窓は開いたままに。

この館の窓は、スライド式じゃないんだね。

「改めて、おはよう」

「あ、う、うん。おはよう」

ゲルズはじょうろを持って、館の周りにある花の世話をしていた。  
ん？ 金の指輪の首飾りを、慌てて服の中にしまった。どうしたんだろ？

「朝早いわね。いつもこれぐらいに起床するの？」

「あ、うん」

「？ 歯切れが悪いわね。どうかしたの？」

あんまり、関わりたくない。

メグが誤解しないでと言ってたけれど、あたしはゲルズの雰囲気  
が苦手だ。

「ふう。華葉、ごめんなさい」

「え、え？」

いきなりだったので、びっくりした。

ゲルズが、深々と頭を下げたからだ。

「昨日はごめんね。見知らぬ場所に来て困惑してるのに、遠慮なし  
にいろいろと聞いちゃって」

「い、いいよ。あたしは、皆に助けられたから。自分が何者か少し  
は話さないと、帰れる手がかりも見つからないし」

「ふうむ。にほんだっけ？」

頭を上げたゲルズは、腕を組んで首を傾げる。

「あ、うん」

「悪いけど、あたくしは耳にしたことがないわ。ただ、ひとつ気  
なるのよね」

「え、な、なにっ？」

「ああ、そんなに怖がらないですよ。別にあたくしは、華葉を困らせ  
たいわけじゃないの」

「そ、そう」

「うん。それで、質問いいかしら？」

「ど、どうぞ」

「はい。華葉は、花は好き？」

「へ？」

拍子抜けした。もっと踏み込んだものが来ると思ったから。

「ん？ どうしたの。花が好きか嫌いかわぐらい、すぐに答えられる  
でしょ」

「えっと、す、好きだけど。それは、どういう意図があつて？」

「はあ？ でもいいわ。華葉は花が好きなのね。うんうん」

その笑顔は、本物なのかなあ。後々、花でイタズラされるかもしれない。そう思うと不気味に見えてきた。

「花が好きなの女の子に、悪い人はいないわ。華葉は将来、素晴らしい美女になるわね」

「は、え、へっ？」

「あ、今も美少女か。華葉って、可愛いし」

「か、か、かわいいっ？ あたしが？」

ゲルズの言葉に驚いて、あたしは自分を指差してしまう。

「自覚ないの？」

「な、ないっていうか。今までそんなことは一度も……」

「はあ。噂になつてゐるみたいよ？ 番人のフィヨルスヴィドだつて、あなたにひとめぼれしたとか言つてたし」

「え、ええっ!？」

「相手は本物の巨人だから、本気にしなくてもだいじょうぶよ。ま、それもそうよね。短髪の似合う女の子なんて、ここしばらく見てなかったもの。あたくしもメングラッド様も、エイルさんも長髪だし。巨人の皆もほとんど長髪だし。短髪が珍しいのかもしれないけどさ。華葉の顔立ちは、やっぱり美人の類よ。凜々(りり)しいって感じがして、同性のあたくしでもドキドキするもん」

「そ、それは……ど、どう受け取ればいいの？」

「告白じゃないわよ。あたくしは」

何かを言おうとして、ゲルズは唇を噛み締めた。

暗い表情。それを見せたのは、ほんの一瞬だけ。

「なんでもないわ」

「え、えっと」

「とにかく、華葉は可愛い。にほんってさ、華葉みたいに可愛い女の子がたくさんいるの？」

「うえ？ そ、そんなには」

どうなんだろう。芸能人とか、数えきれないほどいるし。

「お、多かつたほうだと思うよ」

「へえ。一度行ってみたいわね。あたくしなんかの容姿じゃ、笑われるのがオチかな？」

「そうでもない。」

ゲルズは、あたしから見ても美少女だと思う。

正直、あたしなんかよりゲルズのほうが可愛いんじゃないかな。

「ん？　どうかした？」

さつき見せた顔が、目に焼きついてる。

「ありがとね」

あ、それだよ。少しアンニュイな表情。

ゲルズはあたしに背を向けて、お花に水をあげてる。

「華葉。早く顔洗って、身支度したほうがいいわよ」

「え？」

満面の笑顔で振り返るゲルズ。

「あたくしも、知恵の泉に用があるから」

「ま、マジでっ？」

館の食堂に集まり、朝食の時間。

あたしとゲルズが席に着いてすぐ、メグがやってきた。

「おはようございます。メングラッド様」

配膳してたエイルさんが真っ先にあいさつする。

「おはよう。あ、華葉にゲルズもいたんだ。私が最後だったのね」

ふう。溜息をついて、メグはあたしを見た。

「華葉。部屋に行ったらいなかつたでしょう？　起床したのなら、

医務室にあいさつしてくれればいいのに」

「あ、ごめん。顔を洗うところを探したら、時間かかっちゃって」

「ええ。迷子のところをわたくしが見つけて、お風呂場へ案内しておきました」

「はあ。結果論は聞いてません」

メグは頬をふくらませて、ご立腹な様子。

自分の席に座り、ちらりとあたしの顔を見る。

「華葉。よく眠れましたか？」

「う、うん。ぐっすりだよ」

本当は、これが夢じゃないことにショックを受けてるんだよね。

あたし、いったいなんでこんなところに……？

「ささ、知恵の泉へ向かうのですからね。たんと召し上がれ」

考えててもしょうがない。目の前の現実と向き合おう。

「あの、これはなんですか？」

皿に盛りつけられた白いスープみたいなのを指差すと、エイルさんがそれについて教えてくれた。

「あら？ 華葉さんは、オートミールを知らないのですか」

「おうとみいる？」

初めて見聞きした。

「燕麦えんぱくを山羊やぎの乳で煮て、甘く味付けしたものですよ」

エイルさんがていねいに説明してくれるけど、ちんぷんかんぷん。

とりあえず、今日の献立。

オートミール、パン、リンゴ、以上ですっ。

「あ、その。ひとついいですか」

「はい？ どうしました、華葉さん」

「このリンゴ、切り分けてないよね。これじゃ食べにくいから、あたしにやらせて」

「は、はあ。別に構いませんが、指を切らないように注意してくださいね」

エイルさんに頼んで、あたしは果物ナイフを受け取った。

「よしっ」

深呼吸してから、あたしはリンゴを八つに切り分ける。

それらをひとつずつついでいねいに皮をむいて、ウサギさんへと変えていった。



「わあ。華葉、すっごい器用ね」

「あらまあ。華葉さんにこんな特技が。これはこれは」  
皿に並べたウサギさんは、皆に好評みたい。

「ウサギさんです」

「ウサギ？ わ、可愛くて食べるのがもったいない」

メグはそう言いながら、パクリとひとついただいた。

「どうぞ。食べてください」

「では、おひとつもらうわ」

「そうですね。華葉さんの芸術作品。味わってみましょう」

どれもリンゴだけど、見た目が変化するだけで新鮮味がある。

あたしも一口。

「ん〜。おいしい」

皆がリンゴをひとつ頬張って、すぐに気づいた。

「あ。い、いただきますをしませんね」

「そ、そういうばそうね」

「今からでも遅くはありません。では」

エイルさんが音頭を取り、あたしたちは

「……………いただきます……………」

をした。

朝食を済ませて、あたしは医務室にいた。

「うん。乾いてる」

干していた自分の服に着替えるためだ。

「ありゃ？」

ひとつ、気になるものがあった。

どうして、あたしが家で使ってた水玉エプロンがあるの？

「うん。使えるっちゃ使えるけどさ」

とりあえずそれはほっといて、早く着替えよう。

「よしっ」

一通り終えた頃に。

「ん？」

扉がノックされた。

「華葉。あ、その服は……」

「メグ？ どうしたの」

「あ、ごめんなさい。私もここで着替えるので」

扉を閉めてから、メグはベッドの上に自分の着替えを放り投げた。

「では、私も着替えますね」

「うん」

白ワンピースを脱いで、新しいワンピースに袖を通すメグ。

てか、うわわっ。

「ん？ か、華葉。そんなにじろじろ見ないでくれませんか」

「あ、いやあ。その、メグって、肌が雪みたいに白いよね」

「は、はあ。華葉こそ、肌白いじゃないですか」

「髪も銀色だしさ。み、見とれちゃうよ」

「からかわないでくださいっ」

困った様子で訴えるメグ。あんまりからかうと、時間が来ちゃう。

「ごめんごめん。あ、これだけ聞きたいんだけど」

「なんですか？」

「その三つ編みだけど、いつ整えたの？ 昨日からずっと？」

「そんな。起床してすぐ、エイルがやってくれました。そのままにしていたら、髪が痛んでしまいますよ」

「そ、そうだね」

「ふう」

あたしの服装は下から順に、運動靴、白の靴下、デニムの短パン、水玉模様の टीーシャツ、その上に長袖の白のワイシャツ。袖はちよつとだけまくつてあるよ。

短パンには革製のベルトを通していた。

「華葉って、かっこいい服を持つてるんですね」

「は、はあ？」

「一応これ、部屋着なんだよね。」

外に出る時は、デニムのパンツとか選ぶし。

シャツも水玉が恥ずかしいから、無地のものをよく使ってたんだよね。」

「あれ？ そちらは」

「これはエプロン」

「はあ。着ないのですか？」

「え？ 料理する時は使うよ」

「普段着ではないのですね？」

「う、うん」

「そういえば、黒いものが干されてましたよね。あれはなんだったのですか？」

「あれはブラにショーツだけど」

「なんですか？ それ」

「ん〜。日本の女の子が必要とする下着だよ」

「はあ。華葉がいた世界は、いろいろと進んでいるんですねえ」

メグと話していると、こっちの世界の事情が見えてくる。

今着てる服、大事に使おうと。

「あつと。華葉。身支度はできましたね。今着替えたのはそのままで結構です。エイルが洗濯しますから」

「うん」

メグは着替えを済ませて、白ワンピースの上に白いマントを羽織ってる。

「それ、なに？」

「ブローチです。外套を留めるのに必要ですし、一応アクセサリとして凝ったものを選んでいきます」

よく磨かれた、白く輝くブローチ。

メグは、本当に白が似合うね。」

「はい。華葉の外套も用意してあります」

「え？」

手招きするメグに誘われ、あたしは藍色のマントを渡された。

「これが華葉のブローチです。どうぞ」

「あ、ありがとう。メグ」

「じつとしてくださいね」

うれしそうに、メグはあたしにマントをつけてくれた。

仕上げに、銀色のブローチで留めてくれる。

「うん。似合いますね」

「そ、そう?」

一回転して、マントを翻す。

「さあ、外へ参りましょう。ゲルズとエイル、ギフが待っているはずです」

「あ、ちよつと待って。これこれ。水を汲みに行くなら、これを持ってかないと」

あたしは木箱から水筒を取り出した。

ふと、メグがぼかんとしている。ど、どうしたの?

「それは、水を入れるものだったのですね」

「そ、そうだよ」

「ならば、それも持っていきましょう。役に立ちそうですしね」  
につこりと微笑むメグ。

「さあ、皆のところへ向かいますようか」

「うん」

館の渡り廊下にはゲルズと、お弁当を作ってくれたエイルさんが待っていた。

ゲルズは中にレモン色のワンピースを着て、黄金のブローチで留めた黒のマントを羽織ってる。

髪型はポニーテールだ。赤のリボンで髪を束ねてる。

「あら、華葉さん。外套が似合いますね」

「え、そう?」

「ふうん。華葉って、そういう服着るのね」  
「ひゃあっ！」

ゲルズはあたしのマントをめくって、中を確かめる。  
びっくりしてあたしが飛びのくと、エイルさんがゲルズの首根っこをつかんで注意した。

「はしたないですよ。ゲルズ」

「う。医務室に干してあったのが、気になってたんだもん。どういうのかなあって」

ふたりがそんなやりとりをしていると、一匹のワンちゃんがこっちにやってきた。

「ワンツ」

「あ、ギフ。待たせてしまいましたね」

「キャン」

「ふふ。もう少し待ってくださいね」

ギフはお座りして、尻尾を左右に振ってる。

「メングラッド様。これはわたくしが精魂込めて作りました。お腹が空いたらどうぞ」

「ありがとう。エイル」

メグはエイルさんから少し大きめの包みを受け取る。

「薬なども入っております」

「この重みは、そうだと思いますよ」

「あたくしが預かります」

ゲルズはその荷物を手にして、大事に抱えてる。

「ギフ。じっとしてね」

「ワンツ」

ギフは小さいナップザックを装着した。ゲルズがその中に荷物を入れてる。

「ワンちゃんは荷物持ちなんだね」

「ガウツ」

「わ」

「ギフ。華葉をからかつてはいけません」  
「クウン」

メグに叱られて、ギフは尻尾を振るのを止めた。

「皆さん。出発しましょう」

「ワンツ」

「そうですね」

「うん。行こう」

「いってらっしゃいませ」

メグとギフを先頭に、ゲルズとあたしが続く。

エイルさんは手を振って、あたしたちを見送ってくれた。

城門近くにある、小人用の扉を通って外に出るあたしたち。てか、暗いね。それは番をしている巨人がいたからだった。

「んんん？ 誰だあ？」

「うっ。耳がいったあい。」

「フィヨルスヴィド。少し邪魔です。どいてもらえませんか」

「おお、すまあんすまあん」

「それと、声を小さく。華葉が苦しんでいます」

耳を塞いでるので、メグが何を言ってるのか分かんない。

「おお、これはメングラッド様。お出かけですかあい？」

あぐらをかいていた巨人は、ずりずりと距離を取ってこっちを向いた。

「だいじょうぶですか？ 華葉」

「う、うん」

まだちよつと痛いけどね。

それよりも、大きい。巨人って、普段から何を食べてるんだらう。

「フィヨルスヴィド。あなたが助けたお嬢さんよ」

「んん？ おお、ゲルズ。お前の隣にいるのは、これまたべっぴんさんだなあ。オイラ、ドキドキしちゃうよ」

フィヨルスヴィドって巨人は、髪も長いし、ひげも長い。どれも黒色だ。

優しそうな顔をしてるし、着てる服から何となく、農家のおじさんって感じがする。

て、てか、べっぴんさんって。皆して、あたしをからかっているかなあ。

「ほら、華葉。あいさつしといたら」

「あ、うん。あ、あたしは折笠華葉です。助けてくれて、ありがとうございます」

「ん〜？ いやあ、いいんだよお。オイラはただ拾っただけだからあ」

「は、はあ」  
会釈してあいさつするも、体格差がありすぎて奇妙な感じだ。

「惜しいなあ。オイラがもうちいっとな背が低ければなあ」

「え、え？」  
「フィヨルスヴィド。そういう言動は誤解を招きます。華葉が困ってるじゃないですか」

「お〜。すまなんだ」  
大きな頭を下げる巨人さん。

う、汗くさつ。思わず鼻をつまんじやった。  
「ワンツ！」

「ん？ あら、頭がくさいそうよ。フィヨルスヴィド」  
「あつははは。皆にそう言われても、オイラはここを離れられないんだあ。ベルゲルミル様に怒られちゃう」

てか、ゲルズもワンちゃんとか話できるんだ。

「さて、おしゃべりはこれぐらいでいいでしょう。私達は知恵の泉へ向かいます。帰りは明日になると思います」

「そうかあそうかあ。気をつけて行くんだぞあ」  
巨人さんに見送られて、あたしたちは泉へと歩き始めた。

街道を歩いてて、こう思った。

殺風景さつふうけいじゃない？

草とか林とか、家とか小屋とか、ちらほらとあるけどさ。

そんなに彩りが豊かじゃない。

「まだガストロブニルが見えるわね」

ゲルズの言うように、背後を振り返ると大きな城が見える。あぐらをかいた巨人さんも。

「ギフ。少し歩くのが速いです」

「ワンツ」

「よろしい」

メグは足を止めて、振り返ってあたしとゲルズを見る。

「おふたりは、このペースでだいじょうぶですか？」

「問題ないよ」

「ご心配なく」

「そうですか」

メグは前を向いて、ギフに進むよう命じた。

ギフはあたしのほうをちらちらと見て、たまに「ワンツ」と吠える。

「ふうん。ギフ、華葉のことが気になるんだ」

「キャン」

「え？ そうなの？」

「ギフっ」

「クウン」

ゲルズの発言にギフは反論したみたいだけど、メグがそれ以上はダメと口止めする。

てか、あたしにはまったく理解できないんだよね。何を話してたんだろっ。

「もつすぐ農村が見えます。そこで休憩きゅうけいしましょう」

「うん」



「メングラッド様。そこでエイルさんのお弁当ですか？」  
「そうですね。少し早い気もしますが、そうしましょう」

しばらく歩いて、小さな農村に辿り着いた。

日は真上にある。もうお昼かあ。

「随分ときびれたところだよね」

人がいない。ていうか、畑のほうに巨人はいる。

その巨人はくわを持って、畑を耕たがやしてた。

「馬とかヤギ、それらを飼育する小屋に人がいるのよ。外で農作業してるのは、見た目通りの巨人ぐらいね」

「あ、そうなんだ」

「ここからヤギの乳をもらっているの、ガストロプニルでオートミールやシチューをいただけるのです」

「へえ」

ゲルズとメグがていねいに説明してくれる。

「牛とかはいないんだね」

「えっと、牛ですか？ 残念ながら、ここにはいないですよね」

「え、どうして？」

「牛は貴重なんですよ。過疎化かそかしているのもあって、昔ほど豊かではないものだから」

「そ、そうなんだ」

こっちの世界も、いろいろと大変なんだなあ。

あたしたちは飼育小屋にやってきて、ちらっと中をのぞく。

う、なんかくさい。いろんなのが混じってるね。

「人が少ないよね。これじゃ、酪農らくのうが危ないよ」

「現にそうなんですよ。外にいる巨人が麦などを栽培していますから、それなりに稼ぎはあります。しかし、なかなか現状を打破できない」

「ガストロプニル付近の農村はまだマシなほうね。城砦から物資も

人員も援助されるから、少しぐらい赤字でもやっていける。ただ、遠いところは……大地にマナが満たされてないのもあって、農業ではどうにもならない。干ばつとかの問題もあるのよねえ」

「ウアンティレズドから海産物を買集めて、食料難を脱しよう」とベルゲルミルが努力してますね。これから改善するでしょう」

あたしには何がなんだか分かんない。とにかく、難しい事情があるのは分かった。

ふたりが深刻な顔をして話していると、人が集まってきた。

「おお、メングラッド様。ここに何か用が？」

「知恵の泉へ向かう途中です。顔色が優れませんね。どうなされました？」

おじいさんがあいさつする。あたしたちも会釈した。

ギフはお座りして、メグの傍に寄り添ってる。

「いえ、特には。あつしの顔はいつもこんなですよ」

「そう。無理はしないでくださいね」

「その言葉だけで充分でござい。こんな何もないところにお嬢さんが三人とは。おもてなしできんですいやせん」

「いいんですよ。それより、何か困ったことはありませんか？」

「ふうむ。ここ最近、小さな子供がうるついているという噂がありやしてね」

「子どもが？」

ちらりと、メグがあたしを見る。

「それもこれぐらいの背丈で、杖をふたつ持ち、振り回しているんだとか。ここらで暴れていたゴロツキの巨人が、稲妻の剣によって成敗されたと聞きやしたぜ」

おじいさんは自分の胸と腰の間くらいに手をやっていた。

目測だけど、それじゃあメートルちよつとだよな。

「稲妻の剣ねえ。そんなものを振り回す子どもなんて、本当にいるのかしら？」

「いるんですよ。ボクも実際に目の当たりにしたんです」

何か思い出した青年が、あたしたちに身振り手振りで説明してくれる。

「その子は、ボクが強盗に襲われた時に助けてくれたんですよ。こんなにちっこくて、杖をふたつ浮遊させて振り回してて。それから稲妻の剣を発生させ、巨人数人を一瞬で倒したんですよ。めちゃくちゃ強くてかつこよかったです」

「二刀流の魔術師？ しかも雷属性なのね」

ゲルズは腕を組んで、青年にひとつ聞く。

「その子は、悪党にとどめを刺したの？」

「いいえ。麻痺して動けなくなったら、もう悪いことはするなと注意して、忽然と姿を消しました」

「ふむふむ。身長以外に、外見に特徴は？」

「黄土色の外套に身を包んでいたの、顔は見えていないですよ。」

あ、すっごい特徴的な言葉遣いでしたね。一度聞けば、絶対に忘れないと思います」

「ふうん」

ゲルズは情報を効き出して満足げだ。

「そのような子どもが、この近くにいますね」

メグは胸を撫で下ろして、皆の顔を一瞥する。

「悪を討つのなら、悪い子じゃないよね」

「そうですね。華葉の言うように、悪い人ではないでしょう」

「……………」

あたしの意見にメグはうんうんとうなづいている。

ただ、ゲルズだけ様子がおかしかった。左の耳たぶを、指でいじっている。

「あら、どうしたの？ ギフ」

「ワンツ」

「その青年から、その子の臭いを感じ取ったのね？」

「キャンツ」

「そうですね。頼りにしてますよ」

「ワアウォーンッ」

遠吠えして、ギフは気合充分。

「さて、もうそろそろ出発しましょう。泉に着くまでに暗くなってしまう」

メグの一言で、村民の方々が道をあける。

うわあ。メグって、皆に尊敬されているんだね。

中には、ひざまずく人までいるし。

「メングラッド様。これはわしらが作った野菜じゃ。どうか召し上がって下せえ」

おじいさんが、メグに野菜の入った紙袋を手渡した。

「あら。無理はしなくていいんですよ」

「いやいや。いつもベルゲルミル様には世話になってばかりで。メングラッド様の医療にも救われているんです。こんなもんですいせんが、恩は返さないと罰が当たりやす」

「そうですか。では、おいしくいただきますね」

「ええ。新鮮なので、水洗いすれば生でも食べられますぞ」

メグは受け取ったそれを、ギフのナツプザックにしまった。

「華葉。ぼつつとしてないで、行くわよ」

「あ、う、うん」

ゲルズに言われてハツとなる。

「ワンッ」

「あ、何よお」

ギフもあたしを見て吠える。多分、注意したんだね。

「待て〜」

「キャウン」

逃げるギフ。追いかけるあたし。

「ふふっ。華葉、ギフ。遊んでいたら、泉まで持ちませんよ」

「そうよ。体力は温存しとかなきゃ」

ふたりの忠告を無視して、あたしとギフは街道まで追いかけてこをした。

街道に戻ってからは、エイルさんのお弁当を食べながら進んだ。  
「おいしいね。これ」  
軽く炒めてあるシャキシャキ玉ねぎとお肉、それにとろけるチーズがはさんである。

「そうですね。エイルは本当に料理が上手なので、助かります」  
「あ、ウサギさんっ」  
ゲルズはそれを見つけて、大はしゃぎ。

「エイルさん、あたしの一度見ただけで覚えたんだ」  
「ほんと器用よねえ。あたくしなんか、焼くぐらいしかできないもん」

パクリ。ゲルズはリンゴをひとつ頬張る。

「ギフ。あなたの分もありますよ」

「ワンツ」  
メグはサンドイッチをギフに食べさせてる。

「クウン」

頬つぺたが落ちるぐらいおいしい。ギフは尻尾を左右に振って、大喜びだ。

「リンゴもどうぞ」

「キャウン」

「好き嫌いはいけませんっ」

渋々ながら、ギフはリンゴを食べてた。

「あ、見えてきましたよ。あれが知恵の泉のある森林です」  
サンドイッチを食べ終えたメグが指差す。  
遠くに見える森林、巨大な根っこ。

ここからでも、その根っこが他の樹木より太いのが分かるよ。

「あれはユグドラシルの根よ」

「え？ な、なにそれ」

「一言で言うなら、世界樹ね」

せかいじゆ？

「疑問符だらけね」

言いながら、ゲルズはリンゴをもひとつ食べる。

「あ、ゲルズ。リンゴはひとり三つまでですよ」

「はい」

パクリ。メグもリンゴを口に入れて、うつつり。

「このまま歩けば、日が暮れる前に着きますね」

「そうですね。ミーミルの機嫌がよければ、大量の水が汲めます」

ふと、疑問に思った。今更だけどね。

「あのさ、どうやって水を持ち帰るの？」

「ん？ ああ、水を吸収する魔石があるのよ。泉でそれを使うから、

もう少し待ちなさい」

「う、うん」

ゲルズの説明を聞いて、この世界は普通に魔石があるんだなあと感じる。

あたしのいた世界じゃ、そんなの日常的に使おうにも存在しないからね。

「荷物持ちであるギフがいて、本当に助かります」

「キャンッ」

メグの一言に、ギフはうれしそうに声を上げる。

ふと、ギフが足を止めた。前傾姿勢になって、鼻で何か探ってる。

「ど、どうしました？」

「ガウウウウウウッ」

「え？ 農村で嗅いだ臭いがするの？ もしや」

「ワンッ」

メグの問いかけにギフはうなり声を上げる。

ゲルズの通訳で、あたしにも理解できた。

「血の臭い、ですって？ メングラッド様、ミーミルに何かあったのかもしれない」

「そうですね。急ぎましょう」

「ワオンッ！」

「え、ええ？ ま、待ってよ〜」

草が生い茂り、森林が青々とした葉を育んでいる。

「華葉、だいじょうぶ？」

「う、うん」

引きこもりだったけどさ、あたしは家の中で筋トレしてたんだよね。

だから体力には自信がある。ふふっ。憧れのアイドルの真似っただけどね。

「そう。あたくしは先に行くわよ」

それでも、皆に敵かなわない。

ギフはともかく、メグもゲルズも足が速い。それに加えて、息切れもしてない。

数百メートル走って、どうしてまだ元気なの？

ゲルズに伴走ばんそうしてもらってるけど、バテてきたよ。

「このまままっすぐに進めばいいのよ。華葉、お先に失礼するわ」  
おっかしいなあ。

あたし、これでも百メートル十二秒台で走れるんだけど。

長距離走も得意なほうだったんだけど、やっぱり家にいちやダメだね。

ちゃんとトレーニングしてないと、身体がなまっちゃうみたい。

「はあ、はあ、ふう」

少し休んで、それから再び走る。

「あ、あれは」

見えてきた。泉と、皆の姿が。

「ぐああああああっ！？」

「むんっ」

お城で見たのよりもちょっと小さいけど、それでも大きな巨人が

誰かを殴り飛ばした。

「華葉、後ろ！」

「え？」

ゲルズがあたしに気づいて、大声で叫んだ。

「きゃっ」

「がっははははは！ こいつの命が大事なら、抵抗するのを止めるんだなあ！」

太い腕で首を締められる。

ギフ、メグ、ゲルズ、巨人の動きが止まってしまった。

「よしよし。おい、てめえら。金目のものを出しな。そうすりゃ、こいつは殺さずに返してやるよ」

あたし、人質になっちゃったんだ。

「うっ」

く、苦しいっ。息が、息ができないっ。

「め、メングラッド様」

「ゲルズ。ここはおとなしく従いましょう。ギフも、ミーミルもいいですね？」

「仕方あるまい。我々では、どうしようもできん」

あれが、ミーミルなんだ。やっぱり髪も長いし、ひげも長い。

地味な服を着てるけど、それが筋肉を目立たせてる。

藍色の瞳と髪は、背景の泉と色が合ってるてキレイだ。

って、冷静に分析してる場合じゃないよっ。

「おっと、力を入れすぎたな。ここで死んでもらっては困るんでね」

「うっ」

な、なんとかしないと。

「っ」

でも、怖いっ。眼前に突きつけられたナイフが、あたしの頬に触れそうだ。

「おや、誰かと思えばあんたはメングラッド様じゃないか」

「なんだって？ こいつあ、いい土産だ。こいつを捕まえれば、べ



ルゲルミルもいろいろと出してくれるんじゃないか？」

「悪い人たちが、皆を取り囲む。」

「どうしよう。あたしがこのままだと、皆が危ない。」

「な、い、いつてええっ!?!」

「あたしは思いきり腕に噛みついた。」

「迷ってなんかいられない。どうなろうと構うもんかっ!」

「て、てめえ! 今すぐにブツ殺してやる!」

「っ」

「あたしは、額に触れるギリギリでナイフをつかんだ。」

「うう、いったあああああいつ!」

「な、なんだと? く、は、はなせええっ!」

「やだね。絶対に放さない。そうしたら、そうしたら、皆を傷つけるんですよ?」

「傷つくのはあたしだけでいい。皆を、大切な皆を傷つけないでよ。」

「お!」

「く、だったら」

「あ、血で滑ってナイフが くゝひいつ!?!」

「その心意気やよし。感服であります」

「うぐおうええええええええええええええええええっ!?!」

「あたしを捕らえていた人が、ナイフを落として前に倒れる。」

「な、なんだ? ふぎゃあああああああっ!?!」

「“スパーク”!」

「バリバリとほとばしる、激しい電流が 悪い人だけに襲いかかる。」

「皆に触れることなく、その地を這う稲妻は、悪い人を真っ黒焦げにした。」

「あ」

「おっと」

倒れそうになるあたしを、後ろから誰かが支えてくれた。

「じっとしておれ。治療してやりんす」

ぽうつと、全身が暖かい光に包まれる。

そしたらすぐに、あたしの手の切り傷が治ってく。

「か、華葉」

「華葉、だいじょうぶ？」

メグとゲルズが、あたしを心配して駆け寄ってきた。

「あ、あ……ぐう」

息が、苦しい。ち、力が入らない。

「か、華葉？ お、落ち着きなさい！ 落ち着いて、深呼吸するのよ」

ゲルズがあたしを抱き留めてくれた。背中を優しくさすってくれる。

「ぐ、うつ。げほ、ごほん！」

「華葉、吸って吐くを繰り返すのよ」

「うつ……すう、はあ、すう、はあ」

「うん。それでいいわ」

ゲルズがぎゅっと抱きついた。少し、震えてる？

「あらら、鼻水垂れてるわよ。ほら、これでふいてあげるわ」

ゲルズはそれに気づいて、ハンカチでふきふきしてくれる。うつ、汚くしてごめんなさい。

「華葉は、極度の緊張から解放されて、酸欠に陥おちいってしまったのですね」

「先刻、男にきつく絞しめられておったしのう。しばらく休みんしゃい」

黄土色のマントをなびかせ、小さな女の子が横ぎる。

その子は、自分の背丈ぐらいある杖をふたつ、浮遊させて連れていた。

「ワンツ」

「ギフ、お止めなさい。華葉を助けてくれた恩人に齒向かうなど、あつてはなりません」

「クーン」

女の子はギフの傍で足を止め、頭から被っていたマントを緩めて、素顔をさらした。

「ふう」

長いブロンズ色の髪の毛を振り乱して、女の子は巨人の顔を見上げる。

瞳は目じりが垂れてて可愛い。その緑の輝きは、エメラルドみたいでキレイだった。

「そなたが、ミーミルでありんす？」

「それがどうした」

「ふむ。その泉の水を分けてほしくてのう」

「それはできん。今は後始末が優先される」

「うむ。これはワシが呼び寄せた災いじゃしいう。それはワシひとりでありんす。そなたらは手出しせんでよろしい」

女の子は杖ふたつを活用し、気絶した人たちを一ヶ所に集めた。

「もうよい。後は我輩がやる」

「ほう？ まさか、ここで始末するつもりか。ワシひとりでやると申したじゃろう？」

「ふん。ガストロプニルへ転送するだけだ。手荒な真似はせんよ」

ミーミルは手を合わせて呪文を唱える。すると、その人たちは淡い青の光に包まれた。

「往け」

もう一度手を叩くと、その人たちは一瞬で消えてしまった。

「これでいいだろう。さあ、さつさと帰るがよい」

パンパンと手を叩きながら、ミーミルは泉の前であぐらをかいた。

「ミーミル。私達はガストロプニルから参上しました。泉の水を分けてもらえませんか」

メグがギフの傍に立ち、ミーミルに頭を下げ、頼み込む。

「メングラッドか。ベルゲルミルの使者とあらば、断るわけにはいかない。しかし、何故に人間の娘を連れて歩いている？ 泥臭さが鼻につくぞ」

「華葉に、弁償しなければならぬものがあるのです」

「ほう？ そなたらの失態など、我輩は関知しないこと。そのために泉の水で喉を潤そうなどとは笑止千万。さあ、帰った帰った」  
ミーミルは手で、しっしっしと追い払う。

困った様子のメグ。

それを横目で見て、小さな女の子がミーミルの前に立つ。

「ワシはこの者達とは関係ないのでな。それでも泉の水は分けてくれぬか」

「小娘もダメだ。どうしても飲みたければ、我輩と知恵比べをしろ」

「ふむ。勝てば飲ませてくれるのかや？」

「そうだ。だが、負けたらお前は どうする？」

「……。お前の嫁になってもよいぞ」

「それは勘弁願いたいな。我輩は幼女など趣味ではないのだ」

あ、女の子の目つきが鋭くなった。今で怒ったのかな。

「ほう？ 我輩とやる気が」

ひげを指先ですいて、ミーミルが問う。

「聞き捨てならぬ。ワシを子ども扱いしおって」

「子供に子供と言って何が悪い？」

「……」

小さな女の子は、肩をすくめてあたしとゲルズのほうへ来た。

「ミーミル」

「なんだ？」

立ち止まり、女の子はミーミルを振り返った。

「ワシをなめぬほうがよいぞ」

「……ッ！？」

バタリ。突然、ミーミルが倒れた。

「ワンツ！ ガルウウウウツツ」

「ギフ？ 今のを、感知できたのですね」

メグの傍にいたギフが、前傾姿勢になって女の子をにらむ。

そのメグは倒れたミーマルに寄り添い、淡い光で包んでる。治療してるのかな。

「ほう？ ワシとやる気か？」

女の子はあたしとゲルズに背を向けたまま、ギフとにらめっこをする。

「も、もうだいじょうぶ」

「そ、そう？ なら華葉。あなたは樹木の陰に隠れてなさい」

あたしを草むらに避難させて、ゲルズは身構えながら女の子との距離を詰める。

「犬つころと、女子おんなが三人。ワシとやりあうつもりかや？」

「ふざけたしゃべり方して。あんた、いきなり手を出すなんて卑怯よ！」

ゲルズは黒のマントを外して、投げ捨てた。

「卑怯？ 見知らぬそなたらにほめられる生き方など、するつもりは毛頭ないわ！」

叫びながら、女の子は杖ひとつを右手に握り締めた。

「斬り捨ててくれよう」

女の子は右手の杖を帯電させた。バチバチとした電流がまぶしいつ。

「ガオンツ！」

「“サンダー・ブレード”！」

女の子は杖から発生させた稲妻の刃を、ギフめがけて振り下ろす。素早く横に動き、ギフはそれをかわした。

「ギフ。泉から離れなさい！ メングラッド様とミーマルに当たるわ」

「キャン」

ゲルズの指示を受けて、ギフはさらに前へ出る。

「かかってくるのは、ふたりだけかや？」

「ウォンツ！」

ふと、ギフは何かを思い出してメグの傍に駆け寄る。

「え、に、荷物を外せ？ わ、解ったわ」

背負っているナツプザックが邪魔なんだ。メグは急いでそれを外して、ギフを送り出す。

「ふむ。重荷は取り除かねばのう」

「よそ見してるんじゃないわよ！」

ゲルズは両手に炎を発生させた。あ、熱くないのかな？

「炎じゃと？ ほう、貴様は紅蓮術師か」

「だからなに？ あんたは、何者なのよ」

「ワシか？ 知りたければ、ワシを倒してみるがいい」

ゲルズは炎の拳で、女の子へ殴りかかる。けれども、女の子が浮遊した杖に跳び乗ったことで届かなくな

た。  
「ならば撃ち込むまでよ。“ブレイズ”！」

ゲルズは両手をかざして、女の子へ火の玉を放つ。

「むんっ」

しかし、それは杖によって打ち払われた。

「その女子おなこよ。ここがどこだか解って戦っておるのかや？」

「うるさいわねっ！ あんたに言われたくないわ」

「ふっ。ならば自分で気づきんしゃい」

女の子は杖から降りて、背後をついたギフの体当たりをかわした。

「ガウウウウッ」

着地したギフは、再び樹木を駆け上がった。枝の上に立って、様子見してる。

「上から狙うか。なら、これでどうじゃ？」

女の子は左手の指をパチンと鳴らした。

すると、遙か上空から。

「キヤインツ!?!」

鋭い稲妻が、ギフのいる樹木へ落ちてきた。

ギフはかるうじてそこから離脱してた。樹木は雷を受けて燃えちやつてる。

あたしは危ないと思って、ここから離れた。ゲルズの後ろに立って、事の成り行きを見守るしかできない。

「っ」

「反応が速いのう。そうでなくては」

ふと、ゲルズの両手から炎が消えた。ど、どうしたんだらう。

「白魚のような指じゃな。それは紅蓮などで包まず、男の頬を撫でるのが好ましい」

「だ、黙りなさいよ!」

ゲルズは足下に落ちているナイフを蹴り上げ、かつこよく右手でキヤツチした。

それを逆手に持ち、女の子へ斬りかかる。

女の子はすかさず後退して、ちらりと燃え盛る樹木を見た。

「赤マナをもらいんす」

女の子はそこへ両手をかざして、炎から赤い光を引き抜いた。

それによって、炎が消えた。何がどうなってるの?

「な、あれは」

ゲルズは足を止めて、両腕で防御する。

「ワオオンツ!」

「ふ。これで黙りんす。“フレア”!」

女の子はそれを手の中で練り合わせ、背後にいるギフへと投げ捨てるように放った。

「キヤイイイイイイイイイイイインツツ!?!」

散らされた赤い光は、ギフが触れたことで大爆発を起こす。

その衝撃で吹っ飛び、地面を転がされるギフ。その先にある泉に、落ちてしまった。

「ギフっ！」

ゲルズが叫ぶ。メグはミールの治療に集中していたのか、何が起きたのか分からず混乱してる。

「犬っころは戦闘不能。さあ、そなたひとりでどうするのかや?」

あたしはマントを捨てて、泉へと走っていた。

「か、華葉。あなたは下がってなさい」

ゲルズがあたしの腕をつかんで止める。

「で、でも……このままじゃ」

「案ずるな。戦意のない者に、手出しはせん」

「う、嘘つきなさいよ。あなたの言葉なんて信用できないわ」

「行け。あの犬っころは、さっきので気絶している。急がねば、溺<sup>で</sup>死<sup>き</sup>するぞ」

どうして、この女の子はそんなことを教えるの?

「早<sup>はや</sup>う行かんか。犬っころを見殺しにするつもりかあ!」

「え、あ、うんっ」

女の子は、本当にあたしに手を出さなかった。

横<sup>よこ</sup>ぎる時、小声で「ごめん」と言ってた。だったら、やらなきや

いいじゃんか!

「わわっ」

石につまずいて、転んじやった。

すぐに起き上がり、走る。その勢いのまま、あたしは泉へ飛び込んだ。

思いのほか、泉は浅かった。

水が澄んでいる。おかげですぐに見つかったよ。

底にいるギフは気を失ってて、身動きひとつもしてない。

早く引き上げないと、死んじやうよっ。



「じぼっ」

あ、焦って息を吐いちゃった。

ええい、もう一度水面上がってる余裕はない。

早く、早く、ギフを抱えて上へ行かなくちゃ。

「ご、ぼい」

重い。ギフの身体は大きくて、体毛が水を吸ってて、あたしひとりじゃ持ち上がらない。

あ、い、息が苦しっ。

「う」

あ、大量に水を飲んじゃった。

い、息が持たないよ。ど、どうしよう。

え？ あ、な、なに？ 急にあたしとギフが上がってくよ。

「ぶはあっ」

あたしとギフは大きな手につかまれ、地上に引き上げられていた。

「無事か？」

「げほ、ごほ、げふんっ」

ミーミルだ。その手で、あたしとギフを助けてくれたんだね。

でもさ、泉から出してすぐに投げ捨てないでよ。救われて、文句を言うのもどうかと思うけどさ。おかげでお尻が痛いよおっ。

「ゲルズ。ゲルズっ！」

メグの声。そっちを見ると、うつぶせに倒れたゲルズが視界に入った。

赤のリボンが焼けてて、髪がほどけてる。

「近づかないほうがいい」

「で、でも」

ミーミルがメグの手を引いて止める。

ふと、ゲルズに反応があった。

「もうしまいか？」

「ま、まだあ……っ」

ゲルズは根性で立ち上がり、女の子と向き合った。

「ガ、ガウツ」

あ、ギフ。気がついたんだね。

「無理をするな。お前達は、ここでじっとしている」

ミーミルはあくらをかいて、女の子とゲルズのほうを見据えた。

「やるな。我が雷刃らいじんを受け、気を失わぬとは」

「あ、あんなの効いちゃいないわ」

強がつてる。ゲルズはあちこちに火傷してて、虫の息だ。

「ど、どうしよう。このままじゃ、ゲルズが……」

メグは涙目で、あたしたちを見る。

「っ」

気づいたら、あたしは女の子に飛びかかっていた。

「なんじゃと？」

「わっ」

女の子はそれに気づいて、浮遊する杖に飛び乗った。

あたしは転んじやって、泥まみれだよ。

「そなたも、やる気が」

「か、華葉」

「ゲルズを、ゲルズをいじめないでえ！」

飛び起きて、あたしは女の子を怒鳴りつける。

「いじめめる？ 違うぞ。力をどう使うべきか、教えておるのさ」

「何が力の使い方だよ！ あなた自身が間違っって使ってるじゃない

！ ゲルズを傷つけて、もう、もう許さないんだからあつ！」

「本気か？ ふっ、ならばお前もその身に受けよ」

「え？ きゃああああああああああああつっ!？」

気づくのが遅かった。女の子は、杖を握っていない。

あたしは背後から電撃をもらってしまい、うつぶせに倒れる。

「っ、っ、っ」

ドクンっ。

目の前が、真っ白。

ぐう。身体がしびれて、動けないよ。

「あ、あんたあ！ 華葉に手出ししてんじゃないわよ！」

「ワシに戦意を見せた時点で、敵でありんしょう？」

「ちいっ！」

ゲルズが何かをしようとした時。

「もういい。これ以上は止める」

ミーミルが言葉でふたりを制する。

「ほう？ ならば、その泉の水をワシにくれるのか」

「くれるだと？ ふん。その気になれば、いつでも青マナを取り出

せたはずだぞ」

「ふむ。どうやら、完全に気を失っていたわけではないようじゃな。

一撃で沈めたと自負していたのじゃが。まさか、意識があるうとは

のう」

スタッ。女の子が飛び降りる音がした。

「“キュア”」

あ、身体のしびれが取れてく。この、暖かい感じはなに？

「その女子おんなこよ。自分ひとりで立てるかや？」

「あ、あなたは……うう」

「無理か。しばらく休んでおれ」

女の子は泉に近づいて、両手で青い光を引き抜いた。

「確かに水はいただいた。あむっ」

女の子はそれから水玉を発生させて、それを一気に飲み干した。

「うむ。うまい。ミーミル」

「なんだ？ まだ何かあるのか」

「水をくれた礼じゃ。受け取るがよい」

女の子は腰から下げたずだ袋から何かを取り出し、それをミーミ

ルへ投げた。

「パワーストーンか。まあいいだろう」

「では、ワシはこれで失礼する」

「ま、待ちなさいよ！」

立ち去ろうとする女の子を引き止めるゲルズ。

あたしの傍に来て、ぼうつと優しい光で包んでくれた。

「なんじゃ？」

「あんた、名前は？」

「名を聞くのなら、そちらから名乗るべきじゃな」

「ちっ。あたくしの名はゲルズよ」

「ふむ。して、そちらの女子おなこは」

「折笠華葉。そういう名よ」

「……………。ふむ。ワシの名は、ウルヴァフ。また逢えるのを楽しみにしておるぞ」

女の子は名乗った後、浮遊する杖と一緒に消えてしまった。

### 第3話

#### 《ユグドラシルの根》

太い根つこの上に立つ、黄土色の外套を羽織った女の子。夕焼け空を眺めながら、ウルヴァフは泉を見下ろしていた。

「あの女子、ほんの一瞬じゃが目が……あれは、いったい」  
首を左右に振って、彼女は華葉と対峙した時を振り返る。

「む。震え、じゃと？ ふっ、ワシに恐怖を教えるとはな」

ウルヴァフはぎゅっと握り拳を作り、それを無理やり止めた。それから杖を腰帯に差して、再び泉のほうを見やる。

「もしやと思うが、あの女子は……化けるやもしれん」

そこに背を向けて、ウルヴァフは膝を曲げた。

「折笠華葉、か」

胸の昂揚を楽しみつつ、ウルヴァフは空高く跳んだ。

#### 《知恵の泉 折笠華葉》

「はあつくしゅんっ！」

「ふえつくしゅんっ！」

あたしとゲルズは、同時にくしゃみをした。

泉の前で焚き火をしてるけど、まだ身体が暖まらないよお。

日も落ちてきて、気温も下がってるし。さ、さぶっ。

「無事でよかった」

「そうでもなさそうだな」

後ろから暖かい光をくれるメグ。

あたしとゲルズはマントを羽織り、皆と一緒に焚き火を囲んでいる。ちなみにこの火はゲルズがつけました。

「服は脱いだほうがいいですよ。あ、ギフとミーミルがいますし…」

「我輩は、小娘の裸体ごときで見境はなくさん」

「ワンツ」

なんか、むかつく。ギフは何を言ってるのか解んないけど。

「と、とにかくあたくしはくしくしくしょん！」

「あ、あたしよりもゲルズにくしくしくしょんっ！」

「ふたりして、何を言ってるか解りません」

くすくすとメグは笑う。

「ウツツ」

ギフは寒そう。あれ、離れてくよ。お、全身をブルブルさせて水をきってる。

そうしてから、また焚き火の近くで横になった。

「ミーミル。その石は」

「お前達にやろう。我輩には重すぎる」

「わわ」

あたしに赤い石をキャッチさせないでよ。う、重い。目の前に置いてごう。

「まだ何も言っていないわ。どうしたのよ」

「賄賂わいろだと思われたくないのでね。それよりも、その石はかなり

上質だ。大事にするといい」

「ふうん」

ゲルズは納得いかない様子。

「もうすぐ日が暮れるな。どうする？　ここで寝泊りするか」

「ここであって、夜風で冷えるでしょ」

「近くに我輩の小屋がある。そこで寝泊りするかと聞いたんだ。言葉が足らなくて済まないな」

ちよつとキレてるミーミル。

「ミーミルはどうすんのよ」

「我輩は泉の前で瞑想めいそうしているさ。小屋は我輩ひとりで住んではい

るが、小さいお前達なら広々と使えるだろう」

「あ、ありがとう」

あたしがお礼を言っていると、ミーミルはにっこりと微笑んだ。

「あ、華葉にほれたの？」

「ゲルズ。お前はもう少し慎みを持って」

ミーミルの発言に、メグとギフが吹き出す。

「あ、なによあ。何がおかしいの？」

怒って立ち上がるゲルズ。

「は、はあつくしゅん！」

でもすぐに、身体が冷えてくしゃみをしちゃう。

「早く小屋に行け。そっこのほうが暖まるだろう」

「そうですね。皆さん、そちらで休ませてもらいましょう」

メグの案内で、あたしたちは泉近くの小屋にやってきた。

中は広々としてて、壁にかけてある釣竿や斧、竹ぼうきに木の桶に金属製の鍋、麦わら帽子。それらはちよつとサイズが大きい。

中心に囲炉裏があり、今いる玄関には大量の薪が置いてある。

ミーミルみたいに、身体が大きい人にはちよつどいい空間だね。

生活感がプンプンする。汗くさいのもあるけどさ。

「よつと」

ゲルズはサンダルを脱いで上がり、囲炉裏に火をつけた。

「わあ、ゲルズってすごいね」

「す、凄い？ どこが」

「だって、魔法で火を起こせるから」

あたしも靴を脱いで、そこで暖を取る。靴は近くに置いて乾かすところ。

「ワンツ」

ナップザックを口に咥えてたギフは、それをメグに預ける。

「ありがとう。ギフ」

「クーン」

暖がほしいのか、ギフもこっちにやってきた。

「メングラッド様、今のうちに水を汲んでは？」

「そうですね。あら？　これは」

ナップザックの中を見たメグは、何か見つけたらしい。

「どうかしましたか？　メングラッド様」

「その、この水筒。どう使うのか、教えてくれませんか」

メグはそれを片手に、あたしへ質問する。

「そこにふたがあるでしょ。それを回せばいいの」

「はあ。んつと。あ、外れました」

「水を入れたら、今度はそれを締めてね」

「なるほど。何となく使い方が解りました。ありがとうございます」

ナップザックをあたしの近くに置いて、水筒と青い石を持ったメ

グは。

「では、私はミールに食べ物がないか聞いてきますね」

と言い、小屋を出ていった。

「ふう」

あたしの顔をちら見して、ゲルズは溜息をつく。

「どうしたの？」

「ん。ごめんね」

「え？　な、なんで謝るの」

ゲルズはあたしをじつと見つめて、唇を噛み締める。

「あたくしは、感情に任せてあの子と戦ってた。自分の力が、何な

のかを考えずに」

「うん」

「炎は、森林火災を引き起こす可能性があった。あのウルヴァフッ

て子は、戦いくの中でそれをあたくしに教えてくれた」

あ、だからあの時に手の炎を消したんだね。

「あの子と違って、あたくしは後先を考えていなかったんだよね。

あゝ、もうっ。悔し〜！」



ゲルズは髪をくしゃくしゃにする。

「あのウルヴァフって子は、相当な手練ね。落雷させて樹木ひとつを燃やし、赤マナを手に入れつつ消火してる。杖が放つ雷刃も、皆に当たらないよう加減してた。他人を気遣いながら、あたくしとギフの動きを先読みしていたんだもの。力の差は歴然ね」

「ワンツ」

「ギフもそう思う？ 今度会った時は、必ず一泡吹かせましょうね」  
「ウォンツ」

ギフの言葉がまったく解らない。何を話してんの？

「華葉も、悔しいでしょ？ あのウルヴァフって子に、リベンジしたいと思わない？」

「え、あ、あたしは……」

「ふふっ。華葉は優しいのね」

「ええ？」

「ありがとね。あたくしがピンチの時に、助けてくれて」

「あ、でも、逆にやられちゃったよ」

「そうね。でも、うれしかったわ」

「う、うれしいって」

「だって、あたくしは華葉に仲間だと認められたからさ」

にっこりと微笑むゲルズ。

「な、仲間って……どうして、そうじゃないって思ってたの？」

「え？ 何となくだけど、華葉ってあたくしのことを遠ざけてるのになって。ちよつと、不安だったんだよね」

「そ、そんなことないよつ。メグも、ゲルズも、ギフも、エイルさんも、大切な友だちだよ」

「ともだち？ ふふっ。そっか、友達かあ」

ゲルズは目の前の炎を見つめて、ほつと胸を撫で下ろした。

「ミーミル」

星が瞬く夜空。丸い月が泉を幻想的に照らしている。

その下で瞑想するミーミルは、メンングラッドの声を聞いてまぶたを上げた。

「なんだ？ 我輩は、瞑想中だと言ったはずだぞ」

「邪魔をしてごめんなさい。これを」

メンングラッドは水筒と青い魔石を置いてから、ひとつの書簡しょかんを手渡した。

「ん？ やけに大きな手紙だな。なるほど。ベルゲルミルからか」

「もうひとつ用件があります」

「水なら好きに汲むといい」

「先刻と申していることが違いますね。泉の水が汚れたからですか」

「違う」

「華葉が、勝手に飛び込んだからですか」

「何度も言わせるな。ただ、その娘に起因するのは間違いではない」

「はあ」

「気づかなかったのか？ ならいい」

「え？ な、何か華葉が？」

ミーミルは泉に映った星空を見て、溜息をついた。

（あの娘から、ほんの一瞬だがとても強い何かを感じた。泉の水を飲んだには違いない。しかし、それだけで知以外の何を身につけたというのだ……？）

疑問を振り払いながら、ミーミルは手紙を広げた。

「……………」

「あの、ミーミル。ベルゲルミルは何を？」

「ふう。メンングラッド、この泉はお前にやろう」

それに目を通し終えて、おもむろに立ち上がるミーミル。

「え、え？ な、何を突然」

「何も聞くな。今から、この泉はお前のものだ。もう我輩のもので

はない」

「な、なぜ」

「聞くなと言っただろう。三度は言わんぞ」

ミーミルはメングラッドを振り返り、ひげを指ですきながら微笑んだ。

「あ、あの」

「なんだ」

手紙を両手で丸めながら、ミーミルはメングラッドの目を見た。

「出かけるのですか？」

「ああ。急用ができた」

「然様ですか。それは困りましたね」

「ふむ。何が困ったんだ？」

メングラッドはミーミルの顔を見上げて、溜息をひとつ。

「目的は聞きませんよ。ただひとつ、食べ物についてうかがいたいのです」

「そうか。ならば」

### 《ミーミルの小屋 折笠華葉》

ガチャ、キ、バタン。メグが帰ってきた。

「ただいま」

「あ、メグ。おかえりなさい」

「ふふつ。華葉、ゲルズ、ギフ。お魚が取れましたよ」

皆が一斉にメグのほうを見る。

「あらまあ。皆さん、そんなに空腹なのですか？ 目が怖いですよ。そう言いながら、メグはサンダルを脱いで、囲炉裏の近くに腰を下ろす。

「ほら、こんなにありますよ」

得意げに、竹かごに入った魚をあたしたちに見せてくる。

それらには木の棒が差し込んであった。

「こ、これはメングラッド様か？」

「いえ、ミーミルが獲ってくれました。ささ、早く焼いていただきましょう」

「では、あたくしがくつくしよん！」

炎が揺らぐほどの激しくしゃみだ。

「ゲルズはおとなしくしてたほうがいいですよ」

「うう。でも、火の扱いはあたくしにおまかせあれ」

「風邪を引いたかもしれないのに、魔法なんでもつてのほかです。静養してください」

「は、はい」

メグの厳しい態度に、ゲルズはしゅんとうなだれる。

「ひとり二尾ずつですよ」

メグは魚を並べて焼いていく。

「木の棒は、ミーミルが用意したの？」

「ええ。このナイフで、落ちていた枝を削ってくれたんです」

「あ、それ」

ゲルズが拾って使ってたものだ。

それを脇に置いて、メグは魚の焼き具合を見る。

「あ、それもういいんじゃないかな」

「そうですね。華葉、それを食べてください。栄養をつけないと、風邪を引いてしまいます」

もうすでに引いてるかも。寒気がするし。

「あつっ」

木の棒をつまもうとしたら、思いのほか熱かったよお。

「ちよつと待って。火を弱めるわ」

「ゲルズっ」

「で、でも、華葉が火傷しちゃいます」

「少し水を加えればいいんです」

そういつてメグは、水筒を手にして火に水をかけた。

「あ」

かけすぎ。火がちっちゃくなっちゃった。

「メングラッド様」

「げ、ゲルズ。お願いします」

「はい」

気まずいのか、メグはこめかみを指で引っかいてる。

「わっと」

火が強くなった。でも、さっきよりかは穏やかに見える。不思議だね。

「ガウツ」

「あ、ギフ。先に食べちゃいましたね」

「クウン」

「よっぽどお腹が空いてるのね。メングラッド様、ありがたくいただきます」

「あ、うん。あたしもいただきます」

「ワンツ」

「はあ。では私も、いただきます」

皆は魚を手にして、パクリと一口。

「あちちっ」

「ふうふうしてから食べなさいよ。もう」

そういうゲルズも、舌を出して冷やしてるじゃない。

「ほら、お水ですよ」

「あ、ありがとうございます」

まずはゲルズが水筒の水を飲む。

「次は華葉ね」

「うん。ぐびぐび」

そういえば、これ。知恵の泉の水だよな。

飲んでいいのかなあ。あ、ギフを助ける時にガブ飲みしちゃったから、もう関係ないか。

でも、泉を汚しちゃったからね。後でミールに謝っておこう。

「ギフは？」

「キャウン」

首を左右に振ってる。いらないんだね。

「メグは？」

「私は結構です。あ、骨があるので気をつけてね」

「ワンッ」

ギフはお構いなしに魚を食べてる。

ペツと木の棒を吐き出して、ふたつ目を口にした。

「骨がちよつと多いわね」

「うん。でも、気にならない」

身に脂が乗ってて、このお魚はとってもおいしいよ。

「「「ごちそうさまでした」「」」

「ワンッ」

魚を食べ終えたあたしたちは、そろってごちそうさまをする。

「さあ、就寝の準備をしましょう」

「あたくしはお風呂の支度をくくくしゅん」

元気なメグとは対照的に、ゲルズは本気で風邪を引いちゃったみたい。

「ゲルズは無理をしないで。お風呂を沸かすとなると、時間がかかるし負担になります。ゆっくり休んだほうがいいですよ」

「で、でも……」

「ワンッ」

「うう」

あたしは大きな鍋を見つけて、閃いた。

「メグ。ナイフあったよね。それ貸して」

「え？ な、何をなさるのですか」

「他に、調味料とかないかな」

「はあ。小屋のどこかにあるのでは？」

「うん。じゃあ見つけたら、使わせてもらおうと」

あたしは鍋を囲炉裏にセットしてから、ナイフを受け取って玄関で靴を履く。

「あ、メグ。その竹かごを投げて」

「華葉。服がぬれてるし、身体も冷えているのですから。無理はなさらないで」

近づいて、それを手渡しするメグ。

「だいじょうぶだよ。食べられる草とか、そういうの探すだけだから」

「あら、それでしたら。ミールが薪の近くに、山菜があると言っていましたね」

「へ？」

ちらりとメグが見たところを、あたしも背伸びして見る。

あ。ほんとだ。薪の向こうに大きな竹かごがある。確かめてみよう。

「こんなにあるんだ。ここが食料庫みたいだね」

キノコとか、野草とか、豊富だね。あ、目の前に木製の棚がある。その大きな瓶に入ってるの、味噌かなあ。

指を入れて味見する。ちよつと豆が残ってるけど、間違いない。

「お借りしまあす」

あたしは食材を竹かごに入れて、調味料とそれを持って鍋の前に座る。靴は囲炉裏近くで乾かしとく。

「あ、メグ。野菜あつたよね」

「え？ あ、はい。それも使うんですね」

メグはナップザックから紙袋を取り出し、それを竹かごの脇に置く。

「まな板ないかな」

「この木の桶でいいですか？」

「そうだね。借ります」

木の桶に食材を入れて、あたしはメグから水筒を受け取り、その

水で食材を洗う。

紙袋にあった野菜は、ごぼう、にんじん、玉ねぎ。

「水が足りないね」

「では、私が汲んできます」

「お願いするね」

水汲みをメグに一任して、あたしは食材を取り出し、桶の水を囲炉裏に捨てる。

「弱火にして、と」

木の桶を裏返しにして、あたしは食材をナイフで一口台に切っていく。

「何を、作るのですか？」

水汲みから戻ったメグが、あたしに訊ねる。

「とりあえず味噌汁かな」

「みそしる？ な、なんですかそれは」

メグが首を傾げる。あ、ゲルズもギフも解らないみたい。

「作ってあげるから、ちょっと待ってて」

水筒を受け取り、その中にある水を鍋に注ぐ。

鍋が熱いので、水がすぐに煮える。

「もう一回お願い」

「はい」

メグが走る。数秒後、メグが帰ってきた。

「これで足りるね」

戻ってきたメグから水筒を受け取り、水を注ぐ。これで量は充分。ダシをどうしようかと思ったら、魚の頭を八つ見つけた。焼き魚の残りだね。

「ゲルズ。焼き魚の残りを持ってきて」

「あ、うん」

ナイフで骨を切断して、頭だけを八つ確保した。それを鍋に放る。

ごぼうの先端をナイフで切り、笹掻さしかきにして鍋に入れていく。

ごぼうは硬いからね。先に入れて、火を通しておかないと。



あたしは焼き魚を食べる時に使ってた、木の棒をふたつ手にして箸<sup>はし</sup>代わりにする。

「な、なんか……凄<sup>すご</sup>い手際がいいわね」

「ワンツ」

ゲルズとギフは目を白黒させつつ、あたしの調理を見守っている。

「へっくしゅん」

「もう少し待ってて。ゲルズの身体を暖める料理ができるから」

「あ、ありがとう」

煮立ってきた。それと同時に、アクも出てくる。

木の桶を使つて、あたしはそれをていねいに取り除く。

それから箸で魚の頭を取り出し、木の桶に放置する。

「じゃ、具を入れましょう」

あたしは刻んだ食材を入れる。

全部薄めに切つてあるから、すぐに火は通るはずだ。

「後は、お味噌だね」

大きな瓶に保存されてる味噌を箸ですくう。それをお湯に浸して、

少し溶かしてから箸でかき回す。

うん。いい色と香りだ。

「わ、おいしそう」

「ワンツ」

「華葉<sup>はなは</sup>つて、料理が上手なんですね」

あ、ひとつ忘れてた。

「あのさ、食器はないかな」

「え？ あ、はい。少々お待ちを」

メグは薪に隠れた食料庫のほうへ向かい、木製の棚から大きなお椀を四つ見つけてきた。

「はい。これもどうぞ」

「あ、うん。ありがとうね」

ひしゃくも持ってきてくれたんだ。ありがとう。

それで味噌汁をかき回して、ふうふうと冷ましてから味見する。

「うん」

ようやく完成しました。

「はい。よそるから待っててね」

あたしは味噌汁を皆に渡して、自分の箸とお椀を持つ。

うゝ、米が食べたいっ。やっぱりご飯と味噌汁はセットでしょ。うええええ〜んっ。

「か、華葉。どうしました？」

「なんでもないよ」

メグがあたしの様子に気づいて話しかけてきた。

嘆なげいててもしょうがない。ありがたく、この味噌汁をいただく。

「熱いから、冷ましてから食べようね」

「ワンツ」

ギフは無視して、自分の前に出された味噌汁をすすってる。

「クウン」

「ギフ。とつてもおいしいですって？ どれどれ」

ゲルズは慣れない手つきで、箸を持つ。

「か、華葉。これは、どう使えばいいのでしょうか？」

「ふたりは、あたしを見て。こうやって箸を使うの」

メグも箸に不慣れなので、あたしはふたりに箸の使い方を教えてあげる。

「なるほど。コツはつかんだわ」

「ええ。これは治療にも使えそうです」

ふたりは飲み込みが早い。すぐに箸の使い方を覚えちゃったよ。

「器用だね。ふたりとも」

「そう？ 華葉のを真似すればいいだけだもの。いい手本があれば、すぐに学習できるわ」

「ええ。その通りです」

ふたりは箸とお椀を持ち、息を吹きかけてから味噌汁を一口。

「あ、おいしいよ。うゝん、暖まるわあ」

「まあ。華葉、これは……えっと」

「味噌汁って言うの」

「みそ？ それって、その瓶にある？」

「うん。あれ、皆は味噌を知らないの？」

「コクリ。メグもゲルズもギフも、そろってうなづいた。」

「じゃあ、なんでミーミルは持つてるの？」

「ミーミルは賢いですからね。身の回りにあるもので、様々なものを作り出せるんです。こういった調味料も、試行錯誤を繰り返して自作したのでしょう」

「ふうん」

あたしも待ちきれず、ふうふうと冷ましてから味噌汁をすする。

「これ、ガストロプニルでも飲みたいわね」

「そうですね。エイルにも味わってほしいです」

ふたりとギフは、味噌汁に大満足。

よかつた、ちゃんと料理の勉強してて。

「ん〜。味噌なら、大豆があれば作れるけど」

「だいで？」

「豆のことだよ」

「はあ。豆ですか。ヨツン Heim では麦が第一ですからねえ。豆の栽培は心得がないので、難しいところですよ」

メグはがっくりとうなだれる。そ、そんなに落ち込まなくても。

「だったら、この小屋にある味噌をちよっとだけでもらおうよ」

「はあ。それは泥棒ですよ？」

「につこりと、ゲルズを叱るメグ。」

とかいいながら、大きな瓶のふたを閉めて、ナツプザックにしまつてるんだよね。

「ミーミルは泉を私にしてくれると言ってましたし。小屋にあるものも自由にしているとのことですよ。ですから、ここにあるのは私のものなんですよ？」

「え？ み、ミーミルが？ な、なんでそんなことを急に」

「さあ。私は存じませんよ」

肩をすくめて、小首を傾げるメグ。

「え、ミールはもういないの？」

「はい。華葉、ミールに何か用事でも？」

「あ、その……勝手に泉に飛び込んだから。後で謝ろうと思  
ってたんだよね」

「もう遅いですね。彼は、慌てて行きましたから  
ふと、気がついた。」

ギフが、味噌汁を完食して眠っていることに。

「あら。風邪を引いてしまいますね」

メグは自分のマントをギフにかけてあげる。

「さて、ゲルズに華葉。ふたりは服を脱いでください。ふたりが泉  
にいる間、私が洗濯しておきますから」

「え」

「う」

まだ味噌汁、飲みきっていないんだけど。

「それを飲んでからで結構です。服がぬれたままでは、身体が冷え  
て風邪を引いてしまいます。病人を連れてガストロプニルに戻るの  
は大変ですから、ね？」

満面の笑顔で、メグはあたしとゲルズに同意を求める。

「う、うん」

「わ、解りました」

あたしとゲルズは、渋々ながらメグに従った。

メグに服をはぎ取られ、あたしとゲルズは泉で身体を洗っていた。

「ちべたっ」

「味噌汁で暖まったのが、冷えちゃうよう」

何かあってもいいように、マントは近くにたたんで置いてある。

「てか、お風呂沸かしたほうがよかったと思う」

「華葉。それは禁句よ。メングラッド様、何だか知らないけど機嫌

が悪いみたい。逆らわないほうが身のためだわ」

「そ、そうなの？」

うんうんと、凍<sup>こ</sup>えながらもうなづくゲルズ。

あたしから見ても、メグは普通のような気がしたんだよね。付き合<sup>ひ</sup>いが短いから、そのへんの判断はちよつと難しい。

「そういえば、冷水で顔を洗ったほうがいいのよね。よし」

「え？ わ」

ゲルズは泉の水で洗顔してる。

「ふう」

「あ、あんまり無理してやらないほうがいいよ」

「そう？ って」

ゲルズは、あたしのほうをじゅつと見てる。

「華葉。スタイルいいわね」

「げ、ゲルズのほうが引き締まってるじゃない」

「メングラッド様も凄いからね」

「あ、それは朝見たよ」

「あら、そう。しっかし、寒いわね。長く入ってたら、風邪を引く

かも」

「うん」

とりあえず、泥汚れを洗い流せたからよしとしよう。

「ん？」

ガサガサ。

草むらに、何かがいる。

「華葉はあたくしの後ろへ」

「う、うん」

片手に火を灯したゲルズが、そこをじつと見つめる。

うわっ。ゲルズの背中、真っ白でキレイ。

「ひ」

ん？

ゲルズがこっち振り向いて、あたしに抱きついてきた。



ゲルズが蛇嫌いなのを知っていたのか、メグはそれほど驚かない。「華葉。ゲルズの背中をさすってあげてくださいね」

「うん」

とりあえず、ゲルズが落ち着くまで背中をすりすりしてあげた。

「ふう。ありがとう。華葉」

しばらくしてから、水筒の水を飲んで、冷静になったゲルズ。

「さて、そろそろ私も身を清めなければ」

腰を上げて、ふたつの三つ編みをほどくメグ。

「ゲルズ、白のリボンをひとつどうぞ。それで髪を束ねなさい」

「え？ あ、はい。その心遣いに感謝します」

メグはゲルズの髪を束ねてあげた後、ギフにかけてた白のマントを持って外に出る。

「ふう。暖かいわね」

「うん。でもさ、毛布とかないの？」

「ミーミルひとりで住んでたからね。汗くさいんじゃない？」

「そ、それは失礼だと思う」

「まあ、当人はいないんだしね」

ゲルズは元気を取り戻したみたい。よかった。

「あ、それ」

ナツプザックから見える、赤い石。

「あのウルヴァフって子が土産に置いてったものね」

あたしは何となく、それを手に取っていた。

「どうしたの。華葉」

「うん。あたし、もっと強くなりたいなって思ったの」

悔しかった。あの子と戦って、手も足も出なかったことにじゃない。

あたしが捕まったせいで、皆に迷惑をかけてしまったことに、だ。自分の身は、自分で守れるようになりたい。そして、皆も守れる強さが欲しい。

「強くなりたい？ どうして」

「えへへ。内緒」

「え〜？ いじわるっ」

「ごめんごめん。そういうゲルズは、そのウルヴァフって子に勝ちたいんでしょ？」

「ううん。違うわ」

「え？ でも、リベンジしたいって言ってたじゃない」

「そうね。別にあたくしは、あの子に勝ちたいわけじゃないの。あの子と対等に渡り合える力が欲しい。ただそれだけよ」

「力が、欲しい？」

「目標みたいなものね。ほら、漠然<sup>ぼくぜん</sup>としてるよりは、明確な目標があつたほうが頑張れるでしょう？」

「あ〜、うん。そうだね」

「明らかにあの子のほうが年下だけど、あたくしは魔術師としてウルヴァフを尊敬するわ。今度会う時は、ウルヴァフと対等にやりあえる力を身につけないと。そのためには、まず……」

ゲルズはすでに答えを見つけてるようだ。うらやましい。

「ただいま」

「あ、おかえりなさいませ。メングラッド様。早かったですね」

ポニーテールのメグは白のワンピースを片手に、マントを羽織ったまままでこちらに駆け寄る。

てか、激しく動くと中が見えちゃうよっ。

「ふうん。親しげですね。いつからふたりは仲良しに？」

「え？ だ、だって……ギフも寝てるし、ゲルズしか話す相手がないから」

「そうですよ。メングラッド様」

メグは頬をふくらませて、不満そうだ。

「まあ、いいですよ。さて、もうそろそろ就寝しましょう。火を囲んで、外套を羽織っていればだいじょうぶですよね？」

そりゃ、メグは白ワンピース着て、マントで包まればいいと思うけども。



ただ、あたしとゲルズはすっぱんぽんでマントだけだよ？ どう考えても寒いって。

「ええ。平気です」

「うん。あたしも」

「そうですか。なら、おやすみなさい」

メグはギフの隣で横になった。あ、ワンちゃんを抱き枕にしてる。残されたあたしとゲルズは、溜息をつきながら就寝準備をするこ  
とになった。

## 《ガストロプニル》

「エイルか」

ヨツンヘイムにある巨大な城砦。

その王の間に鎮座する巨人の長ベルゲルミルは、エイルを迎え入  
れた。

「ベルゲルミル様。伝書鳩を用いて、ドヴェルグに書簡を送りまし  
た」

「そうか」

「必要な材料は、布と金属と伝えておきましたが。本当によろしい  
のでしょうか」

「勝手に連絡を寄こしたのが、気に入らないのか？」

「ええ。もしメングラッド様の帰りが遅ければ、ここに派遣される  
ドヴェルグが何をしでかすか」

「それは心配いらんさ。下手なことをすれば踏み潰す。向こうもそ  
れを理解しているはずだ」

「はあ。しかし、本当に来るのでしょうか」

「きちんとした報酬を約束すれば、悪戯はせんだろう。後は、皆が  
ここに帰還するだけだ」

「先手を打つのは構いませんが、空回りしたらどうなるかぐらいは

考えてくださいね」

「むう。さ、最近、妙に口うるさくないか。エイル」

「わたくしは、ここで生活している身です。ベルゲルミル様がだらしないと、皆まで何を思うか。しっかりしていただかないと困ります」

「解った解った。説教は勘弁してくれ」

「ふふつ。では、これで失礼します。が、その前に」

「なんだ？ まだ、何かあるのか」

困った顔をして、エイルを見下ろすベルゲルミル。

「わたくしが用意した荷物に紛れさせた、あの筒は何だったのですか。もしか、手紙でも？」

「……………」

「答えないところを見ると、都合の悪いものようですね」

「それだけ理解したのなら、もう聞かないでくれ」

「然様ですか。なら、この件はなかったことにしましょう」

エイルは一礼して、小人用の扉から王の間を出た。

「ふう」

ベルゲルミルは神妙な面持ちで、天井をあおぎ見た。

（済まないな。ミーミルよ、お前しか適任がいなかったのだ。アー  
スガルズへのスパイはな）

### 《ミーミルの小屋 折笠華葉》

チュンチュン。小鳥のさえずりが聞こえる。

「ん〜」

身を起こして、伸びをする。

その拍子に、はらりとマントが落ちちゃった。

「はわわっ」

そっだよっ。すっかり忘れてた。

あたし、マントの下は裸なんだよお。

「朝から凄いのを見せられたわね」

あ、ゲルズ。起きてたんだ。

「んつと。華葉、おはよう」

「う、うん。おはよう」

てか、ゲルズ。そっちもマントがはだけてるよ。

「あら、あたくしも人のこと言えないわね」

ゲルズはあくびをこらえながら、囲炉裏の火を強めた。先にマントで隠しなよつ。

「火事にならなくてよかったね」

「ならないわよ。だってこれ、あたくしが燃え広がらないように制御してるんだから」

「へ？ ど、どゆこと？」

「魔法にある限度を越えないように制限を設けてるの。それは目に見えないから解らないでしょうけど、そういうのも可能なのよ」

「へ、へえ」

その火は、昨日の残りである味噌汁を温める。

「ふう。やっぱ身体が冷えたわね」

「そ、そうだね」

ふと、ギフに反応があった。あ、目を開けた。

「ワン」

「んん〜」

メグも目覚めたみたい。

「おはようございます」

「おはよう」

あたしたちのあいさつに、ギフはお座りして「ワン」と答える。

「ふたりとも、おはようございます」

「うん。おはよう」

「おはようございます」

メグとのあいさつを済ませてすぐ、あたしとゲルズは自分の服を

手に取った。

「うん。乾いてる」

「ギフ。向こう向いてなさい」

「ワンツ」

ギフはそっぽ向く。そこをメグが押さえた。

「着替えを終えたら味噌汁を飲んで、すぐに城へ戻りますよ。忘れ物はなさらぬように」

「はい」

「うん」

### 《イアルンヴィズの森》

「ひよえひよえひよえ。アンタ、この森に足を踏み入れるたあ、い度胸しとるねえ」

ヨツンヘイム東部にある、深緑の森林。

多くの葉が朝日を遮る中、ウルヴァフは老婆と対峙していた。

「明朝に來客とは。あなたは、何用でここに？」

褐色の肌の長身の女性が、長い白髪を振り乱しながらウルヴァフの背後を取る。

「寝起きのところ済まんな。ワシに戦意はありんせん」

女の子を黒い毛並みの魔狼まろうが取り囲む。

「む。ワシとやる気か？」

「戦意はなかったんじゃないのかい」

「黙って食われるのはごめんでのう。勘弁願います」

ふと、魔狼の群れがウルヴァフから離れていく。

「ほづ。こやつらが自然に離れるとはね。相当の手練てだれのようだ」

褐色の女性は、警戒しながらもウルヴァフの隣に並んだ。

「聞いてみましょう、エルザ。とりあえず」

腕を組んで、ウルヴァフに話すよう促す女性。

「この者は理解があるようじゃ。そちらの老婆はエルザとゆうか。そなたは？」

「私ですか？ 私は、シンマラです」

その名を聞いて、ウルヴァフがたじろいだ。

「な、なんじゃと？ ど、どうしてここに……ムスペルヘイムの長、スルトの妻がおる？」

「そんなことはどうでもいいでしょう。あなたの用件は何ですか」

「う、うむ。この森に伝わる、力の果実をひとつ分けてほしい」

それを聞いて、エルザは眉をひそめた。

「あの果実は、長い年月をかけてようやく実るんだ。どこの馬の骨だか知れない奴に、食わせる代物じゃないんよ」

シンマラは肩をすくめて、ウルヴァフから離れた。

樹木に寄りかかり、事の成り行きを見守っている。

「小娘。お前は何故、力を求めるんだい」

「ワシは力に興味はのうない。ただ、それを食わしてみたい人間がいる」

それを聞いて、エルザは目を見開いた。

「人間にじゃと？ そんなことをしたら、その人間はおだぶつじやよ」

「なら、賭けてもよいぞ。もし、その人間が力の果実を口にして死したのなら、ワシはお前達にどのような扱いをされても構わん」

その提案に、シンマラは目を白黒させた。

「ほう？ アンタ、そこまでその人間にほれ込んでるんだねえ」

「それは無理ね。人間なんて脆弱な生き物に、力の果実を食べさせたら肉体が破裂するわ。その賭けは無謀よ。止めなさい」

エルザは不気味に笑い、シンマラはウルヴァフに忠告する。

「ワシは本気じゃ。でなければここにおもむかん」

シンマラを見据えたウルヴァフは、次にエルザをにらんだ。

「無理なら無理でよい。ワシはこれで失礼しよう」

身を翻し、この場を立ち去ろうとするウルヴァフ。

「待ちな。アンタ、これを持っておいき」

エルザは、ウルヴァフにあるものを放り投げた。

「なんじゃ。これは」

青いリンゴを両手で受け取ったウルヴァフは、怪訝けげんな目でエルザを見る。

「それは」

シンマラはエルザに視線を向けた。

「ご要望の力の果実じゃ。それを食わしてやるといい」

「どういふ風の吹き回しじゃ？」

「ふんつ。あつしは賭けなんぞどうでもよいのさ。その代わり、アンタ。力の果実を食わせた人間をここに連れてきな。絶対だよ」

「どうしてそのようなことを？」

「ここに来るのは大抵、自分が強くなりたいたいという馬鹿たれだけじやった。が、アンタはこう言った。自分は力に興味はないとね。それが本当かどうか証明しな。もしそれが虚偽であつたら、あつしはアンタを潰すよ。いいね？」

ウルヴァフは、エルザを見くびっていた。

その発言と気迫だけで、気を失いそうになつたからだ。

「ここを出る前にアンタ、名を名乗りな」

「っ。ワシの名は、ウルヴァフ。これでよいか」

「ほほう」

エルザはその名を聞いて、顎あごに手をやった。ニヤリと不気味に微笑んでいる。

それとは対照的に、シンマラは首を傾げていた。

「凶作じゃからな。力の果実はそれひとつしかない。なくすんじやないよ」

「うむ。大事に使わせてもらう」

「待ちな。最後にもひとつ忠告しとくよ」

「なんじゃ？」

「力の果実は、丸々ひとつ食べさせるんだよ。でないと中途半端に

作用して、毒されて死んでしまう。全部食べさせないと効果が出ないんだ。解ったね？」

「ふむ。信じてよいのか」

「はんつ。あつしは毒リングゴなんか、くれてやった覚えはないよ」

エルザは手を振って、ウルヴァフを追いやるうとする。

「芯も食わせるのか？」

「それはいいんだよ。ったく、いつまでここにいるんだい」

「そうじゃな。もしこれが偽物だったなら、どうなるか覚えておくがいい」

「ふん。さつさとおいき。真偽を確かめたければ、アンタが動くしかないんだからね」

「ふむ」

杖に乗り、急いでこの森から離れるウルヴァフ。

エルザは呆然としていた魔狼とシンマラを一瞥し、森の中へと戻った。

### 《ガストロプニル 折笠華葉》

もうお昼だよ。お腹空いたあ。

もうちよつとでお城だけど、くたくただよあ。

「華葉。お疲れですね」

「ワンッ」

「ほら、フィヨルスヴィドが気づいて手を振ってるわよ」

そう言われても、手を振る元気もない。

どうにかこうにか、城まで辿り着いたけれども。

「おやあ、どうしたんだあ？ 元気がないなあ」

「フィヨルスヴィド。もうちよつと声を小さく」

「うゝむ。ささ、早く通るといい。ついさっき、職人が来たんだぞ

「お

「え？ まさか、ドヴェルグを呼んだのですか」

「ああ、ベルゲルミル様が呼んだらしいんだあ。早く行ってやれえ」  
メグは真つ先に扉を開けて、城の中に入った。

ギフも後を追う。と思つたら、仲間に迎えられて違つほうへ走つてつたよ。

「さ、華葉。あたくし達も後を追うわよ」

「な、なんで？ も、もすこし休ませて」

「ドヴェルグが来てる以上、長く待たせると面倒だわ。何せイタズラ好きの種族だからね」

「あう」

ゲルズに手を引かれて、あたしは王の間へと連れてかれた。

「失礼します」

「あ、失礼しまあす」

あたしたちは王の間にやってきた。

「ようやく来たか。先にメングラッドが訪れたから、もしやと思つたぞ」

う、ちよつとだけ耳が痛いっ。

「ベルゲルミル」

「むう。これぐらいでいいか」

「はい」

王の間にはベルゲルミルとメグだけでなく、黒い短髪の小人がひとりいた。大きな鞆かばんを抱えて、あぐらをかいてる。

「くっつち。うっせえなあ。んで、オレっちは何をすりゃいいんよ」

「物の修繕だと言つたらう」

「ちっ、ちっ、ちっ」

し、舌打ちを連射してる。態度悪いなあ。

ベルゲルミルとメグも困ってるよ。

「さっさと物出せや。おい」



「わっ」

その子はあたしを見るなり、鋭い眼差しでいらんでくる。でも、怖くない。身長が、あたしの膝くらいだからね。

「まったく、ドヴェルグは礼儀がなってないわね」

「あ？　なんだ、その色ボケ金髪クソ女」

「な、なんですってえ？　あんた、もう一度言ってみなさいよ！」

あ、ゲルズがキレた。両手に炎がちらついている。

「けっ。んなもんでオレっちを脅かそうってか？」

向こうはハンマーを片手に、床をトントンと叩いている。

「止めんか。ここで下手な真似をしてみる。両者とも踏み潰すぞ」

「ちっ。わっつたよ。んで、オレっちが直すべき代物しろものはどこよ？

さっさと持ってこいや。この、どあほ」

ふと、小人用の扉が開いた。

「あら、皆さんいつの間におかえりになられたのですか？」

エイルさんだ。タイミングよく、壊れた雨傘を持ってきたよ。

「そいつか？」

「あ」

小人は気づいたらエイルさんのとこにいて、それを奪って鞆の置き場所へ戻った。

「ら、乱暴に扱わないでよ」

あたしが怒ると、小人は「ちっ」と舌打ちする。む、むかつくっ。

「んしょっと。オレっちはこいつを直しゃいいのか」

「ああ、そうだ。完成形に関しては、その華葉から聞くといい」

「……………。完成形？　オレっちをなめてんのか」

「そういうお前は、それがどうなって完全に修復したのか判断できない」

「……………。確かに。これはオレっちも何だか分かりやしねえ。な

んぞじりゃ」

「雨傘だよ」

「あまがさ？　知らねえな。で、これをてめえが納得するように直

「しゃい〜んだな」

「う、うん」

ほんとにむかつく。が、我慢しないと。

「んで、作業場はどこよ？　ここでやれってんなら、オレっちは帰るぜ」

「エイル。皆をこの城の作業場に案内してやれ」

「然様ですか。はあ、荷が重いですねえ」

エイルさんは溜息をついて、渋々ながらあたしたちを作業場へ案内してくれた。

館と同じように、作業場は離れにあった。

「ふん。なかなかそろってるじゃねえの」

中をのぞくと、そこには鉄製の台、炉にふいご、大小の金槌に木の桶と、最低限の鍛冶道具がそろっている。

汚いかと思ったら、ちゃんと掃除されてる。エイルさんがやってたのかな。

「しっかし、妙なモンを持ってんな。嬢ちゃん」

「じよ、嬢ちゃん？」

「いいから、こいつあどうすりや完成なんだ」

「この布の部分が半球状に広がって、この柄の部分がまっすぐになればいいの」

「そうかい。んで、前金は？」

「まえきん？」

あたしと小人が話していると、エイルさんが話に割り込む。

「それはベルゲルミルから預かっています。こちらのパワーストーンです」

「ちつ。しけてんなあ」

小人はずだ袋を受け取り、中を確認する。

「……………。なかなか良質だな。隣国から買ったのか？」

「ええ。ちなみにそれは前金だけじゃありませんよ。報酬全体としてお受け取りください」

「なるへそ。なら、さっさと直すか」

小人は壊れた雨傘を手に持ち、それをじっくりと眺めている。

「覚えた」

「え？」

小人は鞆を開けて、その中から金属とひもの塊を取り出した。

「あらよつと」

小人は雨傘を青白い光で包んで、鉄製の台に置いた後、手にしたハンマーで軽く打ちつけた。

すると、すぐに元通りになったよ。びっくりだね。

「ほれ、嬢ちゃん」

「わわ」

「直ったか自分で確かめろ」

「う、うん」

雨傘を受け取り、あたしは動作確認。

バサツ。あ、ちゃんと開く。

手で触って確かめると、うん。雨傘として使えそうだよ。

「も、もう終わり？ これだけ報酬をもらっというて、こんな簡単に

……」

ゲルズは不満そうだ。

あ、エイルさんとメグも何だか複雑そう。

「誰が終わりだと言ったよ。こんだけの報酬フツをもらっというて、半端な仕事で終わらせるなんざやだね。せつかく材料もあるんだ。強化させるや」

「え、ええ。あなたはそれで納得する働きをすればいいと、ベルゲルミルも言っていましたしね」

「なら、嬢ちゃんに聞くぞ」

「え、な、なに？」

「おめえは、それをどうしたい？」

「ど、どうしたいって?」

「つまり、どう強化するんだ? 一度と壊れないようにするのか、武器としての完成度を高めるのか、もっと見た目をよくしたいのか、よく考えて答えろ」

「え、えつとね。見た目はそのままでもいいよ。壊れないようにしてほしい」

「武器として強くしなくていいのか」

「その、それは武器じゃないんだけど?」

「は? こいつぁ、武器じゃねえのか。ふざけた剣かと思ってたんだが」

「雨を防ぐための道具なのっ。それで人を叩いたりしちゃいけないの」

「ふんっ。そいつぁ、広げれば盾みたいになるしな。防御力を高めりゃいいんか」

「なんか、違う方向に話が進んでる。

「要望は壊れないようにだけでいいのか」

「う、うん」

「ちっ。参ったな。んん?」

クンクン。小人は急に鼻を動かして、何かを探っている。

「何かニオうな。なんだ?」

ドンドンと、扉が叩かれる。

「ギフですね」

メグとエイルさんが、扉を開ける。

「ワンワンッ!」

「ちっ。犬っころか。どおりで泥くせえと思ったんだ」

「ガウウウウウウウウッ」

今にもここへ傾れ込みなだそうなギフとワンちゃんの群れを、メグとエイルさんが身体を張って止める。

「敵がいる? 違いますよ、ギフ。ダメですからね」

「ええ。そんなことをしたら、ご飯抜きですよ」

ワンちゃん皆が、エイルさんの一声でお座りをした。

「あら、ギフ。あなたはいつまでこれを背負っているつもりですか」「キャンッ」

エイルさんはギフからナツプザックを外してあげた。

「さあ、各自持ち場へ戻りなさい。いいですね？」

「ウォンッ」

エイルさんの命令で、ワンちゃんは解散した。

「随分と素直だな。あんた、魔犬を飼い慣らす才能があるんかい」

「おほめいただき、ありがとうございます」

「ちっ」

小人はエイルさんの対応に困惑しているみたい。

「ところで、メングラッド様。水は汲めたのですね」

「はい。あ、他にもいろいろと持ち帰ったものがあるので、後で整理しましょう」

「待てよ」

エイルさんがそのナツプザックを持って外に出ようとしたところを、小人が引き止めた。

「なんですか？」

「そ、その中身には何がある？」

「あなたに關係あるのですか？」

「そんなから、強い魔の二オイがするんだよ。見せるだけでいい」

「仕方ありませんね。後でくどくどと言われるのはごめんですから」

それを抱えたエイルさんは、小人のほうへ歩み寄る。

「どうぞ」

「どれどれ」

エイルさんは屈んで、ナツプザックの中を見せる。

背伸びした小人は、何かを見つけて血相を変えた。

「こいつあ、びっくりだ。間違えねえ」

小人は赤い石を取り出して、息を飲んだ。

「あら、これは？」

「エイルさんがメグを見る。」

「それは、ミーミルからもらったんです」

と、メグが説明した。

「ゲルズはそっぽ向いて、作業場を観察する。振りをしていた。あたしも同じく。」

「なるほど。ミーミルがこのようなものを。魔石に水は溜め込んであるみたいですし、機嫌がよかったみたいですね」

「エイルさんはにっこりと微笑む。」

「それはそうと、小人はどうしたんだろ。」

「ちよつとあんた、それがなんだっていうのよ」

「妖精の涙だよ。知らねえのか？」

「ようせいのなみだ？」

「アルヴヘイムで定期的に作られる、光の妖精たちの魔力の結晶さ。どおりで、オレっちの鼻が反応するわけだけ」

「なるほど。あなたは闇の妖精ですし、光の妖精の力には敏感ですものね」

「エイルさんはうなづいて納得してる。」

「言ってくれるな。うしっ。これさえあれば、おもしれえモンが作れるぞ」

「え？ それ、それはダメよ」

「ゲルズは小人からそれを取り上げた。」

「お、おい。それは使っちゃダメなのか」

「当たり前よ。これは、あたくし達のものだもん」

「ちっ」

「どさくさに紛れて、これを盗もって魂胆こんたんよね？ そうはさせないんだから」

「ゲルズは小人を疑ってるようだ。」

「その小人は、両手を広げて見せた。」

「な、何で火傷してるのよ」

「ったりめえだろ。オレっちは闇だ。光の力に長く触れていたら、

消滅しまつ。魔法の手袋でもすればちよつとかゆいぐらいで済むが、こいつあいくらなんでも持ち帰れねえ。帰路の途中でオレっちが蒸発するのがオチだ。だったら、ここで使うしかねえ。オレっちも職人の端くれだ。すげえ材料があるのに、それを使わないでおくのは惜しいってもんだぜ」

言いながら、小人は鞆から手袋を取り出した。それをはめてる。

「な、なんで火傷するまで持つてるのよ」

「妖精の涙は壊れやすいんだ。落としたら砕ける。それにオレっちは鍛冶作業で火傷には慣れてるんでね。大事な材料はムダにやしねえさ」

小人の顔が、真剣そのものだ。

ついさっきまでの、ふざけた感じが一切ない。本気<sup>マジ</sup>の目をしてる。「どうする？ オレっちを信じりゃ、そのカサっていう道具の完成度が極みに達すんぜ。ついでにといつちやあなんだが、もうひとつぐらい何か作れそうだ。今ある材料の関係で、布と金属製のモンに限定されるがね」

「極みって、ぐ、具体的にどうなるの？」

あたしはそれとなく聞いてみた。

「さつき、二度と壊れないようにすると言ったがよ。それはけして防御力が高いってことじゃあない。おそらく強い魔法を受けたら、貫通して持ち主にダメージが通つてしまう。ただ、妖精の涙を使えば……火や氷、雷などの魔法すらも防ぎきる完璧な盾になるはず。いや、なるぜ」

そ、それを聞いて、皆のお口があんぐり。

信じているのかそうでないのか、表情では解らない。

「しっかし、あんたらこいつをどっここで手に入れた？」

ゲルズの持つそれを見上げる小人。

ピョンピョンしても、ちっちゃくて届かない。

「ミーミルからだと言ったじゃない。聞いてなかったの？」

「んなバカな。アルヴヘイムの連中が、そうホイホイと妖精の涙を

渡すはずがねえ。アルヴヘイムと友好関係にある、よっぽどの権力者じゃない限り、妖精の涙なんて手に入らねえよ。てか、ミームルって誰だあ？」

話を聞いてなかったみたい。

ま、その時はその石に夢中だったしね。

「そいつあどうでもいいや。現物がここにある以上、あんたらがその権力者と通じてんだろ」

ふと、メグとゲルズの表情が曇った。

「さて、わたくしはこれを片付けますので。少しの間、失礼致します」

エイルさんは立ち上がって、ナップザックを抱えて外に出ていった。

「あの、ひとついいですか」

「なんだあ？ ついでに作るモンが決まったのかい」

小人は床にあぐらをかいて、メグを見上げる。

「その妖精の涙は、薬の調合に使えますか？」

「使えるな。粉末にすれば少量でも有効だぜ。オレっちも完成させたモンに、妖精の涙の粉末をアストラライズ霊体化して練り込むつもりだからな。

全体的にコーティングできる分だけあればいい。そのカサの質量から考えると、涙は半分ぐらいは必要だな。残り半分、薬に使っにゃもつたいねえ気もするぜ」

「そ、そうなのですか」

「一番有効なのは、涙の粉末を水に浸すことだ。それを薬と合わせれば、本来の効果が倍になる。滋養もある飲み薬になっから、体にもいい」

「それはいい情報ですね」

「ただし、水に対して妖精の涙の分量は……うむ。水が四で、涙が一だな。それぐらいがちょうどいい。あんまり強すぎると、薬の効果を殺しちゃう」

「ふむふむ。ひとつ提案なのですが、あまった分を私にくれる。と



「いっつのは？」

「あーいよ。後で小瓶に詰めといてやんよ。ただ、ついでに作るモン次第だな。誰か、他に必要なものがあれば早く言ってくれ」

「なら」

ゲルズが口を開いた。

「手袋と靴を、作れないかしら」

「あんだって？ そんだけでいいの？」

「ええ。撰氏数千度の熱に耐えられるものが欲しいの」

「随分とムチャな要求しやがんな。まあ、涙がありやできないこともないが」

「ほ、ほんと？」

「ああ、引き受けた。さあて、オレっちはこれから作業なんだが…

…」

小人はお腹を手でさすっている。

「腹が減っちまってな。何か、うまいもんを食わしてくれねえか」

「エイルさんが戻ってきてから、あたしたちは食堂で昼食を取ることになった。」

「ごっつちやま」

「あら、もういいのですか」

小人は出されたものを素早く平らげ、テーブルから椅子へ移り、床へ飛び降りる。

「オートミールとリンゴだけでいい。それに、早く作業に取りかかりたくてうずうずしてやがる。さっさと指を動かさねえと、夜も寝れねえぜ」

小人は食堂を立ち去る前に、エイルさんのほうを向いた。

「うまかったぜ。あんがとよ」

「ちよこちよここと小走りで、小人は作業場のほうへ戻っていった。「見張らなくて平気なの？」」

「そのへんはワンちゃんがやってます。ご安心を」

ゲルズの指摘を、エイルさんはにこやか笑顔でかわす。

「しかし、皆さん。わたくしに相談もなく、品物を注文しているなんて」

「あ、そ、それは」

「うっ。だ、だって、その場にいなかったからいけないのよ」

「まあ、別にいいですよ。わたくしも薬が手に入れば結構です」

エイルさんはおかんむり。

妖精の涙の使い道について、勝手に決められたのが腹立たしいよ  
うだ。

「えっと、エイルさんには後でおいしいものを作りますから」

「華葉さんは気を遣わなくてよろしいのですよ」

「そ、そうじゃなくて。後でお味噌汁作ります」

「おみそしる？ な、なんですかそれは」

「ナツプザックに大きな瓶があつたでしょ」

「ああ、はい。あれは何かの調味料なのですか？ 香ばしい匂いがあったので、とりあえずその調理場に置いてありますけど」

「ならそのままでもいいよ。後であたしがエイルさんにお味噌汁をこちそうします」

「あらまあ。それは楽しみですな」

エイルさんは満面の笑み。

メグとゲルズは、ほっと胸を撫で下ろしている。ご機嫌取りには成功したようだ。ふう。

「あ、華葉さん。実はおいしいリンゴが手に入ったんですよ」

そういつて、エイルさんは青リンゴをエプロンのポケットから出した。

「わ。それ、どうしたんですか」

「そんなことはどうでもいいんです。お味噌汁はまだいただいてませんが、華葉さん。そのお礼にどうぞ」

横から、メグとゲルズが割り込んできた。

「エイル。それは私にはくれないですね」

「そうよ。あたくしにも、一口ちょうだいな」

「ダメですっ。おふたりはわたくしの相談もなく注文をして。わたくしだって、欲しいものがあつたのに」

ふたりはエイルさんの落ち込みを見て、バツが悪いのかそっぽ向いている。

「はあ。鍋が焦げついてたりするので、もうそろそろ交換したいと思っていたのですが……」

「だ、だったら頼めばいいんじゃない？ もひとつぐらい注文しても、へ、平気でしょ」

「仕事を増やしたら、きつと報酬も増やされますよっ」

今のエイルさんは、虫の居所が悪いらしい。

メグも何か言おうとしたけど、口ごもっちゃった。

「ささ、すぐにナイフで切り分けますから。遠慮なくどうぞ」

「あ、はい。で、でも……やっぱりふたりにも」

「ダメですっ」

「はいっ」

下手なこと言うと、あたしもとばっちり受けそう。

エイルさんが切り分けたそれを、あたしはパクパクと頬張る。

うーん、果汁たっぷりおいしい。てか、これあたしひとりで食べたいのかなあ。

「華葉さん？」

「う。よそ見しないで全部食べます」

「はい。実はまだあるので、おふたりは夕飯まで我慢してくださいね」

「あ、そうなんだ。なら、遠慮なく」

最後のひとつをパクリ。完食しちゃいました。

ふと、目の前が歪んで見える。な、なにっ？

額を手で押さえたあたしを見て、エイルさんが大きな溜息をついた。

「さて、急ぐとするかのう」

「くくっ!?」

メグとゲルズが同時に、エイルさんのほうを見た。  
てか、今の声って。

「もう正体を隠す必要はのうない。よつと」

「え、わ、わっ」

身体が浮き上がる。

後ろを見ると、杖が先端をあたしの服に引っかけて持ち上げてるよ。

「あ、ぐ」

き、急に意識が薄れて　ち、力が入らない。

### 《館・食堂》

「あ、あんた。ウルヴァフ!」

ゲルズの叫び声。

ガストロプニルにあるメンングラッドの館。

その食堂は、一触即発の危機にあった。

「か、華葉を放しなさい!」

メンングラッドが華葉を救出しようと席を立つ。

「きゃあ!?!」

しかし、浮遊するもうひとつの杖が接近を阻んだ。

「え、エイルは……?」

「エイルなら、風呂場のほうに寝かしてある。案ずるな。無用な殺生は好まぬのでね」

ウルヴァフはふたたりを警戒しつつ、出入口のほうを見やる。

「に、逃がさないわよ!」

ゲルズは両手に炎を灯しながら、ウルヴァフと対峙する。

「もう少し幻術を使うべきじゃったかな?」

気を失った華葉を後ろへやり、ウルヴァフは杖をひとつ左手に握る。

「か、華葉をどうするつもりですか!」

「どうしようが、ワシの勝手。答える必要はありません!」

杖の先端から雷刃を発生させる。

ウルヴァフはそれを、華葉の首に突きつけた。

「う、そ、そんな。華葉を、人質にするなんて」

「時間がないのでね。早急にここを脱したい。ゆえに、邪魔せんでもらいんす」

「ふ、ふざけないでよ! あたくしの、大切な友達を連れてかないで!」

ゲルズは激怒して、ウルヴァフに殴りかかろうとした。

「あ、あぐううううっ!?!」

しかし、ウルヴァフが華葉を感電させたことで足を止めた。

「聞こえんかったか?」

ウルヴァフが本気だと知り、メングラッドとゲルズは絶望した。

「ワンワンッ!」

「む。魔犬か?」

食堂に現れたのは、ギフだった。

この場に駆けつけたものの、かなり疲弊ひへいしている。

「ほう。どうやら魅了チャームから覚めたのは、そなただけのようじゃな。

強烈なのをかけたつもりじゃったが、まさか破られようとは」

「ガルウウウウウウッ」

「ぎ、ギフ。ダメです。華葉が、傷つけられてしまう」

「ッ」

メングラッドの一声で、ギフは前傾姿勢を解いた。

悔しそつに歯噛みし、ウルヴァフをにらんでいる。

「それでよろしんす。ワシはこの娘を連れて行かねばならない」

「ど、どこによ。どこに拉致する気なのよ!」

「案ずるな。その魔犬の鼻を頼りに進めば、ワシとこの娘の居所

はすぐに割り出せよう」

まばゆい閃光。この場にいる皆の目がくらんでいる隙に、ウルヴ  
アフは華葉を連れてガストロプニルを脱出した。

## 第4話

### 《折笠華葉》

「起きなさい。こら、いつまで寝てるの」

「え？」

「おかあ、さん？」

「あたしはびっくりして飛び起きる。」

「どうしたのよ。華葉、いつにも増して元気ねえ」

「頬に手を当てて微笑むお母さん。」

「ここは、あたしの部屋？」

「ど、ど、ど、ゆ、ゆ、ゆ、こと？」

「お、おい、華葉。早く朝ご飯食べよう」

「おとうさん？ な、なんでお父さんまで」

「おいおい、酷いな。私は朝食を食べてから出勤なんだぞ」

「い、いつの間にもリビングに？」

「あ、服もパジャマから部屋着になってる。」

「そうよ。お父さんは警察官なんだから。いそがしいのよ」

「な、なに？ なにが、どうなってるの。」

「はんつ。折笠さん、あなた生意気なのよ」

「……え？」

「ちよつと、何か言ったらどうなの」

「上級生だ。しかもここ、小学校にある体育館の裏じゃない。」

「や、止めてよ」

「やっぱり、一発殴らないと分からないのかしらね」

「ひっ」

「殴られるのが怖くて、目を閉じる。」

「……あれ？ 恐るおそる目を開けたら。」

「あなたたち、何をしてるの！」

小学校の時の、担任の先生がいた。

「あ、え？ あ、あたし……」

何か様子がおかしい。

「わ」

あたしは先生に押し倒されて、床にうつぶせにされた。

「な、なんで」

「なんでじゃないでしょう！ あなたは、どうして折笠さんを！？」

あたしの目の前には、窓ガラスに頭をぶつけて、血だらけで横たわる……あたし、自身がいた。

その隣には、当時あたしが庇<sup>かば</sup>った友だちの女の子、角沢深汐<sup>すみさわみしお</sup>ちゃんがいる。

彼女は向こうのあたしの姿を見て、号泣していた。

「あ、あたしは」

「あなたが突き飛ばさなければ、こうならなかったのよ」

先生は、冷たく静かな声で言った。

当時、あたしを突き飛ばした女の子は、警察に補導されたただで済んだ。

お父さんは多分、その子と話はしたと思う。警察官だもんね。

あたしは病院に入院。全治二週間程度で、頭を数針ぬった。

その間に、深汐ちゃんは別なところへ引っ越してしまったんだよね。

理由は解らない。お母さんが言うには、元からそういう予定だったという。あたしは聞かされてなかったけどね。

その前に一度だけ、あたしの病室に深汐ちゃんの家族が来たという。

あたしは、事件のショックで混乱してたからよく覚えてない。

「あなたは、それでいいの？」

「え？」

病室だ。しかもあたしは、ベッドに寝ているあたしに声をかけられた。



頭に包帯が巻かれてる。鏡でなくて、じかに見るとそういう感じだったんだね。

「深汐ちゃんは、自分の代わりにあなたが傷ついたことが気まずくて、悔しくて、背を向けて逃げ出したのよ。どうしてあなたは、深汐ちゃんを追いかけないの？」

「そう、なのかな」

当時、あたしは深汐ちゃんを守ったという認識はなかった。

ただ、深汐ちゃんを傷つけるいじめっ子が、許せなかったただけだ。それは結局、守ったという結果に繋がるのかもしれない。

「あたしは、深汐ちゃんが逃げたとは思わない」

「どうして？」

「まだ、あたしは深汐ちゃんからそのことを聞いてないから」

「聞いたじゃない」

「ううん。その時、深汐ちゃんは、ずっと泣いてたままだった気がするんだよね」

親友だったから、何となく解るんだ。

「でもあなたは、それからずっと傷つけられてばかりだった。事件を逆恨みして、裏でいじめをする人間がいると告発もしないで、あなたはじつと耐えていた」

そうだね。

あたしはその事件以降、傷つくことに慣れてしまっていた。

小学校を卒業するまでは穏やかだった。しかし、中学校に通うようになってからは酷い事の連続だったよね。

さつき体育館裏であたしを怒鳴りつけていたのは、事件を起こした子のお姉さん。

その妹も同じ中学に上がり、一緒になってあたしを追い詰めた。

あたしの父さんが警察官であることは知っているはず。なのに、ふたりはメールや裏サイトであたしを中傷してきた。

攻撃は徐々にエスカレートした。

上履きに画びょうを入れたりとか、教科書に落書きするとか、も

う散々な毎日だったね。

中でも一番酷かったのは、暴漢に襲われた時だ。

陸上部の帰り、あたしは公園でひとりの男性に襲われ、乱暴されそうになった。

でもその時、防犯ブザーを持っていたし、たまたま通りかかった警察官の方に助けられた。

後々解ったことは、男は裏求人サイトにあつた依頼を引き受け、その内容にしたがつてあたしを襲ったんだと証言した。

その証言を元に辿ったら、予想通りふたりに繋がった。

この事態に、警察も黙つていなかった。ふた리를捕まえたんだ。

日本全国に、大々的にこの事件は報じられた。

女子中学生ふたりが、同じ学校の生徒を殺害するべく、ネットを通じて殺し屋を雇ったという極悪事件として。

「どうしてあなたは、耐えてばかりなの？」

「解らないよ。ただ、あたしは傷つけるのが怖いのもかもしれない。痛みを、知っているから」

ふたりが姿を消した後も、どうしてかあたしへの攻撃は止まなかった。

今考えると、それをしていたのは多分、ふたりの親じゃないかな。証拠はないけど。

携帯を買い替えても、アドレスを調べて攻撃してくるぐらいだもんね。すごい執念だよ。

「だからあなたは、閉じこもったの？ 誰も傷つけず、自分も傷つかない。過保護な父親によって、誰もあなたに近寄らなくなった」

確かにそうかもしれないね。

事件後、あたしは一日だけ学校に登校した。

しかし、クラスメイトも先生も、誰もあたしに声をかけようとはしなかった。ずっと無視していたね。

それは、あたしに何かすれば、父親が黙っていない。そんな噂が流れていたからだ。

その噂は、保健室の先生から聞いた。あたしのよりどころは、保健室と家ぐらいだった。

すぐに決断した。あたしはもう、学校には行かないと。

あたしが学校に姿を見せれば、皆に迷惑がかかるから。

皆の楽しい学校生活を、あたしは壊したくなかったから。

「あなたは、そのままでもいいの？ 守られてばかりで、傷つき傷つけるのを恐れて、閉じこもったままで」

「……………」

あたしは、あたしに対して何も言い返せなかった。

だってそれは、ずっと前から、あたし自身が思っていたことだから。

### 《ガストロプニル》

「あんだって？ あの娘が、らちられたあ？」

ヨツンヘイムにある巨大な城砦。

そこにある作業場に、ゲルズが駆け込んだ。

「お願い。早く、あたくしの手袋を靴を作って」

「む、ムチャを言うな。そんなすぐに編み込めるわけねえだろ。大体、オレっちはこの力サからやろうとしてたんだ。順番が狂っちまう」

金敷かなしきには、小さな金槌と華葉の雨傘が置かれていた。

「ど、どうしたらいいのよ」

「落ち着けよ。他の連中はどうした」

「メングラッド様は、魔犬チャームの魅了チャームを解くのに時間がかかると言っていたわ。エイルさんは、医務室には移したけど気を失ったままだし」

「ん？ あの犬っころはどした？」

「唯一、ギフだけが自力で魅了チャームを打ち破って、ベルゲルミル様やヨツンに報告に回ってる」

「なら、追跡はその犬つころがやればいい」

「無理よ。ギフは、その術を解いただけで疲弊してるもの」

「なるへそ。その小娘、魅了<sup>チャーム</sup>だけかけたんじゃないのか。もし解かれたら、その対象の体力を一気に削り取る術までかけてたんだろ。相当なヤツだな。そんなのができるのは、オレっちが知るぐらいじゃ　ヴァニルじゃね？」

「ば、ヴァニル？」

ゲルズは、それを聞いてピンと来た。

「だから、あの子は……」

「何か閃いたみたいだが、これだけは言っておくぜ。すぐにできそうなのは、カサぐらいだ。手袋に靴は編み込むのに時間がかかる。早くても半日は要するな」

「なら、いいわ。華葉の道具は、きちんとていねいに作ってあげて」

「そうか。まだ話は終わりじゃねえ。既製品でもあれば、手袋と靴はどうにかなる。で、お前はどうすんだ？」

「なら、早く作って。それを装備してから追いかける」

「おいおい、どこに行ったのかも解らねえんだぞ？」

「だとしても、華葉の身が危ないの！」

ゲルズは、泣いていた。

ウルヴァフに手も足も出せなかった。それだけじゃない。今回は華葉を奪われた。

「しっかし、そいつあ度胸があるな。この城砦に、潜伏して工作までやるたあ。肝が据わってやがる。最悪、ヨツンとやりあう覚悟までしてなきや……誘拐なんてできねえぞ」

「何が、言いたいなのよ」

「やりあうってんなら、相当な覚悟がいるぜ。んで、どうすんだ？指でこめかみを叩く小人。」

ゲルズは、深呼吸しながら小人を見下ろした。

「今すぐ、あたくしが使ってた手袋と靴を持ってくるわ。ちょっと使い古してボロボロだけどね」

「あいよ」

ゲルズは作業場から出て、自分の部屋へ走る。

小人は道具を取り出して、すぐに仕事に取りかかれるよう支度した。

王の間。

ギフとフィヨルスヴィドが廊下に出るのを見送り、ベルゲルミルは深く息を吸った。

「おい。スクラーミル」

「は。何でございましょう」

ベルゲルミルは廊下にいる巨人兵を呼びつける。

彼が半開きの門から中に入ると、ベルゲルミルは口を開いた。

「隣国ウアンティレズドに書簡を送れ。第一王女セネアに、至急訊ねたい事があると」

「はあ。しかしそれなら、あちら側に書状を送らせるといふ手もありませんが」

「駄目だ。少々込み入った話になる。紙でのやりとりはなるべく避けたい」

「了解しました。ただひとつ」

「なんだ？」

「人間の娘がさらわれたぐらいで、これだけの騒ぎになるうとは意外です」

「儂をからかっているのか」

「そういうつもりは。確かに、あの娘は人間にしては美しい。我々の間でも、噂になっていましたよ」

「ほう？　して、どのような」

「いえ。単純に僕らの背が低ければ、嫁さんにもraitたいという、下らない話ですね」

「そうか。本気だったのなら、儂がブン殴っていたぞ」

「む。く、口が過ぎました」

「よいよい。儂とて、あの娘からは奇妙な何かを感じている」

「奇妙？」

「よく解らんのだ。ただ何か、惹かれるものがある」

「惹かれる、ですか」

「別に恋焦がれてるわけではない。もし、もしだ。儂の娘が生きていたら、ああいうふうに成長したのかと思ってな。面影を重ねてしまっているんだよ」

「なるほど」

「ふう。しゃべりすぎたな。書簡のほうはメングラッドに書かせて送らせる。彼女を呼んでくれないか」

「了解しました」

「ああそれと、ゲルズにこう伝える。あやつも捜索に参加するはず。外でギフとフィヨルスヴィドが待っている、と」

「御意」

巨人兵が門を開け、一礼してから廊下に出たのを見送り。

「……………。無事でいてくれよ」

門が閉まった後で、ベルゲルミルは華葉の生存を祈った。

《イアルンヴィズの森 折笠華葉》

「うう」

「ほう。まさか、本当に目覚めようとは」

おばあさんの声？

う、か、身体が重い。

「どうしたのかや？」

こ、この声。ウルヴァフ？

「げほ、くふ」

「咳き込んでる場合かい？ アンタには、これからやってもらう」

とがあるんだからね」

「う、うぐ」

い、息ができない。

少しだけ、目が開いた。

あたしはおばあさんに、首を絞められ持ち上げられてる。

「殺すつもりかや？」

「ふん。アンタはこの娘に、何を見出したと言っんだい」

「見れば解る」

「百聞は一見にしかず、かい」

片手で投げ捨てられた。

「あ、ぐ」

少しずつ、身体が動くようになってきた。

まだ、目と指ぐらいしかくう、む、胸が苦しいつ。

「果実を口にして、意識を取り戻すとはねえ。普通の人間だったら、即死のはずだよ。いったい何があるっていうのさ」

う、胸が、胸が痛いっ。

両手で左胸を押さえて、深く呼吸を繰り返す。

「ここは、森……？」

口も喉も動いた。

「はんつ。ようやく口が利けるようになったねえ」

おばあさんはこっちに来て、襟えりをつかんであたしを持ち上げる。

「服が汚れておるな。洗ったほうがいいかもしれぬ」

「ふん。こんなおんぼろ、使ってたんじゃすぐに破れちまうね。アンタ、ちよつとじつとしてなよ」

「わ、わっ!？」

急に全身が寒くなる。でもすぐに、元に戻った。

「は、裸に……された」

「アンタの服に、エーテルコートディング霊気保護を施したんだよ。これでもう壊れんさ」  
えゝてるこゝていんぐ？」

「器用な真似をする。そのようなことができようとは」

「伊達だてにこの森に、長年住んじやいないよ」  
「ふむ」

このおばあさんとウルヴァフは、なんなの？

「ついでに、その靴もやっとしたよ」

ドスンッ。おばあさんが手を放したせいで、尻もちをついた。

「あいたたた」

「もひとつついでに、アンタの服に波動オーラライン通気を整えてやったよ。見るからにヒヨっ子だからね。発気はつきやら集気しゅうきがまともにできないんじや、話にならない。慣れるまでは、その服を着て練習しな」

何を言っているのか、理解できない。

「な、なんで……あたしは、こんなところに」

腕と足が、急に痛くなった。

「う、ぐう」

「まだ全身が痛むのかい？ だとしても、あっしは手加減なんてしないよ」

「ううああああっ!？」

おばあさんはあたしのお腹を、強く蹴ってきた。

後ろの樹木が、ぶつかつた衝撃で折れてしまうほどの破壊力。

「本気で、殺すつもりかや」

「これぐらいで死にやしないよ。あっしも老いたね。こんな小娘を教育するのに、一撃で足りないとは」

まだ、身体が言うこと聞かない。

それでも、逃げないと。

「おや、立ち上がれるのかい。だとしても、逃がすつもりはないよ」  
「え うぐっ!？」

顔を殴られた。

その衝撃で、背後の折れた木に張りつけにされる。

「な、なんじゃ？」

ウルヴァフも、驚いていた。

だって今あたしは、おばあさんに直接触れられたわけじゃない。



なのに、どうして殴られたの？

「う」

口内を切ってしまった。

「かかってこないのなら、またこちらからいくよ」

「ひっ」

おばあさんは足で空を蹴った。

ただそれだけなのに、あたしのお腹に重い一撃が当たる。

「あ、ぐううううっ」

食べたものが、逆流する。

膝を崩したあたしは、両手で口を押さえる。

「吐くんじゃないよ。せつかく取り入れた力だ。無駄にせず消化するんだね」

「む。もう終わりかや？」

「アンタ、その娘を治療しておやり。しばらくしたら、再開するよ」

おばあさんは、あたしとウルヴァフに背を向けて、この場を立ち去った。

ウルヴァフはあたしに暖かい光をくれた。

樹木に寄りかかったままのあたしは、あちこちアザだらけだよ。

「な、なんで……あたしを」

「済まぬ。ワシには、こうするしかできなかったのだ」

全身が、痛い。

あのおばあさん、かなりケンカ強いね。

「か、帰してよ。あたしを、お城へ早く」

「それは不可能でありんす」

「どうして」

「力を手にした今、その使い道を教わったほうがよろしんす。まあ、その師はかなり荒っぽいようじゃが……」

さっきの、おばあさんのこと？

それに、力を手にしたって。あ、あたしのことっ？

「ねえ、力ってどういう意味なの」

ウルヴァーフが不安げな面持ちで、何かを言おうとした時。

「ふうん。それが、力の果実を口にした娘ね」

誰かが、会話に割り込んだ。

「む」

「え？」

あたしの目の前には、白髪の黒人が立っていた。

わ、出るとこ出てる。めっちゃめっちゃスタイルいい。

服は薄着で、紅の布を全身に巻いている。地味だけど、そのボデ

イラインが強調されてる。

「ちからの、かじつって？」

「それはワシが言うべきこと。余計なことを申すな」

「ふ。あなたは、この森の住人ではないのよ。どちらが余計なのかしらね」

白髪を手でかき上げて、気だるそうにあたしを見る女の人。

そのルビーのような瞳は切れ長で鋭く、見つめられただけで身震いがした。

「エルザは？」

「しばらくしてから、教育を再開するそうじゃ」

「そう。なら」

女の方は、両手に炎を灯した。

「ほんの少し、味見してもいいわよね？」

「っ」

もう、無我夢中だったよ。

女の人の拳を、あたしは転がりながら避けた。

「な、何をするの」

あたしの後ろにあった樹木は、一瞬で黒い炭と化した。

炎はもう消えている。残されているのは、木炭と黒煙だけだ。

「な、何をする。シンマラ！」

マントに燃え移った火を手で払って消し、ウルヴァフは女の人と向き合う。

浮遊するふたつの杖を帯電させてた。やる気なんだね。

「ウルヴァフ。あなたも消し炭になりたいの？」

「っ。い、今は休息中じゃぞ」

「あなたの言い分など、私には関係ないわ。つまみ食い嫌なら、ここに放置しなければいい。エルザだって、普段からそう言うもの」  
ウルヴァフは素早い動きで、あたしのところへ駆けつけた。

「逃げるぞ」

「え？」

「させないわよ」

シンマラと呼ばれた女性は、深く息を吸い込んだ。

「な、なんじゃと？」

女の人は、口から灼熱の炎を吐き出した。

その紅蓮の火は、瞬く間にあたしたちを取り囲む。

「も、森を燃やすつもりか」

「あ、あちちちっ」

あまりの熱さに、あたしとウルヴァフは炎から離れた。

「その女の子が、どれほどの力をものにしたのか。この目で確かめさせてもらっわ」

「え？ きゃっ」

あたしとウルヴァフは、いつの間にか炎の狼三匹に包囲されていた。

「フレンヴァイン。レアでなくて、ウェルダンになるまでじっくり焼き上げましょう？」

「や、焼かれたくないよっ」

「ど、どうしたらいいの？」

頼る人がいなくて、ついウルヴァフに聞いてしまう。

「落ち着け。今のお前は、力を手にしてある。このような敵など、たやすいはず」

「は？ あ、あたしは普通の女の子っ。こんなバケモノ相手に、頑張れませえんっ！」

「ええい、おしゃべりはそこまでじゃ。来るぞ！」  
炎の狼が、あたしめがけて飛びかかってくる。

「キャインッ」

ウルヴァフは杖から発生させた雷いかづちの刃で、その一匹を斬り伏せた。

「ぼつとするでない。まだ二匹おるのだぞ」

「う、うん」

とにかく、逃げることを考えよう。

でも、暑いよ。汗が出るし、息も……続かなくなってきた。

「く、この熱気は、まずいな」

膝を崩したあたしを見て、ウルヴァフは暖かい光をくれた。

「紅き舌よ、その限りない食欲を満たすべく、眼前の獲物を弄なぶるが

いい。“フレイムタン”！」

女の人は両手を合わせて、太く長い炎の刃を作った。それを豪快に振り下ろしてくる。

「ぬっ！」

「わ」

ウルヴァフは女の人の拳動を見て、あたしを蹴飛ばした。

「あゝちちちちっ！」

おかげで、お尻が火に触れちゃったよ。あついあついっ！

「敵はそれらだけじゃないわ。私を忘れないことね」

「く。だいじょうぶか。華葉！」

「へ、平気」

手でお尻を叩く。ふいっつ。

てか、ほんとだ。服が燃えてない。

ただ、熱いのは変わらないんだね。

「あ」

狼の一匹が、あたしを狙ってる。

「しもつた」

ウルヴァフは、女の人と狼に囲まれてる。

「ならば」

周辺の炎から、赤い光を引き抜くウルヴァフ。

「させないわ」

パンツ。両手を強く叩いて、女の人はその光を奪い取った。

「ぬっ。そなたも、そのような真似ができるか」

「でなければ、炎など使わないわ。さあ、蘇れ！」

女性の足下に倒れていた炎の狼が、再び活力を取り戻した。

「倒しても、無駄か」

「そうね。この場には赤マナが溢れている。このエッセンスは、私に逆らうなどありえない」

「くっ」

足踏みをするウルヴァフ。

ど、どうしよう。狼が、あたしに迫ってくるよ。

「っ」

怖い。けど、逃げられない。

だったら、やるしかないじゃんか。

「キャンツ!？」

「え?」

あたしに詰め寄っていた狼が、不意に足を止めた。

「ようやく、か」

「な、あれは」

ウルヴァフは安堵し、女の方は愕然がくぜんとしている。

炎の狼は何を思ったのか、女性のほうへと退散した。

「な、何が……どうしたの」

見える。ついさっきまで見えなかったのに、大気中に細かい粒々が見える。

それだけじゃない。女の人を包み込む、赤いもやみみたいなのが目視できるよ。

「は、波眼はかん? あのような娘が……」



「そうさ」

「お、折笠華葉です」

「ふうん。華葉でいいかい」

「は、はい」

「なら華葉。深呼吸して、気持ちを落ち着けな」

「え？ い、いきなり何を」

「蹴飛ばしたりしないさ。安心して息を吸いな」

すう、はあ、すう、はあ。

深呼吸している間は、本当に襲ってこなかった。

「なるほど。まだ制御できてないみたいだね」

「え、な、なにが？」

「この場に水はないしね。まあいい。華葉、気をしっかり持ちな」

「な、何を言ってるの？ おばあさん、さっきから」

「いいから、自分を保ちな。自分はこのにいと、強く意識するんだ。それからあつしの目を見るんだ。いいね？」

「は、はい」

あたしは深呼吸して、自分の存在を強く意識した。そして、おばあさんのキレイな瞳を凝視する。

「ウルヴァフ。シンマラ。アンタらも強く意識を持ちな。いいね？」

「は、はい」

「む。よく解らんが、こうでよいのか」

パンツ。おばあさんは手を合わせ、あたしをしっかりと見つめて。

「はどつがん  
波動眼！」

目を閉じて、そう叫んで力強く目を開けた。

「っ」

おばあさんがまばたきするほんの数秒が、とてつもなく長い時間  
に感じられる。

あたしはその目が閉じられた瞬間、呼吸困難に陥ってしまった。

「げ、げほっ！ あ、が……うっ」

「ウルヴァフ。癒しておやり」

まばたきをしたおばあさんは、後ろのウルヴァフにそう指示した。

「……………っ」

「どうしたんだい」

「あ、ああ」

ウルヴァフはあたしに寄り添い、背中をさすりながら暖かい光をくれる。

「シンマラ」

「は、はい？」

「あんまり下手な真似はするんじゃないよ」

「き、肝に銘じておきます」

シンマラは、あたしと同じでその場にへたってる。

「な、なんじゃ。さっきの、波動眼というのは」

「今のは予告ありきでやったからね。もう一度やっても構わんさ。

そしたら、アンタら気絶するよ。ひよえひよえひよえ」

おばあさんは腕を組んで、高笑いしてる。

「ふう」

ウルヴァフは、冷や汗だらけだ。

よく見たら、手が震えてる。

そんな状態で、あたしを癒してるんだ。

「華葉。アンタは、ほんの一瞬でも見たらどう？ あっしの双眸めくまを」

それは、瞳の意味かな。

確かに、一瞬だけ見た。

「あ、あの」

「言わなくていいさ。湖や川で、自分の顔を見てもらうほうがいい  
と思ったけどね。昂揚状態めでないと、その眼めにならないみたいだ。  
だったら、あっしが見せたほうが理解が早いと思ったんだよ。ひよ  
えひよえひよえ」

「え、えっと。あたし、どうしてそれを見させられたのか……解ら



ないんですけど」

「ふんっ。ついさっき、アンタも同じ眼をしていたのさ」

「え？ あ、あたしがっ？」

自分を指差して、おばあさんを見上げる。

「アンタはおもしろそうだ。短期間で徹底的に磨いてやろう」

「み、磨くって。さっきみたいにいじめるの？」

「どう思おうがアンタの勝手さ。けどね、その力を放置していたらいつか溺れ死ぬよ。せっかくの原石だ。磨かなくちゃ、もったいな  
い  
い」

「い、いや。嫌ですっ」

「む」

立ち上がって、あたしはこの場から逃げ出した。

「はあ、はあ、え、えっと」

こ、こっちな。

森の中だから、方角がまったく解らない。

「わわわっ」

何も無いところで、こ、転びそうになる。

あ、目の前にたんぽぽが。あたしは足を踏ん張って、どうにかその脇に倒れ込む。

「あ、危なかったあ」

身体が、思うように動いてくれないよ。

歩くことや、走ることもままならないなんて。ど、どっしたらいいのっ？

「え」

「ふんっ。逃げ足だけは、いつちよ前だねえ」

おばあさんが、上から降りてきた。

「な、なんで」

「んっ？」

おばあさんはあたしを見つめて、にこりと笑った。な、何か裏がありそうっ。

立ち上がったって、逃げようとしたら。

「そうはさせないよ」

「うああああっ!?!」

おばあさんの拳が、あたしのお腹にめり込む。

「く、う。あぐっ!?!」

お腹を押さえて苦しんでいるところに、デコピンをもらった。

また、樹木にぶつけられる。

「あ、はあ、な、なにを………するの」

「アンタ、気づかないのかい? そんな重い一撃をもらって、気絶したり絶命しないことがさ」

痛みは、ほんの一瞬だけだった。

言われてみれば、骨とかが折れてる感じはしない。

背後の樹木は、ぼつきりと折れてるけど。

「ふん。ようやく自覚したのかい。己の得た力にさ」

「あ、あたしは………なんで、こんなに頑丈になってるの」

「力の果実を食べたからさ。聞かなかったのかい? あの、ウルヴアプって小娘に」

「な、なにそれ。あたし、そんなの………」

「青リンゴを食べただろう? それが、力の果実さ」

青リンゴ?

あ、食堂で口にしたあれのこと?

「え、なに? あれのせいで、あたし。普通の女の子じゃなくなっただの?」

「そうさね。アンタは、力を得た。あっしがじきじきに鍛練たんれんしてやるうってのに、逃げるってのはどういうことだい?」

その眼光だけで、全身に力が入らなくなる。

「あ、あたしは………こんなの、力なんていららないよ!」

「いらない? 今更何を言うんだい。得てしまったものは、捨てら

れないのさ」

「だ、だったら」

何をするか察したのか、おばあさんは素早い動きであたしをうつぶせにした。

「自害なんてよしなよ。アンタは原石なんだ。磨く前に砕くんじやないよ」

背中を踏みつけて、おばあさんはあたしの後頭部に手を置く。

「も、戻してよ！ あたしを、あたしを普通の女の子にいつ！」

「普通？ アンタの中で、普通ってのはなんだい？ か弱く美しい娘であることがかい？」

「ち、違う。あたしは、あたしは……」

自分を、皆を守るようになりたかっただけ。

ただそれだけなのに、どうして？ なんであたしは、こんな目に遭ってるの。

「力を拒むんじゃないよ。力の果実は、食べた生命の潜在能力を引き出すぐらいしか効能がない。つまり、今アンタが持っている力はね。アンタがいつか見出す力だったんだ。理解できるかい？」

「あたしがいつか、見出す力？ う、うそだよ」

「嘘じゃないさ。ただ、その力を引き出すには数年、数十年、数百年とかかる。普通の人間じゃ、そうなる前にくたばってるね。若いうちに、可能性を解放できてよかったじゃないか。そうは思わないかい？」

「っ」

「ふんっ。生意気だねえ。これだから、ガキのお守りは嫌なのさ！」

「きゃあー！」

腹を蹴られて、地面を転がされた。

「っ、っ」

「立ちな。アンタはその力を、自分で制御できるようにならないといけない」

「い、いやだ」

立ち上がるうとして、また転んでしまった。

「嫌だ？ どうしてアンタは、そこまで力を嫌うんだい」

「だ、だって。傷つけるしかできないものなんて、あたしはいらないよ」

「……………」

おばあさんは、何かを言おうとしたけど口をつぐんだ。

「だって、現におばあさんはあたしをいじめてるじゃない！ そんな力なんて、傷つけるしかできない力なんて、あたしにはどうだっていいよ！」

「傷つけるしかできない、ね。確かに、いつの世も力つてのは災いの種になる」

「でしょ？ だったら」

「けどね、それから逃げることなんてできやしないよ」

「な、なんで」

「力つてのはね、個性のひとつだからさ」

「こ、個性？」

「そうさ。華葉のその力だって、華葉自身なのさ。欠けたら、それはもう華葉じゃない。それがあって初めて、華葉は華葉だと言える」

「い、意味が解らないよ」

「年寄りの言葉には、耳を傾けるもんだよ。あつしだって、若い頃は自分の力に恐怖したさ。けどね、逃げようたっていつまでも付きまとうんだよ。誰かに利用されちまうんだよ。力つてのはね。それは自分の中にあるんだ。自分でどうにかするしかない」

「っ」

「今の華葉は、自分の力におびえて逃げ惑っているだけさ。望まずして得たかもしれないけどね。その力はアンタの一部なんだ。それを嫌うことは、自分を嫌うことと同じさ。生きるのがつらくなるだけだよ」

「だから、もう……………死んじゃうしか」

「そこまで思い詰めてるのなら、決意が固いのなら、あつしは何も

言わずに見送るよ。でもね、華葉が死ぬ事で、誰が泣するのかぐら  
いは、よく考えな」

あ。

「どうしたんだい？」

意地悪そうな笑みを浮かべて、おばあさんは言う。

「死ぬならさつさと首を括くつて死にな。それともなにかい？ あつ  
しの手で、屠ほぶってもらいたいのかい」

それは、嫌だ。

「ん？ 身構えたね。死ぬのが嫌と見える」

このおばあさん、苦手だ。

しわくちゃで、身体は細い。服も地味で、あちこちに穴が開いて  
る。

なのに、内に秘めた力は凄まじい。見た目と強さが、完全に一致  
していない。

「ふん。華葉、アンタにひとつ聞きたい」

「な、なんですか」

「アンタは、何のために力を求める？」

「え？ ち、力を求めるって」

「今現在、華葉の中にある力はまだ芽なんだよ。それが花開くかど  
うかは、アンタの覚悟次第さ」

あたしの、覚悟次第。

素直な気持ちで、あたしは答えた。

「そう、ですね。あたしは、自分と大切な人を守るために、力が欲  
しい」

「ふうん。じゃあもうひとつ聞くとよ。アンタにとって、強さとはな  
んだい？」

「え？」

力の次は、強さ？

「ど、どっちも同じなんじゃ」

「はん。若いうちは混同しがちだからねえ。力と強さは、えてして

そういうものだと考えちゃう。本当は別もんなのにさ」

「べ、別なもの？ 力と強さは、違うの？」

「当たり前さ。力ある者が、強いとは限らない。力ない者が、弱いとは限らない。力と強さの区別ができない者は、いつの世も運命に見放されるのさ」

おばあさんは手で顎に触れて、あたしの目を見た。

「華葉。アンタは、道端にあるタンポポを踏みつける輩やからがいたら、どう思う？」

「た、たんぽぽ？」

「そこに引つかかるんじゃないよ。答えな」

屈んだおばあさんは、さっきあたしが潰しそうになったたんぽぽを撫でてる。

「き、嫌いです。花に八つ当たりするなんて、あたしは許せません」

「そうかい。花を慈いづくしむ心があるなら、合格だよ。本質的に強さを理解している」

おばあさんはその返事を聞いて、にっこりと微笑んだ。

「もうひとついいかい」

立ち上がって、おばあさんはこっちにやってきた。

「は、はい」

「華葉、アンタは傷つけるのが嫌だと言ったね。でもそれは、優しさじゃないのさ。ただの甘ったれなんだよ」

「そ、そんなことはないっ。誰だって、傷ついたら痛いでしょ。そんなの嫌だもん」

ふんつと、おばあさんは鼻を鳴らす。

「もし自分の大切な人が傷つけられている時、アンタは黙って見ていただけなのかい？」

え、そ、それは。

「できないだろう？ 怒りを覚えるだろう？ そういつ時は、傷つけた奴を叩きのめしていい。思いやりと理由のある攻撃は正義となる。相手を直すためなら、その拳は振るっていいんだよ。迷っちゃ

あいけない」

「迷っては、いけない？」

「そうさ。話が長くて嫌だろうけど、これだけは聞き逃すんじゃないよ」

ゴクリ。あたしはおばあさんの言葉を、集中して聴いた。

「華葉が得た力は、アンタの正義を表現するものだ。それを常に意識するんだ。忘れるんじゃないよ」

「あたしの、正義を表現するもの」

自分の手を見つめる。

この手が、誰かを傷つけるかもしれない。

でもあたしは、それを、それを正義だと信じたいつ。

ぎゅっと拳を握り締め、あたしはその言葉を心に刻んだ。

「さて、おしゃべりはそこまでにしようかね。時間もないことだし」  
眼前にいる、おばあさんの姿がちらついた。

「ほう？ やるようになったじゃないか」

姿が、見えない。

でもあたしは、本能的に左から蹴りが来ると察して、腕で防御していた。

「な、何がどうなってるの？ え？」

左を見ても、おばあさんの姿は未だに見えない。

ただ、左腕に足が触れているのが解る。そこにいるのは確かだ。

「しっかし、驚いたねえ。これによる初撃は、確実に当たると思っていたんだ。華葉、なかなか筋と直感がいい」

「ど、どうも」

「そうだねえ。弟子である原石は、しっかりと磨かなくちゃ」

「うぐっ!？」

右から、顔面を殴られた。

しかも今度は、おばあさんの姿が見えてる。

「っ」

地面を転がされ、樹木にぶつかって止まる。

追撃を恐れて、あたしは飛び起きようとした。

でも、思い通りに身体が動かない。足が滑って、尻もちをついたり  
やった。

「あいたたた」

「まだ身体がついてこないのかい。それじゃ、逃げるのもままなら  
ないねえ」

身体が、軽すぎる。

体重は変わってないと思うけど、今までと同じように動けない。  
どうしてなの？

「あ、あの」

「なんだい」

困ったあたしは、土下座しておばあさんに頭を下げた。

「教えてくれませんか。おばあさんの体術を、あたしに」

もつと強くなりたい。そのためにはまず、あたしが変わらなくち  
やね。

変な意地を張ってる場合じゃないんだ。それじゃ、何も進まない。  
変わらない。強くもなれない。そんなの嫌だもん。

「改めて言わなくても、体術と気術ぐらいは教えるさ。ついでに、  
波動眼の使い方もね」

「あ、ありがとうございます」

「ふん。そういや、名乗ってなかったね。あつしの名はエルザ。  
は忘れたよ」  
齡よわい

肩をすくめて、手を差し伸べてくれるおばあさん。

顔を上げると、おばあさんにはっこりと微笑んできた。

「え、っと」

「華葉。違和感があるだろうか？」

「はい。どうしてそう親切にしてくれるのか　う」

おばあさんににらまれた。

「よっと」

手を引かれて、ようやく立ち上がることができた。



「華葉。身体が軽いつて感じかい。それとも、重いのかい」

「え、えつと。軽い感じです」

「そうかい。ま、その違和感はすぐに消えるさ。じきに思っように動かせる」

「は、はい」

おばあさんは、再びあたしとの距離を取った。

「華葉。これからあつしは、アンタに技を叩き込む。その全てをきちんと見て受けるんだよ。殺さない程度にやるから、安心するとい

い」  
「え？ きゃっ」

### 《イアルンヴィズの森》

傾きかけた太陽を背に、街道を走る巨人がひとり。

その肩に乗る、女の子ひとりと大きな犬が一匹。

「森が見えてきたぞあ」

フィヨルスヴィドは、森を前にして立ち止まった。

「よっこいせ」

「ありがとう」

「ワンッ」

フィヨルスヴィドはふたりが降りやすいように屈んだ。

ゲルズとギフは肩から飛び降りて、森を前にして息を飲む。

「ギフ。あなたは疲れてるのよ。しばらく休んでなさい」

「ガウッ」

「わがままを言わないの。とにかく、あたくしに任せて」

「ワン」

ギフはお座りをして、ゲルズを見送る。

「そっぴやあ、ばあちゃんは元気かなあ」

「ばあちゃん？」

ゲルズはフィヨルスヴィドのひとり言が気になり、後ろを振り返った。

「ああ、この森にいるんだよ。オイラのばあちゃんがなあ」

「ふうん」

ゲルズは、どうしてここにフィヨルスヴィドが派遣されたのか理解した。

「ん？ 何か、来るわ」

森の奥から一匹の大きな狼が現れた。その後ろからは、黒い毛並みの魔狼が数匹ついてくる。

「やかましいのが来たな。何者だ。名を名乗れ」

「あたくしの名はゲルズ。この森に親友が連れ去られたみたいなの。あなた、藍色の短髪と目をした女の子を見かけなかったかしら？」

「んん？ あのウルヴァフという小娘が連れてきた、人間の娘か」

「知っているのね。素直でよらしい」

「やれやれ。ん？ 止める。お前達。無駄な争いはするんじゃない」  
その魔狼は、自分に付き従う魔狼をなだめる。ゲルズに飛びかかろうとしたからだ。

「ありがとう」

「いや、いいんだ。俺の名は、マナガルム。この森の副長をしている」

「あら。ここの上の方は、物分かりがよくて助かるわ」

「後ろの巨人から、エルザと同じ臭いがするんでね。血が繋がっているんだらうと判断したんだ。下手に傷つけると、面倒が起きかねん」

目を細めて、そう説明するマナガルム。

他の魔狼は、その指摘があつてようやく気づいたらしい。

「やれやれ。これからは冷静に行動するんだな。さて、と」

マナガルムは後ろを振り返り、それからゲルズに視線を戻す。

「来客を森の中へ案内したいところだが、微かに焦げ臭くてね。誰かさんが、森に火を放つたらしい」

「は？ な、なによそれ」

「そのせいで、我らの鼻が利きにくい。そなたらが火災に巻き込まれても困るしな。濟まないが、しばらくここで待っていてくれないか」

「べ、別にいいけど。もしかして、華葉を隠そうとしてるんじゃない」

「できるものか。そちらには魔犬がいるだろう。第一、後ろの巨人がエルザと血縁にあるんだ。ぞんざいにはできんよ。長であるエルザに、ご飯抜きにされるのは勘弁願いたいしな」

「マナガルムが言つと、他の魔狼がお座りして尻尾をだらんとさせる。」

「そのエルザって人、かなり強いよね。あなたや、他の魔狼がおびえているもの」

「ふっ。強いの一言で片付けるには、惜しい人だ。ん？ おや、

こいつは」

「マナガルムが再び後ろを振り返る。」

「あら。随分とおもしろいことになってるじゃない」

「ゲルズとマナガルムの前に、褐色の肌の女性が現れた。」

「………………。何のつもりだ」

「あら、どういう意味？」

「森に火を放つなど、笑止千万！ その力は外で使えと、何度言わせたと思っている」

「怒らなくてもいいじゃない。私の炎は、無駄に緑を焦がしたりしないわ」

「こちらが黙ってれば、付け上がりおつて。もう我慢ならぬぞ、シンマラあ！」

「その名を聞いて、ゲルズは絶句した。」

「な、え？ ど、どうしてこんなところに」

「そちらがやる気なら、私も本気を出さざるをえないわね」

「マナガルムとシンマラが、火花を散らす。」

「一触即発。ゲルズは焦げくさいものを感じて、周りを見渡した。」

「ええ。ついさつき、エルザにつまみ食いを邪魔されたからね。あれがオードブルとするなら、今度はメインディッシュだね」

すでに蒼い炎が、ゲルズとマナガルムを取り囲んでいる。

白髪を手でかき上げて、シンマラは舌なめずりをした。

「な。あ、あたくしまで……」

「おい。お前達はエルザとウルヴァフ、あの娘を呼んでこい」

マナガルムの指示を受け、魔狼は森の中へと姿を消す。

ただ、一部は残り、シンマラを血眼でにらんでいた。

「臆病者ね。マナガルム」

「ふ。俺は血の流し合いなどごめんだ。それを強いるのなら、手加減はしない」

尻尾を逆立てて前傾姿勢となり、全身から黒いオーラを発するマナガルム。

シンマラはそれを見るなり、片目を閉じた。

「ちょ、ちよつと。勝手に話を進めないでよね！」

ゲルズは意を決して、マナガルムとシンマラの間に割り込んだ。

「なんだ？ お前は下がっていいんだぞ」

「うっん。マナガルムと言ったわね。あなたこそ、下がっててくれない？」

「どういうつもりだ。まさか」

「その、まさかよ」

マナガルムはゲルズの目をじつと見つめ、発気を抑える。やがて、溜息をついて距離を取った。

「あら、逃げるの？ マナガルム」

「この娘の目は本気だ。それに両手に炎を灯すとは、な」

「ムスペルヘイムの長、スルトの妻であるシンマラ。あたくしはあなたで腕試しをしたい」

ゲルズの台詞に、シンマラは大笑いした。

「何がおかしいのよ」

「ふふつ。たかが炎を使えるぐらいで、何を言い出すと思ったら」

「炎？ あなたの目は節穴なの」

紅蓮に包まれた手を地面へ突き刺し、ゲルズはそこから溶岩の斧を手にした。

新しい手袋と靴は、溶岩に触れても焦げひとつつかない。

「なるほど。あなたも、溶岩ラヴァマンサー術師なのね」

「な」

シンマラは煮え立つ地面へと手を伸ばし、そこから溶岩の剣を握り締めた。

「やっぱり、ね」

「解っていたのなら、すぐにお逃げなさい。あなたじゃ、私の退屈を解消してくれそうにないから」

「い、言ってくれるわね。“ラヴァ・アックス”！」

ゲルズは溶岩の斧をシンマラへと投げた。

それを避けず、全身に溶岩を浴びるシンマラ。

「な、なんですって？」

「私はムスペルよ？ 炎の巨人の血族である私が、溶岩ぐらいで火傷なんて負わないわ」

「ち。やるしかないわね」

「へえ。あなた、自息法じそくほうができるの。その若さで、よく体得したわね」

炎の囲いは、その内側にある酸素を食い潰している。

「まあ、それがどうしたって話なんだけどね。あなたにはさっさと消えてもらおうわ。私は、そのマナガラムと遊びたいんだから」

シンマラは手に持つ溶岩の剣を、瞬く間に巨大な剣へと変えた。

それを軽々と持ち上げて、ゲルズへと踏み込む。

「ひ、く、来るなあっ！」

ゲルズは両手を溶岩につけて、波を作り出した。

それは次第に大きくなり、シンマラの接近を防ぐ壁となる。

「無駄よ」

シンマラは深呼吸し、火を吹いた。

溶岩の壁は、その火に触れたことで冷えて固まってゆく。

「な、なんで？ きゃっ」

溶岩の壁を蹴り砕いたシンマラは、溶岩の大剣でゲルズへ斬りかかる。

「きゃあっ!？」

かろうじてそれは外れた。

いいや、シンマラはそれをわざと捨てていた。

「それぐらいで悲鳴を上げるの？ もっと、可愛く泣きなさい」

「え、な」

よろめくゲルズを抱擁（ほうよう）したシンマラは、彼女を紅蓮の炎で包み込む。

「さあ、泣きなさい。可愛い声で、喘ぎなさい。逝かせてあげるわ」

「いやああああああああああああああっっ!？」

その炎の色が、少しずつ青に変わってゆく。

「ふふ。この程度なのね。がっかりだわ」

「う、うう……」

灼熱の闘技場を彩る溶岩は、すぐに冷えて固まった。

ゲルズは全身に火傷を負い、シンマラに紅の布を被せられている。衣服が炎によって焦がされ、肌が露出していたからだ。

「ゲルズ。おい、しっかりしろお」

「来るな。まだ息はある」

マナガラムはゲルズに寄り添い、それからシンマラをにらんだ。

「ふふ。ようやく、あなたと遊べるわね」

「ん？ これは」

マナガラムは森のほうを見やる。

シンマラも何かを感知し、背後を振り返った。

「なに？ 今の、気は。まさか」

「やあああああああああああああつ！」

シンマラはその跳び蹴りを寸前でかわした。

しかし、彼女の狙いはシンマラではなかった。

「ウルヴァアッ！ お願ひ！」

華葉だ。華葉はゲルズを抱えて跳ぶ。ようやく追いついたウルヴァアッに、彼女を託した。

「こ、これは酷い火傷じゃ。急がねば、命に関わる！」

杖をふたつ浮遊させ、回転させて強い癒しの光を放つ。

その光は、ゲルズを優しく包み込んだ。

「う、うう」

ゲルズは薄目を開けて、華葉の存在を見つけた。

「休んでて。ゲルズ。後はあたしに任せて」

口から大量に吐血している華葉。ゲルズは、それを見て目を白黒とさせた。

「シンマラ。アンタは、その娘を味わいたいんだよねえ？」

「お。ばあちゃんあん」

またひとり、森林の奥から姿を現した。

「味わうといい。その娘は、咲き誇る一輪の花だからさ」

### 《イアルンヴィズの森 折笠華葉》

怒りが、込み上げてきた。

ゲルズを、あたしの大切な人をこんなにしたシンマラが許せない。

「エルザ。本当にいいのですか？ 手加減はしませんよ」

「はん。口答えしてるひまがあるんなら、さつさとやったほうがいいよ」

意識が朦朧もうろうとしてる。

ついさっきまで、おばあさんからあらゆる技を叩き込まれたから

ね。無理もないか。

「すう。はあああああああああああああああああつっ」

「な、なんですって?」

「すごい。本当だ。」

深く呼吸して、集中するだけで　みるみるうちに身体が暖くなる。

「いける」

あたしは炎の壁を跳び越え、シンマラの背後を取り、その背中を蹴飛ばした。

「きゃああつ!?!」

空中で体勢を直し、側転しようとするシンマラ。

でもあたしは、その腕をつかんで地面へ激しく叩きつけた。

「う、ぐあああああつ!」

ボールのように弾んだシンマラは、黒い大地に手をつけ、よろよろと立ち上がった。

「ば、馬鹿な。あれが、ついさっきまで戦い方も知らなかった少女だというの?」

まだ、無茶はできそうにないね。

「はあ、はあ、ふう」

あたしは親指で空気を弾いた。

「うあつ!?!」

指弾。握り拳から親指を弾いて、空気の弾丸を対象へ飛ばす。

慣れれば、他の指でもやれるし、連射もできるんだよね。

「な、なんだ?　これは、なんだっていうの!?!」

腹を押さえたシンマラは、おばあさんを血眼でにらんだ。

「ふん。シンマラ、アンタはいつもやりすぎる。加減ってものを知りな」

「く」

膝を崩しているシンマラは、あたしを見据えて立ち上がる。まだ、やれるんだ。



「エルザから何を教わったか知らないけどね。私を怒らせたことを、後悔させてあげるわ」

ふと、急に気温が上がったような。

シンマラの足下が、赤くなってる。

「あなたを、焦がしてあげるわ」

地面が燃えてる。と、溶けてる？

「すう、はあ」

呼吸を整えて、あたしは全身を冷やす。

それから、おばあさんの言葉を振り返った。

「あたしの、正義を表現するもの」

ぎゅつと、強く握り拳を作る。

「すううううううううううううううううううううううう」

深く、息を吸った。

「よそ見など、している場合かしら！」

シンマラは両手に炎を灯して、あたしに殴りかかってくる。

あたしは微動だにせずそれを受けた。

「な、馬鹿な」

炎の拳は、あたしの顔面に触れていた。

でも、熱くない。不思議な感覚だよ。

「心頭滅却すれば、火もまた涼しすず」

「だ、黙りなさい！」

シンマラはあたしの腹を蹴る。でも、ちよつと痛いだけだ。

「っ。こ、これはどういうこと？ こ、こんな娘に遅れを」

すごい。自分でもびっくりだ。

これが、あたしの力。

ほんとに、びっくりだよ。

「馬鹿な。私だって、力の果实をひとつは口にしている。どうして、どうしてこのような小娘に劣るの！？」

知らないよ。そんなの。

ただひとつ言えるのは。

「あなたが、あたしより弱いつてことだけ」

「……ッ」

人差し指を立てて言ったら、シンマラは歯を食い縛ってあたしをにらんだ。

「燃え尽きておしまい！」

両手の炎が激しく燃える。あれ、青い？

「あ、あくちちちちっ！」

ついさっきまでは平気だったのに、それが近づくと熱くてしょうがない。

「ふっ。所詮は強がりね」

我慢できず、あたしは後ずさる。

「スピードが速い。パワーもある。タフさも兼ね備えている。けれど、まだ不慣れね。まだ力を使いこなしていない」

言われて、カチンと来た。

だからあたしは。

「なっ!？」

地面を強く踏んで、シンマラを地震で転ばせる。

「く、い、今は」

大地を強く蹴り、前方に激しい地鳴りを起こす。

それは敵の足止めにも使えるし、味方を伏せさせるのにも使える。

「うぐああっ!？」

懐に飛び込んで、そのお腹に鉄拳を叩き込む。

シンマラはまた地面に弾んで、転がった。

「あ、あくあっ! げほっ、ぐぼおっ」

うわ、吐いてるよ。そ、そんなに強烈だったんだ。

「く、エルザ。私を、私を実験台として使っているわねえ！」

「だからなんだい？ あっしがやるよりはマシじゃないか。まだまだヒヨっ子とはいえ、あっしの技を受け継いでいるけどね。ひよえひよえひよえ」

お師匠様の笑い声、よく聞こえるなあ。

「なら、全身全霊をかけてあなたを焼き払ってあげるわ。覚悟なさい！」

立ち上がったシンマラは、自身を青い炎で包み込んだ。うわ、やばっ。

「ど、どうしよう」

熱いのは嫌だ。殴りかかろうにも、否応なしに青い炎に触れることになる。

「恐れなくていいのよ？　すぐに、すぐにあなたもウェルダンに焼き上げてあげるわ」

「ワアウオオオオオオオオオオオオオオオオ」

遠くから、何かの鳴き声が聞こえる。

「え？　あ、あたしのほうに」

来る。炎を跳び越えて。それも、見慣れたものを啜えたワンちゃんが。

「ワンッ」

「あ、ありがとう」

これは、あたしが使っていた雨傘だ。

そのワンちゃんも反転して、炎の壁の近くでくつろいでる大きな狼のところへ歩いてった。

「な、なに？　く、武器を得たのね」

「いいじゃないか。シンマラ、相手が強いほうが燃えるだろう？」

「そうですね。エルザ。私も、ようやく本気でやれるんです。簡単にやられたんじゃない、つまらないですしね」

向こうは何か勝手なことを言ってる。

あの小人さん、ちゃんと作ってくれたんだ。うん、開くよ。

この雨傘、見た目はそのままなのに、なんだか暖かい。できたてだからかなあ？

「そんなものを手にしたところで、私との差は縮まらないわ！」

速い。シンマラは、一瞬であたしとの間合いを詰めてきた。バサツ。あたしは傘を開いて、シンマラの拳を受け止める。

「な、なんですって？ それは、剣ではないの？」

皆して、傘を剣だとか言うよね。

「く、ふざけた盾を使うなんて」

だ〜から、盾でもないの。雨を防ぐための道具っ。

でも、今は武器として使わせてもらっよ。ごめんね。

「な」

たたんで振り払うと、あたりに風が起きる。

「か、風切り？ ふっ、私の炎を育ててくれるなんて、好都合だわ」

そうだ。風は火を強くしてしまう。

どうしよう。下手に振り回していたら、シンマラの火の勢いを強めるだけだ。

「よそ見などさせないわ！」

「わ」

頬に拳が 違う。青い炎がかすった。熱い。火傷したかも。

「く」

あたしは後退して、シンマラの動作を注視する。

「逃げてばかりで、芸がないわね。先刻までは強気だったのに、どうしたのかしら」

雨傘を左手に持ち、あたしは右手に気を集中させる。

「せえいっ」

「ふぐうっ!？」

シンマラの腹に、拳を叩き込んだ。

けど、あたしは近づいてすらいない。拳から気を飛ばすことで、シンマラを殴ったんだ。

「な、く、そんな芸当が……っ」

威力が弱い。やっぱり、遠距離じゃダメだね。

「そうだ」

この雨傘なら、もっと多くの気を練り込めるかも。

え〜つと、どうしたらいいんだろ。

「逃がしはしないわ」

地震を起こして時間を稼ごうと、足に力を入れる。変な感触がした。

いつの間にか、あたしは溶岩地帯に足を踏み入れてる。

「さあ、大地のようにあなたも溶かしてあげる。おびえなさい。それこそが、私にとって最高のスパイスになる」

「っ」

この溶岩と暑さはまずい。長くやりあっていたら、こっちが持たないよ。

てか、靴が溶岩にはまって動けないのお？ これは、まずいかも。

「ふふ。あ〜はっははははははは。エルザに何を教わったか知らないけどね、この短期間でよくやれたほうだわ。ほめてあげる」

「それはどうも」

ええい、相手から数発もらおうが関係ない。どうせ死にやしないんだから。

「な、私を無視する気なの？」

あたしは目を閉じて、雨傘を両手で構えた。

感じる。あたしの身体にある、大気にある、ほんりゅう気の奔流を。

「っ。私をコケにしたことを、今に悔いるがいいわ！」

あたしは雨傘を、下段に構えて。

「やあああああああああああああああああああああああああああああ  
あああっっっ！」

全力で振り上げて、その気を放った。

勝負は、決っていた。

「あ、あ……」

この声は、シンマラのものだ。

最後のあたしの技は、外してしまった。

「すっげえなあ。オイラ、こんなの初めて見ただよ」

「ワンッ」

シンマラの真横には、大きな地割れができています。

そのほうがよかった。もしシンマラに当たっていたら、彼女を殺していたかもしれない。

「ワンワンッ」

「こいつは、俺でも勝てんな。人間の娘が、ここまで開花するとは」

「ほう？ これは、もしかしたらあつし以上かもねえ」

距離にしていくつなのかは解らない。

深さも、どれぐらいなんだろうね。

「シンマラ。今のはわざと外したけど」

うそだよ。これは、うそつ。

「次に下手なことしたら、今度は当てるからね」

雨傘を地面に突き刺して、あたしは威勢よくたんかをきった。

## 第5話

《イアルンヴィズの森 折笠華葉》

もう真っ暗だ。

いつの間にか、日が落ちてたんだね。

「ほぐれ、尻拭いしりぬぐしてやったよ」

「あ、すいません。お師匠様」

おばあさんは足で大地を踏み込んで、地割れを塞いでしまった。

「シンマラ。後で大地を溶かして調整しときな。まだそのへんが脆もろいからね。誰かが落ちたら面倒だ」

「は、はい」

シンマラはおばあさんの指示を受けて、地割れの修復を急ぐ。

「おゝい、ばあちゃん。久しぶりだなあ」

「ふん。フィヨルスヴィドかい。随分とでかくなつたじゃないか」

おばあさんは巨人さんのところに向かい、何か話している。

「華葉。こつちへ来い」

「あ、うん」

ウルヴァフに呼ばれて、あたしはゲルズに寄り添う。

「か、華葉」

「しゃべらないで」

「う、ううん。あなたは、どうして……そんなに強くなつたの？」

強いかどうかは解らない。

ただ、あたしは力を得た。得てしまった。

その使い方は、間違っていなかったと信じたい。

「話は後ですよ」

「そ、そう」

あたしの近くに、大きな狼がやってきた。口に葉っぱを啜すすえてる。

「これを使え。火傷に効く薬草だ」

「かたじけない」

ウルヴァーフは手で揉んでから、ゲルズの肌にそれを当てる。

「う」

「染みるか？」

「だ、だいじよぶ」

ゲルズはやせ我慢してるね。

「しっかし、驚いたな」

「え？」

「力の果実を口にして、あそこまで強くなるとはね。俺では歯が立たんよ」

「っ」

唇を噛み締める。

「ん。どうやら、あまりうれしくないようだな」

「そう見える？」

「見える」

「そっか」

しゃべる狼はあたしの反応を見て、複雑そうな顔をした。

「どうしたの？」

「ふっ。俺は森へ戻らなくてはな。もうそろそろ、食事の時間なのでね」

しゃべる狼は別の狼を引き連れて、森の中へ消えてしまった。

「ねえ、ウルヴァーフ」

「ん？」

「ひとつ、聞きたいことがあるの」

「ワシを、恨んでおるのか？」

「違うよ。それはそれ。別なことだよ。ウルヴァーフなら知ってそう  
な気がして」

「さようか。して？」

「ウルヴァーフは、別世界に通じる門みたいなのを知らない？」

「門じゃと？　しかも別世界に通じる？　残念じゃが、ワシは知ら



ん

「そう」

首を左右に振るウルヴァフ。

ふと、その話を聞いてたゲルズが。

「華葉は、元の世界に帰りたいの？」

ちよつと涙目で、そう聞いてきた。

「うん。あたしね、おばあさんに言われて気がついたんだ。あたしがいなくなったことで、お父さんやお母さんが心配してるんじゃないかなって」

未だに、あたしがこつちの世界に来た原因は解らない。

ただ、こつちに来れるのなら戻れる方法はあるはず。きっと。

「ウルヴァフ。驚かないんだね」

「んや」

首を横に振るウルヴァフ。

その反応には、ちよつと違和感があった。

「元の世界に帰れる方法、ね」

いつの間にやら、シンマラがあたしたちの近くに立っていた。

溶岩での地割れ修復は終えたらしい。

「あ、その」

「いいわ。あなたとのやりとりは、全て私が悪いのだから。そのお詫びとってはなんだけど、あなたに情報を提供するわ」

白髪を手でかき上げ、シンマラは屈んであたしの目を見る。

「ムスペルヘイムに深淵の洞窟があつてね。そこに足を踏み入れた者は、別世界に辿り着くという噂があるの」

「ど、洞くつ？　じゃあ、そこに案内してくれませんか」

「ふ。ムスペルヘイムは先刻の灼熱より酷い環境よ。気温は平均一千度で、地面は溶岩だらけだし、高温の蒸気と硫黄が立ち込めている。層気楼で視界もよろしくない。今のあなたでは近寄ることすらままならないわ」

「ど、どうすればいいんですか」

「その洞窟を通れば、そこに戻れるという保証はないわよ。通れるのは人間サイズだし、どうしてかムスペルはそこを敬遠してる。だから、噂になってるのよ」

「確かじゃないんですね」

「そうでもないわ。その噂の発端は、その洞窟から奇妙なものが見つかったからよ」

「奇妙なもの？」

あたしは首を傾げる。すると、シンマラは胸に手を突っ込んで、わわわっ。

「あら、あなたはそういうの苦手なのね。夫のスルトと同じ反応だわ」

「あ、あの」

「これよ」

シンマラはそれをあたしの手に置く。

「あ」

「こ、これは」

「懐中時計だ」

針は七時七分のところまで止まってる。

裏にメイドインジャパンって刻んであった。どこのメーカーのだろ。

「なるほど。あなたはそれが何かを知っているのね？」

シンマラはうんうんとうなづいている。

「でも、さつき、灼熱だって言ってたじゃないですか。溶けてもおかしくないはず」

「その洞窟周辺の環境だけは、ここと大差ないのよ。何か物が転がり落ちるから、壊れないように私が結界を施している。スルトは余計だと言って、口論となつたのが懐かしいわ」

さつきから気になるんだけど。

「シンマラ。そなた、もしかやスルトと別れたのかや？」

ウルヴァフが、容赦なく踏み込んだっ。

「違うわ。ムスペル Heim にはたまに帰省するもの。あそこではおいしいものが食べられないし、何より私以外のほとんどが巨人ですからね。暑苦しいのよ」

肩をすくめて、溜息をつくシンマラ。

「それより、この娘はだいたいじょうぶかしら」

「問題はありんせん。ワシが治療しておる」

「そう。ならよかった」

シンマラはゲルズの頬に触れる。

「ごめんなさいね」

「な、なによ」

ゲルズはシンマラのことを嫌いみたい。

「私はやりすぎたわ。あなたにも、お詫びがしたいの」

「ふ、ふん。負け犬に施しなんて、随分と優しいのね」

す、すねてる。

「それを言うなら、私のほうが負け犬よ。その娘に圧倒されたんだから」

こっちもすねてるっ。

「んで、なによ」

「あなたも、私と同じ火の使い手でしょう。これをあげるわ」

そういつて、シンマラは何もない手の平に服を出現させた。すこっ。

「そ、それは」

「私が昔、幼い頃に使っていたものよ。体型的にもサイズも、ぴったりだと思っわ」

「合わなかったらどうするのよ」

「その時は裁縫さいほうすればいいだけじゃない」

言いながら、裁縫セットを出現させるシンマラ。用意周到だねっ。ゲルズはまだ納得してない様子。

「そのままじゃ風邪を引くわよ。まあ、私が服を焦がしちゃったんだし。弁償しないと気が済まないのよ」

「そ、そう。じゃあ、ありがたくもらっておくわ」

素直じゃないね、ゲルズ。照れ臭くて、そっぽ向いた。

「ウルヴァーフ？」

立ち上がって、ゲルズから離れるウルヴァーフ。

「どこに行くの？」

「ん。ちいと腹が空いてなあ」

頬を染めて、ウルヴァーフはお腹をぼんぼんと叩いた。

森の前で、あたしたちは山菜汁をいただくことに。

ちなみに山菜は、狼たちが森の中から取ってきてくれた。

「はい。どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

シンマラが調理してくれたこれは、とってもいい香りがする。

あたしは木のお椀とスプーンをもらい、いただきますをする。

「ふんっ。相変わらず、めんどくさい味つけだねえ」

「エルザ。そういうあなたはいいい加減に、レシピを覚えてくれませ

んか」

「はんっ。あつしに口答えなんて、百年早いよ」

ふたりは仲良しなのかなあ。

おばあさんは文句を言いながらも、ちゃんと食べてる。

「あ、ありがとう」

「いえ」

シンマラはゲルズにも木製のお椀とスプーンを手渡す。

そのゲルズはさっきもらった服に袖を通して。よく似合ってる

よ。

ちよつとサイズが合ってたけど、裾すそはシンマラが整えたか

らだいじょうぶっばい。

「うむ。キノコにタケノコ、つくしに葉物がよく煮えておる」

「当たり前よ。私を何だと思っているの」

「そうじゃったな。これは失敬」

ウルヴァフは夢中になってそれを食べてる。

「ふうふう」

あたしとゲルズは息を吹きかけて、冷ましてから一口。

「あ、おいしい」

「そうね。ダシが利いてるわ」

他にも巨人さんにワンちゃん、狼も黙々とがつついてる。

「大人数での食事なんて、久々だねえ」

おばあさんは巨人さんを見て、にっこりと微笑んだ。

「そうだなあ。ばあちゃん、ガストロプニルには戻らんのかい？」

「そういうあんたがこっちに来ないのかい」

「悪いけど、オイラは見張りの仕事があるんだなあ」

「そうかい。あんのでれすけは、立派にヨツンどもを従えてるんだねえ」

つんつん。隣のゲルズが肘で小突いてくる。

「どうしたの？」

「華葉。これを食べたら早く帰りましょ。メングラッド様が心配してたわ」

「そ、そっか」

「ん？ どうしたの」

「うん。ちよっとね」

本当は今すぐにでも、元の世界へ帰りたかった。

そう急がなくてもいいよ。

皆にお礼をしてから、ムスペルヘイムを目指そう。

「あの」

「はい？」

「シンマラ、でいいですか」

「ええ。呼び捨てで結構よ」

「その、ムスペルヘイムにはどうやって行けばいいんですか？」

あたしのこの発言は、静寂をもたらした。

しばらく沈黙した後、シンマラが口を開く。

「徒歩でなら、この森から南下したところに、ウトガルズという国があるわ。そこにいるウトガルズなら……」

「ウトガルズに行けば、ムスペルヘイムへの道があるんですね？」

「确实とは言えないわよ。ウトガルズは気まぐれだから」

ふと、シンマラはおばあさんを見た。

「華葉。今のアンタじゃ、ムスペルヘイムに行っても焼け死ぬだけだよ」

「え。ど、どうすればいいんですか」

「まずは自息法を体得するしかない」

「その、じそくほうというの？」

「単純に言えば、自身が大気中の水分を体電気で分解し、酸素を確保して呼吸することさ。これができないと、酸素の少ないムスペルヘイムでは活動できやしない」

「なるほど。おばあさん、それをあたしに教えてください」

「無理だね。あつしは自息法ができないんだ」

「え。お、おばあさんにもできないことがあるんですね」

「当たり前さ。あつしを何でもできる万能だと思っんじゃないよ。それにもう、アンタに教えることあない。アンタは叩き込まれた技を振り返って何度も練習し、全部をちゃんともものにするんだ。それから応用だよ。いいね？」

「は、はい。お師匠様」

「ふう。もうあつしは師ではないのさ。赤の他人だよ。ひよえひよえひよえ」

おばあさんは山菜汁を完食した後、腰を上げて森のほうを見る。

「華葉。こいつは餞別だ」

「わ」

おばあさんがこつちに投げたのは、一枚の銀貨。

それを受け取ったあたしは、その意味が解らなくておばあさんを見る。

「あつしはこれで失礼するよ。これを食べたなら、さつさとおかえり。ベルゲルミルが心配しとるはずだよ」

背を向けたおばあさんは、逃げるように森の中に姿を消した。銀貨は短パンのポケットに入れておこう。

「ん〜。じゃあ、自息法はどうすればいいんだろう」

考えていることが、口に出していた。

「華葉。自息法ならワシが教えてやりんす」

「え？ い、いいの？ ウルヴァフ」

「ふむ。しかし、ワシとて自息法をものにするのに季節が巡ったほどじゃ。短期間で覚えるのは不可能に近い」

「ちよつと、あんたの出る幕じゃないわ」

ゲルズが、ウルヴァフに食ってかかった。

「華葉を連れ去っておいて、謝りもしてないじゃない。それに今度は、華葉が元の世界に戻るための手助けをしようだなんて」

「……………」

無言のウルヴァフ。

ずずつと汁をすすり、具を噛み砕いている。

「ワシがどうこう言うのも奇妙な話か。それもよろしんす」

「は？ は、はぐらかすつもり？」

「あんまりしゃべるでない。先刻まで全身火傷を負っていたんじゃ。静かにしておれ」

唇をへの字にして、ゲルズはふくれてる。

「そういえばシンマラ。そなたは、どうやってムスペル Heim に帰省しておるのじゃ」

「私？ 私は、この近くでヨルムンガンドが顔を出したら、その背中を渡つてムスペル Heim に戻ってるわよ」

「む。それは、かなりの確率論になるな」

「ええ。けど、ウトガルザはヨルムンガンドと召喚契約を交わしているの」

「なるほど。だからウトガルズなのか」

よく解らないけど、ウトガルズに行けばどうにかかなりそうなんだね。

「でも、ウトガルズは幻術の名手よ。噂によれば、あのツールとシヤルヴィ、ロキですら手玉に取ったって言うじゃない」

「ええ、そうね。でもその娘は、波眼を使える。波眼は幻術使いにとって天敵よ。ウトガルズも、その娘が波眼を使えると知ったら下手な真似はできないわ」

ゲルズは、シンマラの言葉を聞いて舌打ちをした。

「なによ、どうということなのよ。華葉は、いつの間にか皆と仲良しだしさっ」

それで機嫌悪いのお？

「悪いことではなかるう」

「ふん」

そっぽ向くゲルズ。

「さあ、これ早く食ってガストロプニルに戻るだあよ」

巨人さんは自分の分を食べ終えて、あたしたちを急かしてくる。

「そうか。ならワシも、いろいろと詫びるためにおもむきたいのじやが」

「お。それなら、オイラは歓迎するぞお」

「ま、また何か企んでるわね？」

巨人さんはうれしそうだけど、ワンちゃんとゲルズは嫌みたい。

「疑われるのは致し方ない。散々やらかしたからのう」

頭をかいて、ウルヴァフはあたしたちを見る。

「だったら、ちゃんと謝りなさい」

「うむ。この通りじゃ」

ウルヴァフは土下座して、頭を下げた。

「ほ、ほんとにやるなんて」

「ワンッ」

ゲルズとワンちゃんはびっくりしてる。

「華葉も、乱暴な真似をして済まなかった」



「いいよ。あたしは気にしてないから。力の果実のおかげで、元の世界に帰ることができそうだしさ」

「そ、そうか」

ウルヴァフは顔を上げて、頬を緩めた。

月が見える。すっかり暗くなっちゃったね。

食事を済ませた後、あたしたちは森を離れてお城を目指している。といつても、歩いているのは巨人さんだ。

あたしとゲルズ、ギフともう一匹のワンちゃんを左右の肩に乗せて、巨人さんは一歩ずつ大地を踏み鳴らしている。

「もうちいっと、ばあちゃんと話したかったなあ」

「あたしも、もう少しお師匠様に鍛えてほしかったなあ」

「ふむ。あの老婆は、ちいとばかり偏屈ではあるがの。根はいいよ  
うじや」

ふと、ゲルズが下を見てこんな一言。

「ちよっと、そのあんたっ」

これはウルヴァフに言ったんじゃない。

「あら、いいじゃない。私はずっと森にいて退屈だったもの。それに、ヨツンの長であるベルゲルミルにもあいさつしておきたいしね」  
ゲルズは飛び降りて、シンマラに食ってかかる。

シンマラの隣を歩くウルヴァフは、肩をすくめてふたりから遠ざかった。

「だったら、この趣味の悪い服に代わるものを出しなさいよ」

あ、気に入らなかつたんだ。それ。

「それは高熱に耐える代物よ。それで私はスルトのハートを射止めたんだもの。あなたもそれで殿方にアタックすればいいじゃない」  
「よっと」

あたしもふたりの傍に飛び降りる。

「っ」

ゲルズはあたしとシンマラから視線をそらした。

「あら、すでに意中の男性がいるのかしら。それとも、いたのかしら」

「黙りなさいよ」

「そう。嫌ならそれ以上は追及しないわ」

シンマラはあたしとゲルズを追い抜いた。ウルヴァフはシンマラと並んで歩く。

「どうしたあ？ 置いていくぞあ」

「あ、うん」

あたしが巨人さんのほうを見た瞬間、それは起きた。

「きゃっ」

「え？」

パカラパカラ。誰かが馬に乗って、あたしたちの横を通り過ぎた。「ガルッ！」

「なんですって？ な、本当にいない。しまった」

ギフが飛び降りて、馬を追跡する。

シンマラは何が起きたのか、すぐに理解したようだ。

「あ、え？ げ、ゲルズがいない」

「さっきのが、彼女を連れ去ったのよ。私は先に向かうわ」

「お、オイラの肩に乗るんだなあ」

「そうね。さあ、あなた達も早く」

「ワンッ」

シンマラと小さめのワンちゃんは巨人さんの肩に乗って、あたしたちを誘う。

「見失うわけにはいかん。華葉、ワシはこれに乗って向かう。そなたはどうする？」

浮遊する杖ひとつに足を乗せて、ウルヴァフはあたしに問いかける。

「走るよ」  
「さようか」

《街道『巨人達の足跡』》

「ちょっと、放しなさいよ！」  
「む」

馬に乗った何者かに抱えられたゲルズは、全身から火を起こして抵抗する。

「きゃ」

地面に落とされたゲルズ。

ゲルズを放した男は、馬を止めて彼女のほうを向いた。

「オレはあなたを、フレイ様の下へ連れて行かねばならない。抵抗は止めてくれないか」

「ふ、フレイ？ な、何を言ってるの」

「あなたはフレイ様と婚約しなくてはならない。そういう運命なのだ」

「い、意味が解ないわよ！ いきなり人を拉致しといて、何を言っているの？」

ゲルズは立ち上がり、両手に火を灯した。

付近の草むらに炎を放って、暗がりを払う。

「大体、あたくしはバツ一なのよ。もう結婚なんて考えたくもないわ！」

馬に乗る男は、それから降りて杖を握り締めた。

「あなたを傷つけたくはない。さあ、おとなしく来るんだ。悪いよ  
うにはしないぞ」

「もうすでに悪いようにしてるじゃない」

ゲルズはまだ自分が本調子でないことを悟った。

それを敵に気取られまいと、必死に火を灯し続ける。

「どうした？ 来ないのなら、こちらから行くぞ」  
「く」

《街道『巨人達の足跡』 折笠華葉》

驚くほど、速かった。

誰が？ じゃない。あたし自身が、だ。  
すでもう、ギフに追いついている。

「キャンツ？」

隣を走るギフは、あたしを見るなり可愛い声で鳴く。

「ねえ、ギフ。この先にゲルズはいるの？」

「ワンツ」

うなづいた。よしっ。

前方に明かりが見える。あれは、もしかしたら。  
力強く大地を蹴って跳び、あたしは炎に囲まれた中心へと降り立  
った。

「な、なんだと？ く、邪魔が入ったか」

「か、華葉」

ふう。間に合った。

ゲルズは尻もちをついて、あたしを見上げてる。

「あなたは、何者なんですか」

左腰のベルトに差してた雨傘を左手で抜いて、その先端を向けな  
がら言い放つ。

「オレの名はスキルニル。フレイ様の命により、その娘を連れて  
行く」

「随分と強引だよね。どうして、そんなことをするの？」

「聞こえなかったか。フレイ様がその娘を欲ほっしているからだ。逆ら  
うのならば、容赦はできないぞ」

ふと、ゲルズがあたしの服の裾を引っ張る。

「は、早く逃げて！ 華葉、そいつは  
「え？」

半歩下がって、上から突っ込んできた剣を避ける。

一瞬でも反応が遅れていたら、やられてた。

「ほう。いい反射神経をしている」

あたしはゲルズを抱えて、その人から距離を取った。

「これは」

額から、血が流れる。

それを手でぬぐって、あたしは浮遊する剣を見据えた。

「そいつは、奇妙な剣を持っているの。それには、ルーンが刻んであるわ」

「ルーン？」

「魔法文字よ。あたくしは、あれから峰打ちをもらっちゃってね」

お腹を押さえて、ゲルズは顔をしかめている。

「たかが小娘ひとりに、これを使うまでもないと思ったが。そもそも言ってられない。勝利の剣よ、その娘を斬り捨てよ」

浮遊する剣が、あたしに斬りかかってくる。

黄金の輝きを持つそれは、暗闇にあっても目立つ。合わせるのは簡単だ。

「っ」

あたしは雨傘でそれを打ち払う。

しかし、持ち手不在の剣は弾いてもすぐに体勢を直し、突撃してくる。

「このっ」

払っても、しつこくあたしへと切っ先を向け続ける。

「げ、ゲルズ。早く逃げて」

「で、でも」

「いいから、早くう！」

その隙をつかれた。

あたしは突っ込んでくる剣を、右手でつかんだ。

「ぐ、うう」

「無駄だ。片刃とはいえ、勝利の剣は巨人をもたやすく殺す。抵抗は止める。命が惜しければなな」

痛い。かなり痛い。

「つう」

剣はあたしから放れて、右手に深い傷跡を残した。

かなりの量の血が流れてる。

身体が頑丈になったから、だいじょうぶだと思ってた。けど、そ  
うでもないみたい。気をつけないと、やられちゃう。

「はあ、はあ、ふう」

「か、華葉」

大きい足音。皆が、追いついてきた。

「新手か。仕方あるまい。一気に片をつけてやるっぞ」

男の人が杖の先端に光を灯す。

「ぬうつ!?!」

あたしは地面を踏み込んで、男の人を転ばせた。

「お、追いついたんだなあ」

あれ、剣はどこっ?

「うぐああああああああああっっっ」

影?

あたしは後ろを振り返り、巨人さんの身体を右手で支えた。

「は、早く降りて!」

巨人さんは胸から大量に出血している。

あの剣に、やられたんだ。

「華葉お!」

「そこを離れなさい!」

ウルヴァフとシンマラの叫び声。

何が来るのか、あたしには解ったよ。

だから、あえてそれを受けた。

「ぐ、うううう」

右脇腹に、剣が深く斬り込んできた。

あたしは雨傘を捨てて、左手で巨人さんを押さえる。右手は、剣の柄をつかんで動きを止めていた。

反応が遅れてたら、危なかったよ。

「なんだと？ く、勝利の剣よ。その娘にとどめを刺せ」

「うあああああつ！？」

もっと深く、食い込んでくる。

右手で引きはがそうとしても、びくともしない。

「あの剣は くつ。華葉、早うフィヨルスヴィドを下ろせ！」

ウルヴァアの言う通り、あたしは巨人さんを横たえる。

「く、あの剣は所有者を片付けないとどうしようもないようね」

シンマラは炎を手に灯し、敵の姿を映した。

「な」

「む」

「ウォンッ！」

ワンちゃん二匹が、男の人へ飛びかかる。

「それぐらいで」

「キャインッ」

男の人は杖でバリアを張り、ワンちゃんの体当たりを防いだ。

その直後、光線を放ってシンマラを狙う。

「く。早く剣の所有者を倒さないと、その娘が危ないわ」

それを避けて、シンマラは両手に青い炎を灯した。

「か、華葉」

ゲルズが、剣の刀身をつかんだ。

「は、はなれて……」

「いやよ！ 華葉が、華葉が死ぬのなんていやあああああつ！」

泣きながら、ゲルズは剣を手で押さえる。

あ、い、意識が……薄れてきた。

傷が深い。急がないと、あたし真っ二つにされちゃう。

目が、目がかすむ。

「っ」

あたしは、おばあさんの言葉を思い出していた。

『波動眼は、周りの生命に強い影響を与える。あっしがアンタに見せたように、周りの生命の意識が揺らぐほどのね。だから、波動眼はいざという時か……周りに味方がいない時に使っただよ。いいね？』

おばあさんが見せた、ダイヤモンド金剛石のような瞳。

あたしも、それができる。

けど、今それをしたら皆が気絶しちゃうかも。

いざという時。

今が、そうじゃないの？

あたしがやられたら、ゲルズが連れて行かれる。そんなの、そんなのやだあつ！

「っ」

深く、息を吸い込む。

まぶたを下げて、あたしは瞳を開けた。

「 波動眼！」

その瞬間、剣の動きが止まった。

脇腹からそれを引き抜き、右手に握る。

「な、なんだ？ ぐ」

男の人が、荒い呼吸をして膝をつく。

それは、あたしが男の人をにらんでいるからだ。

「こ、これはっ」

「きゃ」

「クウン」「」

シンマラ、ゲルズ、ワンちゃんたちも膝を崩した。

ウルヴァフは、横目で見た限りは影響を受けてないように見える。

「そ、その目は」





《ガストロプニル》

「落ち着いてください。メングラッド様」

「だ、だって」

ヨツンヘイムにある大きな城砦。

その城壁内にある館の医務室に、メングラッドとエイルがいた。

小人が残していった妖精の涙の粉末で、薬の調合をしているふたり。

華葉とゲルズのことを気になって、その作業がはかどらないようだ。

「わたくし達は、待つしかできないのです。何があってもいいように、薬だけは備えておかなければ」

「そうですけど」

椅子に座っていたメングラッドは、おもむろに立ち上がって窓の外を見る。

丸い月が、夜空に輝いていた。

「ふう」

エイルは手を止めて、メングラッドのほうを見た。

「続けましょう。もしふたりに何かあって、薬を要する時に、適切な処置ができるようにしておかないと」

「そういうエイルは、心配じゃないのですか」

「心配ですよ。しかし、万事に備えておくのも重要です。いざという時に何もできないような失態を、わたくしは犯すつもりはありませんから」

エイルは作業を再開する。

メングラッドはそれを見て、静かに席に着いた。

それから、しばらく経ち。

「な、なんでしょう」

「鐘が激しく鳴らされてますね。敵襲でしょうか」

メングラッドとエイルは、席を立てて渡り廊下へ出た。

遠くに見えるのは、慌ただしく動く巨人兵。

何があつたのか気になり、ふたりはベルゲルミルの下へ向かおうとした。

「お、お待ちください。メングラッド様、この近くに重傷者がふたり出たとのことです」

巨人兵のひとりがふたりを見つけ、事を報告する。

「ふたり？」

「ええ。そのうちのひとは、すぐに到着するはずです」

巨人兵の言うように、ギフとゲルズに浮遊する杖ひとつが、ひとりの少女を運んできた。

「か、華葉？」

「すぐに治療の準備をしましょう。メングラッド様」

ギフが背負っている華葉は、意識がない。

ゲルズは浮遊する杖とともに彼女を支えて、ここまで走ってきたのだ。

「は、はやく……か、華葉を」

泣きそうなゲルズの声に、メングラッドとエイルはうなづいて応えた。

メングラッドとエイル、浮遊する杖の力により、華葉は一命を取り留めた。

フィヨルスヴィドは、ウルヴァアの尽力により救命に成功。

そのウルヴァアは疲れているようで、医務室のベッドでぐっすりと眠っている。

「何があつたのかわかりませんが、ここもにぎやかになりましたねえ」

ベッドで寝息を立てる華葉を見て、メングラッドは溜息をひとつ。彼女は机に置かれたグラスを手に取り、注がれた水を飲み干す。その隣に立つゲルズは、複雑そうにウルヴァアの寝顔を見つめていた。

「華葉さんはだいじょうぶです。落ち着いていますからね」

「エイルは華葉の傍を離れて、エプロンで手をふいている。」

「そう。エイル、フィヨルスヴィドのほうは？」

「これから確かめに行きます。それと、ベルゲルミル様のところへ報告に参りますので」

「はい。お願いしますね」

「では」

エイルはふたりに会釈をして、医務室を出ていった。

「ゲルズ。どうして、華葉がそんな傷を負ったのか説明してくれませんか」

メングラッドはハンカチで額の汗をぬぐい、隣のゲルズに問いかける。

「はい。その……」

ゲルズはメングラッドに、事の顛末てんまつを伝えた。

森での出来事から、現在に至るまで。

「そうですね。ここヨツン Heim も、穏やかではありませんね」

メングラッドはうつむいて、大きく息をついた。

「ゲルズ。あなたも休んだほうがいいですよ」

「へ、平気です。華葉が目覚めるまで、あたくしは……」

「無理をしないで。よく見たら、あなたには火傷の跡がちらほらとあります。治療の途中だったのではないですか」

鋭い指摘を受けて、ゲルズは黙り込む。

「わ、解りました。ベッドはひとつ空いてますし、そこで休みます」

「ええ。ごゆっくり」

王の間。

そこには、シンマラとベルゲルミルがいた。

「久しいな。シンマラよ」

「ええ。ベルゲルミル」

顔を合わせたふたりは、同時に頬をほころばせる。

「しかし今は騒々しいのでな。あまり悠長に話はしてられん」

「別に、あなたは癒し手ではないでしょう？　ここでじっとしているのが、王たるあなたの務めのはず」

「フィヨルスヴィドも華葉も、重傷だか重体だかはっきりしないのでな」

「まるで、子を案じる親ね」

「言ってくれ」

ふたりは白い歯を見せ合う。

「して、今日は何用だ？」

「特にないわ。私はイアルンヴィズの森に居候いこうしているので、それを伝えるついでに顔を見せに來ただけよ」

「森に？　もしや、スルトと別れたのか」

「皆して、同じようなこと聞くのねえ」

「ん？」

「私はスルトと仲良くやっているわよ。たまに帰省しているしね。

ただ、ムスペルヘイムだと満足に食事もできないし、暑苦しいからね。のどかな場所で時を過ごしたくなるのよ」

「むう。女の考えは理解できんな。普通は、好いた者と一緒にいたがるのではないか？」

「あなたはスルトと同じで、さびしがり屋なのね」

「だ、断じて違うぞ」

「どうだか」

肩をすくめて、シンマラは目を細める。

扉がノックされて、ふたりは口を結んだ。

「失礼します」

「エイルか。どうした」

小人用の扉を開閉したエイルは、シンマラの姿を見て驚く。

「お邪魔でしたか？」

「いや、いい。世間話をしていただけだ。して、どうした」

「あ、はい。折笠華葉の容態ですが、落ち着きました。フィヨルス  
ヴイドですが……」

「なんだ。もしか、死んだのか？」

「いえ、ウルヴァアの治療のおかげもあり、一命は取り留めていま  
す」

安堵の溜息をもらすベルゲルミル。

「しばらく、巨人訓練場のほうで寝かしていたほうがいいですね。

他の巨人の方々は、闘技場のほうで鍛練するよう言っておきました」

「ふむ。そのほうがいいだろう。静かに寝かshoいてやれ」

「はい」

「おっと、ウルヴァアといったか。その小娘は、華葉を拉致した張  
本人だろう。厳しい罰を下したいところだが、フィヨルスヴイドを  
救命したからな。それを考えると、あまり責めることはできんな」

「そうですね。あの子の持つ杖は、自律行動して華葉さんを癒して  
いました」

「ふたりを救った恩人、か。儂としては、何故に華葉を連れ去った  
のが気になる。済まないが、エイル」

「はい」

「後で、その小娘をここに連れてくるように」

「承知しました」

エイルは視線をベルゲルミルから、シンマラに向ける。

「こちらの方は？」

「シンマラ。スルトの妻だ」

「な、なんと。これは無礼を」

頭を下げるエイル。

「いいのよ。それより」

シンマラは手の平に細身の長剣を出現させる。

黄金でできたそれを、シンマラはエイルに手渡した。

「あの娘に、この剣を届けてくれない？」

「な、なんですかこれは」

「勝利の剣よ」

シンマラの発した言葉に、耳を疑うエイルとベルゲルミル。

「勝利の剣、だと？ 確かそれは、フレイの所持品だったはず」

「ええ、そうね。でもどうしてか、ゲルズを誘拐した犯人が持っていたのよ。事情を詳しくは知らないけど、フレイはゲルズを欲していたみたいね。死ぬ間際、そんなうわ言を口走っていたし」

「ふうむ。立て続けに、人さらいが起きるとはな。警戒を強めねばならん」

ベルゲルミルは腕を組んで、指先でひげをすく。

「これを、華葉さんに？」

「ええ。これはあの娘が勝ち取った代物よ。私が使おうとしても、反応がない。おそらくそれは、強者が持つことで真価を發揮する」

「シンマラ。そなたは、それを黙って持ち去ろうとしたのか？」

「言葉の綾よ。本音を言えば、巨人すらたやすく屠るこの剣は封印したいところね。けれども、私はこれひとつで手一杯なのよ」

そういつて、シンマラは右手に剣をもうひとつ出現させた。

「な、なんだそれは」

「レヴァティン。昔にロキがスルトに贈った、業物のひとつよ」

シンマラは鞘からそれを引き抜き、片刃の剣をふたりに見せつけた。

ルーン文字が刻まれた刀身は、妖しげな輝きを放っている。

「私とスルトは、包丁と呼んでいるけどね」

「包丁、だと？ ふつ。ルーン文字が刻まれた刃に、その表現はどうかと思っぞ」

「そうね」

シンマラはその剣を鞘に収めて、青白い光に変換した。

「ふむ。スルトは、そのレヴァティンを手元に置かないのか？」

「我が夫は、拳ひとつで語るのが好きな熱い男よ。武器などに執着しないわ」

「儂と同じか」

「ええ。だから、あなたとは気が合うのよ」

「ふっはははは。その割には、手紙をひとつも寄こさないがな」  
大声で笑うベルゲルミル。

シンマラは無言で、両耳を塞いだ。

「ごっほん。済まない」

「別にいいわ。それはそうと、スルトがここに手紙を送らないのは、ムスペルヘイムに紙がないからよ」

「そ、それもそうだな。あちらでは、紙などすぐに燃えてしまうな」

「まあ、こちらから手紙を送るのは可能よ。後で私が燃えない紙を調達して、ここに持ってくるわね」

「む、それはありがたい」

ベルゲルミルは、シンマラからエイルの持つ剣へ目をやる。

「ふむ。勝利の剣が手に入ったのだ。儂としては、脅威のひとつが消えて満足だ」

「だとしても、アーシルがそれを放置しないわよ」

「確かにそれもそうだ。嚴重に管理したほうがいい気もするが……」

「その剣は生き物よ。今は折笠華葉の傍にあつたほうが、自然と護衛になるはず。かえってそちらのほうが安全だと思っわ」

「ふうむ。いつの間に華葉は、力をつけたのだ？ つい先日まで、か弱い娘であつたのに」

「力の果実を口にして、半日もしてないけど、森の長であるエルザに鍛えられたからよ」

ベルゲルミルはシンマラの話聞いて、何度もうなづいた。

「そうだったのか。ようやっと、腑ふに落ちたぞ」

しかし、別な疑問が生じたらしい。

「待て。あの、あのエルザが？ 儂の知る限りでは、そんな好意的



では……」

「ふふつ。私も驚いたわ」

ふたりの世間話はしばらく続くと思ったのか、エイルが頃合を見て切り出した。

「あの、わたくしはこれで失礼します。ベルゲルミル様、何か報告はありますか？」

「ふむ。華葉も目覚めたら、こちらへ来るようにと伝えてくれ。ただし、無理はさせるなよ」

「承知しました」

頭を下げて、エイルは王の間を退室した。

医務室にて。

「ううう〜んっ」

ウルヴァフが、目を覚ました。

「も〜あさかや〜？」

「いえ、まだ夜中です」

「ん〜？」

身を起こしたウルヴァフは、椅子に座る銀髪の少女を見やる。

「むにゃ」

「え？」

「ふあああああああああつ」

大きなあくび。

「あ、あの」

「ふみい。ちと眠いの〜」

「は、はあ。もうすぐ夜明けですから、もう少し眠っていたほうが」

「ふみゆ〜」

こてん。ウルヴァフは再び横になった。

「はい？」

扉がノックされ、メングラッドは返事をする。

「失礼します」

「エイルでしたか」

彼女は医務室に入るなり、ウルヴァフの様子に気づく。

「あら。その子がどうかありませんか？」

「ついさつき起きたんですよ。どうやら、寝ぼけてるみたいで」

「はあ」

エイルはそれほど驚いてはいない様子。

「エイルこそ、どうしました？」

「いえ、その。ウルヴァフと華葉さんが起きたら、ベルゲルミル様の下へおもむくよう伝言を預かりました。目覚めたら、そのようにお伝え願います」

「はい。それ以外には？」

「ええ。見ての通りです」

メングラッドは、エイルが持っていた黄金の剣に目をやる。

「この剣は、華葉さんのものだそうです」

「え？ ど、どういうこと」

「それが……」

エイルは、これが華葉に渡る経緯を説明した。

「ゲルズを誘拐した犯人が持っていたんですね」

「ええ。反応がないそうなので、もしかしたら華葉さんを持ち主に  
わ」

勝利の剣は、まるで生きてるように宙に浮き、華葉の傍に寄り添った。

「華葉を、守っている？」

「本当に、生き物のようですね」

ふたりは剣を注視する。

「華葉に手を触れても、だいじょうぶでしょうが」

メングラッドは試しに、華葉の胸に手を当ててみる。

しかし、剣に反応はなかった。

「幸い、わたくし達は敵と見なされないようですね」

「そ、そう。でも、華葉の治療に専念しにくいのがちょっと」  
ふたりの会話を聞いているのか、剣はカランと床に転がった。  
それは雨傘と重なっている。

「ほ、ほんとに生き物みたいですね」

「当たり前じゃ。それは生きておる」

メングラッドのつぶやきに、ウルヴァフはそう答えた。

「起きていたのですね」

「あほうが。眠気を覚ますために、目を閉じていただけじゃ。意識はある」

上半身を起こして、ウルヴァフはエイルをにらんだ。

「それは、ドヴェルグがこしらえた生きている剣じゃ。頑丈だし、  
どのような敵にも打ち勝てる強さを持つ」

ウルヴァフはベッドから降りて、勝利の剣を手にした。

「そ、それを奪うつもりですか」

メングラッドはウルヴァフの持つそれをつかみ、彼女とにらめっこをする。

「それはせんよ。フレイの手垢てあかのついたこれを好むなど、考えと  
ない」

「だ、だったら手を放したらどうですか？」

「ふむ」

ウルヴァフは剣をメングラッドに渡した。

メングラッドは、それをぎゅっと抱く。

「もう何も奪ったりはせんよ」

「嘘ですね。あなたは、目の前で華葉を連れ去ったじゃないですか。  
何を信用しろと？」

頭をかいて、ウルヴァフは目線をそらした。

「どのような疑いを持たれようが構わん。おっと、自己紹介が遅れ  
たな。ワシの名はウルヴァフとゆう。そなたは？」

「わ、私はメングラッドです」

エイルは無言でウルヴァフを見つめていた。

「そうか。そなたが、ヨツンヘイムの最高の医師か」

「な、何が言いたいんです？」

「泉の時から気になっていたが、まさか本物だったとは。まあ、ゴ  
ロツキが人質にしようと言っていたいな。ふむふむ」

腕を組んで、ひとりで納得しているウルヴァフ。

ちらりと、ウルヴァフはエイルを見た。

「そ、そちらはエイルです」

「ふむ。ワシはウルヴァフとゆう。初めまして」

「あ、はい。エイルです」

たがいにペコリと頭を下げる。

「それはさておき、身体の調子はどうですか」

「よく寝た。ばっちり動ける」

「でしたら、わたくしについてきてくれませんか」

「ふむ？」

「この主である、ベルゲルミル様がお呼びです」

「さようか。いろいろとやらかしたからな。叱責が飛んでくるやも  
しれん」

言いながら、ウルヴァフはうなだれた。

「下手な真似はなさないように」

「解っておる。む。な、なして手を繋ぐ」

「迷子になられても困りますので」

「わ、ワシは子どもではないぞっ」

頬をふくらませて怒るウルヴァフ。

それは、メングラッドとエイルに微笑みをもたらした。

王の間。

シンマラとの話が途切れたところに、扉がノックされた。

「入れ」

小人用の扉から入ってきたのは、ウルヴァフとエイルだった。

「その小娘は……」

「こちらはウルヴァーフ様です」

その紹介に、ベルゲルミルとシンマラは眉をひそめた。

「エイル。お前は、何を言っている」

「事情はワシが説明する。ベルゲルミル」

「ワシを呼び捨てにするか。いい度胸をしているな」

開いていた扉から、浮遊する杖ふたつが入り込む。

その杖は、ウルヴァーフの背中を守るように浮いて回転している。

「ようやく来たか。これらがないと、ワシは安心できん」

腕を組んで、ウルヴァーフはベルゲルミルの前に立つ。

エイルは扉をゆっくりと閉じた。

「なんだ？ 下らんことを考えているのなら、踏み潰すぞ」

「単刀直入に言おう。ワシはそなたに協力を申し出る」

ひざまずくウルヴァーフ。

「む？ 何をふざけたことを」

「話が前後して済まない。ワシの名は、ウルヴァーフ。ヴァナヘイム

の長であるヴァニアスタルと、副長のグルヴェイグのひとり娘じゃ

それを聞いて、ベルゲルミルとシンマラが目を白黒させる。

「な、なんだと？ ど、どういうことだ」

「ワシはヴァニアスタルの密命みつめいを受け、アースガルズを攻め落とす

材料を集めておる」

「そ、それが儂と何の関係がある」

「今、アーシルとヴァニルは休戦中。おたがいに腹の探り合いが続

いておるのが現状」

ウルヴァーフは淡々と、ベルゲルミルに事を説明する。

「ワシとエイルはヴァニルから脱した裏切り者として通っており

しかし、その実態は長からの密命を受けて活動する間諜かんちやくじゃ。その

目的は、アースガルズを攻め落とすべく、それを望む者に協力する

こと」

「え、エイルが。もしや、つい先日の事件は」

「うむ。ワシがエイルから情報を得て、警備の薄い場所から潜入した。それからエイルに化けて、あれこれと工作したのは事実」

「ほう。そこまで明かすのか」

「ベルゲルミル様。わたくしが助言致しますから、警備を見直したほうがいいですよ」

「むう。エイル、お前も食べん奴だな」

「いえいえ。それはほめ言葉ですよ」

エイルは手を頬に当てて、上品に笑う。

しかし、その笑顔はすぐに曇った。

「ベルゲルミル様。わたくしがヴァニルであることは、メングラッド様は存じません。もし話せば……」

「相解あいわかった。エイルがヴァナヘイムの使者であることは黙っていよう。これまで何度も世話になっておるからな。そなたを追放するな  
どできん」

「心遣い、感謝します」

ほっと胸を撫で下ろし、それから頭を下げるエイル。

「うむ。ウルヴァフよ、どのように協力するのか申せ」

「ワシは、これらの杖でヴァニアスタルと交信しておる。エイルは耳にしたピアスを通じておる。アースガルズに潜伏するスパイから得た情報は、ワシとエイルから流すことができよう」

「なるほど。つまり、これからはエイルが僕に情報をくれるのか」

ベルゲルミルはエイルを見やる。

「はい。ここまで公にしておいてなんですが、わたくしは、メングラッド様がない時にだけ報告します」

「そのほうがいいな。で、メングラッドは今どうしている」

「医務室で華葉さんを診ています。ゲルズは寝ていますから、目を離すわけには参りません。わたくしも華葉さんが心配なので、すぐに戻りたいのですが……」

「そつか。ならすぐに戻ったほうがいい。メングラッドも疲れてい  
よう」

「はい。では、わたくしはこれで失礼します」

エイルは会釈した後、ここを退室した。

「ウルヴァフ」

「ふむ。何かあるのかや？」

「スパイとか言っていたな。それは誰だ？」

「それは黙秘でありんす。知っておるのは、ワシと長ぐらいじゃ」

口を結んで、溜息をつくベルゲルミル。

ひげを指ですいて、新たな疑問をぶつけた。

「ふむ。そういえば、フレイの所持していた剣があったろう。あれ

は、どうしてフレイの手から離れたのだ？ 同じヴァニルだろう？

惜しいとは思わんのか」

「ふつ。フレイはこの上ない患者よ。最強の武器を手に行っているのが、最弱の存在であるならば。自然とそうなるよう、仕向けるのが筋というもの」

「なるほど。策したのだな？」

「うむ」

ほくそ笑むウルヴァフ。

ベルゲルミルは、眼前の少女がただものではないと知って、昂揚している。

「これでもまだワシに罰則を下したいのなら、好きにするがよい」

「ほう？ そのような覚悟でいたのか」

「この城から折笠華葉を連れ出したのは、覆くつがえしようのない事実。エ

イルも一枚噛んでおるしな。その責任は全てワシが取らねばならぬ」

「ふ。別に構わん。僕は子供と女をいたぶる趣味はないのでね」

「む。わ、ワシは子どもではありんせん」

頬をふくらませて怒るウルヴァフを見て、ベルゲルミルは腹を抱えて笑った。

「ふっははははは」

「わ、笑うなっ」

「済まない。そなたが可愛い反応をするのでな。つい笑ってしまっ

た

未だにふくれているウルヴァーフ。  
シンマラムも、おかしくて吹き出していた。

《館・医務室 折笠華葉》

「う、うう」

汗、びっしょり。

「あ、華葉」

「め、メグ？」

わ、びっくりした。

だって目の前に、メグの顔があったから。

「どうしました？ 起きる直前、何かうなされていたようですが」

「だ、だいじょうぶ」

「ここは、メグの館？」

「顔色が優れませんね。はい」

そういつて、メグはハンカチを差し出す。

「あ、ありがとう」

それを受け取り、あたしは顔の汗をふき取る。

「ふう」

身を起こして、あたしは椅子に座るメグを見た。

「おはようございます」

「あ、うん。おはよ」

ふと、メグがあたしを見て首を傾げる。

「華葉。背が伸びましたね。髪も、少し長くなったみたいですし」

「え？ そ、そうかな」

自分では解らないけど、メグから見るとそうなのかな。

「き、気のせいじゃない？」

「なら、ベッドから降りてくれませんか」



「う、うん」

靴を探していたら、メグが足下に置いてくれた。

あ、雨傘もある。拾って杖代わりにしよう。

「ありがとう」

「いえ」

それを履いて、背筋を伸ばす。雨傘を片手に持ち、これで万全。

「やっぱり、少し高くなりましたね」

「そ、そう？」

部屋の中が暗い気がする。

「ねえ、ちよつと暗くない？」

「もうすぐ夜明けですからね。灯石の光を弱めてるんですよ」

机に置いてあるそれは、淡い輝きを放っている。

あたしはそれに近づいて、手を触れた。

「あ、華葉はまた灯石の扱いを……」

「そ、そうだったね」

明るくなれと念じて触っても、反応なんて……ありっ？

ひ、光が強くなった。

「ん。まぶしいわね」

ゲルズの声。

ちよつとだけ光を弱めてあげた。

「あら、ゲルズを起こしてしまいましたか」

「華葉が心配で熟睡なんてできません。って、華葉。起きたんだ」

ゲルズは靴を履いて、こっちへやってくる。

「おはよう」

「うん。おはよ」

「顔色が優れないわね。悪夢でも見た？」

ゲルズも、同じこと言うんだ。

そんなに、今のあたしの顔は変かなあ。

「血が足りないのかもかもしれませんね。それよりも華葉。腹部は痛みませんか」

「え？ な、何も感じないけど」

そういえば、あたしはあの剣に右脇腹を斬られたんだ。シャツのほうは、切れてない。あんなに血を流していたのに、その跡すらないなんて。これが、おばあさんの言ってたエーテルコーティング？ すごい。

ふと、メグの脇にその剣が置いてあった。

「ど、どうかしました？」

「そ、それ」

あたしは恐るおそる、それを指差した。

「それは勝利の剣ですよ」

キィ、バタン。背後からエイルさんの声がした。

「どうしました？ 皆さん」

ぼかんとするあたしたちを見て、エイルさんはいっこりと微笑む。けれども、すぐに表情が曇った。

「あら、華葉さん。顔色が優れませぬ」

それ、三回目。

「そ、そんなに悪い？」

「ええ。何か、栄養を取られたほうがよろしいかと  
エイルさんは手で丸い形を作る。

「り、リンゴ？」

「はい。持ってきて、皮をむきますけど？」

「あ、はい。そういえばちよつと、お腹空いたかも」

「かしこまりました」

エイルさんは医務室から出て、ゆっくりと扉を閉める。

あれ？

なんか、空気が重いんだけど。

「ど、どうしたの？ メグ」

「いえ。何だか、華葉が華葉でないような気がして」

「え、ええ？ あたしは、あたしだよお？」

「それは解っています」

メグは腰を上げて、窓のほうへ寄った。

「もう朝なのですね」

「め、メグ？」

「メングラッド様」

「そつとしておいて」

何か、思い悩んでる。

あたしには、それが何なのか解らない。

「お待たせしました」

しばらくして、エイルさんが戻ってきた。

その手に持つ皿には、リンゴがいくつもある。

「あら？」

エイルさんはすぐに、メグの異変に気づいた。

「ささ、食べましよう。栄養をつけて、元気を取り戻さなくては」

エイルさんはメグに触れずに、あたしとゲルズにリンゴを差し出す。

「う、うん」

「いただきます」

あたしは雨傘をベッドに立てかける。

リンゴをひとつ頬張り、噛み砕くとじゅわっと果汁が溢れる。

「んん〜」

「やっぱり、リンゴはいいわね」

リンゴがなくなるまで、メグはただじっと朝日を見つめていた。

リンゴを食べ終えて、あたしたちは王の間へと歩いている。

その間も、メグは黙ったままだ。

「皆さん。着きましたよ」

「あ、うん」

扉の前でエイルさんが立ち止まり、こちらを振り返る。

その視線は、メグに向けられていた。心配してるのが解るよ。

「おや、ようやく目覚めましたか。安心しましたよ」

「わ」

大きな声。

門の前に立つ巨人さんが、あたしを見つけて一礼した。

「ふむ。顔色が悪いですね。まだ無理をなさらぬように」

「は、はあ」

皆にはどう見えてるんだろう。鏡で自分の顔を見てみたい。

「少し背も伸びたようですね」

「わ、解るのっ？」

そっちからしたら、あたしは豆粒みたいなものなのに。

「ええ。やはり変わられましたね。僕と最初に話をした時、腰を抜かしていたじゃないですか。今はどうでしょう。僕を見ても驚かず、普通に言葉を交わしておられます。華葉さん、たくましくなられましたね」

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ。おっと、エイル様。僕が門を開けましょうか？」

屈んで、あたしたちを見下ろす巨人さん。

「だいじょうぶです。スクラーミル。余計なことをすると、また叱られますよ」

「は」

敬礼して、にこやかに微笑む巨人さん。

「では」

コンコンとノックし、扉を開けてそこに入る。

「おや、エイルか。ん？ 華葉も目覚めたのか」

ベルゲルミルが、あたしたちを出迎えてくれた。

中にはウルヴァフと、シンマラもいる。

「早い目覚めじゃな。もう動けるのか」

ウルヴァフは腕を組んで、あたしのほうへやってくる。

「む？ 顔に覇気がないな。どうしたのかや？」  
もう聞き飽きたよ。

「あら、ほんとね。華葉、どうしたの？」  
シンマラも、あたしを心配してる。

「あ」

あたしはウルヴァアの浮遊する杖を見て、男の人を思い出した。  
「う」

吐き気がして、手で口を押さえる。

「ど、どうなさいました」

エイルさんがあたしを支えて、背中をさすってくれる。

「あ、ありがとう」

あたしは膝をついて、深呼吸を繰り返す。

「まだ無理はできんか」

ウルヴァアが近づこうとした時、メグがあたしの前に立った。

「あなたは何もしないで」

「む？ そうか。まだワシも本調子ではないのでな」

屈んで暖かい光をくれるメグは、よく解らないけど怒ってるみたい。  
い。

「だいじょうぶですか。華葉」

「う、うん」

ほんとに、まだ平気じゃない。

男の人の顔が、声、頭の中に残ってるよ。

「どうした？ 華葉。頭など抱えて、顔が青ざめておるな」

「う、ウルヴァア……」

あたしは救いを求めて、ウルヴァアを見た。

「あなたは何もしないでください」

「そう言っな。メングラッド。華葉を思っのなら、誰の手を借りよ  
うが関係あるまい。重要なのは、華葉の無事であるっ？」

「っ」

メグは悔しそうに、あたしの目の前からどいた。

「どうした？」

「あ、あのね。男の人が……」

あたしはおびえながら、ウルヴァフに抱きついた。

「む。震えて、おるのか」

どうしてだろうか。

あたしは、ウルヴァフなら何とかしてくれると直感してた。

「よもや、呪いでもかけられたか？」

あたしの言いたいことを理解したのか、ウルヴァフは杖を呼ぶ。

「ふうむ。華葉。そなたから呪いを感じられぬ。まだ万全ではないのじゃろう。静養していたほうがよい」

「そ、そだね」

あたしは両手を床について、深呼吸をする。

「ウルヴァフ。華葉に呪いがないのは本当か」

「ベルゲルミル。それは真じゃ。呪いは、ヴァニルの十八番。フレイの従者であるスキルニルも、多少はたしなんでおろう。しかし、そのような痕跡はない」

「そうか。もしあったとしたら」

「案ずるな。ワシなら、呪詛全般を解呪できる。呪詛も解呪も、ヴァニルの得意分野。抜かりはない」

ベルゲルミルのほうを向いて、えっへんと胸を張るウルヴァフ。

「となると、華葉の震えは……まだ血が足りぬからか？」

「うむ。ゆっくり休ませるべきじゃな」

そういつて、ウルヴァフは扉のほうへと歩く。

「どこへ行く？」

「ワシはあの巨人のほうを診に行く。済まないが、エイルとやら。案内してくれぬか」

「かしこまりました」

エイルさんは会釈して、ウルヴァフを連れて外に出る。

「ふっ。期待外れだわ」

シンマラが、あたしの近くに立っていた。

「私を打ち負かした強者が、このような軟弱な精神の持ち主だったなんてね」

「ちよつと、あんた。華葉に対して、何言ってくれてんの！」  
ゲルズがシンマラの襟をつかむ。

「や、やめて」

「け、けど」

「あたしのことはいいの。だって、事実だし……」  
手が、身体が震えてる。

「こ、怖いよ。あたし、男の人を殺しちゃったんだもん」  
メグ、ゲルズ、シンマラ、ベルゲルミルがあたしを見る。

「あたし、どうなるの？ 捕まっちゃうの？ そうして、罰を受けるの？」

「何を、言っている」

「ねえ、ベルゲルミルっ！ あたしは、あたしはどうすればこの罪を償えるの!？」

大声を上げて、あたしは自分が犯したあやまちを振り返る。

「ちよ、懲役何年かなあ？ 刑務所に入れられて、あたしは……あ、少年院だっけ。あたし、あたしは……罪を償わないとしくちやいけないんだよね。あ、あははは」

「か、華葉？ ねえ、しっかりしてよ」

ゲルズが、あたしの両肩をつかんで揺さぶる。

その瞳に見つめられて、あたしは冷静さを取り戻した。

「だいじょうぶ。誰もあなたを裁いたりしないわ」

「え、え？ ほ、ほんとうに……？」

「ああ。儂が許す」

「ゆ、ゆるす……？」

ゲルズとベルゲルミルの言葉に、安堵するあたし。

でも、まだ不安は消えていなかった。

「っ」

シンマラが剣を引き抜き、それをあたしに突きつけた。

「折笠華葉。あなたは、この刃を見て何を思う？」

「え、え？」

「な、何してんの。あんたあ！」

ゲルズが身構える。でも、シンマラの顔を見て腕を下ろした。

「っ」

「そうでしょうね。怖いはずよね。でもあなたは、敵の凶刃を受けてもひるまずにその娘を、ゲルズを救い出した」

刃を引いて、鞘に収めてる。

「確かにあなたは殺人を犯した。犯さざるをえなかった。そうしなければあなたは、自分の生命と、ゲルズという大切な親友を失っていたんだもの。もしかしてあなたは、そうなっていたほうがよかったというの？」

「っ」

そんなわけないっ。

あの時、あたしはそれが嫌だから男の人の頭を踏み潰した。

でも、それ以外にも解決法があったはず。あたしは、その可能性すら自分で潰したんだ。

「あなたはエルザから何を学んだの？ たった一日とはいえ、あなたはエルザの弟子だったのよ？ そんな姿を彼女に見せてみなさい。がっかりすると同時に、鉄拳が飛んでくるわよ」

シンマラはそう吐き捨てて、ここを退室した。

「あたしは、あたしは……」

自分の手が、赤く染まっているような錯覚。

それに驚いて、尻もちをついてしまっ。

「華葉。だいじょうぶですか」

「あ、う、うん」

メグが、あたしの背中をさすってくれる。

ほんとは、だいじょうぶじゃない。涙も鼻水も出てる。うう、テ



イツシュほしいよお。

「華葉。ひとつ聞きたい」

「え？」

「ずずつと鼻水をすすり、あたしは顔を上げる。」

「そなたは、本当にエルザから教えを受けたのか」

「は、はい」

「そうか。あの頑固者が、華葉に」

「ベルゲルミルは、ひげを指ですいている。」

「華葉。お前は自分の行いを悔いておるのか」

「っ」

「そうか。ゲルズを守るためとはいえ、敵を害したことに苦惱しているのだな」

「な、なに？ 何が、何が言いたいの」

「いいや。僕は過去に、それをしなかつたことを悔いておるのさ」

「え……？」

「メグとゲルズも、ベルゲルミルの顔をあおぎ見た。」

「過去に僕は、巨人の始祖であるユーミルがオーディンに倒された時、彼奴を殺してしまおうかと考えた。しかし僕は、自分の家族が危険にさらされるかもしれないと考えて、手を出さなっていた。それがあやまちだった。今でも悔いている」

「あたしは、雨傘を杖代わりにして立ち上がる。」

「ゲルズとメグが心配して支えてくれた。ありがとう。」

「オーディン達はユーミルを解体して、大穴ギンヌンガガブを埋めた。と同時に、ミドガルズやヨツンヘイム、大地に海を創造したのだ。その海ができた時、僕の家族は津波に飲まれて溺死してしまつたのだ」

「手で口を押さえる。」

「メグもゲルズも、びっくりしていた。」

「ベルゲルミルが、大粒の涙をこぼしたからだ。」

「妻に娘が、目の前で死んだのだ。後に、その洪水の原因がオーデ

インにあると知って、僕は怒り狂ってアースガルズに攻め込もうと  
考えた。しかしそれは、あのシンマラが止めたのだ。僕の半身を焦  
がしてまでな」

家族を、目の前で失ったんだ。

もし、もしあたしがあの時、男の人を倒すのをためらっていたら？  
考えたくもない。だってそれは、今日の前にいるベルゲルミルが  
全てだもん。

「僕は甘かったのだ。折笠華葉。お前には、そのような後悔をして  
ほしくない」

甘い、か。

おばあさんも、同じこと言ってたね。

優しさとかさは、違ってた。

「折笠華葉。お前はゲルズを守ってくれた。感謝する」

「で、でも。あたしは、あたしは人を殺したんだ。感謝されるなん  
て、おかしいよ！」

「おかしいかもしれないな。華葉は、罪悪感ざいごかんに苛いらまれてるんだろ  
う？」

「そ、そうだよ」

「ならそれでいい。相手を殺すことに平然としているよりはマシだ。  
エルザから教わったのだから？ 思いやりと理由に満ちた拳は正義  
である。それ以外はただの暴力にすぎない、と」

「え、ベルゲルミルも……？」

「ふ。エルザは僕の母親だ。昔から、耳にたこができるほど聞かさ  
れたよ」

腕を組んで、ベルゲルミルは微笑む。

「あ、あたしは……」

「ん？」

「あたしは、おばあさんから、この力はあたしの正義を表現するも  
のだと教わりました」

握り拳を作り、ベルゲルミルに訴える。

「あの人なら言いそうなことだ」

片目をつむり、顎に手をやるベルゲルミル。

「あたしは、あたしは間違っていたのでしょうか」

「さあな。ただ、シンマラも言っていただろう？ 華葉は、自分とゲルズを失うほうがよかつたのか？」

「そんなの、絶対にやだっ！」

「うむ。それが華葉のあるべき正義だ。守るという行為は、傍から見れば暴力に映るだろう。だとしても迷うな。強さとは、揺らがないことだ。エルザからそう教わっただろう？」

揺らがない、こと？

直接はそう言われてないけど、ベルゲルミルの言うことはおばあさんと似てる。

迷っちゃいけない。

相手を正そうとしても、それが受け入れられないのなら。最悪な事態を避ける方法が、それしかないのなら。

あたしは、自分と皆を守るためなら、迷わずにこの力を振るうよ。

「華葉。お前はタンポポが好きか？」

「ぶ」

「おや、エルザはタンポポの栽培を続けているのか」

「え？」

「エルザは、タンポポの花が好きなんだよ。開花し、いつか綿帽子を風に散らす。まるで女性のようだと常々言っていた」

「そ、そうなんだ」

「花自体は母親で、綿帽子が子供だったか。たくさん綿帽子を飛ばして、まっすぐに立つ残された茎を見ていると……まだ自分は枯れていないのだと、強く思える。エルザはそんなことを口にしていたよ」

「へえ、あのおばあさん。お花が好きなのね。だったら悪い人じゃないわ」

それを聞いて、うんうんとうなづくゲルズ。にっこり微笑んでる。

「ふむ？ 何か、エルザがしでかしたのか？」

「ああ、いえ。ちょっと口の悪いおばあさんだなあと思っただけです」

「ははははっ。口が悪いと思ったただけなら、まだマシなほうだ。儂なんか、あの鉄拳に何度泣かされたことか。手癖が悪いったらありやしない」

昔を懐かしむベルゲルミル。

「ここにいる巨人も、エルザの拳にはおびえていたよ。何せ、巨人だから不注意でタンポポを踏んでしまう。そうになると、エルザの制裁が待っているからな。エルザが隠居してからというもの、気が緩んでいる感じがするな。やはり、エルザにはここにいてもらったほうがいいのかもしれん」

ガタンツ。門の外で物音がした。

「ふ。スクラーミルは、エルザの来訪が嫌と見える」

ベルゲルミルは、それだけで読み取れたらしい。

「まあ、冗談だ。そのスクラーミルは、儂と同様にエルザによく可愛がられた。いい思い出だよなあ？」

腕を組んで、苦笑いをしている。

多分、あの巨人さんもそうしてるかも、ねっ。

## 第6話

### 《館・借り部屋 折笠華葉》

館の部屋に戻って、もう一眠りしようかと思ったあたし。

ふと、テーブルにたたまれてる水玉エプロンを見つけ、それを手にしてる。

「あ、手紙だ」

その脇には水筒と財布と手紙があつた。手紙は誰からのだろう。

「小人さんから？」

水筒を手にして、あたしはそれのふたを外す。

ゴクツと一口。

「あ、冷たくておいしい」

アイスティーだ。

ふたを締めた水筒を置いて、あたしは手紙を広げる。

「に、日本語じゃない」

それも当然だよな。

でも、どうしてか読める。知恵の泉のおかげかなあ。

「ガキんちよへ。」

アマガサは修繕しておいたぜ。ついでに補強きんじょうしといた。

金属はオリハルコン。

布はグレイプニルのあまりを編んで被せてある。

持ち手の部分は、ユグドラシルの枝を加工している。

どれにも妖精の涙の粉末を浸透させているからな。

どのような攻撃にも耐えうる堅固なものになっているはずだぜ。

後、布は風切り布の特性がある。剣として振り回せば、風の刃を

飛ばせる。

ま、気術きじゆを使えるなら気刃きじんも飛ばせるぜ。できっこねえと思うがな。

最後にひとつ。

武器は究極に言えば、敵を屠るもんだ。防具は、究極に言えば自分を守るもんだ。

てめえがどう使おうが、オレっちには関係ない。ただ、道具には魂が宿るもんだ。それに嫌われないように精進しろよ』

読み終えて、感想はひとつ。

「名前、そういえば聞いてなかった。これにも書いてないしっ」  
てか、材料を公開されても、あたしには何がなんだか解んないよっ。すごそうではあるけど。

ゴトツ。あたしはテーブルの上に雨傘を置いた。

「そ、そんなにすごいのかなあ」

ぶっちやけ、見た目は前と変わらない。

ただ、実際使ってみて、とても頑丈なのは知った。

「ふあああああああ」

まあいいや。とにかく昼まで寝よう。

メグが起こしに来てくれるしね。

### 《ガストロプニル》

「はあ」

その隣の医務室にて。

「どうかなされました？ メングラッド様」

溜息をつくメングラッド。

エイルが心配そうに話しかけるも、浮かない顔のままだ。

「ゲルズ」

「はい？」

ベッドで再び眠ろうとしたゲルズは、呼びかけられて身を起こす。

「華葉は、本当に元の世界に帰りたいと言っていたのですか？」

その質問で、ふたりはメングラッドが何を心配しているのかを察

した。

「え、ええ」

「そうですね」

椅子に腰を下ろし、メングラッドは物想いに沈んでいる。

「あ、エイルさん。あたくしは部屋で寝ます」

「はい。ごゆっくり」

ゲルズはベッドから出て、靴を履いてそそくさと医務室を出る。

それを見送って、エイルは改めてメングラッドのほうを見た。

「メングラッド様。おやすみになったほうがいいですよ」

「そ、そうですね。私も、部屋で休みます。今日の晩餐ばんさんは、ウアンティレズドの第一王女、セネアと一緒にですものね」

「あら？ 初耳ですね。いつ手紙が届いたのですか？」

「ついさっきです。エイル、その件についてベルゲルミルに報告しておいてください」

「昨日からいそがしいですね。まあ、そういうのは嫌いではありませんせん」

「そう。じゃあ、お願いね」

「はい」

「なんだ、エイルか」

王の間に入室したエイルを見て、ベルゲルミルは嘆息たんそくする。

「今日で何回目でしょうか」

「数えんでいい。して、どうした」

「ウアンティレズドから返事がありました。今日の晩餐に、第一王女のセネア様が顔を見せるそうですね」

「随分と急だな。いや、呼び出したこちらもそうだしな。よし、晩餐の準備に取りかかってくれ」

「多忙ですね。少し休みたいですよ」

肩を叩く動作をして、エイルはベルゲルミルを見る。

「ふむ。そうか。しばらく休んでもいいぞ」

「そうになると、わたくしが目覚めるまでの間、医師がいなくなりま  
すね」

「ウルヴァフがいただろう?」

「あら、彼女はどちらに?」

「スクラーミルから聞いたが、ウルヴァフはフィヨルスヴィドにつ  
きつきりだそうだ。こちらに来たら、昼まで代理を頼むと伝えてお  
こう」

「はい」

「はつくしゅん」

巨人ひとりが縦や横になっても、まだまだ広い建物の中にウルヴ  
アフがいた。

ここはガストロプニル内で、巨人族が使う訓練所。  
フィヨルスヴィドが、ここで横になっているのだ。

「おやあ、風邪かあい?」

ウルヴァフはフィヨルスヴィドの傍であぐらをかいて、彼を診て  
いる。

「誰かが噂しとるのじゃろうて」

鼻の下を指でこすり、ウルヴァフは闘技場のほうを振り返る。

「熱心に鍛練しておるなあ」

「そうだなあ。皆は、もうオイラより強いんじゃないかあ?」

大きな窓から見えるのは、練習試合をする巨人兵達。

「差があるのならば、詰めればよいだけの話」

「そうだなあ。オイラ、このケガを治したら頑張るぞあ」

「うむ。さて、ワシは医務室のほうで仮眠させてもらうか」

「それがいいぞあ。ありがとうなあ。オイラの世話をしてくれて」

「あまり無理はしないことじゃ。昼にまた来るから、静養するのじ  
やぞ」



「おお」

ここを退室するウルヴァフ。

この後、彼女は王の間で、ベルゲルミルから嫌なことを告げられた。

ガストロプニルの南。

東西どちらかの石橋を渡り、辿り着く島国。

その名は、石の都ウァンティレズド。

ここは西区と東区で分けられており、島の中央には石の宮殿が立つ。

主な産物は、石や金属、特に宝石が目立つ。

また魔石などのパワーストーンが産出されており、灯石もその一種だ。

そうした貴重な産物が海賊に奪われないよう、巨人の精鋭が島を防衛している。

巨人は海を闊歩<sup>かつほ</sup>し、島の外から不審な船がやってこないよう見張っているのだ。

また巨人は漁師の補助もし、魚などを協力して獲っている。

「ふう。確か、ここだったわね」

朝日が顔を出して間もない時間に。

白髪の褐色の女性　シンマラは、東区の路地裏にある骨とう品店の前に立っていた。

前髪を手でかき上げて、奇妙な飾りつけがされた店に入る。

「いらつしや〜い」

中の照明は、ろうそくに火が灯されているだけ。

まだ昼前だというのに、この暗さは不気味だ。

ただ、シンマラはこの雰囲気は何となく好きだった。

「おじいさん」

「おや」

シンマラと老人は、たがいの顔を見てうなづく。

「何か、必要なものでもできたのかい？」

独特な口調で話すこの老人は、白ひげをたくわえている。

杖を持つてはいるが、それを床についてはいない。まるでお手玉をするかのように、両手で投げて遊んでいる。

「浮遊する杖で遊ばないで。ある子どもを思い出すわ」

「ふむむ？」

奇妙に思いながらも、おじいさんは杖を両手でつかんだ。

「まよよろし。して、何をお求めで？」

あちこちを見回して、シンマラは顎に手をやる。

この店に陳列されているのは、どれもこれも奇怪な物ばかり。

「燃えない紙と蒸発しないインク。紙は大きいのを頼めるかしら」

「おーおー。あるにはあるが、値は張りますぜ」

「構わないわ。それで、いくらなの？」

「金貨五枚はいただきますぜ」

財布を胸元から出そうとしたシンマラは、しゅんじゅん 逡巡した。

「おや、足りな〜いと見え〜る」

意地の悪い老人は、シンマラの表情を見逃さなかった。

「本当に燃えないかどうか、確かめたいんだけど？」

シンマラは脅しもかねて、両手に炎を灯した。

「お〜。構いませんぞ〜」

嬉々として老人は、手品のように紙を出し、それをシンマラに手渡す。

それを受け取り、青い炎で焦がそうとする。が、その紙は燃え尽きなかった。

「なるほど。して、蒸発しないインクは？」

「ほ〜れ」

炎を消して、小瓶を受け取るシンマラ。

試しに一滴手の平に垂らして、青い炎で温める。が、インクは消えることはなかった。

「解ったわ。ちょっと待って」

シンマラは財布を取り出し、中から金貨四枚と銀貨九枚を手渡す。  
「やっぱり足りないわね」

「ん？ おや、まだ銀貨が一枚あゝるじゃなゝいか」

「これはダメよ」

シンマラはおじいさんが手にした、真つ二つの銀貨を取り戻す。

「これは、あるおばあさんがある少女に渡したお守りなのよ」

「しっかし、どゝして切断されているんで？」

「この銀貨は、その少女に襲いかかった凶刃を受けて、こゝうなつてしまったのよ。これがあつたおかげで、少女は助かった。そういう逸話があるのよ」

「ほゝお？ なら、それはもらえませんなあ。特別に、これだけでよろしいですぞゝ」

「あら、いいの？」

老人はシンマラに金貨一枚を返した。

「馴染みの客だからのう。まけときやすよゝ」

「ありがとう。また何か必要になったら、ここに来るわ」

「へゝへ。まいどありゝ」

「最後にひとつ。早くエルザと仲直りしたら？」

《館・借り部屋 折笠華葉》

「うゝん」

よ、よゝく寝たゝ。

伸びをして、身を起こす。

「あゝ、お腹空いたつ」

大声でひとり言を口走ると同時に、扉がノックされた。

「華葉？ どうしたの。何か、声が聞こえたけど」

「あ、な、なんでもないっ」

は、恥ずかしいつ。

「てか、ゲルズ。どうしたの？」

「もうお昼よ」

「あれ。メグが起こしに来るんじゃない？」

「……………」

無言。ゲルズは静かに扉を閉めて、あたしが寝てるベッドに歩み寄る。

「ねえ、華葉。ムスペル Heim に旅立つなら、急いだほうがいいわよ」

「え？ ど、どうして？」

「メングラッド様が、華葉が旅立つことを嫌がってるの」

「あ。そ、そっか。だから、様子がおかしかったんだ」

「ええ。荷物は早くまとめて、秘密裏に支度を進めましょう」

「は、はあ」

もう少し、お話してからとか。メグを説得するとか、そういうのは出てこないの？

「メングラッド様は、結構頑固だからね。言い出したら聞かないの。華葉が旅立つと知ったら、断固として止めに來るわよ」

そ、それは嫌かも。

でも、さみしい思いをさせたくない。

「ベルゲルミル様にも報告してある。でも、旅立つ前に話したいそうだから。ガストロプニルを出るなら、必ず王の間に行つてね」

どうしてか、ひそひそ話をするゲルズ。

ふと、扉がノックされた。

「華葉？」

あ、メグだ。

心配がしたなら、早く言ってよ。

「よかった。元気そうで」

にこにこしながら、メグはあたしの傍に寄り添う。

「ど、どしたの？」

「お昼ですよ。ささ、ゲルズも一緒に」  
あたしとゲルズはメグに誘われて、食堂で昼食を取ることにした。

《ガストロプニル・王の間》

「ん？」

扉がノックされ、玉座で寝入っていたベルゲルミルは目を覚ます。

「あら、これは失礼。お昼寝中だったかしら」

小人用の扉を開けて入ってきたのは、シンマラだった。

「いいや。ここでは碌ろくに寝れん。部屋に戻ろうかと思っていたんだ」

「それで、ついうとうと？」

「ああ。して、シンマラ。何の用だ」

聞かれて、シンマラは紙袋から小瓶のインクを取り出す。

「それは、インクか。して、それが何だと言う」

「忘れたの？ 燃えない紙と蒸発しないインクよ」

「なに？ 姿が見えないと思ったら、ウァンティレズドに買い出しに行っていたのか」

「ええ。あの店は、早朝から昼までしかやってないからね」

「なるほど。親父は、まだあんなところで悪趣味な店を開いているのか」

「あなたからも説得したら？」

「無理だ。あんな狭せまいところに、儂が行けるはずなかるう」

ふたりして、肩をすくめる。

「親父は元気だったか？」

「ええ。まだ魔術の腕は衰えてないわ。体術のほうも、まだまだ現役みたい」

「それもそうだろう。親父は、変化と小人化の術が得意だ。それを駆使して集めた物品は、出所は怪しいが、質は確かだ。金銭なら、儂が負担する。いくらだった？」

「金貨三枚と銀貨九枚ね。金貨一枚はまけてくれたわ」  
「なら、金貨五枚でいいな」  
「いえ。銀貨を多めにちょうだい。金貨は不足分だけでいいわ」  
「む？ どうしたんだ」  
「あなたのお父様に、銀貨をほとんど取られちゃってね。中身が金だけというのは、私的に好ましくないのよ」  
「そうか。その門番、スクラーミルに言ってくれ。そいつが小金を持っていて」  
「あら。ここを出る際に言っておくわ」  
「ああ。どうせ聞こえておるだろうしな」  
ふたりは同時に微笑んだ。

《館・食堂 折笠華葉》

食堂であたしは水玉エプロンを身につけて、味噌汁を作っていた。  
「これが、味噌汁なんですか」  
「うむ。うまそうじゃのう」  
エイルさんとウルヴァフは、目を輝かせている。  
あたしのいた日本では、普通にありふれたものだけど。ここでは珍しいんだね。  
うしつ。とりあえず完成したぞう。  
「はい。じゃあ配ぜんを手伝って」  
「ええ」  
「うむ」  
ふたりはやる気だ。  
ひしゃくで木製のお椀によそって、ふたりに手渡す。  
受け取ったふたりはメグにゲルズ、ギフが率いるワンちゃん軍団へとそれを配る。

ワンちゃんの数が多くて、残ってた味噌を全部使っちゃったよ。

「あら？ おいしそうな匂いがするんだけど」

「ありゃ？ 食堂の出入口にいるの、シンマラ？」

「む、ひとり増えたか」

「途端に嫌そうな顔をするウルヴァフ。」

「華葉。まだそれはあるのかや？」

「あるにはあるよ。でも、おかわりはできないかもね」

「言っと、ウルヴァフはがっくりとうなだれる。」

「あら、私の分もあるのね？」

「いつの間にかこちらに来てたシンマラは、あたしを見てにっこりと笑う。」

「うん。シンマラも席へどうぞ」

「ありがとう」

「あたしとエイルさん、ウルヴァフにシンマラの分をよそる。」

「それらを盆に乗せて、配ぜんを終えた。」

「もう空っぽです。皆、ちゃんと味わって食べてね」

「エプロンを脱いで、たたんで背もたれにかけておく。」

「あたしが席に着くと、皆はパンツと手を合わせて。」

「いただきます」  
をした。

「食事を終えて、あたしたちは医務室へ戻った。」

「んや。ワシはちと眠る」

「あ、うん。おやすみ」

「ウルヴァフはかなり疲れているらしく、ベッドで横になった。」

「わたくしが仮眠している間、気を張っていましたがからね」

「どうやら、メグとエイルさんが仮眠をしている間、ウルヴァフは  
ふたりの代理として奔走ほんそうしていたらしい。」

「ふと、メグがあたしを手招きする。」

「ど、どしたの？」

「華葉。華葉も、今日の晩餐会に出席しませんか？」

「へっ？」

「ば、ばんさんかい？」

「メングラッド様は、ウアンティレズド王国の第一王女、セネア様と晩に会食するのです」

「あ、ああ、そう」

「エイルさんに説明されて、ようやく納得。」

「あ、あたしは遠慮しておくよ。そういう場合は、なんだか落ち着かないしね」

「そうですね。残念です」

「本当に残念そうだ。断らないほうがよかったかなあ。」

「こういう時、ゲルズがいると助かるんだけどね。」

「そのゲルズはここにはいない。隣の部屋で、シンマラと一緒にあたしの旅支度を整えている。」

「ふう」

「置き手紙、書いたほうがいいかな。」

「皆はあたしがここを旅立つことを応援しているみたいだけど、メグのことが心配だ。」

「なるべく、事を穏便に。」

「でもそれが無理そうだから、皆はメグに隠し事してるんだよね。」

「どうしました？」

「うっん」

「嘘をつくのには苦手だ。」

「顔に出そうだから、話していたほうがいいかも。」

「てか、ウルヴァフ」

「んみゃ？」

「あたしに、自息法を覚えてくれるんじゃないの？」

「むう。今は眠い。頼むから寝かせてたもれ」

「ああ、そう。」



「華葉。どうして、自息法を学ぼうと？」

あ、しまった。

「えっと、うん。その……」

ど、どう説明したらいいんだろ。

「私とやりあった時に、呼吸困難に陥ったからよ」

う、だ、だれ？

「シンマラ。華葉が、あなたと？」

「ええ。灼熱の環境では、自身を保護する自息法がないと危険だわ。でもまあ、意識を失う前に私を倒したんだもの。恐ろしい強さだわ」

「あ、あはは」

本当は違うんだけどね。シンマラは、嘘をついてこの場をしのいでくれた。

「一応、私も自息法はできるから。教えて差し上げましょうか？」

「む。ワシの立場がなくなるのう」

「あなたは寝てるだけじゃない。簡潔に、方法だけ教えたら？」

「そうじゃな。華葉」

「ん？」

シンマラに刺激されて、ウルヴァーフは身を起こす。

「自息法とは、自身の肉体を気で守りつつ、体内電気を増幅して、自身の体内と大気中にある水分を酸素と水素に分解するのじゃ。あの老婆、エルザからも聞いておつたろう」

「は、はあ」

いや、その。ちんぷんかんぷんなんだけどっ。

「では、おやすみ」

「え」

ウルヴァーフは説明だけした後、また横になってしまう。

「まあ、実際にそれだけでできるはずないわね」

シンマラは肩をすくめている。

「えっと、とりあえず電気を発生させればいいの？」

「体内電気を増幅するのは、言うほど簡単じゃないわよ」

「はあ」

「それに、ここでやらないほうがいいわ。やるんだったら、お風呂場のほうがよろしくてよ」

ふと、メグが不満そうにあたしをにらんでる。

「華葉は、自息法を学んでどうするつもりですか？」

「へ？ ああ、海に沈んだ財宝とかを引き上げるの」

「ぎ、財宝？」

「うん。だって、それぐらいの恩返ししないと失礼じゃん。城の皆には、本当にお世話になってばかりだもん。自分ができることを全力でやって」

しまった。言ってるこれはどうかと思ったよ。

「……………」

メグは、何か察したのか黙っている。

「嘘、ですよね？」

「え？」

「華葉は、どこにも行きませんか？」

祈るような仕草で、メグは涙目であたしを見つめる。

「ど、どこにも行かないよ」

「本当、ですか？」

「う、うん」

ごめんね。嘘ついて。

「そっいえばさ、メグ」

「はい？」

「水筒のお茶だけど、メグが入れてくれたの？」

「ええ。あ、あの紅茶は気に入りませんでしたか？」

「ううん。とってもおいしかったよ。まだ全部飲んでないけどさ」

「ふふつ。じゃあ、また入れてあげますね」

満面の笑顔で、メグは

「じゃあ、エイル。私は部屋でドレスを選びます。共に来てくれませんか」

「はい」  
今夜着る服を選びに、自分の部屋に戻った。

「危なかったわね」

「え？」

「あつと、あんまり口にしないほうがいいわよ」

医務室には、あたしとシンマラ、寝ているウルヴァフのみ。

シンマラは溜息をついて、あたしの肩を軽く叩いた。

「それより、華葉はいつここを出るの？」

「うん。自息法を体得しないと、どうにも」

「そうね。じゃあ軽く、やってみたら？」

「いや、あの。ここでやるなって言いませんでしたか？」

「そうだけでも、いきなり成功するはずないでしょ。こづいづのはイメージが大事な。イメージが、ね」

シンマラって、陽気で前向きな人だなあ。

「は、はい」

まずは、体内電気を増幅するんだよね。

目を閉じて、イメージする。

自分の全身から、電気が発生するようなイメージを。

「な」

「む？」

シンマラとウルヴァフの声がした。

「ど、どしたの？」

パチリ。目を開けて、あたしはシンマラを見る。

「華葉。あなた、身体が熱くない？」

「はあ？ そう言われてみれば、ぽかぽかするよ。まるでお風呂に入ってる感じ」

「場所を変えましょう。とりあえず、風呂場で試したほうがいいわ」  
「は、はい」

な、なに？ ふたりは、何を見たのっ？

シンマラに連れられて、あたしは館の風呂場に来ている。

「さあ、どうぞ」

ただ、どうしてかウルヴァーフも起きてここにいるんだよね。

「ウルヴァーフ。疲れてるんじゃないの？」

「吹っ飛んだ」

「は？」

「ワシのことはよい。華葉、まずはやってみんしゃい」

腕を組んで、脱衣所のほうから観察してるウルヴァーフ。

「うん」

目を開けたまま、あたしは強くイメージする。

「わわっ」

「発電を、もう」

「華葉。後はそれを目に見えない程度に抑えなさい」

「あ、はい。解りました」

自分の身体に電流が帯びるイメージをした。

「で、できておるじゃと？」

「華葉。もしかしてあなた、エルザから自息法を」

「教わってないよっ！ 大体、おばあさんはできないって言ってた

じゃんかっ

「だって、エルザだもの。たまに嘘をつくのよね、あの人は」

シンマラは目を細めて、疑いの眼差しをあたしに向ける。

「まあ、それはよいではないか。次に華葉。周囲の空気を、大気を

自身に渦巻かせるようにするのじゃ」

「あ、うん」

空気を、自分を中心に渦巻かせる、ね。

「もう驚くのも飽きたわい。後はそれを穏やかなものにし、帯びた電流で少しずつ暖める感じでやるんじゃ」

「解った」

「それから深呼吸なさい。できたてのおいしい空気が吸えるわよ」  
言われた通りにやると、冷たくて新鮮な空気が食べられる。  
食べられるって表現はおかしいけど、とにかくおいしい。

身体中に、力がみなぎってくる感じた。

「ただ、過度にやるなよ。自身の水分も消費するゆえ、下手をする  
とめまいを起こす」

「そ、そっか。注意するね」

ふたりの指導のおかげで、自息法をどうにかものにできた。

「こんな短期間で、いとも簡単に。く、悔しい気もするな」

「ええ。私ですら、半年もかかったというのに。恐ろしい成長の速  
さだわ」

ふたりは、ジト目であたしに抗議してくる。

「あ、ありがとう」

と、とりあえず礼は言っておく。

「うむ」

「これで準備は整ったわね。早すぎる気もするけど」

まだ言つの、シンマラ。

「じゃあ、あたしはちよつとベルゲルミルのところへ行くよ」

「そっか。ならワシは医務室で寝よう」

「ふう。私も、少しベルゲルミルに話しておきたいことがあるしね。  
華葉に付き合っわ」

王の間。

の前にある、門に立つあたしとシンマラ。

「おや、どうかなされましたか」

「別に、もうあなたに用事はないわ」

「さ、さようございませうか」

門番の巨人さんとシンマラ。ふたりに何があったんだろう。

「華葉さん。ひとりでここに来れるようになりましたか」

「あの、あたしをバカにしてません？」

「そのようなことは」

微笑む巨人さん。

「ごっほん」

咳払いして、あたしは扉をノックする。

開けようとしたら、中からゲルズが出てきた。

「どうぞ。華葉」

「あ、う、うん」

「失礼するわね」

ゲルズに誘われて、王の間に入るあたしたち。

「おや、華葉か」

扉を閉めて、あたしはベルゲルミルの前に立つ。

「てか、どうしてゲルズがここに？」

話をする前に、あたしはゲルズに疑問をぶつけた。

「華葉の部屋に荷物があると、メングラッド様に気取られるからよ」

と、ゲルズは端っこのほうを指差す。

あ、あれは木箱だ。あたしの私物を収納してたやつだね。

「あの中に隠しておいたから。必要になったら取り出すといいわ」

「うん。ありがとう」

ペコリと会釈して、ゲルズにお礼を言う。

「や、やめてよ。照れるじゃない」

頬を赤くして、そっぽ向くゲルズ。うん、可愛いかもつ。

「華葉。もうここを出るのか？」

「そんな性急な。皆して、あたしを追い出したいの？」

「む。そうではないが、メングラッドに嗅ぎつけられるやもしれん」

もうすでに、危ないと思うけどねっ。

「して、そのメングラッドは？」

「エイルさんと一緒に、部屋でドレスを選んでるよ」

「ああ、晩餐会のか？ 別にそこまでめかす必要は……」

何かを言いかけて、ベルゲルミルは「ごほんっ」と咳払いする。  
「なるほど」

シンマラは腕を組んで、何かを察した様子。

「えっと、とりあえず荷物を確認するね」

「どうぞ」

ゲルズに導かれ、あたしは木箱の中にある大きな袋を見つけた。

「これ？」

「うん。開けてみて」

広げて、中をのぞく。

水筒、財布。

あ、懐中時計。見当たらないと思ったら、ここにあっただ。

他には、灯石、地図、それぐらいだった。

「華葉のカサとか、勝利の剣は持ち出すと不審に思われるからね。  
今は部屋に置いてあるわ」

「そ、そう」

「必要なものがあれば、あたくしが用意するわよ」

「え？ そ、そんなにはいらないよ」

手を振って、やんわりと断っておく。

「あ、エイルさんが念のためにつて薬を用意してたんだった。メン  
グランド様と調合したらしくてね。効果は抜群ばっけんみたいよ」

「は、はあ」

「ん〜？ ちょっと様子が変よ？ どうしたの」

「やっぱり、あたしを追い出そうとしてない？」

改めて言つと、皆は苦笑い。

「あ、ご、ごめん。皆は親切でやってるのに」

「そう思われても仕方ないわよね。はあ。ごめんなさい  
ゲルズが頭を下げる。

「あ、謝らないでよっ」

そんなことされると、逆に困る。

「ふむ。華葉にひとつ聞きたいのだが、いいか？」

ベルゲルミルが、指でひげをすきながら聞く。

「はい？」

「お前のいた場所とは、どのようなところなのだ」

「前に、日本って言ったはずだけど」

「にほん？ それは国が」

「う、うん。島国です」

「どのようなところなのか、儂には想像できんが。その、にほんには強者がうようよいるのか？」

「は？」

「現に、目の前にいるからな」

あ、あたしのことっ？

「そつだ」

「そ、そんなことないよ」

「ふむ。潜在的に戦士の素養がある、ということか？」

「せ、戦士つて。あ、侍魂とか大和魂とかは聞いたことあるけど」

「さむらい？ やまと？ にほんには、儂らの常識を超えたものがあるのだな」

何を言っても、変なふうに解釈されそつだ。

「儂としては家族のひとりを送り出すのは不本意だ。しかし、華葉が強く望むのなら見送らねばならぬ」

「家族の、ひとり？ あたしが？」

「そつだ。その華葉にも、両親がいるだろう。その者達を心配させてはならん」

ベルゲルミルの話を遮り、シンマラがこんな疑問を口にする。

「今更だけでも。華葉が別世界の住人なら、どうしてこちらの世界に？ 華葉、あなたはこちらに来る前に何かしたの？」

「そ、それはあたしに聞かれても。さつぱり解らないんだよ。あたしは眠っている間に、こつちに引き込まれちゃったみたいだし」

「なるほど。原因を究明しようにも、記憶がないのね」

シンマラは腕を組んで、何か考えている。



「妙な胸騒ぎがするわ」

「え？」

「ああ、なんでもないわ。華葉、とにかくあなたはここを出て、ムスペルヘイムへ向かうこと。その道中、私も同行させてもらうわ」  
意外な申し出だった。

「もうそろそろ帰って、スルトに接吻せつぶんしてあげないとね。あの人、さびしがり屋だから」

頬に手を当てて、照れながら言うシンマラ。

「むう。見せつけてくれるな」

「だったら、あなたも再婚したら？ ベルゲルミル」

「食えん女だな」

「うふふっ。ありがとう」

シンマラは手を胸元に置いて、深呼吸をしている。

「どうしたのよ？ シンマラ」

「え？ ああ、さっき言った胸騒ぎが消えなくてね」

冷や汗をかいたのか、シンマラは身体に巻きつく赤い布でそれをふく。

「またいつもの直感か？」

「ええ。生まれつきだからね」

「そうだったな」

ベルゲルミルとシンマラは、あたしたちには解らないやりとりをする。

「うむ。華葉」

「はい？」

ベルゲルミルが、あたしを呼んだ。

「そなたにひとつ、頼みがある」

「頼み、とは？」

「うむ。ムスペルヘイムのスルトに、手紙を届けてほしいのだ」

「手紙、を？」

「そうだ。ちと大きいけど、燃えたりしないから余計な心配はしなく

ていい。華葉なら容易に運べるだろう」

「郵便屋さんを、あたしにやれって言うんだね」

「うむ。かさばるのなら、断ってもいいぞ。届ける手段は他にもあるからな」

そういつて、ベルゲルミルはちらつとシンマラを見た。

「ううん。やらせてもらうよ。ベルゲルミルにもお世話になってばかりだし。それぐらいは引き受けるよ」

「そうか。ありがたい」

ベルゲルミルは懐から出した封筒を、木箱の上に置いた。

あれじゃ、木箱の中身を確かめるのが難しくなるね。

「ベルゲルミル。メングラッド様に中をのぞかれないように配慮したのね」

「ん？ ああ、別にそういう意図はなかったんだが。まあ、よしとしよう」

指でひげをすいて、うんうんとうなづいてる。

「さて、もうそろそろ館に戻れ。あまり長いこと留守にしているとメングラッドが心配するぞ」

「そ、そうだね」

「あたくしも、ボ口を出さないように気をつけなくちゃ」

「ええ、その通りね」

ベルゲルミルにあいさつして、あたしとゲルズとシンマラは館のほうへ戻った。

館の医務室に戻ると、そこには。

「あ、華葉」

「め、メグっ？」

とつてもキレイなドレスに着替えた、メグがいた。

「に、似合うかしら？」

純白のそれは、ウェディングドレスみたい。

「食事をするには、ちょっと派手ですよね？」

「そ、そうかも。でも、キレイだよ」

「え、えっ？ て、照れるじゃないですかっ」

メグは手を振って、エイルさんの肩を叩く。

「確かに派手かもしれないですね。違うものをお召しになりますか？」

「うん。そうですね。エイル、もう一度お願いします」

「はい」

にこにこ笑顔で、メグとエイルさんはここを退室した。

「ほえ」

「ど、どうしたの？」

「あ、うん。メグって、本当に白が似合うよね」

「うん。あたくしもそう思うわ」

あたしとゲルズは感心している。

ふと、シンマラだけ様子がおかしい。

彼女は近くにあつた椅子に腰を下ろして、浮かない顔で天井をおぎ見た。

「ど、どうしたの？ シンマラ」

「……………」

何か、心配事があるのかな。

「嫌な感じだわ。この胸騒ぎは……………」

「まだ言ってるの？ しつこいわよ」

ゲルズは眉をひそめて、シンマラの前に立つ。

「っ」

あたしも、何かを感じ取ってある方向を見る。

「華葉？ ど、どしたの？」

「え？ いや、その」

シンマラは、あたしの顔を見て確信を得たようだ。

「私は、ちよっと出かけるわ」

おもむろに立ち上がるシンマラ。

「で、出かける？ どこによ」

「南にある、ウァンティレズドよ」  
シンマラが指差した方角は、偶然なのか。  
あたしが直感的に見やった方角と、一致していた。

《石の都ウァンティレズド・噴水広場》

夕暮れ前、人が大勢行き交っている。  
石の都ウァンティレズド東区にある噴水広場に、シンマラは立っ  
ていた。

ガストロプニルからここまで走ってきたのだ。

「あら？」

「む？」

石畳をつついてサンダルを整えた後。

前髪を手でかき上げ、シンマラは目の前にいる少女を見据える。

「シンマラ、どうしてここにおる？」

まるでおばあさんのようなしゃべり方をする、すみれ菫の長髪の少女。

朱色のワンピースにサンダルを履き、菫色の外套を羽織っている。

「いつものあれはしてないの？」

「反物のことか？ あれは置いてきた。ちいとばかり面倒が起きて  
な」

「そう。誰か、連れでもいるのかしら？」

「む。どうして解る？」

「何となく、よ」

「相も変わらず、直感はよろしいな」

「ほめ言葉をありがとう」

シンマラはその少女の横を通り過ぎ、振り返らずに足を止めて話  
しかけた。

「アルトレイマ。ここで何か、起こるのかしら」

「ぶっ」

「あら、夢で見通したのね。でない、ここにいるのも不自然だし」  
「そなたも、な」

「私は直感で生きてるからね」

「なら、気をつける。近くに、フレイヤとウルがいる」

「フレイヤに、ウルね。前者はいいとして。どうして、狩猟の神の坊やが？」

「さあ、な。今のところは、フレイヤを監視しておるようじゃ。下手に近づくなよ。事が起きると、わらわが苦勞する」

「肝に銘じておきましょう。さて、私はこれからある店へ向かうわ」  
「ベルゲルミルの父親に会いに行くのか」

「ええ。少なからず、避難は促しておかないとね」

ふたりは、背中を向けたまま離れていった。

《ガストロプニル・借り部屋 折笠華葉》

あたしは部屋に戻って、雨傘と剣を手にしていた。

「華葉。ど、どうしたのよ？」

「殺気を、感じるの」

「さ、さつき？」

「うん。南のほうから、邪やいせな気を感じる」

「わ、わけがわからないわ」

ゲルズには意味不明らしい。

しょうがないでしょ。そう言うしかないんだから。

「も、もうここを出るの？」

「ううん。ちょっとだけ、やっておきたいことがあるの」

「え？」

あたしは剣をベルトに引っかけるように右腰に差して、雨傘を右手で持った。

バンツと勢いよく扉を開け放ち、いざ王の前へ向かおうとしたら。

「か、華葉？」

「っ」

違うドレスに着替えた、メグと鉢合わせになった。

「華葉さん。何か、急ぎの用事ですか？」

エイルさんは困った顔をしながらも、あたしに助け船を出す。

「これから修行するの。もうちょっとで、おばあさんから教わった技をものにできそうだからさ」

それは嘘だった。

本当は、一刻も早くシンマラを追いかけてたい。

「華葉。何か、隠してるでしょう？」

「え？」

「皆して、様子が変わですよ」

メグが、あたしのシャツをつかむ。

「華葉。本当はここを出るつもりなのでしょう？ 皆もよそしいし、やっぱり。やっぱりそうなのでしょうっ！？」

感づかれてたんだ。

女の勘は、鋭いものです。

それを、まさか自分が痛感するなんてね。

「うん。あたしは、ここを出るよ」

下手に隠してもしょうがない。

だったら、あたしはあたしの想いをぶつけるだけだ。もう嘘はつきたくない。

「な、なんで？ ここに、ここにずっといればいいじゃない」

ぎゅっ。

あたしのシャツを強くつかんで、メグは涙目でそう訴えてくる。

「それはできないよ。だってあたしは、日本人だから」

「にほんじん？ それが、それがなんだっていうのですか？ 華葉

は、華葉は私の友達。そう思っていたのは、私だけなのですね」

「メグは友だちだよ」

「なら、ならどうしてっ？」

「でもね、あたしはここにいていいべきじゃない。元の世界に戻らなくちゃ。あたしがいなくなつて、心配している人がいる。両親と親友が、あたしを捜しているかもしれない。だから伝えに行きたいの。あたしは無事だと、この姿を見せてあげたいの」

「っ」

メグは、静かに手を放す。

と思つたら、あたしの頬に平手打ちを浴びせてきた。

「華葉は、華葉は薄情な人だったのですね」  
痛い。いいのをもらっちゃったよ。

「も、もう、もう華葉なんて知りませんっ!」

メグは涙をこぼしながら、自分の部屋へと逃げ込んだ。

「か、華葉さん」

「華葉。どうして」

エイルさんとゲルズはあたしの言動に、目を白黒とさせていた。

「どうせいつかはバレるんだもの。嘘をついたままでここを出ても、後悔するだけだから。それに、今まで世話になつたんだもん。最後を嘘で飾るのは、失礼でしょう?」

ふたりは黙つたまま。

「あたしは正直に自分の気持ち传达了よ。後は、メングラッドがどうにかしなくちゃいけない」

ちらりとメグの部屋の扉を見て、あたしは渡り廊下へと歩む。

「王の間に、行ってくるね」

ふたりのほうを見ずに、あたしはベルゲルミルの下へと向かった。

コンコン。ノックしてから王の間に入る。

「なんだ。華葉か」

「ベルゲルミル。あたし、もうここを出ようと思つたの」

「いきなりどうした? ん? その頬は……まさか」

あたしがその前に立つと、ベルゲルミルは手で顎に触れる。

「うん。メグにバレちゃった」

頭に手をやって、てへへと笑う。

「うむ。そうか。仕方あるまい」

なんでか、ベルゲルミルが立ち上がる。

と同時に、また扉がノックされた。

「か、華葉」

ここに入ってきたのは、ゲルズだった。

「なるほど。その慌て振りには、本当にメングラッドに露見ろけんしたようだな」

はあつと、大きな溜息をつくベルゲルミル。

「華葉。華葉つ。本当に、本当にそれでいいの？ メングラッド様とケンカしたままで」

「いいんだよ。あたしだって、本当は皆と別れるのは嫌だよ。けどね、そういう気持ちを持つ人が日本にもいると思うの。ううん。いるよ。あたしは、その人に自分が生きていると伝えたい。それに、どうしてあたしがこっちに来たのか原因を探りたいの」

額に手を当てて、あたしはベルゲルミルをあおぎ見た。

「でも今は、一刻も早くシンマラと合流したい」

「合流だと？ シンマラは今、どこにいる」

「ウアンティレズドだったっけ？ そこから、強い邪気を感じるの。あたしもそれが何なのか確かめたい」

「気で、存在を探知できるとはな。ふつ。これはおもしろい」

腕を組んで、ベルゲルミルはちらつとゲルズを見た。

「ゲルズ。下がっている」

「え？ な、なに」

「いいから、下がれ」

ゲルズは言う通りにして、扉に背中を預ける。

「華葉。濟まないが、ひとつ頼みがある」

「なに？」

「ここを出る前に、儂と一戦交えろ」



「な、何を言ってるの」

「言葉通りだ。スルトは血気盛んだからな。ムスペルヘイムに人間が踏み込んだだけでも、大いに興奮するはずだ。もし華葉がスルトとやりあうことになっても、果たして無事でいられるかどうか。それを儂が今、見極めてやろう」

ま、マジでっ？ た、体格差がありすぎるよ。

格闘技でいう、無差別級じゃないっ。

「どうした？ エルザに認められた者など、指で数えるぐらいしかないんだ。儂に、その力を見せてみる」

パキポキと、拳を合わせて鳴らしている。

ふと、剣がピクリと反応した。あたしは右手でそれを押さえる。

「ベルゲルミル。ちょっと、いきなりそれは」

「ゲルズ。黙っている。さあ、いつでもいいぞ。かかってくるかい」

「こ、こいでやるの？」

あたしがそう言うと、ベルゲルミルは困った顔をする。

「ふっ。ここは儂にはちと狭いが、華葉には広いだろう。ハンデのようなものだ」

「は、はあ」

や、やる気なんだ。

あたしは剣を外して、それをゲルズに投げ渡した。

「ど、どうしたの？」

「さつき、動こうとしてたからね。今は、何もしてほしくないの」

あたしは雨傘を抜いて、左手に構える。

「そちらもやる気らしいな。さあ、小手調べだ！」

ベルゲルミルが手を伸ばしてくる。

あたしは瞬速でその腕の下を潜り、右手でそれをつかんだ。

「な、なにっ？ ぬあっ!？」

背負い投げで、あたしはベルゲルミルを投げ倒す つもりだった。

ちよつと力<sup>じき</sup>みすぎちゃったんだよね。誤<sup>あやま</sup>って、投げ飛ばしちゃうた。

「ぐ、ぐほああああっ！」

あ、壁にぶつけちゃった。

それに、衝突した際に嫌な音がしたような。

「な、何事ですか？」

大きな門が開いて、門番の巨人さんが顔を出す。

「な、なんでもない。華葉の力を試していただけだ」

ベルゲルミルは上下逆さまのまま、そう答える。

ゴロンと身を転がし、立ち上がるうとしたけど。

「ぐっ？」

どうしてか、左足を押さえてうずくまる。

「な、なんだ？」

「さっきの音はいつたい」

あ、巨人さんが集まってきちゃった。やばっ。

「ふふっ。華葉、お前は強くなったな」

「え？ あ、その」

「儂<sup>おれ</sup>ならだいたいしょうぶだ。捻挫<sup>ねんそ</sup>か、骨折<sup>こっし</sup>だろう」

「だ、だいじょぶじゃないってば！」

「心配無用だ。さあ、華葉。お前がスルトとやりあえる力量の持ち

主だというのは解った。旅立つがよい」

「っ、強がってない？」

ベルゲルミル、ちよつち涙目だよ。

「気にするな」

いや、その。気にしますっ。

だって、あたしの不注意でケガさせちゃったんだし。責任を感じるよ。

「や、やっぱり広い場所でやるべきだったんだよ」

「結果は同じだと思うがな」

ああ、やっぱり強がってる。言わなきゃよかった。

「やれやれ。あたくしが面倒を見るから、華葉は荷物を持ってここから離れなさい。もしかしたら、メングラッド様が来るかもしれないし」

「あ、うん」

木箱から荷袋を取り出し、手紙を持って逃げたあたしは、とある建物の中にいる。

「おい」

「え？」

「オイラだぞあ」

「あ、巨人さん」

ここで寝てたんだ。ふう。びっくり。

「えっと、フィヨルスヴィドだっけ」

頭がこつち向いてるので、あたしが移動する必要はなさそうだ。

「おお。ようやく名前で呼んでくれたなあ」

そういえば、そうだったね。

「華葉。もうここを出てくのかあ？」

「え？ ど、どうして知ってるの」

「ウルヴァフから聞いたからなあ」

「あゝ。そう」

話している途中、扉がノックされた。だ、だれっ？

「あ、ゲルズ」

「華葉。ここにいたのね」

「ベルゲルミルは？」

「骨折よ。エイルさんがやってきて、ウルヴァフと一緒に応急処置してるわ」

「お、折れてたんだ。ごめんなさいっ。」

「め、メグは？」

「部屋から出てこないの。ベルゲルミルが負傷したと伝えても反応

がないから、ギフがワンワン吠えて説得してるわね」

ワンちゃんが説得って、うるさいだけじゃない？

ま、それはいいや。黙っとこう。

「はい。華葉」

「あ。ありがとう」

剣を受け取り、あたしはそれを右腰たすなに携える。

「しかし、手紙が大きいわね。折りたたんで、無理やりしまつたら？」

「そうしたいけど、郵便屋さんとしてあるまじき行為だと思う」

「は？」

「と、とにかくっ。あたしは一刻も早く　その、ウァンティレズ

ドだっけ？ シンマラと合流したいの」

「どうしてよ？」

「南のほうから、強い邪気を感じるの。ただならぬ事が起こりそうな気がして、落ち着かないんだよ」

力説すると、ゲルズは額に手をやって、やれやれと溜息ひとつ。

「しょうがないわね。荷物はあたくしが預かるから、代わりにこれを持ってって」

「え？」

「エイルさんから預かったの。旅の荷物として、加えてほしい」

ゲルズからずだ袋を受け取り、中を確かめる。

「あ」

薬だ。それも大量の小瓶。ラベルが貼られてるね。

「とりあえず、傷薬とかそのへんは持つてきなさい。もし戦いくになっても、効能は強いから、必ず役に立つと思っわ」

その中からいくつか薬を抜き取るゲルズ。必要な分だけ残してくれたんだ。

「さ、早く行きなさい。あたくしも、騒さわぎが落ち着いたらウァンティレズドへ向かうわ」

「え？ さ、騒さわぎって？ やっぱ悪いことだから、怒られちゃうの

「？」

「違うわ。あなたがベルゲルミルを打ち負かしたことで、他の巨人兵があなたを血眼で捜しているのよ。ぜひ一度、試合を　ってね。本当に、巨人は血気盛んだわ」

「そ、それは嫌かもつ。」

肩をすくめてるゲルズは、ちらりとフィヨルスヴィドを見た。

フィヨルスヴィドはただ笑ってるだけだった。

「練習試合を申し込まれないうちに、早くここを脱出して。あたくしも後で華葉と合流するから、こっちは心配しないで。その邪気とやらを、さっさと払ってきなさい」

「うん」

あたしはベルトにずだ袋を結びつけ、フィヨルスヴィドのほうを見た。

「本当にたくましくなったなあ。強さと美しさを兼ね備えてるなんて、オイラがもうちつと背が低ければなあ」

「ふえ？」

「フィヨルスヴィド。華葉が困ってるでしょ」

「お。すまなんだ」

また、いつかのやりとり。

思い出して、笑みがこぼれちゃったよ。

「ふふつ。じゃあ、あたしは行くね」

「うん。いつてらっしやい」

「いつてこいよお」

ゲルズとフィヨルスヴィドに見送られて、あたしは南のほうへ走り出した。

## 第7話

### 《石の都ウァンティレズド》

もうすぐ日が落ちる頃。

シンマラは、石橋の上で海を眺めていた。

「平和なものね」

その海を歩く巨人を指で数えるのも退屈になったようで、シンマラは石の宮殿を振り返った。

「何を企んでいるのか知らないけど、アーシルは何をするつもりなのかしら」

シンマラがそうつぶやいた時。

「さあな。何をするかなど、これから知れることよ」

隣に、そう答える少女が現れた。

「アルトレイマ。相も変わらず、不意撃ちが好きね」

「そうほめるな。照れるぞ」

「ほめてないわよ」

横目でその姿を確かめて、それを否定するシンマラ。

「あなたは何を思うの？ 我が子から創つくられた大地に大海。この自然は、あなたにとってどう映るのかしら」

海に視線を戻しながら、シンマラは隣に立つアルトレイマに問いかけた。

「……………」

「答えないのね」

「あれは、わらわの力の断片じゃ。腹を痛めて産んだ子ではない」「力を分けて化身を誕生させるのは、強大な力を持つ者ができる特権。自己防衛よ。だとしても、情がないわけではないでしょう？」

元はあなた自身なんだから。それに私は、そのユーミルから産まれたのよ。つまり、私はあなたの子孫でもあるの」

ふたりは橋のたもとに手を置いて、共に海を眺める。

「先刻の問いじゃが、墓標以外には見えんさ」

「墓標、ね。私も同じ気持ちよ」

「だからといって、情などありはせんよ。アーシルに憎しみも嫌悪もない。むしろ清々（せいせい）している」

「随分と酷いことを言うわね。ユーミルは私の父よ。侮辱されるとムカムカするわね」

「ふっ。その程度で憤怒されても困る。お前の母である、アウルゲルミルを殺したのは、このわらわじゃぞ？」

「……っ！」

唐突な告白に、シンマラはたじろいだ。

「スルトの力の断片であるアウルゲルミル。わらわの力の断片であるユーミル。火の巨人ムスベルと霜の巨人フリムスルス、火と氷が相容れぬのは自然の理。孤独を分け合うがために結ばれたふたりに、鉄槌を下さねばならなかった。そうしなければ、ニヴル Heim もムスベル Heim も、いつか起こりうるふたりの力の拒絶反応で、滅びる危険性があつたからじゃ。じゃが、スルトはそれを拒んだ。仕方なくわらわが、アウルゲルミルを屠つたのさ。それから間もなく、ユーミルも討たれた。スルトが拒んだ理由は、わらわにも察しがついたさ。それは、お前じゃ。シンマラ」

「わ、私？ どうして、どうして私が関係するの？」

「スルトはふたりに捨てられたお前を引き取った。それはシンマラが、本質的に火を持つからじゃ。わらわでは育てることはできん。

お前に情を移したことで、スルトはユーミルを討てなくなった。それを理解した上で、わらわはアウルゲルミルを屠つたのさ」

過去に起きた出来事を告白されて、シンマラは頭がクラクラした。

「あの人が、そんな」

「お前を伴侶としたのも、罪悪感をぬぐい去るためじゃろう。わらわに依頼したとはいえ、自分がお前の片親を屠らせたのは事実。スルトは未だに、その罪悪感にとらわれているようじゃな。今のまま

ではよくない。活を入れてやらねば、いつか生き恥をさらすことになる。」

そこまで言っつて、アルトレイマは深呼吸した。

「わらわとスルトが憎いか？ シンマラ」

「……………」

その問いに、シンマラは答えない。

うつむいて、涙をこらえているようだ。

「潮風がしょっぱいの。」

話して緊張がほぐれたのか、アルトレイマは意を決してこんなことを聞く。

「ひとつよいか」

「ん。どうしたの？」

まだ動揺するシンマラは、目を泳がせながら返事をした。

「実は、わらわは人見知りなのじゃが……ど、どう克服すればよい？」

予想外の質問に、シンマラは目を白黒させる。

「ひ、人見知り？ そ、その克服法を、私に聞くの？」

「う、うむつ。どのようにすれば、人と親しく話すことができようか。考えても答えが出んのじゃ」

真剣な悩み相談だと知って、シンマラは真面目に答えた。

「そういうのは、頭を使うべきではないわ」

「む」

「何も考えず、気兼ねせず、話したいことや聞きたいことを言えばいいの。友達になるのは、そういうことよ」

「ともだち、か」

「ええ。表裏も打算もなしで付き合える友達がいるのは、実にいいことだわ」

「さ、さようか」

「大事になさい。その子のことをね」

「む。み、見たのか？」



「さあ？ 今の反応を見る限り、子どものような」

「な、か、鎌をかけたのかっ」

気づいたアルトレイマはシンマラをにらむ。

そのシンマラはそっぽ向いて微笑んでいる。

「真実を話してくれてありがとうね。じゃあ、私はこれで失礼するわ。ウルを西区に誘い出して、始末しないといけないから」

「それはありがたい。射手を仕留めてくれるのなら、背後を気にせずやれる」

「西区には近づかないほうがいいわよ。火傷したくなければ、ね」

「ふっ。言ってくれるな」

ふたりは笑みを浮かべて、共に自分が向かう場所へと歩き出した。

### 《ガストロプニル 折笠華葉》

もう、日が落ちて真っ暗だ。

城から脱出するのに、手間取っちゃったよ。

「ふう」

城壁の上に立ち、後ろを見やる。

「折笠華葉はどこだっ？」

「ダメだ。魔犬も探してはいるが、見つからないようだぞ」

ワンちゃんに巨人が、あたしを捜すのに躍起やっきになってる。

「後は、ここを飛び降りるだけだね」

正直、ワンちゃんの追跡はきつかった。

臭いで探知するから、どこに隠れても発見される。

となれば、こうした高所に飛び移るしかない。追って来れないもんね。

ただ、明るいうちにそれをする巨人さんに見つかってしまふ。

だからこそ、夜中まで待たなくてはならなかった。

「さあ、いざウァンティレズドへ」

月明かりが、遠くにある石橋を照らしている。

あそこまで、全力疾走すればいいんだね。

「とおっ」

かっこつけて飛び降り、華麗に着地っ。いざ走ろうとしたら。

「む？　そこに誰がいるのか」

やばっ。見張りの巨人に見つかった。

「おや、君は。ふっ。さっさと行け」

「え？」

あたしは恐るおそる、声の主を見た。

「あ」

誰かに似てるような。でも、暗がりだから顔がよく見えない。

「兄が世話になっている」

「え、えっと。あの、王の間の門番の人に……」

「それが兄だ。ちなみに俺は弟」

くくビンゴっ。

「あ、お世話になってました」

「あまり長くここにいるな。巨人の声は、小さくとも遠くまで聞こ

えるもの。耳も大きいからな、地獄耳の奴が多い。さあ、早く行け」

「あ、ありがとうございます」

あの門番の巨人さんに、弟さんがいたなんて。

しかも、こっちも優しい。うん、どっちも背が低かったら、か

なりのイケメンで大人気だね。自分で言ってる恥ずいけどっ。

ズウウウウウウウウウウッ。

遠くのほうで、とてつもない音がした。

それから、地鳴りがする。

片膝をついて、あたしは音のしたほうを見やった。

「な、なに？」

目を凝らすと、遠くに昇り立つ龍のような存在を見つけることが

できた。

「なんだ？ ウァンティレズドのほうで、何かあったみたいだぞ」  
見張りの巨人さんは、その大きな手で鐘を鳴らす。

「さあ、早く行け。ここにいると見つかってしまう」

小声で、あたしに行けと促してくれた。

「あ、ありがとう」

あたしは全速力でダッシュし、石橋を目指した。

### 《石の都ウァンティレズド・噴水広場》

「随分と気楽ね、あなたは」

白髪を風になびかせて、シンマラはある少年と対峙していた。

「ん？ おや、僕が誰か解るみたいだね。お嬢さん」

噴水の前に立ち、丸い月を見上げていた少年。

彼はシンマラを見つけて、口笛を吹いている。

「付近に強い気があったから、何かと思ったんだよね。そうしたら、

そっちから出向いてくれたんだ。ありがたいことだよ」

「こっちは暗殺されるんじゃないかと、冷や冷やしてたわ」

「そう。まあ、僕の対象はフレイヤだからね。他には興味がなか

ったんだ」

肩をすくめて、恐ろしいことを口走る少年。

「フレイヤはやるべきことはやった。オーデイン様に、万が一があ

つたら殺せと指令があったけど。これで自由行動できる」

「させないわ。あなたはここで、私が始末するから」

「それは勘弁願いたいね。僕は、あなたのようなお嬢さんとやりあ

う気はない」

その言葉に、虫唾が走ったシンマラ。

少年の言動と表情が、一致していなかったからだ。

「嘘が常套ジョウソウのようね」

「うそ？ 僕はそんなのつかないよ」  
それも嘘だと、シンマラは判断した。

「ここにいと、あのミミズに踏み潰されそうね。巻き添えはごめんだわ」

石の宮殿から顔を出したワームを横目で確認し、シンマラは親指で後ろを差す。

「場所を変えると？ 構わないよ」

シンマラは少年に背を向けて、西のほうへと走った。少年もシンマラを追う。

気がないところで、少年はシンマラへ向けて矢を射る。

「やっぱり」

足を止めて、シンマラは背を向けたままで矢を焼き払った。

「なに？ こいつは」

少年は手の平に出現させた弓矢を構えて、石造りである家屋の屋根上に跳び乗る。

「いけない坊やね。消し炭にしてあげるわ」

シンマラは両手に炎を灯し、少年のほうを振り返る。

「ちっ。面倒だから一気にケリつけたかったのに、あんたが炎の使い手とはね」

「この臭い。毒？ そのようなもので不意撃ちするなんて、本当にいけない坊やね」

「黙れよ、クソババア」

カチンと来たシンマラ。

それは相手のペースにはまると感じ、冷静になって少年を観察する。

（服は軽装。武器は弓。ただそれだけなのに、妙ね。まだ何かありそうだわ）

警戒を解かず、シンマラは全身を炎で包んだ。

「まあいいや。とにかくにもかくにも、僕の邪魔をするんだね。なら容赦はしないよ」



膝を崩しながらも、少年はシンマラへ矢を射る。

「っ」

すぐに離脱できないシンマラは、その正確無比な射撃を右手で払った。

その際に、手の甲を切ってしまう。

「ふふっ」

少年の不気味な笑いに、シンマラは動揺する。

「な、これは」

右手は動く。しかし、そこから炎が出現しないのだ。

「まさか、魔封じ？」

しびれはない。痛みはある。と同時に、魔の流れを断ち切られた。

「沈黙のルーンさ。それと毒もある。もう火は起こせないだろ？」

じつくり弱って、くたばるといいたさ

少年の微笑みに、シンマラは悪意を感じた。

「やってくれるわね」

毒が回る前に、シンマラは全身に巻きつく紅の布をほどいた。

「ん？ な、何を」

「出でよ。レヴァテイン！」

「なにっ？」

シンマラは左手に剣を出現させ、鞘から引き抜いたそれを浮遊する布に握らせた。

「幸い、左手は使えるのね。物質化が短時間でできるうちに、切り

札は出しておいたほうが賢明だわ」

ルーン文字が刻まれた片刃の刀身は、少年にとって脅威に映った。

「そ、そんなものを。まさか、お前」

「名乗ってなかったわね。私の名はシンマラ。旦那であるスルトが、いつかあなた達の世話になるわ」

「くっ」

少年は焦った。

シンマラから逃げようとあたりを見回すが、炎がそれをさせない。

「なら、毒が回るまで時間を稼げばいいだけか」

途端に強気になった少年を見て、シンマラは軽く舌打ちする。

右手の感覚がなくなってきた。毒が全身に回る前に、シンマラは決断した。

「なら、こつするまでね」

「え」

シンマラは布が持つ剣で、自身の右腕を斬った。

鮮血が石畳に滴る。それは熱によってすぐ蒸発した。

「自分の腕を切つてまで、毒抜きをするか。そんなことをしたって無駄さ。すぐにとどめを刺してやる」

「やつてごらんさい」

少年は矢の雨を降らす。

それを焼き払おうとするも、火力が足りない。

右手が使えないから、魔力を注ぎ込むのに遅れが生じたのだ。

「ん？」

後ろに下がって回避しようとした時。

ふと、シンマラは石の宮殿のほうを見て屈む。

危ないと、直感が働いたのだ。

「あれは」

ビュンツ。石弾が、高速で通り過ぎる。

それが激突した家屋は、粉々に消し飛ぶ。

と同時に、風圧によって矢の雨が吹き飛んだ。

「うわわわっ!？」

少年の立つ家屋も、飛来する石弾によって粉碎された。

「防御を」

固めないと危ない。そう感じたシンマラは、炎を青く染め上げる。

それから両腕を交差させて守りに徹した。

「や、止んだ……みたいね」

石弾が飛んで来なくなった。

ちらりと、シンマラは少年のほうを見やる。

「や、やってくれるねえ。フレイヤめ、ワームをきちんと制御できてないじゃないか。後でブツ殺してやる」

少年は左のこめかみに石弾の欠片をもらったようで、そこから出血している。

左目は閉じたまま。視力を奪われたらしい。

「ふっ。身内の攻撃で、隻眼せきがんになったみたいね」

「黙れよ、てめえ」

少年はゆっくりと立ち上がり、瓦礫がれきの山の上で矢を構える。

シンマラは布を前に浮遊させ、それが握る剣先を少年へと向けた。

「すぐに射殺いころして、次はフレイヤを撃ち抜いてやる」

「物騒なことを。けど、フレイヤを殺すことには賛同するわ。私の自慢の髪にほこりがついてしまったからね」

「だったら、ここで待っててくれないか？ すぐにやってくるから」

「嘘をおっしゃい。そのまま逃げるつもりでしょう？」

「ちっ」と、少年が舌打ちをする。

シンマラは青い炎を拡散させ、その火力を最大にまで引き上げた。  
「な、なんだ？」

「もう時間をかけるのは嫌だわ。あなたを、火葬ついでに土葬してあげる」

「っ」

少年は絶句した。

シンマラの周囲の石ころが、赤く発光して溶けたからだ。

「ひ、火の使い手じゃない？ お前は」

「火炎だけじゃないのよ。私はね、溶岩もたしなんているの。さあ、これからあなたはどうするの？ 見ものだわ」

波打つ地面。

シンマラはその上に立ち、少年を見据える。

「く。こ、こんなのとやってられるかよ！」

少年は闇雲に矢を放つ。

しかし、それはシンマラには届かず、途中で剣に払われてしまう。



あるいは、灼熱に耐えられず昇華してしまう。

「覚悟なさい。すぐに、葬<sup>はつむ</sup>ってあげるわ」

「ひっ」

シンマラと少年の周囲は、すでに溶岩地帯。

逃げ場をなくした少年は、溶岩の手に足をつかまれた。

「うぎゃあああああああああああああつ!?!」

「さようなら。“ラヴァランチ”」

溶岩の大波に飲み込まれ、少年は跡形もなく燃え尽きた。

溶岩地帯と化した西区。

その中を歩くシンマラは、人々の悲鳴を聞きながら、右腕に紅の布を巻いていた。

「ごめんなさいね」

すでに溶岩は冷やしているが、火炎や熱気は残されている。

逃げ惑う人々は、シンマラの周辺を避けて走っていた。

「う」

まだ毒が残存しているのか、シンマラは残された家屋の壁に手をつき、深呼吸をする。

「どんな毒を使ったか知らないけど、これは……まずいわね」  
意識が朦朧とする。

「く、こ、こんなところで……くたばるわけにはいかないのよ」  
ふと、近くに人の気配がした。

シンマラは後ろを振り向き、驚く。

「あ、あなたは」

《西の石橋 折笠華葉》

ようやく右側の石橋について、全力疾走するあたし。

「い、急がないと」

そう思っけれど、いかんせん距離がある。

「ま、間に合って」

何が起ころうとしているのか、あたしにはさっぱり解らなかった。でも、確信はあった。もっと嫌な事が起こりそうな気がする。

「この気配」

邪気が近い。

ふと、目の前に何か光が 誰かが、やりあってる？

「どちらが味方か、見極められるかな？」

言ってもしょうがない。

邪気を感じたほうに斬りかかればいいだけだもんね。

「ん？」

人影が見えた。

もうひとつ、巨大な何かがある。

争ってる様子はない。ただ、どちらからも強い邪気を感じる。

「やるしかないね」

腹を括って、あたしは左手に雨傘を構えた。

そして、空高く跳躍（はしりよび）して。

「やあああああああああああああああああああああっ！」

勢いに任せて、女の人へ斬りかかる。

「な」

この一撃は、両腕によってガードされた。

大きくて動く樹木がひとつあり、あたしはそれを警戒しながら距離を取った。

「あなたは何者ですか？ 先程から、光を放っていましたね」

ん。近くに女の人が倒れてて〜な。

「グガアアアアアッ！」

「わ」



「っ」

な、なにっ？ 石橋が、めちゃくちや揺れてるんだけど。ほんの一瞬だけど、先のほうで何か光ったような。

「どうやら、フレイヤが石橋を破壊したようじゃな」

「え？ あ、ほんとだ」

ガラガラという音と、バシャンという音が聞こえる。石橋が崩れて、破片が海に落ちる音だね。

「距離にかなりあるな。跳んで越えるのは無理そうじゃ。それより娘よ、ヨツンの援軍はまだ来ぬのか？」

「え。あたしが、どうしてヨツンヘイムから来たと？」

おっと、危ない。見そうになっちゃった。

「臭いじゃ。巨人特有の臭い。じゃが、そちらはそないなものは感じられん。ただそれが染みついておるだけ」

また拳を振り上げた。あたしと女の子は一緒に後退する。

「グカアアアアッ！」

もう片方の腕で殴って、凍りついた拳を解放しようとする樹木。

「まだ、のようじゃな」

後ろを振り返る女の子。

「何をしておる？ 巨人族は、ウァンティレズドを見捨てる気か？」

「そういつつもりはありませんよ。ただ」

「ただ？ なんじゃ」

「もう少し、待ってください」

だって今、あそこは混沌としてるもん。

王様は骨折してるし、巨人兵とワンちゃんがあたしを搜索してるし、統率が取れてない。全部あたしのせいなんだけどさっ。その責任は、ここで取らないとっ。

「はあああああああああああああああああっっっ！」

雨傘を両手で構え、あたしはそれに気を集中させた。

密度を増した気は、純白に発光する。

あたしは雨傘を下段に構えて、勢いよく振り上げた。

「グギャオオオオんツツツ」

放った気刃は、動く樹木に風穴をあけた。それは後ろに倒れ、胸を押さえて苦しんでる。

それは氷を砕いてしまったけど、動く樹木に大ダメージを与えた。

「まだ、生きてる？ ならば」

よく見たら、傷が塞がろうとしている。

追撃しようとして、雨傘を上段に構えたら。

「ゆけ」

「え？」

隣の女の子が小声で何か言ったので、つい振り向いてしまった。

わわわわわわわ。外なんだから、ふ、ふ、服ぐらい着よう

よおっ。

「こやつはわらわが引き受ける。娘よ、フレイヤを追い。まだ何かしでかすつもりでいる」

「い、いいんですか？」

てか、あの女性はフレイヤって言うんだ。

「案ずるな。わらわひとりでどうにかする。見たところ ん？」

その子はあたしの右腰の剣を見て、目を白黒とさせていた。

「ふっ。ゆけ。フレイヤに一泡吹かせてやるがよい」

「な、なにをいって……？」

「ゆけえっ！」

わっ。い、いきなり大声を出さないでよ。

でも、あの女性を放置できない。追いかけないと、とんでもないことをやらかしそっだ。

なら、この場はこの子に任せよう。

あたしは膝を深く折り曲げて、空高く跳ぶ。

「わっ」と

ちよっと距離が足りない。走り幅跳びすればよかった。

足で大気を蹴飛ばし、どうにか向こう側に辿り着く。

「ふう」

距離にして何メートルあるんだろう。それを助走なしで、かつ空中で微調整したんだ。

「もうあたし、超人だよな」

言っつて、落ち込む。

そんな場合じゃなあい。前を向いて、あたしは全力疾走した。

### 《ガストロプニル》

「ふう」

エイルに手当てしてもらって、ベルゲルミルは嘆息した。

「どうなされました？ 溜息なんて」

両膝について、ベルゲルミルの左足に回復魔法を唱えているエイル。

顔を上げて、彼女はにこやかに微笑んだ。

「折笠華葉と最後に一戦交えたが、この様だ。かつこがつかんなど嘆いておるのだ」

「うふふっ。いいじゃないですか。あんなにたくましくなられたのですから」

「ふう。それもそうだな」

巨人のひとりに包帯を巻いてもらい、ベルゲルミルは安堵する。

「もういいぞ。スクラーミル」

「あ、はい。では、僕は番に戻ります」

「うむ」

彼は王の間を出て、静かに門を閉める。

その後、ベルゲルミルはへこんだ壁を見やった。華葉に投げられて、自分がぶつかった痕跡が残されている。

「本当は、行かせるのは不本意だったんだがな」

「だったら、どうして見送ったのです？」

「子が巣立とうというのに、その羽根をむしる親などいるか」

「それもそうですね。あら、泣いておられるのですか？」

「ここで暴れたからな。ほこりが散ったんだろう。それが入ったんだ」

「はあ」

エイルは包帯越しに癒しの光を与えるのを止め、すつくと立ち上がる。

「話を戻しますけれど。ゲルズをミドガルズへ向かわせたのが、少し意外でしたね」

「儂としては、ゲルズから華葉へ、自息法を教えてやるうという配慮があつたんだが」

「もう、華葉は自息法をマスターしておるぞ」

会話を割り込んだのは、ウルヴァフだった。

彼女は王の間にやってきて、片膝をついた。

「ほう？ そうだったのか。まあいい。それよりも、儂の無様な姿を笑いに來たか」

「そうではありんせん」

「ふむ。では、どうしたのだ？」

冗談を止めて、ベルゲルミルはウルヴァフを見下ろす。

「うむ。ちと思うところがあり、一時的にここを離れる」

「何故に？」

「それは口外できん。数日は戻れない。ただそれだけは伝えなければならんと思つてのう」

「ふうむ。それはちと困るな」

「やはり、簡単には出してもらえぬか」

「いや、そうではない。メングラッドが部屋に引きこもっているのだな。実質、動ける医師がエイルひとりしかない。ウルヴァフが抜けると、エイルへの負担が重くなる。ついさっき、ゲルズも外へと送り出してしまったからな」

おもむろに立ち上がった、ウルヴァフは鼻の下に指をやり、何か考えている。

「ここにはおらんがの。ワシの杖をひとつ置いていこう」

「杖、だと？ あの浮遊するやつか」

「ふむ。あれは自分の意思で動いておる。ワシがいない間は、エイルの言うことを聞くようにする。ただ、緊急時にはワシが杖を召喚するやもしれん。それでよいかのう？」

「緊急時、だと？ 敵地で隠密行動をするのか」  
「む」

途端に渋い顔をするウルヴァフ。

「まあ、詮索はせん。今しがた、ウァンティレズドのほうで何やら騒ぎが起きたらしい。巨人の軍団を派遣したのだよ。もし戦闘にでもなれば、医師の少なさは兵士の不安要素となる」

「さようか？ ならワシは、ウァンティレズドを経由するでしょう」  
「なに？」

「生存者を捜索し、応急処置するぐらいは時間の余裕がある。何か不平でもあるのかや？」

「ありはせんよ」

「さようか。なら、ワシはこれで失礼する」

ウルヴァフは背を向けて、王の間を後にした。

## 《東の石橋》

ヨツン Heim 方面からウァンティレズド方面へと、石橋を駆けている少女がいる。

「わ」

ゲルズだ。彼女はびっくりして足を止めた。

石橋が途中で崩落しており、徒歩で渡ることが不可能になっているからだ。



「ど、どうしよう」

荷袋を背負ったまま、ゲルズはあたりに何かないか見やった。ふと、バサバサと上空から何かが降りてくる。

「ど、ドラゴン？」

ゲルズは袋を置いて、両手に火を灯した。

「待、待。わらわに戦意はのうない」

おばあさんのような口調でしゃべる少女が、ゲルズの前に降り立った。

「な、うえっ？　だ、だれなのよっ？　それに、この飛竜は……」

ゲルズは少女が裸だということに驚き、ドラゴンのほうへ視線をそらす。

「向こう側に渡りたいのじゃろう？　翼を貸してやるうぞ」

「い、いいの？」

「ああ。わらわ達は宮殿のほうへ戻るのな。行き先が同じなら、乗せてってやるぞ」

董色の髪を風になびかせて、アルトレイマはゲルズを手招きする。ゲルズは停空する黒い飛竜がうなづくのを見て、アルトレイマへ向き直る。

「なら、ありがたくその翼を借りるわ。でも」

「でも？」

「途中まででいいわ。あたくしは途中で降りる」

「さようか」

《石の宮殿跡　折笠華葉》

石橋を渡りきり、目の前に崩壊した石の建物がある。

この大きさと広さから察するに、お城かな？

その中心付近に、強い邪気を感じる。

多分、フレイヤって女性だ。



へと攻撃を始めた。

「わあっ！ な、なんだ？」

「た、たすけてえっ」

幸い、誰にも被弾しなかった。けれど、その卑劣な行為を見て力チンとなる。

もう、もうこれ以上は犠牲者を出させない。

あの橋で見たような、無残に殺されたあの女性のような、犠牲者を出しちゃいけないっ。

「あっはははは。よく見たら、愚かな人間ばかりじゃない。さあ、あんたはあたくしを攻められる？」

女性は微笑みながら、また光線を放とうとしている。

あたしはその光球を、波眼で打ち消した。

「え？ な、なんで」

「せいやっ」

「ぐうう！？」

戸惑っている隙に、あたしは女性の腹に気撃を叩き込んだ。

右の拳から放たれる一撃は、この距離なら有効打になる。

「ど、どうして。く、このままやられっぱなしじゃないわ！」

女性は両手を放電させる。

あたしはそれを見て、ほくそ笑む。

「な、何がおかしいのっ？」

ようやく、あたしだけを見てくれましたね。

後は人がいなくなるまで、この女性の注意を引きつけるだけだ。

「その余裕なんて、すぐに消し去って え」

また波眼で、あたしは女性の電気をかき消した。

「ど、どうして？ さっきから、魔法が ちい！」

女性はあたしの接近に気づいて、屋根上へと跳んだ。

「逃げ足だけは、速いですね」

「ふんっ。何か小細工を仕掛けたんだろうけど、もうそんなの通じないわ。覚悟なさい」

まだ周りには人がいる。

その人たちを巻き込まないように戦うのは、あたしには難しい。早く、早く逃げてっ。

「はああああああああああああああああっっ」

女性が手を合わせ、その中に光を集めている。

しかも全身から電気を発している。

下手に近づいたら、火傷しそうだ。

「ふう」

でも、脅威ではない。

「さあ、これで終わりよ！」

眼前に迫る光線。それをあたしは。

「な」

広げた雨傘で、難なく受け止めた。

「く、そんな盾ごときでえ！」

盾じゃないんだけどね。でも、これはすごいっ。

まず、手に衝撃が来ない。ただ持っているだけなのに、手や指に振動が感じられない。

それと、雨傘から溢れる光線が、ほたるのように淡いものに変換されていた。

これがかっと、妖精の涙による効果なんだね。

「な、ど、どうしてよっ!？」

そんなのあたしは知らないねっ。作った本人に聞いてほしい。

「あ、あたくしの攻撃が通じない？ に、人間風情がああああああ

ああっ！」

わ、キレた。

「フレイヤ。あなたはそう言いましたね」

「なによ？」

「ひとつ忠告します。あたしは、あなたを全力で正します」

「な、なんですって？ その余裕を、すぐに叩き折ってあげるわ」  
また手を合わせて、光線を放とうとする。

あたしは溜息をついて、雨傘に気を集中させた。

「く、なら」

「遅い！」

フレイヤが光線を放つより先に気刃を放ち、彼女の下にある家屋を粉碎した。

「な、この」

フレイヤは空高く跳び、勢いに任せてあたしに殴りかかってきた。その帯電する拳を、あたしは右腕で防ぐ。

「どう？ 痛いでしょう？」

そうでもない。ちよつとピリピリするくらいだ。

「く、あああつ！？」

右膝で腹を蹴り、デコピンでフレイヤを吹っ飛ばす。

「あ、ぐ、ぐは。あ、あんた……」

別の家屋に激突し、フレイヤは石ころの山に半身埋まっている。

「その程度ですか？」

「っ」

何となく、似ている。

その目が、口が、顔が、あたしをいじめていた同級生の女の子に。「あたくしを、あたくしを馬鹿にしたことを後悔させてあげるわっ！」

そのプライドが高いところも、言葉遣いも、何もかもがそっくりだ。だからといって、手加減をするつもりはない。なかった。でも、

それでも。

手が、震えている。足が、動いてくれない。

びちゃり。

いつの間にか、足場は水浸しだ。

噴水を壊したあたしのせいなんだけどね。

「泣いてるの、あんた」

急に、怖くなった。



「ええ」

シンマラみたいに前髪をかき上げて、あたしはダメージを受けてないことをアピールする。

足で靴をトントンと整える。震えがないなら、踏み込めそうだ。

「……っ」

鬼のような形相をして、あたしをにらむフレイヤ。

ただ、すぐに攻撃してくる気配はない。どうしたんだろう。

「な、なんで」

「え？」

フレイヤはあたしの右腰にある剣を、震えながら指差す。かなり動揺しているみたい。

「ど、どうしてあんたが」

「隙あり」

その隙に懐へ飛び込み、彼女の腹に鉄拳をお見舞いした。

フレイヤは高く積み上げられた石の壁に激突し、貫通して向こう側に転がったようだ。

「ありや。やりすぎましたね」

追撃しようと、あたしは高く跳躍した。

「なんで、なんでよう！　なんであんたが、なんでえっ!?!」

フレイヤは降りてくるあたしを見つけて、何か叫んでいる。

「あらよつと」

何か太くて長いものがあつたので、その上に立つ。

って、これはミミズ？　でっかい。しかもこれ、死んでる。

気づいた瞬間に寒気がした。うわっ、死んでる虫を踏んじやつてるよおつ。

「ん」

後ろには、女の子が三人に翼のある大きなトカゲが　　ってか、あれはドラゴン？　は、初めて見たよつ。

「つと」

「ミミズから飛び降りて、あたしはフレイヤのところへ歩いていく。

「なんであんなに、フレイ兄さんの剣を!？」

「フレイにいさん？」

「ああ、この剣はフレイヤのお兄さんのものだったんだ。へえ。

「う。あ、あんたら……もう、「コカトリスを」

「こかとりす？」

「フレイヤはあたしでなく、ドラゴンがいるほうを見ていた。

「わらわ達を相手にしたのが運の尽き。フレイヤよ。オーディンに進言するがよい。もう貴様の時代は終わりじゃと」

「こ、この口調。さつきちらつとだけ見たけど、あの裸の少女かなあ。

「ふ、ふざけんじゃないわよ!」

「フレイヤはその少女を撃ち抜こうと、放電する橙の球体をひとつ出現させた。

「あたしはふたりの間に立ち、雨傘を構える。

「すると、フレイヤは撃つのをためらった。

「香乃。ヘルを頼む」

「あ、うん」

「後ろで何かやってるみたいだけど、どうしたんだろ。

「忘れないでください。あなたの相手は、このあたしです」

「うっさいわよ! どいつもこいつも、あたくしを馬鹿にしてえ!」

「ふと、隣に誰かが うわっ。やっぱり裸の少女だっ。

「フレイヤよ。お前の画かくした通り、ウァンティレズドは滅んだ。しかし、後味が悪いじゃろう? 選ぶがよい。ここでくたばるか、尻尾を巻いて逃げ出し、屈辱を背負うか」

「勝手にこの場を仕切ってるね。

「とはいえ、あたしもどうしようか迷っていた。

「このまま戦っても、あたしはフレイヤを正せない。

「あまりにも、あの女の子に似ているからだ。ただそれだけなのに、



あたしはこの人と向き合うのが嫌になっている。

あたしが何をしようと、訴えようと、拳で語りかけようと、無駄だつて解るからだ。諦めてしまうのはどうかと思うけど、あたしではこの人を正せない。根本的に通じ合わないのだ。

「つぎけんな！　ここで、ここであんたらを始末するわよお！」  
手を合わせて、フレイヤは光線を放った。

しょうがない。あたしは広げた傘で、それを受け止める。

「な、この！　くたばれええええええええっ！」

あなたが全力でも、この雨傘はそれを苦としていない。とんでもない代物だよね。

「その程度ですか？」

「っ」

撃ちきつて、フレイヤは両手を膝に置いて深呼吸をしている。

今のは、手に振動が来るほどの威力だった。それすらも、この雨傘は防ぎきつた。

「な、なんで……この、人間風情があっ！」

自分の思う通りにならないと、気が済まないの？

だったら、あの子と変わらないよ。あなたも同じなんだね。

「ふぎけんな。つぎけんなあああああっ！」

「もう、遊びは終わりにしましょう」

心の中に、怒りが煮えたぎる。

別に、フレイヤに八つ当たりするつもりはない。

あたしでは、フレイヤを正せないことに憤いらいっているだけだ。

結果として、八つ当たりになってしまいかもね。それでも。

「何をぬかしてるの。あんたがここで終わるのよ！　見てなさい。

これからあたくしがあんたを消滅させてやるわ！」

あたしは、今自分にできる精一杯でフレイヤを倒す。

雨傘をたたくで逆手に持ち、右手の指が動くことを確かめた。

もう、震えはなかった。これなら、やれる。

「さあ、覚悟なさい！」

「さようなら」

掌底で空気を叩いた。

あたりを静寂が包む。しばらくして、フレイヤが膝を崩し、吐き気をもよおした。

「う、ぐう……うええええっ！」

青ざめた顔、震える手足、手の平を見つめて呆然としている。

おばあさんも、恐ろしい技を編み出したよね。

それを難なく再現できる、あたしもあたしだけどさっ。

「な、にを……」

「別に。あなたの周囲の気圧を、極度に下げただけですよ」

おばあさんはそう言ってたけどね。

でも、やってみて解った。

この技は、波動眼に匹敵する危うさを持つてる。あんまり乱用しちゃいけないね。

「なるほど。掌底で大気を叩いて流動させ、作用点である手から円錐型に空気を押しつけたのか。でなければ呼吸困難の反応など即座に起きん。細やかなことさの。波導の使い手とは、恐れ入る」

「あなたは、いったい」

裸の少女は、あたしの技をそこまで分析している。

実際、やってみたあたしもそんなには理解していない。感覚として、少女の言ったようなことだというのは、ついさっき解った。

「なるほど。そっちの女子は、この地上の大気を……その周辺のみ、高高度に似通った状態にしたのだな？」

翼を広げて、女の子ふたりを庇うドラゴンがそう補足する。

「へえ。そちらのドラゴン。なかなか賢いみたいですね」

「フレイヤが急に高山病にかかったのは、そういうことか。そのよくな体術使いが人間にいるとはな。よく、今の今までオーディンに目をつけられなかったものだ」

なるほど。高山病ね。解りやすい。

裸の少女より、そちらのドラゴンのほうが説明上手のようだ。

「さて。今なら見逃してあげます。フレイヤよ、立ち去りなさい」  
雨傘を構えて、あたしはフレイヤへと迫る。

「ひ」

おびえているんだ。あの子から見たら、あたしや深汐ちゃんはい  
う映っていたんだね。

「よい。そこまで脅さずとも、フレイヤに戦意はのうない」

裸の少女が、あたしとフレイヤの間に割り込んだ。

「そう、ですね」

あたしはおもむろに、雨傘を地面へと突き刺した。

そして、眼前の裸の少女を見つめる。もう、服の有無はどうでも  
いい。

「無益な殺生は嫌いに見える」

嫌いどころか、もうそんなことをしたくない。

「解りますか？」

「うむ。しかし、その優しさが時に仇あだとなろう。情はなるべく戦いくさで  
は捨てる。付け入られるぞ」

「忠告、ありがとございます」

優しさ、か。

あたしの行為は甘さでなく、優しさに見えていたんだ。ちょっと  
ほっとする。

でも、最後のほう。情はなるべく捨てるって。

そんなのできっこない。

あたしは、非情になりきれない。

それが、人から言わせれば甘いんだろうね。

「ふう」

フレイヤは、この場から逃げたみたい。

もうこの場で戦う理由はない。そのことに胸を撫で下ろした。

「……ちっ」

ん？ あ、ドラゴンが翼を外した。

雨傘を引き抜いて、あたしはあることに気づく。

ドラゴンが庇っていた女の子ひとりの右腕が、灰色になってる。うっん。あれは、石？ 右腕が、石になっているのかな。近くで見ないと解らないや。

「敵の気配はないな」

ドラゴンがあたりを見回しながら言う。

確かに、邪気はない。

あたしは警戒を解いて、ドラゴンが庇う女の子のほうへ向かった。この女の子ふたりは、共にワンピースを着てる。白と紫、ね。紫のワンピースの子の石化を、何とかしてあげないと。

「石化、しているんですね」

「ふむ」

裸の少女もあたしの後についてくる。

ふと、白のワンピースを来た女の子が、少女にあるものを差し出した。

「アルテレイマ。ほら、黒マント」

「ふむ？ ああ、別にいらぬ」

い、いらないうって。夜風で寒いのに、この子はっ。

その言葉を見無視して、女の子は裸の少女に黒マントを羽織らせた。右腕が石と化した女の子を前にして、あたしはずだ袋を手にする。「薬ならありますよ。少し待ってくれませんか」

ふと、あたしは近くにシンマラとゲルズがいるのを感じた。

ただ、シンマラの気が弱っているような 気のせいではなければいいけど。

それと、数多くの大きな気を感じる。ヨツン Heim から、巨人さんの大群が来てるんだ。

見つかったら、面倒になりそう。

あたしはマントの少女にずだ袋を手渡し、ふたりの気配を探る。

「ふむ？ いらぬのか」

「ええ。差し上げます。中の薬は全てメングラッドが調合したもので、信用してださいょうぶですよ」

あっちかな。



「む。これは……」

自分の手の平を見つめ、ロキは生気が戻るのを実感する。

「待て。まだ時間がかかる。動くでない」

「貴様は、何者だ？ ここには衛兵が数人いたはずだ」

「あんなの、ワシの手にかかればどうってことはありんせん」

両手を腰に置いて、自信満々に胸を張るウルヴァフ。

「ふっ。俺を助けて、何をするつもりだ」

「その前に、これでも口にしておれ」

「む。リンゴか。しかも、イドウンの魔法のリンゴではないか」

「アースガルズからくすねてきた。案ずるな。足はついていない」

「貴様が何者なのか、大体読めてきたぞ。この癒しの方術、ヴァニ

ルか？」

「アタリ。ただし、もうワシはヴァナヘイムに戻るつもりはない。

よって、それは半分ハズレでもある」

「なに？ どういう意味だ」

「ふっ。今ワシがしたことを、もう忘れたのかや？」

ウルヴァフに言われて、ロキは肩をすくませた。

「ロキ。ひとつ頼みがある」

「ん？ なんだ、改まって」

「ニヨルズとその子息、フレイとフレイヤを殺してたもれ」

突然の申し出に、ロキは面食らった。

## 第8話

「あ、ゲルズ」

「華葉？」

あたしは空中で何度も多段ジャンプし、ようやくふたりを見つけた。

着地して、あたしはゲルズが診ていたシンマラの傍へ寄り添う。

「ど、どうかしたの？」

「だいじょうぶよ」

そうは言うけど、横になってるシンマラの顔色がよくない。

あ、右腕に紫の布が巻かれている。シンマラとゲルズの服の色とは違うね。誰かが手当てしたのかな。

「止血されてるし。薬を飲ませたから、心配はないわ」

ゲルズは空瓶をあたしに見せて、処置したと知らせる。

「そ、そう」

ここに来る前、薬を全部あげちゃったからね。

巨人さんから逃げるとはいえ、その行動は軽率だった。反省つ。

「ん？ あれ、華葉。あたしくしがあげた薬は？」

「あ、それ？ 右腕が石化している女の子がいたから、とりあえず全部あげちゃった」

「そう。華葉自身は、特に負傷してないのね？」

「うん。どれが石化に有効なのか解らなかったからね。そ、その。

まずかった？」

「ふうん。別にいいのよ。華葉が無事なら、ね」

ほっと安堵して、ゲルズはシンマラへ視線を戻した。

「しばらくすれば、元気になるわ。それまで、静かなところで休みましょう」

ゲルズはシンマラに肩を貸して、立ち上がるのを助ける。

「歩ける？」

「何とかね」

ふと、月明かりが何かに遮られた。

「あ、折笠華葉だ」

「うえ？」

「み、見つけたぞ。とうとう」

「おい、今はそれどころじゃないぞ」

見上げると、近くには大勢の巨人さんがいた。

彼らはあたしを見下ろして、拳をパキポキと鳴らしている。

「むう。惜しいな」

「そうだ。今は生存者を探すのが先決だ」

どうやら、あたしを見逃してくれるらしい。ほっ。

「血気盛んねえ。どうして巨人は、強者つわものを見ると一戦交えたがるのかしら」

「あははっ。ベルゲルミルを負かすほどの実力を持つ人間なんて、そうはいないからね」

あきれれるシンマラに、うれしそうなゲルズ。

「とにかく、今はここを離れましょう。生存者搜索の邪魔になるだけだわ」

「うん」

「ん？」

あたしはゲルズに離れるよう目配せする。

「えっと」

気づいたゲルズが、シンマラをあたしに預けた。

「だいじょうぶ。任せて」

あたしはシンマラをお姫様抱っこする。

「な」

「うしよっと」

シンマラは突然のことに顔を真っ赤にする。

「ど、どうしてこんなこと」

「だって、このほうが動きやすいし」



「あ、あなたねえ」

よく解んないけど、シンマラは不機嫌。唇をとがらせて、そっぽ向いちゃった。

「お、重くないわよね？」

「え？ んつと、軽いからだいじょうぶ」

「そ、そう」

あ、それが気になってたんだ。

「よいしょつと」

ゲルズは荷袋を背負い、あたしに急ぐよと目配せする。

「あのさ、ゲルズ」

「ん？」

ゲルズが向かう方角が、ちよつと気になった。

「そつちの方向、橋じゃないよね」

「ふたつの石橋は壊れてるの」

え、もう片方もやられちゃったの？ それじゃあ、どつやってヨ

ツンヘイムに ああ、そついやその手があつたね。

「だつたら、あたしが跳ぶよ」

「と、跳ぶつ？」

「もしくは、巨人さんの手や肩に乗つて、渡らせてもらつとか」

「ああ。その方法があつたわね」

「？」

なんだろう。ゲルズの様子が、ちよつとおかしいような。

「そつよね。そのほうが、より確実よね」

腕を組んで、何度もうなづいてる。ちよつち変だ。

「ゲルズ。どこか行きたいところがあつたの？」

「え、えつ？ そ、そんなわけないじゃなつ」

解りやすい反応だつた。

しかも、指先で耳たぶを触つてる。この仕草、何度も見たような。

「あ、あたくしは……」

「寄り道したいのなら、別に構わないわよ。ウトガルズへの道は、

私は熟知しているし、ね」

何か隠しているゲルズに、シンマラはこんな提案をした。

「ううん。やっぱいいよ。ふたりに迷惑をかけるだけだし」

「言ってくれるわね。気がかりなことをひとつやふたつ残して  
いては、旅もままならないわ」

「っ」

シンマラの言葉に、ゲルズは歯噛みしている。

何か、思い残したことがあるのかな。

「あたくしのはいいわ。さあ、ヨツン Heim に戻ってウトガル  
ズへ向かいましょう」

「……………」

シンマラもあたしも、それ以上は追及しなかった。

石橋のほうへ戻ってはきたものの、やはり壊れて渡れない。

しかも海の上には巨人さんが数十人いる。

暗い中、何かを探しているようだ。

「島の周辺と、島に立ち入って生存者を搜索しているのね」

「後、敵の残党がいるかどうかもね」

ゲルズとシンマラは怖いことを言う。

「もう少し、早く対応できていれば」

「言ってもしょうがないわね。華葉、私達は自分にできることを  
精一杯やったわ。でも結果がこれよ。まだまだ、未熟なのよ。私達  
はね」

「そう、だね」

ふたりの言うことは、間違ってた。

「おっしやあ！ 今晚は、こいつで腹ごしらえだなあ」

「やったな。でっかいクジラだぜえ」

「こっちにゃ、鮭もあるぞお」

ゲルズは手を振って、近くで漁をしていた巨人さんと呼ぶ。

「お〜い」

「ん？ おや、そこにいるのはゲルズか。お、折笠華葉にシンマラ様も」

巨人さんが海を歩いて、こっちにやってきた。

ただ、あたしを見る目が怖いよっ。獲物を見つけたみたいなき感じだったし。

「ひとつお願いがあるの。あたくし達を、向こうまで運んでくれな  
いかしら」

「む。シンマラ様が負傷しているのか。よし、分かった」

巨人さんは手の平を差し出した。

あたしたちはそれに乗り、向こう側の石橋に足をつける。

「用はそれだけか？」

「ええ。後は任せるわ」

「ああ」

巨人さんは特に何も言わず、あたしたちから離れた。

「普通、ここは事情聴取するところじゃない？」

「シンマラ。名の通り巨人はね、頭のほうは使い慣れてないのよ  
人差し指で、頭を指し示すゲルズ。

それを見て、シンマラはあきれているようだ。

「まあいいわ。余計なことに時間を取られなかっただけ、マシだと思  
いましょう」

ヨツン Heim に辿り着き、あたしたちは街道を少し進む。

「ここまで来れば、巨人兵に見つからないでしょう」

橋の付近にいますと、あたしが不安なのだ。

ゲルズはそれを察して、外れのほうへ連れてきてくれた。

「もう真っ暗だね」

「あら、そうでもないわよ」

あたしの腕から逃れたシンマラは、左手に炎を灯す。

「無理はしないでよ。ほら」

「ふふつ。ありがとう」

ゲルズの気遣いに、シンマラはお礼を言って消火する。

調子が狂うのか、ゲルズは両手に灯した炎を地面に置く。

「これで暖まりましたよ」

「もしかして、ここで夜営するの？ ゲルズ」

「そうよ」

「あら、テントがないと厳しいわよ。夜風、雨がしのげないと風邪を引いてしまうわ」

とかいって、シンマラは左手からテント一式を出現させる。すこつ。

「ば、バカっ」

「う」

ゲルズが注意しながら、シンマラの身体を支えた。

「さすがに、きついわね」

「無理はしないでって言ったでしょう？」

「ご、ごめんなさい」

シンマラは草むらの上で腰を下ろし、テント一式とあたしを交互に見やる。

「あ、あたしに組み立てると？」

「無理なら、やり方を教えるわ」

「あ、だいじょうぶ」

「へ？」

あたしは屈んでテント一式を確認する。

杭が四つに、丈夫なひもが四本、大きな布が二枚、毛布が一枚だ。布は地面に敷くやつと、上に被せるやつだね。

うむ、どうにか組み立てられそうだな。

「ガールスカウトやってたからね。これぐらいは苦じゃないよ」

「す、すかうと？」

「あ、なんでもない。気にしないで」

あたしは雨傘と剣を焚き火の近くに突き刺す。  
それから組立作業を始めた。

「華葉。あたくしも手伝おうか？」

「あ、うん。お願い」

火をシンマラに任せて、あたしとゲルズはテントを組み立てる。  
ハンマーはないので、代わりにあたしは足で踏み込んで、杭を打ちつけた。

「器用なものね。道具がないなら、自分の手足だなんて」  
「う」

「あら、ごめんなさい」

シンマラに言われて、落ち込んだ。

やっぱりあたし、もう普通の女の子じゃないんだね。

「余計なこと言っていないで、シンマラ。中で休んだらどう？」

「そうね。なら、お先に就寝するわ」

組み立てたテントに、シンマラが先に入る。

「これって、四人用？」

「ええ、それぐらいの広さはあるわね」

「ふうん」

中は広々としている。

あたしはシンマラに毛布を渡して、あいさつした。

「じゃあ、おやすみなさい」

「ええ。ゆっくりさせてもらうわ」

あたしはテントの出入口の布を被せて、その上に石を置いた。

「あたしたちは、見張りだね」

「そうね」

あたしはゲルズの隣に座り、焚き火を眺める。

「丸太とか、そういうのないかな」

「別に地べたでもいいわよ」

「でも」

近くに何かないかなと、探していたら。

くうづうづうづうづう。

「あ、あははは」

お腹の虫が、騒いじゃったよ。

「あたくしもお腹空いたわね。でも、何も持ち合わせてないし」

「ご、ご飯なしっ？」

「晩ご飯、食べてないからねえ。うう、激しい運動したから。あたし、お腹ぺこぺこ」

「ガストロプニルに戻って、何かいただいでくる？」

「面倒になりそうだから、やだ」

「ふふっ。いつそのこと、巨人達に練習試合を吹っかけて、全員撃破するってのは？」

「そんなことしてたら、いつ旅を再開できるか解らないよ」

「それもそうね」

ふと、後ろのほうで何か光った。

振り返ると、シンマラが顔と手を出している。

「ほら、リンゴよ。これでも食べなさい」

「し、シンマラ。またあなたは、物質化を<sup>マテリアライズ</sup>」

「別にいいじゃない。ほら、食べるの？ 食べないの？」

ゲルズの注意を無視し、シンマラはあたしたちに餌<sup>え</sup>づけをする。

「い、いただくわよっ」

「うん。お腹が空いたよお」

涙目であたしたちが手を差し出すと、シンマラはにこりと微笑んでリンゴをくれる。

「あ、ありがとう。シンマラ」

「いいのよ。私もひとつ食べて寝るから、あなた達も無理をしないでね」

「もう起きちゃダメだからねっ」

「わ、解ったわ。ゲルズ」

シンマラが再び寝たのを確認し、あたしたちはリンゴを手で磨き、一口かじる。

「ん。おいし」

「そうね。瑞々（みずみず）しくて、果汁が溢れるわ」  
最近、リンゴばっかだね。

正直なところ、これひとつじゃ足りない。

うっつ、こめっ、米が食べたいつ。

「か、華葉？ その、華葉から殺気に近いものを感じただけど…」

…」

「なんでもないよ」

ゲルズも、それなりに気を感じることができるようだ。

「「ごちそうさまでした」」

同時にリンゴを食べ終えて、手を合わせてその音頭を取る。

「冷えてきたね」

「そうだ。これの中に」

ゲルズは荷袋から、藍色のマントを取り出した。それと銀のブローチも。

「これは華葉が羽織りなさい」

「うん」

それを受け取り、装備する。

「あたくしのは、と」

その中から黄金のブローチと、黒のマントを取り出すゲルズ。  
それを羽織り、ゲルズはちらつと後ろを見やる。

「寝たのかしら？」

「静かだから、多分そうだよ」

「タヌキ寝入りかもしれないわ」

「そ、そこまで疑わなくても」

あたしはマントをつかんで、夜空を見上げる。

星が瞬いてて、とってもキレイだった。

「華葉」

「ん？」

あたしはゲルズのほうを振り向く。

「あ」

ゲルズは服の中から金の指輪の首飾りを出して、それをぎゅっと握ってる。

「どうか、した？」

深刻な顔をしてるゲルズ。あたしは心配になって声をかけた。

「これ、ね。実は、結婚指輪なのよ」

唐突な告白に、あたしは「ふえっ？」と間抜けな声を出しちゃったよ。

「あ、ごめん。いきなりだったわね」

「え、えっと。ゲルズって、結婚してたの？」

「ええ。女の子も産んでるわ」

ま、マジでっ？

「か、華葉？ 顔が、ちょっと変よ」

「あ、ご、ごめん」

その告白にびっくりして、どうリアクションすればいいのか解らなかつたんだよっ。

深呼吸を繰り返して、冷静になってからゲルズに質問する。

「その指輪。お花に水やりしてる時に……」

「覚えてたんだ。そう、あの人もきつとこれをしてるでしょうね」

「え、え？ ゲルズの旦那さんって」

「音信不通よ。生きているのかも、死んでいるのかも解らない」

行方不明なんだ。

「経緯いきまつを語るとね。あたくしはあの人と、駆け落ちしたのよ」

「か」

かけおちっ？

「じ、順序を追って説明してくれないかな」

「そうね。話が急で、飲み込めなかつたでしょ？ ごめんね」

一息ついてから、ゲルズはあたしに語ってくれた。

「当時、あたくしはヨツンヘイムに住んでいたの。ミドガルズからやってきた男性に恋をして、婚約したのよね。でも、ベルゲルミル



はそれをよく思わなかった。周りも大反対。だからあたくしとあの人、ミドガルズへ駆け落ちした。それからしばらくして、あたくしは女の子を出産したわ。すっごく痛かったのを覚えてる。その子が産まれて、数ヶ月が経ったある日。ヨツンヘイムからの巨人の捜索隊に見つかり、あたくしはあの人と子どもから引き離された。それからというもの、あたくしはガストロプニルで謹慎よ。外出も単独では許されなかった。あれから十年近く経つけど、あの人とあの子は無事なのかしら」

「ゲルズ」

「ん？」

「もしかして、ふたりを捜したいの？」

「そうね。でも、治安のよくないミドガルズで十年なんて。手がかりも何も無いもの。この黄金の指輪以外は、ね」

「名前は？」

「夫の名前は、スヴィプダグ。子どもの名前は、ルナっていうの。あ、そういえば」

「ん？」

「ルナには、古傷があるの。左のこめかみに、三日月の形をした傷がね。それが、名前の由来なのよ」

「そっか」

「そっかって。まさか、捜すつもり？」

「ゲルズはそうしたいんでしょ」

「無理よ。あまりにも広すぎる」

「そうやって諦めていたら、何も見つからないよ。あたしだって、元いた世界に通じてるかどうかも解らない洞窟を目指しているんだ。何事も、やってみるしかない」

「っ」

ゲルズはそっぽ向いて、首飾りを強く握った。

「あたくしは、華葉みたいに強くないのよ」

「そんなことない。あたしは、弱いままだよ」

「弱い？ どうして、そんなことを言うの？」

剣を見て、フレイヤを見逃したことを思い出した。

「あたしはね、フレイヤと戦ったの。彼女を、この手で正せなかった」

「ふ、フレイヤと？ 華葉、あなたはフレイヤと……」

「ごそつ。後ろのほうで物音がした。」

「そう殺気を向けないで。華葉、あなたのは私でもきついのはよ。振り返ると、テントから顔を出したシンマラが注意する。」

「あ、ごめんなさい」

「それよりも、華葉。あなたはフレイヤにとどめを刺したの？」

「逃がしました」

「な、どうして、どうしてフレイヤを殺さなかったの？」

「そう言われると、どう答えたらいいのか。」

シンマラから視線を外すと、残念そうに「なるほどね」「とつぶやく。」

「あなた、寝た振りして話を聞いてたわね？」

唇に手を当てて、目を細めるシンマラ。

その反応は、はいそうですと答えてるようなものだ。

「シンマラは、フレイヤを殺したほうがよかったんだ」

「ええ。すでに彼女はアーシルのひとり。生かしていてもいいことはないわ」

「でも、殺すことで全てが解決するわけじゃないよ」

「言いたいことは解るわ。でもね、アーシルは災いしか生まないのよ。華葉、あなたは甘いわね」

甘い、か。

シンマラは、あたしを甘いと見るんだね。

「ちよつと、シンマラ。華葉だって、悩んだのよ」

「悩む？ 殺すべき相手を目の前にして、見逃すことが？」

「……………」

ゲルズはそこで黙ってしまった。

「殺す、べき？」

「ええ。華葉、忘れたの？ フレイヤは、フレイの妹よ。フレイはスキルニルという従者を使って、その彼女。ゲルズを誘拐しようとしたのよ」

「それは解ってる。でも、でも、殺すことが最善だとは限らないよ」

「最善も最良も関係ないわ。あなたは正すと言ったわね？ 戦いの最中、華葉はフレイヤを正せると思ったの？」

「っ」

核心に触れられて、あたしは動揺してしまった。

「思えなかったのなら、どうして屠るのをためらったりしたの？」

「だ、だって」

「生かしておいたら、また災いをもたらすわよ。あのウアンティレズドのような、国が滅びる事態がまた発生するかもしれないのよ？」

あなたは、いったい何のために戦っているの！」

何のために？

「あなたはエルザから何を学んだの？ その力を何に振るうべきか、見誤るようなことは言っていないはずよ！」

「あ、あたしは」

「あたしは？ 言つてごらんさい」

「あたしは、おばあさんから……この力は、あたしの正義を表現するものだと教わりました。あたしの正義に反することに、この力は使いたくない！」

「正義に反する？ あなたは、人為的な災いによって、人命が失われるのを正義に反すると言えるの？」

「っ」

「放置したら、また何かやらかす危険な存在を、生かす事があなたの正義なの？ そんなのふざけてるわ。考え直すべきよ」

「そう思ってた！ でも、いざそうなると……怖くて、怖くて震えちゃうの。皆を守るためなら、相手を殺すこともいとわなくて、そう覚悟してた！ けど、けどね。フレイヤと対峙している時に……」

…この手が、足が、急に動かなくなったの」

「殺すなんて、できない。あたしは、あたしはそんなことできないよ。だって、だって、誰だって死ぬのは怖いじゃんかあっ！」  
涙ながらに、あたしは声を張り上げる。

シンマラとゲルズは、黙ってあたしの想いに耳を傾けていた。  
「そっ」

にこりと微笑むシンマラ。

「何がそっ、よ。華葉に、失望でもしたの？ シンマラ」  
「違うわ」

ゲルズの質問に、シンマラは首を左右に振る。  
「安堵したのよ」

「え？ ち、ちょっとあんた」  
それだけ答えて、シンマラはテントの中に戻った。

「逃げられたか」  
ゲルズは頭をかいて、ちらつとあたしを見た。

「ふう」  
袖で涙をふいて、あたしは夜空を見上げる。

「ごめんね。ゲルズ」  
「いいのよ。華葉は、華葉なりにやるべきことをやった」

「そっじゃなくて」  
「ん？」

「ちよつと、うるさくしちやつてさ」  
精一杯の笑顔で、ゲルズに謝る。

「別に、いいわよ」  
頬を赤くして、ゲルズはそっぽ向いちゃった。

チュンチュン。

小鳥のさえずりが、近くに聞こえる。

「んみゃ〜?」

あくびをして、目を開けると。

あたしの肩に小鳥さんがいて、クチバシでつんつんと頬をつついていた。

「んん〜」

あ、体育座りしたままで寝ちゃってたんだ。よく倒れなかったなあ。

「お、起こしてくれたの?」

小鳥さんに話しかけると、こくんとうなづく。

「あら、おはよう」

「し、シンマラ。おはよ」

シンマラは焚き火の面倒を見ていた。

「あれ、ゲルズは?」

「テントの中で寝てるわ。もう少しすれば起きるでしょう」

「そっか」

後ろを振り返り、テントがあることを確認。

中からは、気持ちよさげな寝息が聞こえた。

「起きて早々悪いんだけど、華葉。あなたにひとつお願いがあるの」

「な、なに?」

「我が夫、スルトをこてんぱんにやっつけてくれない?」

「ふえ?」

いきなりそんなことを頼まれて、お口があんぐりだよ。

「そ、その。ベルゲルミルからも、戦うことになるかもって聞いてはいるよ?」

「なるかもって。まあいいけど。そ〜ゆ〜わけで、華葉。あなたにスルトを叩き直してほしいのよ」

「た、叩き直すって。な、なんで?」

「最近、あの人から覇気が感じられないのよ。昔は生き生きしてかっこよかったのにさ。前に会った時から考えてただけで、痛い目に遭わせないとダメね。私がほれたスルトに戻すには、強者と一戦つわもの

やりあうしかない。華葉、あなたならスルトにも勝てるわ」

「そ、そ〜ゆ〜理由でえ？ で、でも、不安だよ〜」

「そうねえ。ムスペルヘイムの環境は、華葉にはつらいでしょうけど。すぐに慣れるんじゃないかしら」

「な、慣れるって。そんな無茶なあ」

「とにもかくにも、我が夫に活を入れてちょうだい」

「は、はあ。具体的に、アドバイスとかはないの？」

「スルトはムスペルの長。当然のごとく、炎の巨人ね。見た目的にも大きい。力はあるし、炎を操れる。所詮はそれだけよ」

「そ、それだけって。過小評価してるんじゃない」

「そうでもないわ。破壊というのは、実に単純明快なのよ。存在するものを、有から無へと消し去ってしまう。着火、焼却、炭化。これらの過程が恐ろしく短い。我が夫スルトは、そういう純粋な破壊の力の持ち主なのよ」

肩をすくめて、シンマラは半目であたしを見る。

「怖い？ 華葉」

「そ、そうでもないよ。つまり、スルトの炎に触れるなってことでしよう？」

「一応言っけど、スルトの炎は青いわよ」

「え？ ほ、ほとんど見えないじゃない」

「ええ。炎はある温度を越えると、赤から青くなる。スルトの炎はほとんど青なのよ。目視で捉えるのは不可能に近い。ましてやムスペルヘイムは火と熱だらけ。幸いなことに海に囲まれているから、危なくなったら海へ退避するといいわ。自息法もやりやすいからね」

「そ、そ〜ですか。ふむふむ」

「まずは、華葉。あなたが青い炎に耐えられるようにならないとね」

「ええっ？ お、おばあさんにもそんな方法は教わってないよお」

「気鎧きがいは極めると、溶岩を風呂とすることもできる。エルザにもできるんだから、華葉にもその素質はあると思うけど」

「よ、溶岩をお風呂につ？ あのおばあさん、そんなことまで……」

びつくりですつ。

「私とやりあつた時に、青い炎で熱いと叫んでたからね。ムスペルヘイムの環境は常にそれだし、スルトの気も灼熱そのものだから。高熱に耐えられないと、どうしようもないわ」

「うわつ。それやだあつ。」

「ふふつ。見るからに嫌そうな顔をしたわね」

「うう。あたしには無理かも」

「そんなことないわ。華葉の順応力なら、すぐに灼熱に適應できるはずよ」

「そ、そゝかなあ」

腕を組んで、あたしはシンマラの顔を見上げる。

「華葉。話は変わるけど、ひとついいかしら」

「あ、はい。改まって、どうしたの？」

「あなたは、私の言動を信じているようだけど。それはどうして？」

「は？」

シンマラがおかしいことを言うので、あたしは反応に困る。

「逆に、どうしてシンマラを疑わないといけないの？」

「うふふ。私はあなたを、ゲルズを痛めつけたのよ？ それに、ムスペルヘイムに次元の穴があると聞いて、そこから出た物品を見るなり確信を得たみたいだけさ。それに今、夫を倒せなんて無茶な要求までして。そんな私を、あなたはどうして信じられるの？」

シンマラが何を言いたいのか、その途中で解つた。

「華葉。私はあなたを罠にかけようとしているかもしれないのに、疑心も何もないんだもの。こちらがあなたが何なのか疑ってしまうわ」

「はあ。別に、あたしはシンマラが嘘を言っているなんて思わないもの」

「これまたどうして？」

「何となく、かな。シンマラは悪い人じゃないよ。そりゃ、最初はいじめられたけどさ。話してみて、優しさが感じられたもん」

「優しさ、ね。それすらも虚偽かもしれないの？」

「それは違うよ。直感だけど」

「ふうん。そう」

シンマラはちよつと納得いつてないみたい。

前髪を指先で遊んでるからさ。

「それがあなたの言う、正すなのね」

「え？」

「私は、あなたに正されたひとりよ。あなたに出会えて、よかった  
と思っっているわ」

そ、そんなこと言わないでよ。は、恥ずかしくなるじゃない。

「はい。朝食のリンゴよ。こんなものしかなくてごめんね」

「わあ。ありがとう。シンマラ」

ゲルズが目覚めるのを待ち、それからテントを解体して出発し。  
朝食にリンゴをいただきながら、街道を歩くあたしたち。

もうすぐ太陽が真上に来そうだなあつていう時に、シンマラがあるところを指差した。

「あれが、ウトガルザ・ロキの城よ」

街道から外れた先にある半島に、それはあつた。

「え？ あ、あんなに目立つところに建物が？」

ゲルズの言うように、堂々とお城が建っている。

しかもそれはガストロプニルと同じくらい、でつつつかい。

「シンマラ。あまりにも不自然じゃない？ 相手は、幻術使いなん  
でしょう？」

「そうだけど。付近に何も無いほうが、幻惑しやすいのよ。華葉、  
あなたの目に何か見えるものはある？」

「城以外は、特に何もないよ」

近くには海岸もあるし、奇妙なものはなかった。……今のところ  
は。



「着いたわよ」

シンマラの案内で、城門の前まで難なく辿り着いた。お城の周りには、人がまったくいない。

「門番とか、衛兵はいないの？」

「見当たらないわね。不用心にもほどがあるけど、これが当たり前と考えるのが妥当よ」

「え？ そ、そうなの」

「ウトガルザは、孤独を好むからね。彼の周りには、それほど人はいないのよ」

それはそれでさみしいような。

「あ、ここも巨人用と小人用の扉があるんだね」

「え？ そんなのあったかしら」

シンマラが首を傾げている。

あたしはドアノブを手にして、小人用の扉を開けようとしたら。

「うえ？」

あ、開かないっ。

引っ張っても、押しても、横にスライドさせようとしても、開かない。

「華葉。それって、絵じゃない？」

「え、え？」

「そう、絵画よ」

いやいや、今は驚いただけだよ。

ドアノブから手を放して、じいっと観察する。

「た、確かに。これ、絵だよ」

手でぺたぺたと触ると、木材の感触がない。ざらざらとした、石の感触がする。

「この木目とか、よく表現できたね」

「か、感心してるの？」

「あ、うん。ゲルズも、よくできてると思わない？」

「思っっちゃ思っけれども。今は、この城に入る方法とか、中にい

る人呼び出すとか。そういう発想が先に来ないの？」

「あ、ごめん」

いやあ、全然っ。

純粹に、このだまし絵の完成度にびっくりしてたよ。

「シンマラ。これ、なんなの？」

ゲルズが話しかけると、シンマラは壁に描かれた絵に触れて、こんな一言。

「これは、ウトガルザ・ロキのものではないわ。明らかに、他者に  
よるものね」

「どういうことよ？」

ゲルズとシンマラは絵から距離を置いて、大きな門を観察しながら話し込んでる。

「ウトガルザは絵の才能がないもの。しかもこんな、完成度の高い  
だまし絵を……こんなことできるの、ひとりしか思い浮かばないわ」

「それは、誰よ？」

「中に入ってみましょう。この大きな門は、おそらく本物だわ」

シンマラはそう言いながら、城門を引いた。

流されたゲルズは、不満気に頬をふくらませてる。かゝわいいつ。

「よくそんな大きいの、開けられるよね」

鈍い音を立てて開かれるそれを見て、思わずつぶやくあたし。

「あなたに言われたくないわ」

「う」

確かに。シンマラの言う通りだね。

現にあたしも、それくらい難なく開けられるだろうし。

「中は真っ暗ね」

「よしっ。入ろう」

我先にと突っ込んだら。

「うぴゃっ」

鼻を、思いつきりぶつけちゃった。

「あいたたた」

「だ、だいじょぶ？ 華葉」

「ん？ これも、だまし絵ね。真っ黒な板を、出入口に置いておくなんて」

冷静に分析するシンマラ。

少しはあたしの心配してよっ。

「華葉。とりあえずひとつ」

「な、なに？」

鼻を押さえてるので、声が変わります。

「その黒い壁、蹴破ってちょうだい」

「あいあいさっ」

ここまでされて、あたしは感心すると同時に怒りが込み上げてきたよっ。

「とりゃあっ！」

分厚い黒の壁を蹴破って、あたしたちは城内に突入する。

「なんだと？ ちっ。こう簡単に突破されちまつたじゃねえか」

暗闇の中、何者かの声がする。巨人らしき影がひとつ見えた。

「あんのクソジジイめ。今度顔見せたら、ブツ殺してやる」

物騒な台詞を口にして、その巨人は明かりを灯した。

城内に、ほたるのような淡い輝きが漂う。

「ようこそ。我が孤城、ウトガルズへ」

奥にある玉座に、ボロボロな服と錆だらけの枷かせと鎖を身につけた、老巨人がいる。

見た目は、全身毛むくじゃらだ。肌は黒く、筋肉がすごいい。

「女の客人とは、随分と久しぶりだ。ん？ お前は」

「……………。ウトガルザ・ロキ。私の顔を忘れたとは言わせないわよ」

「ほう？ シンマラか。てことは、その後ろにいるふたりは」  
バタンッ。いきなり城門が閉められた。

「な、これは」

ゲルズがあたしを見ながら、大きな門をドンドンと叩く。

これは、幻術じゃない。

あたしがそう目配せすると、ゲルズは他に出入口がないか探し始めた。

「シンマラよ。それがしに生け贄を捧げに来たとは、実に喜ばしいことだ」

「し、シンマラっ!」

老巨人の一言で、ゲルズが怒って両手に火を灯す。

当のシンマラは、ゲルズを無視して何かを探しているようだ。

「ヨルムガンドへ差し出す生け贄は、ひとりでもいいはずだぞ？」

それもふたりとは。早急にムスペルヘイムへ帰還したいんだな。い  
いだろう」

「あ、あんた。やっぱり、あたくし達を畏にはめようとしたのね」

シンマラはゲルズを一瞥して、それから老巨人へ視線を向けた。

「どちらも美しい娘だ。生け贄にするには惜しい。そうだな。そちらの金髪の娘。それがしの嫁にしてやろう。感謝するがいい」

「な、ふ、ふざけないで！ 華葉を生け贄になんて、させないから  
!」

老巨人は玉座から立ち、擦りきれたカーペットの上を歩いてくる。

「シンマラ。あんたは後で始末してやるから、覚悟なさい!」  
「……………」

黙ったまま、シンマラは右腰に差していた剣を引き抜いた。

「な」

それからあたしへと、斬りかかってきた。

「っ」

唐突だったのと、荷袋を背負っていたので、雨傘を合わせるのが  
少し遅れた。

あたしは力任せに剣を払う。

シンマラは後退し、あたしの動きを注視する。

「ふふっ」

今ので確信が持てた。

あたしはマントを外して、それと荷袋を投げ捨てる。

「く、華葉。華葉はシンマラを頼むわ」

う、なにこれ？ く、くさっ。

思わず鼻をつまんでしまう。ゲルズもシンマラも同じことをした。

「どうした？ それがしはずツツと、風呂に入っていないからな  
実にクサイだろう？」

それを、自慢げに言わないでほしい。

「ふん。“ギャザー”！」

「な、きゃっ」

ゲルズが玉座のほうへ引き寄せられ、そこに縛りつけられた。

「く、うぐっ。く、くさっ」

「その玉座の鎖は簡単には解けんぞ。さあ、もうひとりの生け贄を  
巨大蛇に喰わせるまで、そこでおとなしくしているがいい。それが  
しの花嫁よ」

「ふ、ふざけんじゃないわよっ！」

ゲルズは炎で抵抗を試みる。

しかし、ゲルズの魔法は打ち消されてしまう。その時、鎖が妖しく  
発光していた。

「く、くそっ。華葉、華葉っ。あなただけでも逃げなさい！」

できないよ。それだけは。

「シンマラ。それがしが巨大蛇を召喚するまで、時間を稼げ」

「ええ。任せなさい」

シンマラは剣を両手に握り締めて、あたしとの距離を詰めてきて  
いる。

「この、シンマラっ！ 後で覚えときなさいよ」

ゲルズの叫び声と同時に、シンマラが踏み込んできた。

「いい反応ね」

下段からの切り上げを、あたしは雨傘で押さえる。

「……………」

あたしは無言で、シンマラとの罅迫り合いじはせを演じた。

老巨人は、小声で何か唱えている。

「さあ、華葉。いつかの再戦といきましょう」

「そんなの、ごめんだね！」

あたしはシンマラの剣を足で踏みつけ、右手で思いきりぶん殴る。  
「ワンパターンよ。それじゃ、私をミディアムぐらいにしか焼けないわ」

左手で受け止められた。

それだけじゃない。青い炎を灯して、火傷させようとする。

「あゝちちちちっ！」

あたしは我慢できず、雨傘でシンマラの手を払った。

「ちい。でも、まだ青い炎は有効のようね？」

「ふう〜ふう〜」

息を吹きかけて、右手を冷ます。

「シンマラ。どうしてこんな」

「目的の成就には、手段は選んでられないのよ」

ふと、右腰に差してある剣が動き出そうとした。

とつさにそれを右手で制して、あたしは左手に持つ雨傘を前に突き出す。

「こんな窮地きふちでも、勝利の剣を使わないのね」

「力に頼るのは、愚か者がすることです」

「ぬああッ!？」

あたしは地面を踏み込んで、老巨人を転ばした。

「愚者ですって？ 華葉、あなたは力を馬鹿にしているの？ それだけの力を手にした、あなたがあっ！」

「くっ」

両手持ちの剣を、雨傘で合わせる。

力は互角。またしても罅迫り合いになった。

「こんの、ドちくしょうがああああああああああああああああああ

「ッッ！」

老巨人が右腕を振り上げて、あたしへ殴りかかってくる。シンマラに突き飛ばされ、体勢を崩してしまった。

「うあああつ！？」

拳を脳天に受けて、あたしは両膝をついてしまう。

「こ、の」

「なんだと？」

あたしは雨傘を投げ捨て、左手だけを床につける。

それから老巨人の右手首に自分の手足を絡め、それを力任せにひしいだ。

「ぬぐあはあああああああああッッッ！？」

ガゴキツ。鈍い音がした。

間違いなく、関節が外れて、骨が折れてる。

続けてあたしは、痛みに喘ぐ老巨人を蹴飛ばし、壁にめり込ませた。

「な、う、ウトガルザを……」

左腕をバネにして、軽く跳び上がる。

床に足をつけて、深呼吸した。

「ぬ、ぬぐあああッ！ こ、小娘がああああああッッ！

よくも、よくもああああああああああああッッッ！

あたしね。護身術として、お父さんから柔道技を仕込まれてるんだよね。プロレス技もちよっちあるけど。

といっても、相手は巨人だ。通用する技が限られる。

「くっさ」

鼻をつまむほど、老巨人はくさかった。加齢臭どころじゃないよっ。

カビくさいし、汗くさいし、もう何をどう言ったらいいのかわからない。

「か、華葉おおおおおおおおおっ……」

背後から斬りかかるシンマラを、あたしは右の裏拳で押し留めた。といつても、シンマラには拳を当てていない。

大気を叩いて、シンマラが前進するために必要な運動エネルギーを、衝撃波で相殺したのだ。

「な、く」

尻もちをつかされて、シンマラは剣を片手に飛び起きる。

「こ、この小娘ええええ。覚悟しろおおおおおおおッ！」

老巨人は壁から抜け出て、あたしを血眼で見つめている。

「か、華葉。後ろ！」

やっぱり、ダメだ。

相手を傷つければ傷つけるほど、あたしの手足が言うことを聞かなくなってくる。

「ほ〜ほほほ。ちよ〜つとばかり、お待ちなされ〜」

後ろのほうで、ご機嫌なおじいさんの声がした。

「シンマラ。殺気のない剣で遊ぶのは止め〜んしゃい」

「ヴァフスルズニル。やっぱり、あなただったのね」

「ん〜？ どうやら、僕のトリックアクトはお気に召したよ〜じやな〜」

シルクハットを頭に被り、ステッキを振り回す。このマジシャンみたいな服装のおじいさんは何者だろう。

今まで、その気配が微塵にも感じられなかった。

「おい、このクソジジイ！」

「ま〜ま、ウトガルザ・ロキ。そうかつかするでない」

シンマラは剣を鞘に収めている。

「私はゲルズを救出するわ。華葉、自分でまいた種はどうにかなさい」

「え？」

「その小娘ッ！ すぐに、すぐにお前も押し潰してやるぞッ」

殺気立つ老巨人は左腕を振り上げた。

「おや」



おじいさんは顎の白ひげを指ですいて、片目をつむっている。

「覚悟しろよッ？ 今から、これでブツ潰してくれるわッ！」

振り下ろされる拳を、後退してかわすあたしとおじいさん。

石畳の床がくぼんでいる。かなりの破壊力だ。

「ウトガルザ・ロキ。いゝ加減にせんか」

ブルツ。背後から、凄まじい殺気を感じた。

「ぬッ」

それをじかに受けたせいなのか、老巨人が両膝をつく。

「せっかくの来客じゃとゆゝに、本気になってどくする？ ん。お

や、右手首が折れておるのか。それは、調子に乗った報いとゆゝわ

けじゃのう」

なんだったの、今は。

振り返ると、そこにはにこにここと微笑むおじいさんがいた。

「おゝいしよッと」

不意に、老巨人が後ろに倒れた。ど、どうしたの？

しかも、その腹の上に誰かが立ってるし。

「いえゝい」

うえ？

倒れた老巨人の上にいるのは、とっても小さな男の子。

エメラルドのようなどんぐり眼まなこに、腰こしまである長い緑の髪は、あ

でやかでキレイだ。

顔立ちは中性的で整ってる。男だって言われないと、女の子と間

違えそう。

服装は半袖のシャツに短パン。遊び盛りの男の子が好みそうな格

好だね。

「か、華葉」

「ん？ あ、ゲルズ。無事だったんだ」

あたしはゲルズの肩に手を置いて、ケガがないか確かめる。

「だ、だいじょうぶよ。それより、何がどうなってるの？」  
ゲルズはシンマラのほうを見る。

そのシンマラはおじいさんをにらんでる。

「ヴァフスルズニル。あなたが、だまし絵を仕掛けていたのね」

「その通りっ」

笑顔でVサインしてるよ、このおじいさん。

「ふうん。今ここに、エルザを呼んであげましょうか？」

「む」

シンマラがおばあさんの名前を出すと、おじいさんは硬直する。

「ど、どゆこと？」

「この老人。ヴァフスルズニルは、エルザの旦那さんなのよ」

「え？」

「は？」

これには、あたしもゲルズもびっくり。

「ごっほん。ま、僕は商売どころであるウアンティレズドが壊滅  
してしまい、仕方なくここへ移り住んだのじゃ」

「ンで、オイラがそれを受け入れたんだぜえ。えッヘン」

老巨人の上に立つ男の子が、そこから飛び降りてあたしのところ  
へやってくる。

「ン」

「え？ ど、どしたの？」

男の子があたしの顔を見て、なぜか頬を赤らめる。

「お、お前さ。近くで見たら、けっこ美人だよな」

「は、はあ」

「というわけで、オイラの嫁になれ」

唐突な告白に、あたしは固まってしまふ。

「こっちの金髪ツ娘より、オイラはあんたにほれたぞッ」

「な、なんですって？」

胸を張る男の子へ食ってかかるゲルズ。

男の子はいつの間にか、あたしの背後にいる。

「そう怒るなよお」

いや、そのね。あたしもブチギレしそつだよ。

「うほッ。こいつぁ、いい感触だぜッ」

というのも、この男の子。あたしのお尻を触ってるんだよね。

「なにいッ？」

「捕まえたよ」

素早く振り返り、あたしはその子の腕をつかんだ。

「く、は、反応が恐ろしく速いな」

「それはどうも。ゲルズ、お仕置きを」

「ええ。任せなさい」

両手に火を灯したゲルズが、男の子へと接近する。

しかし、いつの間にかあたしが捕まえているのが  
わら人形に  
なつた。

「な、華葉つ。ちゃんと押さえてなきやダメでしょ」

「そ、そう言われても」

確実に、確実に押さえていたはずなんだよね。

「ウトガルザ。もゝそろそろイタズラは止めんか」

「うゝい」

男の子は、おじいさんにおんぶされていた。

「よッ。今更だけど久しぶりだな、シンマラ」

「ええ。まだまだ若いあなたが、一気に老けて巨大化するなんておかしな話よね」

「ごめんな。あの人形で、ちょこッと遊ぶつもりだったんだ」

「ええ。よりもよつて、私を裏切り者に見立てるなんて」

「いいじゃねえか。仲間からそんなに信頼されてないッて、確証が得られたんだから」

「……………」

あたしたちは城内にある、食堂でお茶をしています。

円形のテーブルを囲んでの、おやつタイムだね。

あたし、ゲルズ、シンマラ、男の子、おじいさん、の順で時計回りに座っている。

「あ、あたしはシンマラの剣を受けた時、本気じゃないって確信があったよ」

「だったら、早めにウトガルザを見つけてほしかったわ」

「ええ？ あたしには、この男の子の気配がまるで感じられなかったもん」

「そう。華葉、あなたでも探れなかったのね」

シンマラは紅茶を一気飲みする。

「以前のオイラだったなら、簡単に見つかっただろうなあ。でもでも、潜伏のコツがつかめてからは、シンマラにも見つけられない。隠れんぼの名人だぜ。ブイッ」

この男の子は、調子いいなあ。

あたしを見る時は、頬が真っ赤になるんだよね。かゝわいいつ。

「何だか知らないけど、腹が立ってきたわ」

カップを壊しそうなゲルズ。

「イライラするなよ。肌が荒れるぜ」

「あんたのせいでしょうが！」

「うおお」

ゲルズに叱られて、男の子はちょっと涙目。

「めんごめんご。だからこうして、詫びてるんじゃないか」

「誠意が足りないわね。勝手にあたくしのことをフツておいて、これぐらいで済むと思ってるの？」

「うう」

さつきから、男の子の隣にいるおじいさんは黙ったままだ。

「まゝよいではな〜いか」

その一言で、場が静かになる。

このおじいさん、あのおばあさんの伴侶だけはある。ただものじゃない。

「さして、シンマラとその旅の一行に聞かねばのう。とはいえ、ま  
くずは自己紹介じゃな。僕はヴァフスルズニルとゆう。そなたらは  
？」

「あ、あたしは折笠華葉です」

「ゲルズですっ」

「改めて、シンマラよ」

「オイラはウトガルザ・ロキ。こう見えて、よわ齡は三桁だ」

は？

「てか、そのお嬢さんの名前は違和感があるな。偽名だろ？」

「そうじゃないのよ。華葉は、異世界から来た人間なの」

「異世界から？ ほほう、してその名称は？」

「えっと、日本だよ」

「……にほん？ ちょッち待て。お前はにほん人なのか？」

「あ、うん。ウトガルザは、日本を知っているの？」

「……………。ああ」

不意に男の子が真顔になる。

「だまされないで、華葉。いつもの嘘よ。ウトガルザには虚言癖が  
あるの」

シンマラが注意しても、男の子は表情を変えない。

「いや、これはマジなんだ。オイラがつい最近出会ったのは」

ゴクリ。

「なあゝはははははッ。うッそびょ〜ン」

ピキッ。

「う、わ、わりい」

ゲルズとシンマラが手に火を灯したので、男の子は平謝りだ。  
ふたりのキレ方が尋常じゃない。どうなだめたらいいのやら。

「だ、だが」

「まだ何か？」

「ちよ、そんなに怒るなよ。待ッてる。シンマラ。あるモンを持ッ  
てくる」

そういつて、男の子は逃げるように席を外した。

「ふゝむ。まま、そう怒らんよゝに。ウトガルザは、場の空気を和ませよゝとな」

「そうは思えないわ。次何かしたら、じつくりと焼き上げてあげる」  
「ええ。ミディウムでは生温いわ。ウエルダン　いえ、黒焦げになるまで火を通してあげましょう」

おじいさんはゲルズとシンマラを見て、顔を引きつらせてる。

だって、出てくる言葉が危ないんだもん。そりゃあ、怒りの矛先がこつちに向くの嫌がるって。

「そゝいえば最近、エルザから手紙をもらってな。できのいゝ女子おなこがひとりいるそゝだから、見かけたら面倒を見てやってくれと。その娘の身体的特徴と服装が書かれたおつたのだ」

「は、はあ」

おじいさんはあたしをじつと見つめている。

「それらが見事に一致してある。しかも名前までもな。折笠華葉といったか。聞くまでもないと思うがの。娘さんは、あのエルザから技を学んだのかゝい？」

「は、はい。おばあさんにはお世話になりました」

「ほほゝう。半日も経たずに師弟関係が解消されて、世話も何もなゝいと思うがのう。まゝ、エルザは昔から素直でない。そゝこが、儂のほれたところなのじゃが」

おじいさんはにこやか笑顔で語る。

「とゝころで、そなたらは何のためにウトガルズへゝ？」

「あ、その。あたしは、ある理由でムスペル Heim へ向かっているんです」

「ほっほゝう。して、その事情とは？」

「その、信じてもらえるかどうか解りませんが。元の世界に帰るためなんです」

「元の世界、か。なるほど。しかゝし、あゝの世界は火と毒に満ちておゝる。生身の人間なぞ、すゝぐに焼却されよゝぞ。自息法ぐ

「はいは使えんと、呼吸すらできぬぞ」

「問題ありません。自息法は使えます」

「そ〜か。ならよい。後でウトガルザに、ヨルムンガンドを召喚するよ〜に頼んでおこつ」

「あ、ありがとうございます」

「よいよい。して、ひとつ気になるのじゃが。娘さんや、問〜てもよいかのう？」

「は、はい。どうぞ」

「ふ〜む。娘さんと巨人の人形との戦いを傍観しておったのだが。娘さんは、何を迷つておるのじゃ？」

見ていたんだ。

「右手首を破壊するまではよかつた。しかし、それからは戦意を感じなかつた。いったい何が、娘さんの戦意を折つた？ 教えてくれまいか」

このおじいさんに、話してもいいのだろうか。

でも、あのおばあさんの旦那さんだし。

話すことで、解決策が見出せるかもしれない。

「あの」

「ん。話す気はあるのか。感心感心」

「えっと、あたしは……相手を傷つけるのが、怖いんです」

「傷つけるのが怖い。ほつほう。たとえそれが悪人であろうと、その行いが自身において絶対の正義であろうと。その行為を正当化できるか否かを問わず、他者を痛めつけるのが嫌というのか。ふむふむ」

「は、はい」

このおじいさん、あたしが何を迷っているのか。端から、見抜いている。

「殺してしまうかもしれない。それでも殺さないと、誰かを守れない。そんなことを考えてばかりで……」

「そうか。なら、儂も娘さんにひとつ伝授したいものがある」

「え？ で、伝授とは？」

「まゝ、そゝ急<sup>せ</sup>くでなゝい。ウトガルザが戻<sup>かえ</sup>つてからでも、話は遅くなかるゝて」

「そ、そうですね」

紅茶を飲みながら、あたしたちは男の子が戻るのを待った。

「お待たせ」

男の子は、テーブルの上に懐かしい本を並べる。

「あれ？ これって、小学校の教科書じゃない」

「し、知<sup>し</sup>ってるのか？」

「わ」

びっくりした。

男の子が接近したのもあるけど、どうしてこっちの世界に教科書が？

「これは、そのジジイが持ち帰ったもんなんだ」

「うむ」

おじいさんは真顔で、その本を見つめていた。

「んなことより、華葉はこれが何なのか知<sup>し</sup>っているんだな？」

「あ、うん。これらは、日本にあるものだから」

あたしの発言で、ゲルズとシンマラの表情が穏やかなものになる。

「虚偽ではないのね」

「でも、華葉の世界のものがどうしてここに？」

謎は深まるばかりだ。

「そんなの知るかよ。異世界に通じる穴があ<sup>あ</sup>ッから、そうな<sup>な</sup>ッてる  
としか言えないぜ」

結論を言えばね。

「しきさと、かの？ この教科書の持ち主の名前だね」

あたしは教科書を手にして、表と裏を確かめる。

うわっ。難しい漢字だ。送り仮名がなかったら、読めないよ。



若郷香乃、ね。

日本に戻ったら、この子を探してみよう。

「ンで、その本はどういう内容なんだ？」

「子どもが勉強するためのものだよ。そんなにおもしろいことは書いてないって」

「そ、そうなのかつ？」

あたしは勉強あんまり好きじゃないし。得意科目は体育です。

「そっか。華葉がつまらないって言うンじゃ、事実そうなんだろうな」

いやいや、君みたいな男の子がちゃんと勉学するために必要なものなんだよね。

……実年齢知らないけど。

「ふむ。ウトガルザの話は、もう終わりかい？」

「ああ。そだな」

「ならば、娘さんや。先刻の場所へ行ってくれぬか。お相手してやるうぞ」

「え、え？ も、もうですか？」

「そうさのう。待つておる間、準備運動でもするとよい。儂はちと準備があるでな。時間がほしいのじゃよ」

「は、はい」

あたしは城内のロビーにやってきて、戦の有様を眺めていた。

「この巨人が、人形だったなんて」

よくできてる。ほんとに。

温もりもあるし、鼓動も感じられる。

人形だと言われなければ、本物の巨人と間違えてしまうほどだ。でも、あの男の子はこれをどうやって動かしていたんだろう。

「華葉。お待たせ」

「あ、ゲルズ。それにシンマラも」

「私達は見物客よ」

ゲルズとシンマラは、倒れてる人形の脇に立つ。

「待たせたの〜」

「ご機嫌な様子で、おじいさんがこちらにやってきた。」

「あれ？ 男の子は」

「ウトガルザなら、夕飯の支度をしておるよ。それと、ヨルムンガンドの召喚準備もすると言っておった」

「あ。ありがとうございます」

「ま〜、それまでのヒマ潰し。余興として、儂と娘さんの試合とシヤレ込もう」

シルクハットにステッキ。

上着を脱いで、白のシャツに黒のズボン。

見た目はどうあれ、あのおばあさんの伴侶だ。油断はできない。

「よ、よろしくお願いしますっ」

「ほ〜ほ。そ〜緊張せんでよろしく。娘さんの悩みを、ひとつずつ解消してやる〜とゆ〜だけじゃよ」

「は、はあ。それでも、ありがたいことです」

深々とおじぎをする。

「礼などいらんさ」

おじいさんはステッキの先端で床をつつき、シルクハットを人差し指で上げた。

「さあ、いつでもよいぞ。かかってこんしゃ〜い」

全身から静かに発気していた。

左手を振って、あたしを誘っている。

「も、もう始まりですか？」

「戦いくばくなど、いつ始まるか解らんものよ。まずは、娘さんのお手並み拝見とゆ〜っ」

ふと、剣が勝手に動き出そうとした。

あたしは右手でそれを制する。

「ふ〜む？ それは、勝利の剣かね」

「し、知っているんですか？」

「ああ。別にそれを使っても構わぬぞ。大して差はないからのう」  
このおじいさんは、かなりの手練だ。剣の反応が、あまりにも強  
い。

「や、やめて」

あたしは、自分の力でおじいさんに挑みたい。

だから、動かないで。お願い。

「ふう」

静かになった。これで、思う存分にやれる。

「では、参ります」

「うむ」

一気に懐に飛び込んで、右手で殴りかかった。

けれども、それは左手の人差し指で下へさばかれる。

「く」

「やるのう」

あたしはすぐさま後退して、雨傘を下に構えてから振り上げる。

「そりゃ」

放った気刃は、ステッキで振り払われた。

「どうした？ 娘さんの実力は、こんなものではなかるう」

「まだまだ、これからです」

「然様か。楽しみじゃわ〜い」

にこやかに微笑むおじいさん。

けれど、その気迫は口調と違って軽くはない。とてつもなく重い。

「はあ、はあ」

知らない間に、息が切れてた。

冷や汗が、額から垂れる。

「ふう」

対峙しているだけなのに、どうしてここまで疲れるの？

おじいさんは、何もしていないのに。

「もう終わりか〜い？」

答える代わりに、あたしはおじいさんの背後から殴りかかった。

「な」

でも、その拳は途中で止まった。

ついさっきここで、あたしがシンマラにしたような、裏拳による衝撃波で勢いが殺されたのだ。

「く」

それだけじゃない。その衝撃波が、圧倒的に重い。

相殺するだけならまだしも、あたしを壁に打ちつけるほどだった。

「う、うぐ」

「確かに、エルザに教えを受けたようじゃな。しかし、妙な違和感がある」

「い、違和感？」

あたしは壁から抜け出て、おじいさんの背中を見つめる。

こちらを振り向かずに、おじいさんは話を続けた。

「華葉とやら。お前さんはエルザと違う。エルザのように、剛の戦い方をするでない」

「「うぐ」？」

「剛と柔じゃ。力と技、どちらに重きを置くかで戦い方が変わる。

華葉、お前さんは力にこだわる必要はない。小手先の技中心に戦うのじゃ」

「わ、技を……？」

「然様。エルザは姿こそ人間そのものじゃが、巨人族の血を引く。

華葉、お前さんは力の果実を口にしたとしても、所詮は人間。巨人族に力で勝ることはできない。エルザの真似をした戦い方など、華葉にとっては重荷じゃぞ。自分らしく戦う術を編み出せ。さもなければ」

さもなくば？

「いつか、自分の力に、自身を砕かれるぞ」

「っ」

おじいさんはステッキで、自分の右肩をトントンと叩いてる。

「あたし、らしく?」

「然様。誰かの真似などせず、自分らしく戦え。儂はエルザと違って、剛ではない。柔なのでな。少なからず、華葉にとってはよい見本じゃ。よく観察するとよい」

「は、はい」

呼吸を整える。

「ふむ。そちらから来ないのなら、こちらからゆくぞ」

「ひっ」

おじいさんはまたも裏拳でこちらを狙う。

あたしはとつさに屈んだ。

無音。

でも、あたしの背後にあった石の壁が。

「な、なくなってる」

風穴があいて、海が見えてるよ。

「ほほう? かすると確信していたんじゃが、まさかかわされようとは」

未だにおじいさんはこちらを見ていない。

「水で例えるかのう。エルザが滝なら、華葉は雨じゃな。滝であるエルザは、力である水を大量に集めて、一気に落とすことで破壊を成し遂げる。それが剛よ。剛とは、一撃で相手を砕くものじゃ。しかし、華葉はその力である水の量がエルザより足りない。ならば、その水を細かく分けて、雨にして降らせばよい。雨は長く降り続けることで、角ばった岩をも丸くし、山を静かに削ぎ落と<sup>そ</sup>し、地滑りを引き起こす。見た目こそ派手ではないが、雨は降り続けることで多くに変化をもたらす。その変化はあまりにも緩やかで、気づく者はほとんどおらん。それが柔よ。柔とは、静かに相手を追い詰めるものじゃ。華葉、そなたならそれができよう」

「あ、あたしにできるのでしょうか」

「できる。華葉がエルザから学んだ技は、剛であろう。しかし、それは工夫すれば柔にもなるし、応用もできる」

おじいさんは、こちらを振り向いた。

「今しがたやったように、拳から放つ気撃を無音にすることも可能じゃ。ただ、威力は落ちるがのう」

分厚い石の壁に風穴をあけといて、威力が落ちるだなんて。

本気だったら、どうだったのか。考えただけで身震いがしたよ。

「や、やり方は？」

「単純。僕の気を見ておれば、理解できよう」

おじいさんは、左手に気を集中させてる。

その密度はあまりにも濃い。

「まさか、圧縮してる？」

「然様。それから気を細く、鋭いものにする。大気に触れる面積を減らせば、それだけ音をなくせる。また、気を一点に集めれば貫通力が増す。どうじゃ？ できそうじゃろう？」

「気を、細く鋭く」

右手に込めた気を、そう意識して圧縮させる。

「物覚えがよいよい。いくら高威力の攻撃とはいえ、当たらねば意味がない。なら、威力を落としてでも精度を上げよ。狙った部位へ当てられるよう、相手を注視せよ」

おじいさんは左手に集中させた気を、あたしに放ってきた。

「っ」

あたしは拳を突き出して、それを分散させた。

「力任せなのは、癖のようじゃな。まあよい。それを実行できる力と技もあるう。後は自分自身で技を磨いていけばよい」

「は、はい」

もう、これで終わりなのかな。

そう思っていたら、不意におじいさんの顔つきが変わった。

「さうと、と」

ゆっくりと後ろを振り返り、おじいさんは。

「あ、え？ げ、げる」

右手に持つステッキで。



あたしへと伸ばしていた、その手が。  
ぱたりと、床に落ちた。

「しんまらあああああああああああああああ  
っ  
泣き叫んだ。

その手をつかんで、あたしはシンマラへ呼びかける。

「ね、ねえ。しん、まら」

「……………」

返事は、なかった。

「つつつつつつ」

悲しかった。

けどそれは次第に、怒りへと変わってゆく。  
唇を噛み切るほど、あたしは激昂げっこうしている。

急に目の前が、白と黒だけになった。

「ぬっ」

カラン。

勝利の剣が、床へと落ちた音だ。

「ようやく、か」

あたしはゆっくりと、おじいさんへ目を向けた。

「どうして、どうしてこんな」

「人間は、失ってからそれがどれほど尊いのかを知る。大切だと言  
いながら、その腕に抱き留めておくことをせん。離れてから、それ  
を抱き締めようとする。それでは遅いのじゃよ。それに目の前にあ  
るものを抱擁したとしても、それはいつしか背中に負ぶさる。罪か  
後悔という重荷となつてな。だったら大切なものなど作るな。背負  
うことができないものを無理に背負うから、押し潰されるのじゃ。

そうした悲哀など、持つだけ無駄だと解らぬか？ 娘さんや」

ゲルズを離して、あたしはおもむろに立ち上がった。

「少々きついな。エルザの波動眼より、威圧感があるうとは」

おじいさんが何を言っているのか、まったく聞こえない。





あたしは雨傘を開閉し、それで強引にブレーキをかける。それでも、左足が踏み込んでしまった。

「う、つう！」

まだ入っていない手足で大気を叩き、その反動でそこから抜け出した。

「はあ、はあ、はあっ」

屈んで深呼吸を繰り返して、おじいさんを見据える。

「ほ〜う？ いい判断じゃ。初見で、よく見抜いたのう」

一秒　ううん。半秒遅かったら、危なかった。

「真空壁<sup>しんくうへき</sup>。僕はそう名付けておる。どうじゃ？ エルザは、この技を華葉に教えたのか〜い？」

左右に首を振る。

「じゃろ〜な。エルザは、この技はマスターできんと嘆いておった。それも至極当然。この技は、剛では実行できん理屈があ〜る」

前方に両手をかざし、門を開けるような動作で、周囲の大気を薙<sup>な</sup>ぎ払った。

風は後方に発生している。狙いは、あたしを吹き飛ばすことではない。

それを知った瞬間、無意識に危険だと察知したんだ。

しかもおじいさんは、それが真空壁だと言う。

いくら大気を吹き飛ばしても、いずれまた新たな大気がそこに移る。

でもそれは、おじいさんの気が制していた。

自分の周囲を、真空状態にする。

それは剛でも　あのおばあさんにもできるだろう。ほんの一瞬だけなら。現に、あたしはそれと似た技をフレイヤにやってみせた。しかし、おじいさんは柔だ。真空状態を維持しつつ、自分はそれにやられないように気の鎧で保護する。

「何か、考えておるようじゃな」

「真空状態に、もし半身踏み込んでいたら」

「娘さんの身体は、内圧で膨張し、下手をすれば破裂していたじゃろうな」

「やっぱり、このおじいさんはただものじゃない。」

「真空状態というのは、空気がない状態。」

「あたしたち人間の身体は、実は大気圧に負けないように、内側から外側へと圧力をかけている。」

「外圧に、潰されないように。」

「その外圧がなくなれば、体内から発している内圧によって、身体がふくらんで破裂してしまう。」

「外圧と内圧の均衡が保ててこそ、生物は存在できる。」

「真空である宇宙空間で活動する際には、その外圧を与えるために宇宙服を着るんだよね。目的はそれだけじゃないけどさ。」

「冷や汗がすごいのか」

「それもそのはず。」

「このおじいさんは、その真空状態を広範囲で、かつ数秒間維持していた。」

「もしブレーキをかけなかったら、あたしは 身体の一部が風船みたいにふくらんで、破裂していただろう。」

「といっても、あたしにも気鎧はある。」

「それさえ忘れなければ、脅威ではない。」

「ふむむ。打開策を見出したようじゃな」

「まだ、左足が痛い。」

「特に指が、小指が痛い。まるでダンスの角にぶつけたみたいなの激痛だ。」

「ほーう？ 気鎧か。真空壁は、生物を通さぬ無敵の壁よ。しかし、気鎧をまとえる敵には効果が薄まる。無生物も変形するなどの反応は起こるが、矢などは変形したほうがより危険かもしれん。とはいえ、外圧のバランスを崩してしまえば……質量を持つほとんどのものは歪む」

「説明、どうもありがとうございます」

「ほう。今ので冷静になったか」  
敵を吹き飛ばすのではなく、わざと受け入れて破裂させるだなんて。

真空壁。本当に恐ろしい技だ。

「む？」

あたしは雨傘を左腰に差して、両手を前に構える。

「なんじゃと？ 素手でやりあおうというか」

それをやるには、どうしても雨傘が邪魔になる。

「おもしろい。やってみるがよい」

おじいさんは前方から踏み込んでくる。

あたしも門を開くような動作で、大気を薙ぎ払った。

「なぬっ？」

成功すると思ってなかったのか、おじいさんの右腕が侵入する。

「ぐああああああっ！？」

膨張した血管から、血煙が噴き出る。

「く、や、やるのう」

けど、それまでだった。

あたしと同じように、踏み込んでない手足で大気を叩き、その反動で脱している。

「はあ、はあ、ふう。まさか。一度見ただけで、真空壁を体得するじゃと？ なんとゆう吸収力じゃ」

「ええ。あたしは、おばあさんの技を一度この身で受けて、学習したんです」

「なんと。それを早<sup>はや</sup>う言わんかつ」  
今がチャンスだ。

おじいさんの隙をついて、あたしは雨傘を抜刀する。

「せえいっ！」

放たれる気刃。

「ふう」

おじいさんはそれを、吐息だけで消してしまった。

「な」

驚きのあまり、声に出してた。

「どうやらエルザは、華葉がどういうタイプなのか見抜いておったようじゃな。学習ラーニングが速い。一度見せるか受けた技は、自分が使えるものならものにしてしまふ。力の果実は、そうした能力すらも開花させたか。未恐ろしいのう」

傷ついた右腕を庇うように、おじいさんは左半身をこちらに向けた。

ゆっくりと左手を開き、胸の高さまで上げている。

「もう儂が教える技はない。後は自分で開発するがよい。そのための土台、いや基礎じゃ。華葉が使える技を基礎とし、そこから応用し、己だけの技を紡ぎ出すがよい」

「う、ぐっ」

後頭部に強い衝撃が あ・・・うう。

「はっ」

意識を取り戻してすぐ、あたしは飛び起きる。

「わわっ」

ベッドに寝かされてたので、勢いあまって落ちてしまった。

「華葉。何やってんの？」

「あいたた。って、ゲルズ？」

「そうよ」

なんでか、ゲルズの頬は赤い。

「ゆ、ゆめ？」

「は？」

屈んで目の高さを合わせたゲルズは、お口があんぐり。

「いつひゃひゃ！」

「どう？ これで夢じゃないと悟ったかしら」

頬をつねらなくてもっ。

「な、なんでゲルズが生きてるの？」

「あゝ、それ？ ちよつと説明がねえ」

耳を指で触つて、困つたように上を見るゲルズ。

「話は食堂でするそうよ。華葉、ゲルズ。こちらへいらっしやい」

「し、シンマラっ？」

振り返ると、そこには元気な姿を見せるシンマラが。

「とにかく、話はこつちです。首を傾げてないで、さっさと移動なさい」

不機嫌なシンマラに誘われて、あたしたちは食堂へ足を運んだ。

「いやあ、わりいわりい」

笑顔で謝罪しながら、男の子はあたしに種明かしをした。

男の子は目の前で、ゲルズとシンマラを操っている。

「といっても、このふたりは偽物。ドツペル君とかいう代物らしい。よくできてんだろ？ いやあ、急に創れと言われたから、急ごしらえでどうにかしたんだぜえッ」

男の子は満面の笑みで、静止したドツペル君を見せびらかす。

ドンツ。あたしは拳でテーブルを叩いた。

「わ、わりい」

男の子は真顔になって、深々と頭を下げた。

「もついいよ。でも、どうしてそんなことをしたの？」

「単純に、あのおじいさんの策よ」

隣に座るゲルズが、この場にいないおじいさんの席を指差す。

「何でも、華葉の波動眼を完成させるのと、大切な人を失った時に何をするのか。それを見たかったと言ってたわ」

そう説明したのはシンマラだ。

「えつと、あたしを試すために？」

「そうだ。ヴァフスルズニルは、お前の波動眼が未完成だと気づいていた。エルザもな」

テーブルの上に両肘をついて、男の子が真顔で語る。

「未完成って、あたしの波動眼が？ ど、どういう意味なの？」

「波動眼を完全にするには、覚悟がいるんだそうだ。今までのお前は、おそらく相手を打ち倒す覚悟があつたはずだ」

「う、うん」

「だがそれは、相手を殺す覚悟じゃなかった。波動眼は発動中、視界の先にと全身から気を放つ。特に殺気の性質が強い。その殺気が甘いだけで、波動眼の効力も落ちる。その未熟な点をすぐに補う方法。それはお前の心に深い傷を負わせることだ。だからといって、すぐにお前の仲間 親友を屠るのはためらわれた。ならば、その疑似体験をさせてやればいい」

どうしておじいさんがあんな真似をしたのか。合点がいった。

「その、おじいさんはどうしてるの？」

「お前の拳を受けて、左手が複雑骨折。特に人差し指な。右腕は酷い裂傷。自分でヤツといて、無事だと思つてたんか？」

「あ」

いや、その。ごめんなさい。おじいさんここにいないけども。

「す、すぐに手当てしないと」

「だいじょうぶだ。お前が気絶している間、その金髪ツ娘が処置しておいた。今は気を練るために城の屋根上にいる。しばらくすりゃ降りてくんだろ」

片目をつむりながら、男の子はあたしをじつと見つめている。

「ヤツはお前、スゲエよ。オイラの嫁になんな」

「ごめんなさい」

「断るか。ちッ」

迷いもなく答えると、男の子はうれしそうに舌打ちする。

「まあいいさ。何度でも口説き落とすチャンスはある」

「ないよ」

「そ、そ。ないんだよなあ。ッて、どうしてだ？」

「あたしは、ムスペルヘイムに行きたいの。皆から聞かなかつたの

「聞いたぜ。でも、それはオイラがヨルムンガンドを呼んで初めて  
成立する話たる？」

この男の子、端から呼ぶつもりないんだ。

「だッたら、呼ばなけりゃいい。オイラの花嫁になることを承諾す  
りゃあ、見せてやツてもいいぜ」

「強引にでも召喚させるよ」

バンツ。テーブルを叩いて、起立する。

「へえ。力づくツてかい？ それも悪くねえ。ただ、華葉じゃオイ  
ラにや勝てねえぞ」

「やってみないと解らないよ」

「クソジジイ相手に気絶させられてンだ。そんぐらいじゃあなあ」

その口振りからすると、この男の子はあのおじいさんより強い？

自信家なのか。それとも、ただの嘘なのか。

「また揉め事？ もう日没よ。せめて夕飯ぐらい、落ち着いて食べ  
させてよ」

治療行為でかなり疲れてるのか、ゲルズが弱音を吐く。

「そだな。クソジジイにも何か食わせねえと。年寄りには大事にしな  
いとなあ」

男の子は腕を組んで、うんうんとうなづいてる。

ただ、その瞳から、妖しい光が見えたのは気のせいだろうか。

おじいさんも食堂に集まり、皆でオートミールを食した後。

あたしはまた、城内にあるロビーに立っていた。

隣にはシンマラもいる。ゲルズはおじいさんの様子を見てて、後  
からこつちに来るそつだ。

「待たせたな」

男の子は長袖長ズボンの服装をして、ここにやってきた。

暗いと思つたのか、この場にある灯石を触れずして、強く発光さ



せてる。

「着替えたの？」

「ああ。こっちのほう動きやすくてね」

嘘だ。普通は、半袖短パンのほうが動きやすいよ。

それに、発言した時の表情。薄気味悪い笑みを浮かべてた。

「ウトガルザ。あなたに勝ち目はないよ」

「どうしてそう言いきれる？」

あたしの正面に立ち、準備運動をしながら男の子はそう答える。

「あなたは幻術を使うんでしょ？ あたしには、そんなの通用しないからさ」

「ふ。今までのオイラの言動を見てたのか？ いつオイラが、お前に幻術を使った」

そういえば、そうだ。

ここに来てから、あたしは一度も男の子が幻術を使ったのを確認していない。

おじいさんのトリックアートはいいとして。

シンマラが裏切り者だという虚言と、老巨人を人形として戦闘を強いてきたこと。

ゲルズとシンマラの人形を作り、それでおじいさんの思惑通りにあたしを怒らせたこと。

どれもこれも、まやかしじゃない。

「幻術ツてのは、現実に存在しねえものを、まるでそこにあるかのように見せるこつた。ただな。それはお前らのいう狭義の幻術だ。

オイラの定義する幻術は、あくまでも相手をだますことだ。お前らのいう幻術を使うのも然り。ただ、オイラはそうした幻術だけにこだわってるわけじゃあねえ。味方を敵と思わせる言葉。人形を操って、偽物を本物と思い込ませる手法。いずれも戦を有利にするなら、この上なく効果的なもんだ。華葉が子どもの頃、ヤンなかつたか？ 空に変なのが飛んでるって遊びをよ」

それ、小学校の頃によく見かけたよ。男子がよくやってたもん。

あ、あそこにUFOが飛んでる〜って、ゆうやつだよな？

「思い当たるモンがあつたな？」

「まあ、ね」

そういうのも、この男の子は幻術と呼ぶんだ。

確かに、その通りだよ。

相手をだます上で、別に視覚だけを利用する必要はない。

人間の感覚をだます。この男の子は、そうしたことに長けている。味方を信じていればいるほど、敵の言葉によつて動揺するモンだ。オイラがシンマラを、裏切り者と見せかけたようにな。シンマラは説得しても無駄だと感じたから、仕方なく華葉とやりあつてたみたいだが。もうちツと揉めてくれりゃあ、用意してた次の言葉が吐けたんだけどよお」

あたしとゲルズがそれを信じていなくても、確実にシンマラを敵と見せることができた。

その自信に満ち溢れた発言は、嘘じゃない。そう直感した。

「私を陥れたことを、いつか後悔させてあげるわ」

「お〜、おツかねえ。ま、悪く言うなよ。後で詫びの品を送るからさ」

「期待しないで待っているわ」

そう吐き捨てて、シンマラは巻き込まれないように遠くに移動する。

そこに、ゲルズとおじいさんもやってきた。

「頑張れ〜、華葉〜」

「うん」

「やれやれ。ウトガルザよ。本気で娘さんを、口説き落としたいらしいの〜」

ゲルズの応援に返事はするものの、両腕に包帯を巻いたおじいさんを見ると、胸が痛む。

「あの、さっきはごめんなさい」

「ん〜？ おや、儂が何かしたかの〜？」

謝罪すると、おじいさんはとぼけてそっぽ向いた。

「さて、ただやるンじゃおもしろくねえ」

とかいって、男の子は白い石灰石を手にして、それで自分の周りに円を書いた。

「何してるの？」

「華葉。オイラを身体の一部でも、この白い円の外側に出せたら、お前の勝ちだ」

「ハンデ？」

「そうさ。別に遠距離から、気撃だけ撃っててもいいぞ？」

自分を追い込んでいるのか。

それとも、あたしに有利だと思わせて、罠を仕掛けているのか。ダメダメっ。何だか疑心暗鬼になってきた。

それも、あの男の子の策略なのかなあ。

「あたしが勝ったら、ヨルムンガンドを召喚してくれるんだよね？」

「ああ。オイラが勝てば、華葉はオイラの花嫁だ」

となると、あたしが諦めなければ負けることはない。

ただ何となく、それが嫌だった。

「それで、時間は？ 無制限？」

心中を察したのか、ニヤニヤしながら男の子が言う。

「もう日没してツからな。太陽が完全に顔を出したら、でいいか」

ふうん。時間的にかなり余裕があるね。

「いいよ」

「そっか」

不敵な笑みを浮かべる男の子。

「じゃ、いつでもいいぜ。かかッてきな」

開始早々、あたしは男の子へ蹴りを浴びせる。

けどそれは、片腕で防がれてしまった。

「いい重さだ。が、それじゃあオイラは倒せねえ」

違和感があつて、あたしは間合いを取った。

「なに、今の感触」

袖の中に何か隠しているとか、そういうんじゃない。  
手応えが、ない。

さっきの蹴りは確かに当たった。でも、感触が一切なかった。ど  
ういうことなの？

「どうしたあ？ もう終わりか」

ふと、あたしは気になつて勝利の剣に触れてみた。

剣は、まったく動く気配を見せない。

「あなたは、いつたい」

男の子からは殺気を感じない。それどころか。

存在そのものが、感知できない。

「オイラは発気できねえぜ。何か探ツているようだから、この際言  
ツておく」

生物なら普通は、微弱な気を発しているはず。

ゲルズやシンマラ、おじいさんからも、戦意はないにせよ気を感じ  
じる。

なのに、戦場に立つ男の子からは何も感じられない。

「突ツ立ツてるだけじゃ、何も始まんねえぞ」

その通りだね。

左手で、腰に差してある雨傘を引き抜く。

逆手に持つてるそれを、くるりと順手に持ち替える。

「本気で来い。だとしても、華葉の攻撃は通じねえ」

「随分と自信があるみたいだね」

言いながら、雨傘で男の子へ斬りかかった。

攻撃は両腕で防がれる。

「え」

まただ。また、当てた感触がない。

「怪訝な顔をすんなよ」

するよ。だって、さっきからあなたの存在を感じないんだもの。

「曲がりなりにも、オイラは国ひとつを治める巨人族の王だ。ま、民はひとりもいねえが……別にどうだッていい。そのクソジジイよりは若<sup>わ</sup>えし、力がある。人間である華葉の攻撃ぐらい、避ける必要もなければさばく必要もねえ。ただ受けりゃいいだけさ」

おじいさんはあたしの攻撃を的確にさばいていた。それでも、手を骨折してる。

なのに、男の子はあたしの攻撃を受けても平然としている。若いからかな？

いずれにせよ、人間と巨人族の力の差は否めない。

「それに、下手に動くと白い円から出ちまう。そんなんで負けるのはごめんだね」

男の子が動けるスペースは、そんなにない。

避けたりしたら、間違はなく外に出してしまう狭さだ。

「そう、全部受けるんだね？」

「ああ。かかッてこいよ」

あたしは男の子へと接近し、蹴り、拳、雨傘の打撃、気刃斬り、ありとあらゆる攻撃を叩き込んだ。

その全部が、腕と足でガードされた。

「これは、なんで」

怒濤<sup>どたう</sup>の連続攻撃。

それらを全部受けても、男の子は笑う余裕を見せてる。

「くっ」

しかも、全部に手応えがなかった。

攻撃の最中、気になって波眼を使ってしまったよ。それでも、男の子はそこにいた。

「何が、どうなって」

「さて、オイラはただ的になッてるわけにもいかねえんだ」  
「え」

上から、ふたつの影が降り立つ。

それは、ゲルズとシンマラ　ふたりの、ドッペル君だった。

「ひ。卑怯よ」

「多勢に無勢がか？ それとも、大切な友人もどきを使役しえきすることがか？」

どっちも、だよ。

「ふん。誰がいつ、オイラひとりで戦うと言ったよ？ いつ？ どこで？ 誰が決めたんだよおっ？」

まるで子どもだね。

しょうがない。そうした取り決めはないもんね。

「こいつらは本物じゃねえんだ。躊躇ちゅうちゆせずに倒しやいい」

「まさか、あなたも本物じゃ」

「んなわけあるか。オイラは好いた女を口説くために、偽りの自分を見せるつもりはない。恋愛こひッてのは人形遊にんぎょうあそびびじゃねえんだ。そこだけは信じる」

真顔で言われても、疑いたくなるんだよね。

「目を凝らしても、オイラからは操り糸なんて見つかりっこねえぜ」  
男の子は両手の指先から青い糸を発して、ふたりのドッペル君を操さっている。

ふと、勝利の剣がようやく反応を見せた。

「やる気、だね」

ひとりでに鞘から抜けたそれは、あたしの前に浮遊して、剣先をドッペル君へ向ける。

「浮遊する剣があるところで、形勢など変わらねえさ」

「いくよ」

「あん？」

男の子の背後に回って、あたしは蹴りを放った。

それは、背中当たる。

けれども、男の子は微動だにしない。

「いつてえな。不意撃ちたあ、よくやれたもんだぜ」

ガードされてない。直撃している。そのはずなのに。

どうして、どうして手応えがないの？

痛いとは言ってるけど、それは嘘だ。表情が歪んでいない。

「そう驚くなよ」

「っ」

足をつかまれてしまった。

「華葉は人間。オイラは巨人族。クソジジイは老いているから、力の果実を口にした華葉の攻撃にケガをしちまった。が、オイラはそうでもない。若いオイラにや、ゴリ押しなんて通用する戦法じゃない」

足を引こうとしても、それ以上の力で引つ張られる。

「力で勝てるはずがねえ。負けるわけがねえ。さあ、どうすんだ？力がダメなら、技しかねえだろ？」

そうだね。けれども。

それは、あたしの技すらも完璧に防ぐという自負でしょ？

その鼻っ柱を、へし折ってみせるよ。

「む」

不意に投げ飛ばされた。

あたしの身体は、玉座の後ろの壁にめり込む。

「わりいが、真空壁だけは許さねえ。そいつだけは、オイラじゃあどうしようもねえし」

発気できないのは、本当みたいだね。

まともにもらったら、風船破裂が確定だし。

「な」

「いつまでも寝ンねしてンなよ。そらッ！」

男の子は指先から青い糸を紡いで、ゲルズとシンマラのドッペル君を操る。

ふたりはあたしを取り囲んで、両手から青い炎を灯した。

「っ」

まずい。

今のあたしじゃ、その炎に耐えられない。

「やれ」

男の子が呼びかけると、ふたりは青い炎をあたしへ放つ。  
「う、ぐ」

壁にめり込んだままだから、逃げられなかった。  
あつつうい。かと思ったら、そうでもない。

それどころか、涼しく感じるほどだ。

「はあっ！」

「なに」

波眼を使うと、炎は消えて、ふたりを操る糸がぷつぷつと切れる。  
その隙にふたりから逃れ、男の子に殴りかかる。

「ちッ」

両腕で防がれた拳。

微かに、手応えがあった。

「逃げ足は速いな」

「どうも」

男の子を跳び越えて、あたしは初期位置に戻った。

「ふう」

冷静に呼吸して、あたしは手を握ったり開いたりする。

ついさつき、微かだけど手応えがあった。今そこにいる男の子は、  
本物だ。

だとしても、それまで手応えがなかったのと、存在を感じられない  
いことに説明がつかない。

現に今、剣は浮いてはいるけど、敵を見失って宙を泳いでいる。

ドッペル君にのみ反応してるんだ。

「よッと」

男の子は指先から糸を紡いで、ドッペル君を操ってる。

そこに、剣が飛びかかった。

「やらせんよ」

シンマラのドッペル君は、眼前に炎の壁を作る。

ゲルズのドッペル君は、剣へ火の玉を放つ。

剣は炎の壁を切り払った後、火球に撃ち落とされてしまう。



「波動眼！」

偽物とはいえ、ふたりが傷つくのは見たくない。

「ほっ？」

その影響で、ドッペル君が倒れる。剣は床に落ちたまま、動かない。

目の前が白と黒だけってのは変な気分だよ。

でもこれが、完全な波動眼なんだね。

「やってみるよ」

「その自信は、どこからくるの？」

「こっからさ」

男の子が親指で左胸を差した瞬間、あたしはその頭に蹴りを見舞った。

「ツてえな」

当たった。手応えもある。男の子は屈んで、円から出ないよう踏ん張ってる。

「はあっ！」

「ッ」

右の鉄拳。

それを手の平で受け止め、続けざまに振り下ろした雨傘も男の子はもう片方の手でつかむ。

「やるじゃねえの」

男の子の顎を足で蹴飛ばし、あたしは強引に手を外させる。

「とどめ！」

その腹に足を当てて、気を暴発させて吹き飛ばそうとしたけれど、男の子は、それすらも耐え抜いた。

「そんな」

たたみかけたのに、どれも微かな手応えしかない。

「ちっ。糸が紡げねえンじゃ、どうしようもねえな」

頭を手でかいて、困っている男の子。

「ま、ソんでもいいぜ。もう時間が迫ッてるしな」

「え？」

おじいさんがあけた風穴から、微かだけど光が見える。

「え、ど、どうしてもう太陽が」

「単純さ。波眼使いが気絶している間、時間経過を錯覚させるなど、造作もねえ」

あたしが気絶している間に、幻術を使ったんだ。

「お前らが夕飯だといッてたのは、実はただの夜食さ。まやかしを使えば、偽の太陽で時間を錯覚させるだけでなく、他の連中と時間が同期するように微調整もできる。ほおら、どうするンだあ？もう時間はねえぞ」

そういえば、あたしは偽の太陽を見ていない。

ゲルズに日没だと言われて、食堂で夕食を食べて、そうなんだと思ひ込まされてた。

「これがオイラの幻術さ。だますのに、まやかしだけを使う必要はない。ありとあらゆるものを使い、全身全霊をかけてだますのさ」

「やっぱり、卑怯だね」

「何と言われようが、オイラは華葉にゾッコンなんだ。否が応でも逃がしやしねえ」

「その想いも、嘘かもしれないからさ」

「なッ」

言われて男の子は目を丸くした。

「ふう」

深呼吸して、あたしは冷静に考える。

もう時間がない。

となれば、一気に決着をつけるしかないよね。

真空壁を嫌っていたけど、それを至近距離で使わせてはくれない。じゃあ、どうするか？

単純だ。遠くから、真空壁に匹敵する技を放てばいい。

「よし」

拳を合わせて、思いついた技を実践しようと試みる。

「何か、閃いたみてえだな」

柔の気の使い方は、真空壁で学習した。

剛は気を放つて吹き飛ばす。

その対極に位置する柔は、気をつかんで振り回す感じた。

「はあああああああああああああああああ」

右手と雨傘に、気を集める。

「しょうがねえ」

男の子は両腕でガードを固めた。

「いくよ」

まずは雨傘を右下段に構え、勢いよく振り上げる。

あたしがシンマラにやった技だ。

「この」

低い声を上げ、男の子はその気刃を右足で蹴り碎いた。

「ツてええな！」

あたしは雨傘を振った勢いに任せ、身体を回転させる。

その遠心力を加えて、手首をひねりながら 気撃を放った。

「なにッ？」

渦を巻いて進むそれは、まさしくつむじかぜ旋風。

体勢を崩した男の子は、それを右半身にまともにもらった。

「ちいッ！」

右足が白い線の上を 越えなかった。線を踏んでいるだけだ。

「はあ、はあ。あツぶねえ」

男の子の右足から、血が出ている。

それだけじゃない。さっきの技が命中した右腕からも、大量の血

が滴ってる。

「や、やるじゃねえの」

ふたつの技に気をやりすぎた。

あたしも、息が切れてる。

「ふう」

呼吸を整え、ちらりと横を見る。

太陽が、もう半分近く顔を出していた。

「もうすぐ、もうすぐ華葉はオイラのモンだ」

「あたしは、元の世界に帰りたいんだ。こんなところで、こんなところであえ！」

掌底で空中を叩き、男の子が吸う空気を排除する。

「な」

すぐに男の子は異変に気づき、鼻と口元を手で押さえた。

「まだまだ、これからあ！」

あたしは雨傘を立てて、広げて、それを回転させた。

それは瞬く間に竜巻を作り、城内に風が吹き荒れる。

「さあ、連続でやってあげるよ」

雨傘を蹴飛ばして、竜巻を男の子へ向かわせた。

「ッはあ」

ようやく呼吸した男の子は、青ざめた顔で竜巻を見据える。

あたしはバレリーナのごとく、何度も身体を回転させ、両手に気を集中させた。

膝を折り曲げて高く跳び、上空からあたしは。

「旋風！」

新たな技名を叫んで、右手はオーバースローで、左手は裏拳の形で旋風を放った。

正面からは竜巻。

その斜め上からふたつの旋風。

「ま、マジかよッ」

そのいずれも、男の子へ直撃した。

激しい砂ぼこり。目に見えるものが、白と黒以外の色を取り戻してゆく。

しまった。男の子の姿が見えない。

白い円から出て、元気だったらそこに戻って、出てませ〜んっ



そう絶叫したのは、ゲルズだ。

あ、そういえば、ゲルズは蛇がダメなんだっけ。

「シンマラ。そちらのお嬢さんの面倒を見ておやり」

「わ、お、落ち着きなさいっ」

あたしも、ヨルムンガンドが蛇だなんて思いもしなかったよ。うん。

シンマラは抱きついてパニックってるゲルズを、どうにかなだめよ  
うと必死だ。

「お、おいこらッ。ヨルムンガンドッ！」

「おやあ〜？ おい〜っす」

「おい〜ッす。じゃねえ！ そこをどけ！ 太陽が見えねえだろ！」  
うまい具合に、巨大な蛇さんが太陽を隠してる。

「んみゃ〜？ あ、大きなおうだあ〜んごお〜ほう」

「変な歌を歌ッてンじゃねえ！」

男の子がブチギレる。

巨大な蛇さんはその胴体で、日光を遮っていた。

「まだ、終わりじゃないよ」

「な、なにッ？」

太陽が確認できない今、まだこの戦いは終わりじゃない。

深呼吸を繰り返して、ようやく立てるまで回復した。

「や、やベッ」

男の子は右腕が折れてるのか、左手に持つ雨傘を手と口で器用に  
広げて、身を守っている。

「もう、終わりにしよう？」

あたしは男の子に近づきながら、そんな言葉をかけてみる。

「だ、だれがッ。オイラは、華葉が好きなんだ。ひとめぼれなんだ。  
ぜッつてえに、花嫁にしてヤンだからなッ」

その根性には、感心するよ。

屈んで見てみると、あちこち傷だらけだ。

「満身創痍まんしんそういじゃない。早く手当てしないと、危ないよ？」

「けッ。情けなソていらねえ」

あたしは男の子の額を、指で小突いた。

「うあッ」

そうしたら、男の子は円の外で尻もちをついた。

## 第9話

「いやだあいやだあああッ！」

だだをこねている、男の子がひとり。

「間違いなく太陽は出てたッ。出てたんだあッ！」

そんな状態で、よくできるよね。右腕折れてるのに。

「ゲルズ。早く治療してあげて」

「ひゃい」

噛んだのは、ゲルズの苦手な蛇さんが近くにいるからだ。

極太の蛇さんは、おじいさんがあけた風穴から、こちらの様子をのぞき込んでる。

「おお。ヴァ〜フ〜スル〜ズニ〜ル」

「久しいのう。ヨルムンガンド」

「なあ〜に〜かあ〜ったのか〜？」

「しばらく顔を引っ込めておいたほうがよい。お嬢さんがひとり、大混乱しとる」

「うい〜っす」

のっそりと動く蛇さんは、ずりずりと海岸に跡を残して、海の中に潜った。

「ぶ、ふう」

落ちて着いたゲルズは、男の子に癒しの光を当ててる。

「か、華葉はだいじょうぶっ？」

「うん。しばらく休みたいかも」

傷はないけど、心身ともに疲労してます。

「う〜ッ。今の勝負は、オイラの勝ちだッ。そうだろ？ クソジジイ」

「さ〜あ？ 俺は太陽が顔を出してたかど〜か、見えなかった〜し

のう」

「む〜ッ」



おじいさんはとぼけてる。

「ちつきしよう。どうして、ここの都合悪くヨルムンガンドが……」

「愁傷様しみじやうさまでしたとしか言えないよね。あのタイミングは。」

「よっと」

あたしは男の子の脇に落ちてた雨傘を拾い上げ、それを左腰に差しておく。

剣も拾いに行つて、右腰の鞘に収めた。

「もう行くの？ 華葉」

「シンマラ。さっき言ったように、ちよっと休みたい」

「そう」

まだ、心臓がバクンバクンいつてる。

深呼吸を繰り返して、鼓動をどうにか静めた。

「しっかし、意外じゃのう。若い巨人族の中では最強の名を欲するウトガルザが、華葉に惜敗するとはのう」

「ま、負けてねえッ！」

傷だらけで、よくそれだけ騒げるよねえ。びっくり。

「元気がありあまつてるわね」

「ゲルズも感心するほどだ。」

「くそッ」

悔しそつに齒噛みする男の子。

「どうしてだッ？ トールに匹敵する瞬力しゆんりきをどうして華葉が使えるんだッ！」

「は？」

唐突に変なことを言われて、お口があんぐり。

「その、トールって誰？」

「雷神。アーシルのひとりだ。そいつは、人間に近い姿をしてはいるが、巨人をいともたやすく屠る、巨人族の天敵。そいつは力帯ちからいおびのメギンギョルドを頼りに、それを発動させてるんだ。華葉は、その瞬力を無意識に発動させてたんだよ。帯の補助なしでな」

最後のほうだけ、強調してたね。

「えっと、その瞬力って？」

「攻撃や防御が力を要する瞬間だけ、尋常でない力を発揮する。それが瞬力だ。アーシルはそれを神の力と呼んで、神力じんりきとか言ってるようだが。オイラ達、巨人族は神と呼ぶのを嫌って、瞬力と呼称してる」

「それがなかったら。あたしは」

「オイラに傷ひとつつけることはできやしなかった。オイラも巨人族なんぞでね。ツールほどじゃあないが、瞬力は使えるんだ。なのに途中から攻撃の威力が段違いに上がりやがった。オイラのガードは完璧だった。そのはずなのにいいいいッ」

悔し涙を流す男の子。

「ツールと同じ、瞬力を？ ほぅ。どぅやら、その瞬力は波動眼を鍵として発動するよぅじゃな」

「波動眼が、鍵に？」

「然様。おそらく、波眼を使うだけでも引き金になるはず。目に気が集中するために、近くにある脳の制限が外され、火事場力が引き出されるのやもしれん」

「かじばりよく？」

「ふむ。まゝ、波動眼もそぅじゃが。華葉。波動眼と瞬力は長く多く使うでないぞ。心身の消耗が激しい。多分、波動眼が完全なものになったがゆえに、瞬力も完全に覚醒したんじゃろって」

「諸刃もろはの剣、ですな」

「うむ。まゝ、そぅじゃのう。完全となった波動眼と瞬力は強烈じゃ。もう少し鍛練すれば、それぞれを個別に発動できるじゃろ。精進するがよい」

「はいっ」

「よゝい返事じゃ」

にこにここと微笑むおじいさん。

「どつやら華葉には、いろいろと謎がありそうね」

「いや、その。あたしは普通の日本人だった女の子ですけど」

「ふうん。確か前に、やまとだましいだっけ？ そんなことを言うてたわね」

「それそれ。あたしが強いのは、大和魂のおかげです」  
えっへん。

「なるほど。にほん人は、潜在的に強い魂が宿ってるのね」  
シンマラは拡大解釈してるみたい。

あ、おじいさんにゲルズも。男の子もだ。

「か、華葉。その、そのね？ あたくしは、ヨルムンガンドが蛇だなんて知らなかったわ」

「あ、うん。あたしも」

「だ、だからっ。あたくしはここに留まるわ。ウトガルザが心配だしっ」

声、裏返ってるよ。

んつと、ゲルズとはここで別れなんだ。ちょっとさみしいかも。

「となると、私と華葉のふたりだけでヨルムンガンドの背中を歩き、ムスペルヘイムへ向かうのね？」

「え、ええ。華葉を頼むわ、シンマラ」

「ウトガルザついでに、ヴァフスルズニルもお願いするわね」

「う、うん」

表情が硬いよ、ゲルズ。

「あのさ」

屈んで、あたしは男の子をじっと見つめる。

「な、なんだよ」

「ありがとね」

ちゅ、と。男の子の頬っぺたにキスをする。

「な」

ぼんつ。男の子の顔が真っ赤になった。それから、こてんと横になっ

「ありゃ？」

「き、気絶しちゃったわよ。華葉」

そゝみたい。

「ほゝほっほ。ウブじゃのう。ウトガルザ」

おじいさんは愉快そうに笑ってる。

「ありがとう。ゲルズ」

「な、何を言ってるのよ」

「今まで、いろいろと助けられたからさ」

「は、早く行きなさい。この子が、このまま気絶しているとは限らないわ」

おたがい、ちよつと涙目。

「あつと、華葉。これを受け取って」

「わつと」

そういつてゲルズが投げたのは、五枚の銀貨。

「メングラッド様、エイルさん、ベルゲルミル、巨人の皆、それからあたくしの分よ」

「え？」

「おや、なら儂ものう」

おじいさんも、あたしの手一枚の銀貨を渡した。

これ、何の意味があるんだろう。聞かないほうがいいのかな。

「さて、さつさとヨルムンガンドの背に乗って、ムスペルヘイムまで歩くとしましよう」

「うん。そうだね」

手を振って、ぎこちなく微笑みながら、あたしはゲルズとお別れした。

マントを羽織り、荷袋を背負って海岸まで歩くと、波を立てながら巨大な蛇さんが顔を出す。

「うゝいつ」

「ヨルムンガンド。私と隣の娘、華葉はムスペルヘイムに向かいたいの」

「お〜お〜お？ そ〜りゃあ別にいい〜けえどさあ〜？」  
何か、イントネーションおかしくない？

「ひ〜とおつ、お願いい〜が〜ある〜んだあな〜」

「別に構わないわよ。して、そのお願いって？」

「フェンリル兄さん〜があ、あある〜孤島に拘束う〜ん〜さ〜れ  
てえ〜るう〜んだああああ〜よおお〜う〜」

「フェンリル？ あの氷狼ユウウツが？」

この蛇さんとの会話は、シンマラに任せたほうがよさそうだ。

「なら、途中でその島に寄りましょう。それで貸し借りなしよ。い  
いわね？」

「はあ〜い。なあんとか、たあ〜すけえってやあ〜ってくれ〜な  
あ〜いかなぁ？」

「できればね」

「う〜う〜い」

蛇さんはその太く長い胴体を、海上に浮き上がらせた。

「さ〜あ、わたあ〜れええええええええええええええええよおおおお  
お〜う〜う〜ふう」

「華葉。ヨルムンガンドの言葉は理解しなくていいわ」

「は、はあ」

隣で硬直してたあたしをちらつと見て、シンマラはそう注意する。  
「会話するんだったら、雲に向かってするほうがまだマシだからね」

蛇さんの胴体を歩いて、どれぐらい経ったのかな。

太陽が真上にある。雨傘で日光を遮り、日焼け防止っ。

「さすがに、疲れたわね」

「そう？」

後ろにはまだ、お城が見える。

「華葉。あなたはタフなのね。ウトガルザとやりあったというのに、  
息も切らしてない」

「あはは」

笑ってはいるけど、かなり疲れてるよ。

だって、足場が不安定だもん。ちよつと酔ったかもしんない。

「もおゝすうぐゝう、島あだゝぜえええええええええええつ」

その声はこぶしが利いてて、演歌っぽい。

「確かに、遠方に島が見えるわね」

「あ、ほんとだ」

「頑張りましょう。波がこれ以上荒れないうちに」

言われて気づいた。波がかなり高い。

「ふう」

あ、シンマラの顔色が悪い。やっぱり酔ってる？

「食事したものが逆流しそうだわ」

あたしはそれに突っ込めないよゝ。

「ふう」

ようやく島に辿り着いて、ほつと一安心。

「う」

と思つたら、シンマラが完全にダウン。

海岸であおむけになって、休息してる。

「おゝやあああああつ？ シンマラゝはあ、倒うれゝちいゝまあゝ  
つたのかああああい？」

「うん。そうみたい」

「しよおゝがあああゝねええええいいいなあああつ」

とかいって、蛇さんは頭を海の中に突っ込んだ。

その胴体はうねうねと波打つてて、どれぐらい長いのか計りたくなる。

「ん？」

後ろを振り返り、あたしは森に囲まれた洞くつを発見する。

「お、おそらくあそこにフェンリルがいるわ。微弱だけど、気配が

あるもの」

「うん。そうみたい。それよりもシンマラ。まだ休んでたほうがいいよ」

「そうね。だから、あんまり帰省したくないのよ」

「はい？」

「なんでもないわ」

最後のほうだけ小声だったから、聞き取れなかった。

「じゃあ、ちよつと見てくる」

シンマラから離れて、あたしは洞くつへと足を踏み入れる。

「んん？」

なんか、くっさい。

この鼻につく臭いは、なんだろう。

のぞいてみると、中は暗い。

荷袋から灯石を出して、照らしてみると。

「あ」

いた。奥のほうに、ひもでがんじがらめにされた白い狼がいる。

「っ、っ、っ」

口をひもで縛られているせいか、声が出せないみたい。

「ちよつと待ってて」

灯石を入口に投げ捨て、あたしは狼に駆け寄る。

口に巻かれていたひもを、力づくで外した。

「ふはあ」

息苦しかったのか、狼は口を開けて呼吸を繰り返してる。

「ガルルルルッ！」

「わ」

いきなり吠えられたので、あたしはたじろいでしまう。

「お、落ち着いてよ。ヨルムガンダが、あなたを助けてって頼んだから……」

「ッ」

「え？」





蛇さんは洞くつの入口に、海水とお魚を吐き出した。

その脇を見ると、骨が見えるお魚が　　ありゃ。蛇さんがここに届けてた魚が、腐ってたんだ。だから臭いがきつかったんだね。

「ちよつと待ってて」

あたしは狼から離れ、腐ったお魚を広げた雨傘の内側に入れる。

狼は嗅覚が鋭いからね。これは取り除いておかないと。

「ちよつとどいて」

「うう〜いい」

洞くつから出て、あたしは腐ったお魚を砂浜に埋める。

「よし」

洞くつに戻って、再び狼の傍に歩み寄る。

「何をする気だ」

「このひもを、手でちぎるだけだよ」

「できるものか」

「やりもしないで、できないとか言わないで」

「何度も抵抗したさ。しかしこれは、私でも切れん。たかが人間風にできるとは……」

「つべこべ言わないで。あたしはあなたを助けたいの」

「……………」

深く深く息を吸い込んで、あたしはひもを両手でつかむ。

「一気にやるよ」

そう宣言して、力むと同時に息を吐く。

「はあああああああああああああああああああああああああああ  
あつつつつつ!!」

ダメだ。ちぎれない。

だったら。

「つつつ」

瞬力を発動させるしかない。目の前が、白と黒だけになった。

「こんのおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！  
ブチッ。」

「わ」

勢い余って、あたしは尻もちをついちゃったよ。

「うおお〜お〜？」

ひもはちぎれた。

狼は拘束から解放されて、這いずってひもから離れる。

「な、なんと」

「フェンリル兄さあ〜ん」

蛇さんは大喜び。

ただ、洞くつ内だと声が響くので、出入口を塞いで叫ばないでほしい。

「ふう」

額の汗を手でぬぐって、ほっと一安心。

「お、お前は……」

「ん？」

「お前は、何だ？」

しわがれた声で、狼が訊ねる。

「あたし？ あたしは、折笠華葉っていうの」

名乗ってから立ち上がり、あたしは蛇さんが吐き出したお魚のほうへ歩く。

「うん。洗ってさばけば、おいしい生け作りができるかも」

と、その前に。

「あ、お魚は食べられる？」

「ん？ 私に聞いているのか」

動く気力がないのか、狼は横になったままで返事をする。

「空腹なんだ。食べるものに文句はつけん」

「そう」

あたしは雨傘に新鮮なお魚を入れて、外に出る。

海岸では、休んで元気になったシンマラが準備運動をしていた。

「シンマラ」  
「ん？ どうしたの」  
「お魚があるから、それを料理して、ご飯食べようよ」  
「そう。中にいるフェンリルにもあげるのね？」  
「うん。生ものだから、焼いたほうがいいかと思ってさ」  
「ふむふむ。それがいいわね」  
「ご機嫌な様子で、シンマラは調理を手伝ってくれた。

勝利の剣で鱗をはぎ、三枚に下ろす。

それをシンマラがじっくりと焼いて、できあがりっ。

「どうぞ」

「む。私に、くれるのか」

「うん」

動けそうにない狼に、焼き魚を食べさせる。

「う、うまい」

ガツガツと、狼は骨を気にせずに関張っていた。

「ごちそうさま」

完食した狼は、少し元気を取り戻した様子。

「さて、私達も腹ごしらえしておきましょう」

「そうだね。ムスペルヘイムに行く前に、体力をつけておかないと」

「待て。今、お前はムスペルヘイムと言ったな」

狼があたしの発言に引っかかった。

「そう、だけど？」

「何を血迷っている。焼け死ぬつもりか」

「あんまりしゃべらないほうがいいよ。まだ顔色が悪いし」

そう指摘されて、黙り込む狼。

あたしはその白い毛を撫でて、その感触を楽しむ。

「撫で、るな」

狼はそれが嫌なのか、這いながら逃げる。

「あんまり無理しないほうがいいよ」

「……………」

無言のまま、狼はあたしたちに背を向けた。

「助けてもらったのに、礼もないのね」

狼は答えない。

「ほつときましょ。さて、華葉。ヨルムンガンドはまた漁に出かけちゃったみたいだから。ここからは歩いて、ムスペル Heim に向かうわよ」

「は？」

歩いてつて、周りは海だよ？

「海の上を歩くなんて、気を扱う者にとっては簡単なことよ。距離もそんなにないし、少し歩けば岩場が見える。そこを跳び回ればすぐに着くわ」

「いや、その。それならいいんだけど」

「華葉は物覚えが早いからね。すぐにコツはつかめるわよ」

蛇さん、いなくなっちゃったんだ。

あたしはここを出る前に、灯石を拾う。

「じゃあ、フェンリル。ヨルムンガンドが届ける魚は、自分で何とかして食べなさいね」

「うん。しばらく休んで、元気になったらウトガルスに向かうといいよ」

あたしとシンマラは狼に別れを告げて、ムスペル Heim へと向かった。

海の上を歩いて、岩場を跳び、ようやくそこに辿り着いた。

「この海岸は、比較的熱が弱いだよ」

「そうなんだ」

あたしがいるのは、黒い砂浜。

どうして黒いのか。理由は単純。

このムスペルヘイムは、火山が密集した島だからだ。

「じほっ」

「だいじょうぶ？ 火山灰が散っているから、呼吸するなら自息法のほうがいいわ」

「うん」

あたしは水筒を取り出し、紅茶を一口飲む。

「ふう」

ふたを締めて、それを荷袋にしまう。

「シンマラも飲む？」

「いらないわ」

「そ、そっか。あのさ」

「ん？ どうしたの。気まずい顔して」

「あの島で気づいてただけだね。て、手紙が。この中に、ないんだよね。あ、あはは」

「ああ、それ？ 私が持つてるわよ」

「はい？」

意外な返答に、あたしはびつくりしたよ。

「ゲルズに助けられた時に、アストラライズ霊体化しておいたのよ。どうせここまですぐで一緒なんだもの。かさばるし、って、ど、どうしたのよ？ な、なんで泣いてるの」

なくしちゃったと思って、責任感じてたんだよっ。

「な、ならいいよ。安心した」

「はあ」

シンマラがあたしの荷袋を取り上げた。

「な、何をするの？」

「自分の身を気で守るのが精一杯なんだから、これは私が預かるわ。洞窟に張った結界内で、再びあなたに手渡す。それでいいわね」

「あ、ありがとう」

「礼なんていいわ。私はあなたに、夫を叩き直してほしいという無茶をお願いしたんだもの」

「あはは」

青白い光に変換された荷袋は、シンマラに取り込まれた。

「よし」

頬を手で叩いて、あたしは気合を入れる。

「そこまで気負わなくていいわよ」

「でも、ここにいても暑さが伝わる。気を抜いたら、危ないかも」

さつきから勝利の剣が強い反応を示してる。

右手で押さえるのがやっとだ。

「そうね。人間である華葉には、かなりきつい環境よ。スルトと揉める以外に、何事もなければいいけど」

シンマラの表情が曇った。

「ここは、シンマラの故郷だね。」

どうして、そんな暗い顔をするの？

「行くわよ」

「あ、うん」

先導するシンマラ。

その後ろをついてくあたし。

ムスペルヘイムはあちこち溶岩だらけで、間欠泉も噴き出してる。火の粉と火山灰が舞い、熱いだけじゃなく硫黄くさい。

その中に、白い石を積んだ家が数多く建っているのが不思議に見えた。

「あれがムスペルの住居よ」

「巨人サイズもあれば、人間サイズもあるんだね」

「私の他に、そういう人が多くいるのよ」

「ふうん」

炎の巨人。

赤い肌をした、強面こわもての巨人たちがあたしらを見下ろしている。

中には人間と変わらない人もいて、遠巻きにこっちを観察してい

た。

「なんか、歓迎されてないような」

「当たり前よ。だから私は、ここに住まずに森にいたの」

「……………」

仲間外れ。

あたしと、同じなんだ。

シンマラも、いじめられてたんだね。ひとりぼっち、だったんだね。

「ここが、スルトの家よ」

眼前には、白い石が高く広く積まれた住居がある。

「シンマラ」

「じつとしてなさい」

背後にいる炎の巨人が、あたしたちをにらんでいた。不穏な空気が漂う。

「あたしが、珍しいのかな？」

「さあ、ね。入るわよ」

「う、うん」

小人用の石の扉を開けて、シンマラはあたしを中に招き入れる。

「ん？ なんだ、さつきから騒々しいと思ったが。シンマラじゃないか」

とても大きな声が出た。

「スルト。ただいま」

「ん。おかえり。して、そちらの娘は誰だ？」

「っ」

あたしは両手で勝利の剣を押さえた。

「ど、どうした？ む？ それは」

「スルト。あなたがスパイを差し向けてまで欲していた、勝利の剣」

「なんだと？ となるとスキルニルは……」

あたしは剣をなだめるのに夢中で、ふたりが何を話しているのか聞いてられなかった。

「お、落ち着いて」

両手で柄を握っていると、剣は静まってくれた。

「ふう」

動き出してもだいじょうぶなように、右手で押さえておこう。

「あ、すみません。あたしは折笠華葉です。初めまして」

あいさつが遅れてしまったことを詫びて、あたしは深々と頭を下げる。

「よいよい」

スルトは肌の赤い、とつても大きな巨人だった。

ベルゲルミルよりも一回り大きく、肉体は鍛えられて、腕や脚が太い。

そのルビーのような真っ赤な瞳は、対峙したものを畏怖させる迫力があつた。

「我が名はスルト。ここムスペルヘイムの長だ」

灰色の長髪を手で後ろにやりながら、大声で自己紹介してくれた。スルトは座禅を組んで、めい想していたらしい。

「それにしても、肌が白いな」

「ええ。華葉は人間よ」

「なんだと？ 人間が、この地に足を踏み入れただと？」

目を見開いて、スルトは足を崩す。

「待ちなさい」

立ち上がるうとするスルトを、シンマラが手で制する。

「華葉は、ここに手紙と、次元の穴が本物かどうかを確かめるために来たのよ」

「手紙と、次元の穴？ あの深淵の洞窟か」

「ええ。まずはこの手紙を受け取って」

「うむ」



シンマラは手紙をスルトに手渡した。  
封を切り、紙を広げて目を通してる。

「ベルゲルミルからの書札か」

家の中にあるものは、全部白い石で造られたものばかりだ。  
床には何も敷かれてないけど、よく磨かれている。

テーブルに椅子、タンスにベッドがふたつ、普通に生活するには  
充分な家具がある。全部石製だけど。

「なるほど。事情は解った」

「そう。内容については私も華葉も知らないわ。秘匿事項でお願い」  
「関与するつもりがないのか」

「ないわ。大体は察せるから」

「ふ」

ふたりはそこで会話を終わらせ、同時にあたしを見た。

「折笠華葉と聞いたか」

「はい」

「そなたはどうして、深淵へと向かう？」

「元の世界に、帰りたいからです」

「帰りたい、か。ここはそなたの世界ではないというのか」

「はい」

「ふうむ。ここに人間が訪れるとはな。百年振りだ」

以前にも、誰かが来たことあるんだ。

「そうだったの？ 私は知らないわ」

「シンマラがまだ赤ん坊の頃だ」

よっこいせと立ち上がり、スルトは。

「その娘よ。我と試合をしないか」

「え？」

「久方振りに、一暴れしとうなった。少しの間でいい。それに付き  
合え」

「は、はい」

予想通り。

シンマラはおかしくて、そっぽ向いて吹き出してる。口は手で押さえなよっ。バレるでしょ。

「どうした？ 本気でやりはせんよ。慣らすだけだ」

絶対、それだけじゃ終わらないよね。

嫌な予感的中すると確信しながら、あたしはふたりと一緒に外に出た。

平坦な冷えた溶岩の上に立ち、あたしとスルトが向かい合っている。

「観客も集まっているようだ。どれ、軽く肩慣らしをしようではないか」

ふと、あたしはスルトの家の玄関にもたれる、シンマラのほうを見た。

目を細めて、あたしをにらんでる。

明らかにそれは「本気でやりなさい」の合図に他ならない。

「ちょっと待って」

「む？」

あたしは右腰に収めてた勝利の剣を、鞘ごと外す。

「シンマラ。これ持っていて」

それをシンマラへと投げる。

「ほう？ 剣を使うつもりはないのか」

「相手にケガをさせるのは嫌だから」

「ふ。別にどうだってよいがな。使おうが使うまいが、お前を殺して奪うつもりだったのだからな」

その発言を耳にして、あたしはシンマラを見る。

「……………」

答えない。

「勝利の剣は、強い心を持つ者を所有者とする。お前はそうなんだろう。しかしな。それはたかが人間風情が手にしていいものではない」

「いのだ。その剣は、運命を決する力を有している」

「運命を、決する？」

「そうだ。我はその剣を手に入れ、自らの運命を断ち切るのだ。そのため、お前には死んでもらう」

シンマラは、じつとあたしを見つめていた。

「それを放すなよ。シンマラ。それは我のものだ。我が運命を断つ、希望なのだ」

「……………」

無言のまま、シンマラはあたしから視線をそらした。

「あなたは、かわいそうだね」

「なに？」

「自分の運命を悲観して、それを变えるのに必要なのが、物や力だとして執着してる」

「だからなんだと？ 貴様ごときに説教される筋合いなどないわ！」

「あたしも、最初は力が欲しかったよ」

「ふ。戯言を」たわごと

「でもね、いざ手にしてからは怖かったよ。傷つけるのが嫌で、傷つくのが嫌で、あたしはこの力を捨てようとした。でもそれはあなたの個性だと、ある人が言ってくれた。力はあたし自身。あたしは自分の正義を表現するために、大切な人を守るために、この力を振るう。そう決めたの」

「力を、他人のために使うだと？ 笑わせるな！ 力は自分自身のものだ。誰かのために振るうなど、甘ったれか偽善者の発言に他ならん」

甘い。

偽善。

「そう」

冷たく吐き捨てて、あたしは左腰にある雨傘を引き抜いた。くるりと、左手に持つそれを逆手から順手に持ち替える。

「あなたがどんな運命を垣間見たのかは知らない。それを变えるた

めに、その剣が必要なのは解った。だったら、あなたにものにする  
ばいい。もうあたしには、その剣は不要だから」

「不要？ 強大な力を自ら捨てるなど、お前はどうかしている」

「かもね。あたしは、あの剣からは恐怖しか感じられないもの」

「恐怖、だと？」

「確かに、勝利の剣は強いし、すごいかもしれない。でもそれは、  
けて自分の力じゃない。剣の力なんだ。それに頼って、依存した  
ままで本当に自分が強くなったのかな？ そう確信できないから、  
あたしはその剣を遠ざけてた」

「だから、この機会に捨てる？」

「うん。勝利の剣は、確かに持ち主に勝利をもたらしてくれる。そ  
のはず。けれども、それは自分の手で勝ち取ったものじゃない。そ  
んな勝利に、本当に価値があるの？ あたしはないと思うよ」

「我を、我を馬鹿にしているのかあ！」

「自分の運命におびえて、自分の手で何も変えようとしないうあなた  
に、あなたにだけは言われたくないよ！」

威勢よくたんかをきった。

あたしは空をあおぎ、スルトの目をまっすぐ見つめる。

「この、生意気な小娘があああああああっっっ！」

元から赤い顔が、さらに赤くなった。

スルトは拳を振り上げ、あたしに殴りかかってくる。

「わっつと」

冷えた溶岩へ打ちつけられたそれは、血のような赤さと空のよう  
な青さを持っていた。

「溶岩が……」

赤く発光し、波打っている。

「すぐに焼き殺してくれよう」

両腕を広げて、その拳から火花が散る。

「で、電気？」

スルトの両手からは、炎だけじゃない。紫色の電流がほとばしっ

ている。

「体内電気を増幅すれば、こんなの造作もないわ」

体内電気。

なるほど。それを聞いて思い出したよ。

「この紫電しでんと紅蓮の拳で、葬り去ってくれる」

ふと、周りが気になって、見渡してみた。

見物している炎の巨人は、誰も割り込もうとはしない。

じつと、あたしたちのやりとりを見つめている。殺気は感じるけどね。

「よそ見など、余裕だなあああああああああああああ！」

「っ」

溶岩に叩きつけられる拳。

あたしは避けるだけで精一杯だよ。

自息法によつて、かなりの体力を消耗している。

「この環境は、熱いし、硫黄くさいし、常に気鎧を発していなければ火傷じゃ済まない。」

もうっ、ここまでスタミナを要求されるとは思わなかったよ。

「逃げよつと」

あたしは大きくバックステップし、黒い海岸のほうへと走る。

「逃がすものかああああああああああっ！」

「わつと」

目の前に拳が。あたしはそれを、蛇行することで潜り抜ける。

「ちょこまかと」

このままじゃ、いずれ捕まっちゃう。

「よし」

妙案を思いついて、あたしはスルトのほうを振り返った。

「どうした？ 死ぬ覚悟が整ったか」

「やってみなよ。あたしを傷つけた時点で、勝利の剣にシンマラを殺すように命じるから」

「な」

スルトは思わず、シンマラのほうへ視線を向けた。

「チャンスだ。」

「せえいっ!」

「ぬあ!?!」

跳び蹴りで、あたしはスルトに膝がつくくんをお見舞いした。

見事。スルトは冷えた溶岩の上に尻もちをつく。

「今なら」

逃げ出せる。

「こ、この小娘がああああああああああああああああ!」

スルトの絶叫を背後に、あたしは黒い海岸へと疾走した。

「ふう」

額からにじむ汗を手でぬぐい、深呼吸する。

大気が温い。でも、火傷するほどじゃあない。

少し煙いけど、しょうがない。ここで作戦を練ろう。

「そんなところで何をやっている?」

スルトだ。その巨体から放つ灼熱のオーラで、黒い砂浜の半分を溶岩と化した。

崖の上には、炎の巨人がちらほらと顔を出している。あたしとスルトの戦いの行方が気になるんだね。ただ、シンマラの姿は見当たらなかった。

「シンマラを人質にしておつて。それが何をもたらすのか、その身をもつて思い知れ」

別に、そんな意図はない。

勝利の剣をどう制御すればいいのか。

あたしは、それを鞘に押し込めるぐらいしか知らないんだよね。

「あなただって、あたしを殺そうとしたじゃない。あなたの大切な人を屠るぐらい、なんてことはないでしょ?」

「き、貴様」

「それに、行かなくていいの？ シンマラが、今頃やられてるかもしれないよ」

「っ」

その脅迫で、スルトはあたしに背中を見せた。

ただ、殺気はあたしに向いたままだ。動いたら、危ない。

「……………」

「ふっ。また同じ手で来るかと思ったが、今度はそうしなかったな」  
スルトは、それなりに頭が回るみたい。

正直者で、素直には違いない。あたしの発言にだまされてるかどうかは、殺気の矛先で判断できる。

「シンマラの気はまだ潰つぶえてはいない。冷静になれば、貴様の甘言かんげんに釣られることはありませんよ」

「炎の巨人が、冷静なんて言うんだね。似合わないよ」

「なんだと？」

スルトの沸点が、何となく理解できてきた。

ウトガルザのおかげかな。ちょっとだけ、はったりが上手になっ  
たよ。

「その刃を、首元に突きつけてるんだよ。ほら、あたしが数えてい  
る間に助けないと間に合わないよ？ 九、八、七」

「き、貴様ああああああああっ！」

スルトは腕を振り上げ、炎と雷いかづちをまとった拳を地面に叩きつける。  
「わわわっ！？」

カウントを止めて、あたしは後ろへ飛んで、海面に足をつけた。  
すごい地響きだ。海に来なかったら、間違いなく転んでたよ。

「我を馬鹿にしおって。シンマラを利用して、我的手から逃れよう  
など笑止千万！ その身を焦がすだけでは生温い。その身と骨と、  
魂までをも火葬してくれる」

バチン。両手を合わせて、スルトは全身を青い炎で包んだ。  
それだけじゃない。電流も発生してる。

「全力で屠ころってやるっ」

低くしわがれたその声は、耳に入るだけで不快だった。

「やっぱあたしには、そういうのは無理だね」

正々堂々。それが一番っ。

「ごめんね。スルト」

「なんだと？ 今更、命乞いか？」

「違うよ。あたしは、シンマラを人質にしようだなんてこれっぽっちも思ってない。今から、あたしは正々堂々とあなたに立ち向かうよ」

「正々、堂々だと」

「うん。やっぱそれがあたしらしいよ。まっすぐ、あなたを正してみせる」

「正す？ 我をか」

何を言っているのか解らない。そんな顔をしてるね。

フレイヤはダメだったけど、スルトなら正せるかもしれない。

ううん。正してみせる。

それがシンマラとの、約束だから。

「波動眼！」

目を閉じて、力を込めて開放する。

ついさっきまで眼前に広がっていた赤と青の世界は、瞬く間に白と黒に彩られる。

「ぬ？ わ、私の力が……」

スルトがまどっていた、炎と雷いかずちが霧散する。

「馬鹿な。お前はいつたい　ぐっはあああああああああああああ  
あああっっ！？」

言いきる前に、あたしはスルトの後頭部に跳び、それを思いきり踏んづけてやった。

顔を海に浸けられて、頭は冷えたかな？

「よっど」

黒く冷えた溶岩の上に立ち、スルトが起き上がるのを待つ。

「こ、この女ああああっっ！ 我を、我を足蹴にしおったな」



スルトが片膝を伸ばしたところで。

「ぐ、ぐふああああああっっ!？」

跳び蹴りにより膝かっくんを、もう一度お見舞いする。

「まだまだ」

空中を蹴って飛び回り、今度は額を蹴飛ばす。

宙返りしながら海のほうへと離脱し、波動眼を解いた。

「はあ、はあ」

ウトガルザとやりあった時より、発動時間が短い。

自息法のせいだ。かといって、それなくしてはこの場で活動できない。

「水、水がほしい」

弱音を吐いても、誰も助けしてくれない。

下を見る。海水。

あ、そっか。

閃いて、あたしは海面に片手をついた。

「こ、このクソアマああああああっ!」

海水を電気分解し、酸素と水蒸気を発生させた。

それを深呼吸して取り込み、何とか回復する。

「よし」

ほんとは液体で飲みたい。うっっ、がまんがまん。

「もう容赦はせんぞおおおおおおおおおおおっ  
っ!」

ああむけに倒れていたスルトは、飛び起きて地震を起こす。

「はあああああああああああああああああああああああ

両手を合わせ、その中に赤紫色の球体を作り出した。

「な、何をする気？」

火炎と稲妻。その球体は、火と雷の属性で構成されていた。

「ゆくぞ。覚悟するがいい!」

そのプラズマの球体から、無数の矢が飛んでくる。

外れた矢が海面に触れたことで、水蒸気が発生した。

「これは」

波眼を使わないと危ないと感じ、矢と球体もろとも消し去った。

「な、なんだと？ 貴様、波眼を使えるのか」

自息法だけでなく、波眼にも頼らないといけない。

このままじゃ、ジリ貧だ。

「はあ、はあ、ふう」

スルトは炎だけでなく、電気を帯びている。

海水温が一気に上がってるね。そうでないと、攻撃が止んだのに、水蒸気が起き続けている説明がつかない。

「さあ、どうした？ このまま逃げたまままで終わるのか」

「っ」

ずぼっと、片足が海中に入ってしまった。

慌てて足を上げて、海面に立てるよう気を引き締める。

「む？」

手と手を合わせて鳴らし、両手で雨傘を構えた。

「何をするつもりか知らんが、我がここにいる限り、深淵への道は閉ざされたままだ」

ほくそ笑むスルト。

やばい。さっきので、こっちが息切れしてるのがバレた。

「通る前に、あなたを倒すよ」

「我を倒す？ 思い上がるなよ。小娘風情がああああっ！」

再び両手を合わせて、プラズマの球体を作り出した。

「さあ、覚悟するがいい！」

波眼が使えないことを見透かしているのか、スルトは巨大な球を生成した。

「消してみるがいい。それができるのならなあっ！」

放たれる、でっかい球体。

雨傘を広げて、あたしはそれを受ける体勢を取った。

「うっわあ」

身を丸めて、足を踏ん張る。

それが雨傘に触れた瞬間、大爆発が起きた。  
「つつつ」

海面が揺れる。  
爆風が起きる。

踏ん張っていられず、あたしの半身が海中に浸かってしまった。

「や」

「うほ」  
やばい。そう言いきる前にはもう、荒れる海に飲み込まれていた。

うまく、呼吸ができない。

あの球体に電気があつたせいだ。

海中に強烈な電流が走り、自息法を妨害されるだけでなく、身体を麻痺させてくる。

「う」

お、溺れちゃうつ。

そう思った時、あたしの身体が何かに引っ張られた。

「ぶはああ」

気づいたら、あたしは海面に引き上げられてる。

「だいじょうぶ？ 華葉」

「し、シンマラ？」

あたしは首根っこをつかまれて、シンマラに救助されてた。

「何のつもりだ。シンマラ」

うわ。いつの間にか、あたしとシンマラはスルトの手が届く距離にいた。

「スルト。あなたは変わったわね」

「変わった、だと？」

「ええ。昔のあなたは、豪放磊落（ごうほうらいらく）な人だったのに。今は、自分が死ぬことを恐れて、目先の力や利益を追い求める利己主義に走っている」

「その何が悪い？ シンマラは、我に死ねと言っのか」

「そうではないわ。早とちりをしないでちょうだい。私が言いたい

のは、どうしてそれだけの力があるのに、勝利の剣なんて欲するの？ あなたはあなたの力だけで充分、運命を覆せるのではないの？」「我に最期を告げた巫女は、それが我の運命を決すると言ったのだ」「巫女？ 誰なの、それは」「言わなかったか？ 百年前にここを訪れた、人間の娘だ」「あなたは、私よりもその女性を信じるのね」「溜息をつくシンマラ。

「もう、平気だよ」

「そう？ 無理はしないでね」

「うん」

海面に足をつけて、あたしは流れに乗ってこっちに來た雨傘を拾う。

「その巫女の予言を過信して、あなたはそんな臆病者に成り果てたのね」

「お、臆病者だと？」

「そうよ。改心しないのなら、あなたの股間についているキタマを蹴り碎くわよ！」

ちよっ。

し、シンマラっ。その発言は、ちよっち過激だよっ。

「き、貴様がたぶらかしたのか」

「そうやってすぐに人のせいにして！ どうして素直に反省できないのっ！？」

「む、むっ」

あたしをにらんだスルトは、シンマラの氣迫にびびってる。

伏し目がちになり、ドスンと尻もちをついた。

「華葉」

「な、なにっ？」

「もう回復したかしら？」

「う、うん」

「そう、なら再開なさい。一度始めたケンカだもの。白黒つけない

と、おたがいに気持ち悪いでしょ？」

まあ、確かにね。

スルトも同じなのか、ゆっくりと立ち上がった。

ただ、先程より気迫がないような。原因は、あたしの隣にいる人だよ。

「ふう」

深呼吸をして、水分と酸素を補給する。

「ひ、ひとつ聞きたい」

「何よ？」

「シンマラにとって、その娘は何なのだ？」

「親友よ」

スルトの問いかけに、シンマラは迷いなく答えた。

「生まれて初めてできた、私の親友よ。私はアウルゲルミルとユミルの相の子。ここにいるムスペルは誰ひとりとして、私に心を許さなかった。私も、誰ひとりとして心を許せなかった。あなたにもね。孤独で荒んでた私は、イアルンヴィズの森で華葉に出会い、ちよっかいを出した。それでも華葉は、私を責めもしないし、とことん信じてくれた。本当にうれしかったよ」

責めたよ、あたしはあなたを。

でもシンマラは、あのケンカについて何も言い出さない。

「わ、我よりもその娘を信じるのか」

「そうね。今のあなたは、信じるに値しない。私を救ってくれた恩義はあれど、墮落したあなたに付き添うかどうかは私が決める」

「だ、墮落？ 我が、そうだと云うのか」

「そうよ。私の親友を傷つけて、殺そうとして、それが墮落してないとしても云うの？」

「わ、我は」

「言いわけなんて聞きたくもないわ」

「前髪を手でかき上げて、シンマラはスルトに背を向けた。

ガーン。ってのが的確なぐらい、スルトは落ち込んでるうっ。

「恐妻家なんだねえ」

ふたりのやりとりは、犬も食べません。

「あ、あの」

「華葉。スルトを叩きのめしてちょうだい」

「は、はあ」

その気迫に、あたしもたじろぐ。

「ぬ、ぬう」

立ち上がるスルトには、霸気が感じられない。

あたしを見下ろしてはいるものの、すっかり腑抜けになってしまった。

「スルト。華葉を殺したり、華葉に負けるようなら離婚よ、離婚」

「な、なにっ？」

ええ？ 突然、何を言い出してるのお？

「ま、待て」

「待たないわ。嫌なら、華葉に勝てばいい。単純なことでしょう？」

「わ、解った」

さっきとは打って変わり、スルトの気迫が戻った。

腕を組んでそっぽ向いてるシンマラは、あたしだけに見えるように微笑んでる。

ああ。そっか。

あたしに、気を遣ってくれたんだね。

「よし」

あたしは頬を叩いて、気合を入れ直した。

「仕切り直しといこう」

「うん」

あたしとスルトは、黒い海岸で向かい合う。

シンマラは岩場に腰かけて、高みの見物。

炎の巨人が複数、崖からこちらを見下ろしているのが気になった。



一撃をもらって、オーラが弱っているみたいだね。

それでも、灼熱と紫電のオーラは脅威だ。波動眼なしでは、とても至近距離で戦えない。

「己の限界に挑戦するのもいいかもね」

「ぬ？ 何をするつもりだ」

波動眼。

それを使おうと目を閉じたら。

「我がやられてばかりだと思っな」

その低い声に乗せられた殺気に、まばたきが止められてしまう。

「うおおおおおおおおおおおっ！」

腕を振り上げ、スルトはその拳で海を叩いた。

「な」

海面が激しく波打つ。

あたしは危険を察知して、大急ぎで岩場に移動し、空高く跳ぶ。

「やりおる」

その波の高さは、優に数十メートルはある。

それをやりすごして安堵してしまったあたしは、スルトが同じくジャンプしてるのに気がつかなかった。

「え」

「甘いわ！」

「うぐあっ」

そのふたつの拳に叩き落とされる。

どうにか穏やかな海面に着地したあたし。

スルトは黒い海岸に降り立ち、腕を組んでこちらを見下ろしてた。

「ほう？ 我の一撃をもらっても、まだ立てる気力があるか」

「ちよっち効いたね」

攻撃が、恐ろしく重い。

動きは緩慢なのに、隙がない。

「ふう」

さっきので、髪の毛が少し焦げてる。



手で触ってみて、あつと思つたよ。

「あつはははは。我が長スルトに勝てるものか。あんな小娘ごときが」

「そうよね。あんな無謀でバカな女は、もう二度と見ることはないと思つてたけど」

上のほうから、罵声が飛んでくる。

「気にするな」

スルトの言葉に、あたしは首を左右に振つた。

「ふう」

深呼吸して、水分と酸素を補給する。

「髪が……ま、しょうがないか」

ちりちりしてる。

まあいいや。日本に戻つたら、適当な美容院に行けばいい。

「髪を触る余裕があるのか」

「髪は女の命だよ」

「ええ、そうね」

「ぬ？　せ、先刻とは雰囲気か……」

あたしとシンマラの怒気を感じたのか、スルトがたじろぐ。

「もうやめろ。あんな軽い攻撃で我が長を倒せると思つなど、笑いがくだぞ」

ヤジがうるさい。

でも、それは事実だ。

あたしの攻撃は全て、スルトに当てても有効打になりえない。

ウトガルザとは次元が違う。波動眼を使つても、大してダメージが通らないんだもの。

「ん？　雨？」

ポツリポツリと、小雨が降る。

「あ」

あたしは、おじいさんの言葉を思い出した。

『柔とは、静かに相手を追い詰めるものじゃ』

頭を冷やさないと。スルトとやりあっている時のあたしは、間違  
いなく剛の戦法に従事していた。

剛ではダメだ。中途半端で、あたしらしくない。

ウトガルザとやりあった時のように剛に柔を織り交ぜ、かつその  
柔が剛を上回るようにしなくちゃ。

「考える時間すらも、我は与えんぞ！」

スルトが海面に足をつけて、あたしに接近してきた。

海上を歩行できるんだ。海が安全地帯ではなくなってしまったね。  
「ほう？」

振り下ろされた拳を引き抜いた雨傘で受け止め、それからその腕  
を蹴飛ばす。

「ふん。それぐらいで」

ダメだ。あたしの蹴りは軽くて、スルトに通じない。

「ちい」

大幅に距離を取って、あたしは雨傘をたたみ、また左腰に差した。  
「どうすれば」

旋風。これもダメだ。かめはめはが通じないのを見ると、気を無  
駄に費やすだけだ。

真空壁。これもダメね。体格差がありすぎて話にならない。

「ふう」

「どうした？ まだ終わりではないだろう。目が死んでいないのだ  
からな」

「そうだね」

「ぬ？ な、なんだ」

スルトは目を疑ってた。無理もないよね。

「え？ か、華葉？ 気配が、消えた？」

あたしは薄い気鎧で光を屈折させ、息を殺して自分の存在を空気  
に等しくしたんだから。

おばあさんとウトガルザの、ふたりの力を借りたんだ。

森の中で、あたしはおばあさんに蹴られた。その時、姿は見えない

かった。気配は本能で感じられたけどね。

次は、ウトガルザだ。あたしは彼と対峙した時、存在そのものが感じられなかった。目の前にいたんだけどね。

そのふたつを組み合わせれば、自然とできあがる。

あたしの存在を隠すことが、ね。

「く、どういうことだ？ 目にも、耳にも、鼻にも、存在が感知できんとは」

この状態になって、あたしは。

「ぬっぐはああああああああああああああああっっっ！？」

スルトの腹に、鉄拳を叩き込んだ。

「な、なんだと？ ど、どこだっ？」

ダメだ。繊細せんさいすぎて、気を維持できない。

即興じゃここまでか。もう少し鍛錬しないと、長時間は無理っぽい。

「な、なんだ。そこにいたのか」

「ふう」

スルトは眼前に立つあたしを見つけて、不敵な笑みを浮かべる。

「華葉といつたか。そなたの攻撃では、我を倒すことはできんぞ」

「言ってくれるね」

「だが、その想いは本物だ。我の臟腑ぞうぷに響くぞ。下手に長引くと、どちらかが溺れそうだ。次でケリをつけてやるう」

スルトは手を合わせて、プラズマの球体を生み出した。

「どうしよう」

あれは、雨傘で防いでも衝撃が来るほどの威力だ。もう一度もらったら、さすがにやばいよね。

でも、それをチャージしている間、スルトは無防備だ。

かといって、攻めても決め手に欠ける。ど、どうしたら……。

「あ」  
ピコン。頭に電球が来た感じ。

「ん？ なんだ。何を考えている」

「へへっ」

指先で鼻の下をこすり、あたしは両手を海面につけた。

「な、何をやる気だ」

「必殺。大波返し！」

海水をつかんでダツシユし、勢いに任せてジャンプする。

そうすることで、スルトに向かう大波ができあがるのだ。えっへん。

「な、なんだと？」

さすがのスルトも、チャージを中断してガードした。

あたしは、再び気配を消してスルトの背後を取る。

「とりゃああああああああっ！」

「な、なに　ぐおおおっ！？」

スルトのこめかみに、あたしの跳び蹴りが当たった。

けど、スルトは微動だにしない。

「よっと」

あたしは黒い海岸に着地し、自分で作った大波を見送る。

その胸元まである大波でも、スルトを押し倒すことはできなかった。

「あっははははは。小娘、貴様の軽い攻撃は我が長には通用せんよ。悪あがきはよせ」

「そうよ。いくらやっても同じことね」

正直、ぶつつけ本番だから不安なんだよね。

ふと、スルトが横に倒れ　なかった。

ギリギリで海岸に手について、四つん這いになって息を荒げている。

「は、はあ、はあ、はあ」

「ど、どうしたんです？　そ、そんな大げさな」

「ッ」

スルトは、ヤジを飛ばしていた巨人たちをにらむ。

「こ、この娘の……攻撃が、軽いだと？ 二度と言うなあああああああああああつっ！」

一喝。スルトは、血眼であたしを凝視する。

「ダメだったか。ちよっぴり自信あつただけどさ」

あたしは足先から気を放ち、それでスルトの頭を固定した。そこに蹴りを当てて、衝撃波を生む。その衝撃波は、気の膜によって外に逃れずに乱反射される。

普通に殴っても蹴ってもダメだ。だからこそ、あたしは攻撃によって生まれるエネルギーを、無駄にしないでどう活用するかを考えた。そして、あの技に行き着いたんだ。

巨人とはいえ、人間と似た身体の構造をしてる。だから頭を狙った。この技が一番効くであろう部位は、脳のある頭だ。内部に衝撃波が発生し、それが逃れずに脳を揺らし続ける。いくら巨人でも、そんなのが起きたら立っていられないはずだ。

現にスルトも、気絶寸前まで追い込まれてるしね。

ふふつ。ほんとと言うと、それはおばあさんの技をちよっちアレンジしただけなんだよね。

腹を拳で殴り、全身に衝撃波を通過させる。その剛たる技を、あたしなりに柔に変えてみたんだ。

「い、今まで、手を抜いていたわけでは……」

「ないよ。本気だった。全力だった。今スルトにやった技は、ついさっき思いついたの。それで、試してみようと思ったんだ。そうしたら、思った通り。にはいかなかったね。練習もしてないし、ぶつつけ本番なもの。付け焼き刃にすぎないよね」

「あ、新しい技だと……？ ふ、やってくれるな。これは、私の完敗だ」

「え、でもそれだと」

「ふふ。もう我は、立ち上がることもすらできん。さっきの蹴りで、意識を持ってかれそうになった。こうして気を失わぬようにするだけで精一杯だ」

スルトは、号泣していた。

「あら、泣いているの？」

シンマラはスルトに駆け寄り、その涙を手でぬぐっていた。

「ふ、ふふ。これで離婚確定か」

「そ、それで泣いてたんだ。うわっ、あたしはとんでもないことをしでかしちゃった。」

「ちよいと演技して、わざと負けたほうがよかったかなあ。なんて思っていたら。」

「あなたはよくやったわ。離婚はなしよ」

「な、なんだと？」

「ああでも言わないと、あなたは華葉と本気で向き合わないでしょう？ ただの方便よ。だから泣かないでよ。みっともない」

頬を赤らめて、微笑んでるシンマラ。

ペロつと舌を出して、あたしにウインクしてくれた。

「済まなかったな」

「うっん」

あたしは倒れたスルトを担いで、彼の家まで運んであげた。

おかげで、ちよっぴりお疲れです。

「ふたりにやられて、我も目が覚めた。それに、シンマラの苦悩に気づけてやれなんだ。これからは、己だけで考えずに行動すると約束しよう」

正座して、頭を下げるスルト。

「そう。ありがとうね」

「今までさみしい思いをさせたな。シンマラよ」

「いいのよ。別に」

安堵しているスルト。

「うっん。シンマラにベタぼれだねえ。」

「さて、華葉とあったか」

「あ、はい」

「本当に、いいのか？ 勝利の剣を、我にくれるなど」

「いらぬよ。あたしはもう、自分の運命は自分で切り開くって決めたんだ」

「そうか。ならばありがたくちょうだいしよう」

ふと、スルトは石造りのタンスから何かを取り出した。

「代わりにとってはなんだが、これを授けよう」

「わつと」

あたしがキャッチしたのは、短い刀。　　って、刀？

「珍しい刃物ね」

「ああ、にほん刀で、わきざしというらしい」

日本刀？ 脇差？

「ん？ どうした。ふたりは、その名に聞き覚えでもあるのか」

「あるも何も、あたしはその日本に帰りたいの。そうしたらなんで、ここに？」

「なんだと？ とになると、お前もあの娘と……同じなのか」

同じって、誰と？

それを察したのか、スルトが淡々とした口調で話してくれた。

「百年前。ここにある人間の娘が訪れた。我はその娘と話をして、一戦を交えた。結果は引き分け。その娘は確か、銘をむらまさという刀を振るっていたな」

村正？

それって、妖刀ようとうの代名詞じゃない。

「その娘はニヴル Heim からヨツン Heim の知恵の泉、次にウトガ ルズ、そこからムスペル Heim へとやってきた。我と遊んだ後、落盤して塞がっていた洞穴に剣閃けんせんを放ち、深淵を向こうの次元へと繋げたのだ。こう話していたのを今でも覚えている。いつかここに、黄金の剣を持つ人間の娘がやってくる。その剣が、この世界の運命を決すると。その娘がこの穴を通る前に、わきざしをくれてやれ。あちらの世界で巡り逢う、赤い糸となるように」

この刀が、赤い糸？

「まさか、アルテレイマにウトガルザは……」

「ふたりは知っていて当然だ。シンマラよ、聞かなかったのか？」

「い、いいえ」

ウトガルザは、知ってて隠してたんだね。

その確信は、次のスルトの言葉でより強固なものになる。

「確かその娘の名は、若郷美奈わかくさみいなという」

しきさと？

それって、あの教科書の裏に書かれてた名字と一致する。

「その人は、巫女だと言ってたよね」

「ああ」

「服装とか、特徴は？」

「ふむ。その娘は上に白い服を着て、下に藍色のものをはいていたな。背丈は、華葉と同じくらいか。それより小さいかもしれない」

「ほ、他には？」

「我が知りうる情報はこれで全部だ。華葉といったか、済まないな」

「ううん。後は、向こうに行ってから自分で探すよ」

「とはいえ、百年も経っているんだぞ？ あの娘も、無事ではおるまい」

「どうかな。あたしには、そうは思えないよ」

あたしとスルトは、同時に微笑んだ。

洞くつの前。

あたしは結界内ということもあり、自息法を止めて、深呼吸している。

見送りに来たのは、スルトとシンマラだけだ。

「だいじょうぶ？ ムスペルヘイムの環境が劣悪だというのは、応

えたでしょ」

「まあ、ね」



ここに辿り着くまで、いろいろあったなあ。  
課題は見えたよ。波動眼が発動していない状態でも、技を完璧なものにしくちやね。

「はい。華葉」

「ん？ なにこれ」

ジャラジャラと音がする、ずだ袋をもらった。

「中には、金貨と銀貨と銅貨が入ってるわ。こつちの世界のお土産  
よ」

「え、お、お金？」

「そうよ。記念にっつても変だけど、持って行きなさい。こつちに置いてても、酸化したり溶けてしまっただけだから」

中をのぞくと、多くの金銀銅の硬貨があった。

ふと、真つ二つになってる銀貨が一組ある。それを取り出すと。

「それは、エルザがあなたにあげたものよ」

「え。ど、どうしてこんなふうになっちゃったの？」

「あなたが勝利の剣を脇腹にもらった時、ね。それがなければ、華葉の傷はもつと深かったはずよ」

あ。

「もしかして、あたしはおばあさんにまた助けられたの？」

「うふふ。そうみたいね」

ぎゅっ。あたしはこの銀貨を、大事にずだ袋にしまった。

「よつと。荷袋よ」

「あ、ありがとう」

「いえいえ」

にこやかに微笑むシンマラ。

うっん。涙目だった。

無理して、笑ってるんだね。

「シンマラ。その中には我の分の銀貨もあるのか？」

「あるわ。ウトガルザの分も、含まれてる」

「ど、ど、ど、ゆ〜こと？」

あたしが首を傾げていたら、微笑みながらシンマラが説明してくれる。

「華葉。こつちの世界ではね、銀貨を旅人に手渡す風習があるの」「銀貨を？」

「ええ。銀の代物なら何でもいいんだけど、普通は銀貨をあげる。その意味はね、その旅の道中に幸福あれって意味なの」

「へえ」

「こつちの世界では、銀は魔除けになると信じられているのよ」

「そっか。もらった銀貨は、大事にするね」

「いいのよ。その銀貨は、旅費として使ってもらわないと困るわ」「そ、そうなんだ」

こつちの世界の常識は、あたしにはさっぱり。

「とはいえ、エルザにもらったのは硬貨として使えそうにないわ。大事に持ってなさい」

「うん」

スルトはこつちの慣れに慣れてないのか。目線に落ち着きがない。

「シンマラ」

「こつちの心配はしなくていいわ。私は、あなたから勇気をもらった。しばらくしてから、私はウトガルズに戻って、それから皆へ華葉は旅立ったと知らせるわ」

腰に差してる勝利の剣を、シンマラは名残惜しそうに触れる。

「それは、大事に使ってね」

「あなたという主人を失って、それ以後、言うことを聞いてくれるかどうかは怪しいけどね」

「どうかな？ あたしは、その剣から相手の力量を教えてもらったもん。これからは、自分の感覚で計るから問題ないよ」

「この剣を、ただの指標にしたの？ ふふ、あっはははは。まったくあなたという人は、とことん不思議だわ」

涙をこぼして、大笑いするシンマラ。

「じゃあ、もうそろそろ行くね」

「ええ」

「無事を祈っているぞ」

「ありがとう」

「ずだ袋をしまった荷袋を背負って、あたしは暗い洞くつの中を歩み進む。」

「さようなら。また逢えるといいわね〜！」  
手を振って見送るシンマラ。

あたしはそれに手を振って応えて、暗闇の中を駆け抜けた。

## エピソード

まっぶしい。

一筋の光が見えて、そこへ向かってダッシュしていたら。  
あたしは、とある森の中にいた。

「あれ？」

背後を振り返ると、そこには何もなかった。  
ただ、大きな樹木があるだけだ。

「この木が、まさか」

と思い、両手で触れてみる。

しかし、何にも見つからなかった。

「あたし、地球に帰ってきたの？」  
実感がない。

そもそも、ここが日本だっていう確証もない。

「あ」

空を見上げると、そこには三日月があった。

夜空に目を凝らしていると、そこには見覚えのある星座がいくつもある。

「あれは、カシオペア座？ てことは、今は秋？」

季節が解ったところで、何の解決にもならないよね。  
ここにいてもしょうがない。

とにかく、ここがどこなのか解るものを探そう。

「ん？」

人が通れる道を見つけ、そこを歩いていると。  
どうにも、下っているような気がする。

「もしかしてここ、山中の森林？」  
としか思えない。

だって、あちこちの樹木に爪を研いだよつな跡が残されているか  
ら。

「熊、かな」

別に怖くはなかった。

以前のあたしだったら、怖くて泣き出していたかも。それと対峙しても、今は生き残れる自信がある。

「やっぱ、もう普通の女の子じゃないよね」

ひとり言をつぶやきながら、あたしは山を下りる。

声を出しているのは、熊避けのためだ。

本当は鈴がいいんだけど、ね。

「あ」

しばらくして、あたしは見慣れた景色を見つける。

近くの樹木に手を置いて、ビルの明かりが彩る夜景を眺めた。

「ん？」

目を凝らすと、多くの赤い光が あれは、パトカー？

耳を澄ますと、けたたましいサイレンの音がする。

「何か、事件が」

言葉の途中で、あたしの頭上を何かが通過した。

「飛行機？ いえ、あれは……」

そう呼ぶには、あまりにも大きい。

空を覆い隠せるほどの巨翼きょよくをはためかせ、緋色のドラゴンが月に向かって吠えていた。

「ど、ドラゴン？」

どうして、こんなところに。

フレイヤとやりあった時に、脇にいたのとは鱗の色が違うし、サイズが大きい。

『近隣住民の皆さん。急いで避難してください！』

拡声器による呼びかけが、あたしの耳に入った。

ここは、日本だ。その注意で確信が得られたよ。

「火の粉が散ってる。あのドラゴンが……」

都市部の上空を旋回し、ドラゴンは火の玉をまき散らしている。そのうちのひとつが、戦闘機を一機撃墜した。

「あ、町中に落ちちゃっう」

あたしは全力疾走で、落下地点へと急いだ。

「危ない」

あたしは右手に気を溜めて、拳に乗せて放った。

それに見事に命中。

空中分解した戦闘機の破片が、交差点に散らばる。被害は軽微。

「あのドラゴンを、何とかしないと」

ある家屋の屋根上にいるあたしは、姿勢を低くして逃げ惑う人々を観察する。

「事故が、起きなきゃいいけど」

やっぱり皆、あのドラゴンから逃げてる。

「よし」

あのドラゴンを退治しよう。追い払うだけでもいい。ぶるっ。急に、震えが来た。

怖くない。これは、これは武者震いだっ。

「っしやあ」

頬を叩いて、気合を入れる。

「ん？」

パシヤリ。気づいたけど、中には携帯電話で写真を撮っている人もいた。

実物のドラゴンは、こっちじゃ珍しいからねえ。

「やっぱり」

目立つよね。あんなのと戦ったら、翌日の新聞全紙に一面で載せられちゃっうよね。

それでも構わない。

あたしは大切なものを守るために、この力を振るうと決めたんだ。

「行こう」

この世界にどうしてドラゴンが現れたのか。それを確かめなくち

や。

あたしは、屋根伝いに都市の中心部へと急いだ。

## エピソード（後書き）

完読していただき、ありがとうございます。

さて、私がこの物語を読んだ人に対して、ひとつ問いたい。

まず、皆さんは力と強さがどう違うか答えられますか？

私は、一言で答えることができなかった。

というより、一言で納得させる返答がありませんでした。

「うん。勝利の剣は、確かに持ち主に勝利をもたらしてくれる。そのはず。けれども、それは自分の手で勝ち取ったものじゃない。そんな勝利に、本当に価値があるの？ あたしはないと思うよ」

力と強さ。若いうちは混同しておりました。

けれど、後々に解ったんです。

力というものは、接し方を間違えると大変なことになると。

このサイトがよく、言葉は悪いですが改造チートのようなキーワード、設定を用いている人が多いようですが。

そんな作品とキャラクターは、絶対に売れません。

なぜなら、その作品とキャラクターに接するのは、読者である人間だからです。

人間は弱い。だからこそ、完璧、絶対的な力、強さに憧れる。

しかし、それを他者が有している時、抱くのは尊敬ではない。嫉妬がほとんどだ。

そう。人間は、現実味のないもの、自分の常識を超えたものに共感、感情移入できないのです。

もしそのような「完璧超人」を用いる場合、弱さを用いること。

それを表現できなければ、読者である人間に理解されることはない。だからこそ私は、華葉に力を与えた時、彼女が何を思うのか注意して書きました。



皆さんが力と強さに関して、何を抱いたのか。教えてくれると幸いです。

それと、力と強さについてはあますことなく伝えたくもりです。もう私は、これ以上の『力と強さ』については語れません。もし誰か、自分ならもっとうまく表現できるといふ方は、書いてください。私は、それを心待ちにしています。

さて、ウルヴァフとヴァニアスタル、エルザについてですが、スクラーミルもそうです。

北欧神話の文献には、彼らの名前は記述されていません。

ヴァナヘイムの長、イアルンヴィズの長である老婆、に名前がないので、勝手に命名したキャラクターです。

特にウルヴァフは、存在すらも記述されていません。

ヴァン神族について、あまり深く掘り下げられていなかったので、勝手に暗躍させています。

この作品で改めるところは、もう文章ぐらいしかありませんね。

ああそれと、私はこの作品を書く際にプロットは立てていません。話ごとの覚え書き、ぐらいいしか記していないのです。

書き終えた後で、繋がりつつじつま合わせ、推敲したぐらいですかね。

あはは。これ、もう片方にもあるんですよ。コピペしときました。さて、もうひとつを早く書き進めないと。

若郷香乃と折笠華葉。

ふたりの大親友になるひとりの女の子と、日宮明里の王子様となる男の子の物語をね。

## カードリスト（前書き）

後で、フレイバーテキストを付け加えるかも…？

## カードリスト

これはただのカードリストです。小説ではありません。

ルールは公開しておらず、用語は説明しないと解らないので、  
内の注釈文で補ってあります。

解る人は解るでしょう。

ぎやざのみならず、様々なゲームに影響されているな、と。

マークは、\* (プレイ)、! (起動)、? (誘発)、 (永続)、

E (装備)、 (ルール)、の能力を示しています。

「」はコスト、【】はタイミングを示す。

コスト内にある ( ) は、マナコストです。

サヴァントの下部の記述はこういう意味がある。

パワータイプ<sup>パワー</sup>≡ P O W ? / S P D ? / L I F ?<sup>ライフ</sup>。

数値の後に F とある場合、それは効果によっては上下しない。固定値を示す。

パワータイプには、A (ATTACK。戦闘ダメージ)、M (M A G I C。効果ダメージ)、S (????)、がある。

これ以上の情報は開示しません。

解らなくても、質問してきてても、公開を求めても。

特定の条件を満たさない限り、私は応じません。あしからず。

《サヴァント》 (SERVANT)

慈愛の癒し手メングラッド。(じあいのいやしてめんぐらっど)

カラー白。(命、光属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：色 橙。(このカードは橙色でもある)

\* - 「(1 + 白2)」

ディテクト。(このカードの周囲1HEX内の敵のセットカードを、あなたは確認する事ができる)

リペル「デイスロツジ」(このカードとこれが位置するHEXは、指定されたものの対象にならない)

! - 「(2 + 白2)P」:サヴァント1体を対象とし、それを再生する。

連携「治療の女神エイル」と連携する場合、代わりに味方全てを再生する。

【プレイヤを再生した】場合、それは残り3点になる。

M || POW0 / SPD2 / LIF3。

#### 連携。

このカードが指定された名称の味方のサヴァントと同HEXに位置する場合、連携のモードを選択する事ができる。

その場合、連携を持つサブの能力のコストを支払う。

サブの効果は適用せず、メインの能力は連携の効果適用する。

代わりに、という記述がある場合、その連携は連携されないモードの効果適用せず、連携したモードの効果のみを適用する。

治療の女神エイル。(ちりょうのめがみえいる)

カラー橙。(命属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

\* - 「(2 + 橙1)」

クリーン。(移動が完了した時、そのHEXにある依存とセットカードを使用不可に送る事ができる)

カウンター2。(1ターンに効果ダメージを2点まで軽減できる)

! - 「(1+橙2)P」: 1HEXを対象とし、そのの全てを3点回復する。

連携II「慈愛の癒し手メンゲラッド」と連携する場合、そのサヴァント全てをアクティブにする。

このターン、それらは再び1回ずつ移動と攻撃ができる。

M || POW 1 / SPD 2 / LIF 3。

情熱の焰姫ゲルズ。(じょうねつのえんきげるず)

カラー赤。(火属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

\* - 「(1+赤2)」

デイフェンス。(同HEXの他の味方がダメージを受ける場合、そのダメージ全てを自身に移す事ができる)

ガッツ。(このカードが残り3点以上で致死ダメージを受ける場合、代わりにこれは残り1点となる)

! - 「(1+赤2)P」: 1HEXを対象とし、そのの全てにダメージ2点を与える。

連携II「慈愛の癒し手メンゲラッド」と連携する場合、このカードをアクティブにする。

このターン、+3+3+3とオフェンスと二段攻撃と全体攻撃を得る。

M || POW 3 / SPD 2 / LIF 3。

全体攻撃。(自身のパワー÷2(小数点切上)の通常ダメージを、相手側HEXに割り振る事ができる)

二段攻撃。(通常ダメージを、自身のスピードのタイミングと、それを-1したタイミングで与える)

ヨツンの長ベルゲルミル。

カラー黄。(土属性)

サイズXL。

伝説の亜人のサヴァント。

：プレイ 無効x、召喚 効果x。(このカードのプレイは無効にされず、このカードは効果で召喚できない)

\* - 「(4 + 黄4)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】  
ディフェンス。

ブロッカー4。

! - 「(2 + 黄2)P」：あなたのデッキ、使用不可から「ヨツン」1枚を選び、それを隣接HEXにパッシブで場に出す。

A || POW18 / SPD0 / LIF18。

ヨツン。

カラー黄。(土属性)

サイズL。

亜人のサヴァント。

\* - 「(3 + 黄3)」

ディフェンス。

A || POW10 / SPD0 / LIF10。

知恵の巨人ミール。

カラー青。(水、元属性)

サイズL。

伝説の亜人のサヴァント。

\* - 「(2 + 青2)」【あなたの使用不可にカード5枚以上】  
ライフエンス。

サポート。(このカードをパッシブにして、このカードと同じ色マナを2つつ分補える。ただし、そのマナはこのカード自身の能力には使用できない)

アドバンス $\equiv$ 3。(自分ドローフェイズ、あなたが引くカードは3枚増える)

? - 【戦闘不能】：あなたのデッキ、使用不可、手札から「ミイミルの首」1枚を選び、それを自軍HEXに出す。

M $\equiv$ POW8 / SPD0 / LIF8。

閃光の雷姫ウルヴァーフ。

カラー橙。(命属性)  
サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効x、召喚 効果x。

\* - 「(3 + 橙3)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

ジャンプ。(このカードは、自身が位置できる好きなHEXへ制限なく移動できる)

クリーン。

ヒーリング。(このカードがダメージを与えた場合、あなたを同じ点数分回復する)

! - 「(2 + 橙4)P」：味方のサヴァント全てを再生する。

M $\equiv$ POW4 / SPD5 / LIF4。

灼熱の焰姫シンマラ。

カラー赤。(火属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

\* - 「(2 + 赤2)」【あなたの使用不可にカード5枚以上】  
オフエンス。(移動と攻撃をしてもパッシブにならない)

プロテクト=青と紫。(このカードは指定されたものからの対象にならず、ダメージを受けず、装備されない)

! - 「(赤2)」:このターン、+1+1+1+1を得る。

M = POW 3 / SPD 2 / LIF 3。

魔狼マナガラム。

カラー黒。(闇属性)

サイズL。

伝説の獣のサヴァント。

: 名称 「魔狼」、プレイ 無効x、召喚 効果x。

\* - 「(3 + 黒3)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフエンス。

ダッシュ。(このカードは、距離制限なしで移動できる)

リペル=追加「(4)」(このカードとこれが位置するHEXは追加コストを払わない限り、対象にならない)

再生「(4)」(「コスト」を払う事で、そのターンの破壊を一度だけ無効化できる)

A = POW 12 / SPD 4 / LIF 7。

魔狼スコル。

カラー黒。(闇属性)

サイズM。

伝説の獣のサヴァント。

: 名称 「魔狼」



\* - 「(2 + 黒2)」 or 【味方の「魔狼ハティ」1体が存在】  
オフエンス。  
ダッシュユ。

リペル $\parallel$ 追加「(2)」  
A $\parallel$  POW5 / SPD4 / LIFE5。

魔狼ハティ。

カラー黒。(闇属性)

サイズM。

伝説の獣のサヴァント。

: 名称 「魔狼」

\* - 「(2 + 黒2)」 or 【味方の「魔狼スコル」1体が存在】  
オフエンス。  
ダッシュユ。

リペル $\parallel$ 追加「(2)」

A $\parallel$  POW5 / SPD4 / LIFE5。

狩猟の神ウル。

カラー緑。(風属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

: プレイ 無効x、召喚 効果x。

\* - 「(2 + 緑2)」 【あなたの使用不可にカード10枚以上】  
ダッシュユ。

ディテクト。

クリーン。

リーチ $\parallel$ 直線3HEX。(このカードは指定された攻撃範囲を持ち、  
その範囲内ならば通常ダメージを与える事ができる)

A ≡ POW 4 / SPD 5 / LIF 4。

奔放な妖姫フレイヤ。

カラー橙。(命属性)

サイズS。

伝説の不明のサヴァント。

：プレイ 無効×、召喚 効果×。

\* - 「(3 + 橙3)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフエンス。

ヒーリング。

全体攻撃。

！ - 「(5)P」：赤、黄、青、橙、紫、緑、白、黒のどれか1つを選ぶ。

このターン、味方全てはプロテクト≡選択した色を得る。

M ≡ POW 5 / SPD 3 / LIF 3。

巨大蛇ヨルムンガンド。

カラー赤。(毒属性)

サイズXL。

伝説の竜のサヴァント。

：プレイ 無効×、召喚 効果×、移動 自身×。(このカードは自身ではHEX間を移動できない)

\* - 「(赤8)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフエンス。

再生「(赤4)」

リーチ≡1)2HEX先。

- 【VS同HEX、隣接HEX以外&ダメージステップ】：通常ダメージの代わりに、全体攻撃(効果ダメージ5点)をする事ができる。

A ≡ POW 15 / SPD 0 F / LIFE 2 1。

氷結の狼フェンリル。

カラー紫。(氷属性)

サイズM。

伝説の獣のサヴァント。

：プレイ 無効×、召喚 効果×。

\* - 「(紫6)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフエンス。

ディフェンス。

ダッシュ。

プロテクト ≡ 赤と橙。

再生「(紫4)」

A ≡ POW 8 / SPD 4 / LIFE 5。

炎の巨人スルト。

カラー赤。(火属性)

サイズXL。

伝説の亜人のサヴァント。

：プレイ 無効×、召喚 効果×。

\* - 「(赤8)」【あなたの使用不可にカード10枚以上】

オフエンス。

プロテクト ≡ 青と紫。

! - 「(3 + 赤3) P」：あなたのデッキ、使用不可から「ムスぺ

ル」1枚を選び、それを隣接HEXにパッシブで場に出す。

A ≡ POW 12 / SPD 0 / LIFE 18。

ムスペル。

カラー赤。(火属性)

サイズL。

亜人のサヴァント。

\* - 「(赤4)」 or 【あなたの使用不可に赤のマジック5枚以上】  
オフェンス。

- 【戦闘不能】：このカードは同HEXにマジックとして依存する。

：同HEXの赤が与えるダメージ+1。

カウント=2。(このカードはエンドフェイズにカウントが進む。

カウントが0になった時、このカードを使用不可に送る)

A=POWER/SPD0/LIFE8。

《アーティクル》(ARTICLE)

巨剛山砦ヨツンヘイム。

カラー黄。(土、金属性)

伝説の依存のアーティクル。

：プレイ 無効x。

フィールド。(これは自軍HEXに位置し、あなたはフィールドを持つカードを1枚のみコントロールできる)

\* - 「(4+黄4)」

：このカードは破壊されない。

あなたがプレイするサイズL以上の亜人のサヴァントの\*のコストは「合計(4)」少なくなる。

! - 「(5)」【あなたのサヴァントが0体】：あなたのデッキ、使用不可からサイズL以上の亜人のサヴァント2枚まで選び、それ

らを公開して手札に加える。

L・自分ターン1回。(この能力は自分ターン1回しか発動できない)

イアルンヴィズの森。

カラー黒。(重属性)

依存のアーティクル。

フィールド。

\*・「(3+黒3)」

：このカードは破壊されない。

周囲1HEX内の「魔犬」「魔狼」全ては+1+1+1+1を得る。

！・「(2+黒2)&手札2枚」：名称「魔狼」、黒、獣、サイズM、A3/3/3のファミリアサヴァント2体を同HEXにアクティブで場に出す。

火毒猛界ムスペルヘイム。

カラー赤。(火、毒属性)

伝説の依存のアーティクル。

：プレイ 無効x。

フィールド。

\*・「(4+赤4)」

：このカードは破壊されない。

あなたがプレイする赤のサヴァントの\*のコストは「合計(4)」  
少なくなる。

周囲1HEX内の赤のサヴァント全ては+2+2+2+2を得る。

《マジック》(MAGIC)

スパーク。(SPARK)

カラー橙。(雷属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\* - 「(2 + 橙2)」 : 3 HEXまでを対象とし、その全てにダメージ2点を与える。

サンダー・ブレード。(THUNDER BLADE)

カラー橙。(雷属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\* - 「(1 + 橙1)」 : 1方向を選ぶ。その直線2 HEX上の全てにダメージ2点を与える。

ブレイズ。(BLAZE)

カラー赤。(火属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\* - 「(赤2)」 : 1 HEXを対象とし、その全てにダメージ3点を与える。

フレア。(FLARE)

カラー赤。(火属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

\* - 「(赤4)」 : 1 HEXを対象とし、その全てにダメージ5点を与える。

キユア。(CURE)

カラー橙。(命属性)

効果のマジック。

: 名称 「トリート」

\* - 「(橙2)」 : 1 HEXを対象とし、その全てを5点回復する。

\* - 「(橙2)」 : 1 HEXを対象とし、その不死と霊体のサヴァント全てにダメージ5点を与える。

フレイムタン。(FLAME TONGUE)

カラー赤。(火属性)

効果のマジック。

: 名称 「ダメージ」

\* - 「(1+赤1)」 : 1方向を選ぶ。その直線2 HEX上の全てにダメージ2点を与える。

ラヴァ・アックス。(LAVA AXE)

カラー赤。(火属性)

効果のマジック。

: 名称 「ダメージ」

\* - 「(2+赤2)」 : 1方向を選ぶ。その直線2 HEX上の全てにダメージ3点を与える。

ラヴァランチ。(LAVALANCHE)

カラー赤。(火属性)

効果のマジック。

：名称 「ダメージ」

セット【あなたの赤のエレメント10枚以上】(このカードはHEXに裏向きでセットできる。セットしたターンはプレイできない。リバースしてプレイする際、【】内の条件が満たされているなら、このプレイはコストを無視し、スタックに積まれない)

\*・「(4+赤4)」：1HEXを対象とし、その周囲1HEX内の全てにダメージ4点を与える。

このターン、このカードから【1点以上のダメージを受けた】全ては回復、再生できない。

このターン、このカードから【1点以上のダメージを受けたサヴァントが場から使用不可に送られる】場合、代わりにそれを除外へ送る。

ギャザー。(GATHER)

カラー黒。(重、空属性)

効果のマジック。

：名称 「マニピュレート」

セット【あなたの使用不可に黒のマジック5枚以上】

\*・「(2+黒2)」：1HEXを対象とする。その周囲2HEX内から敵のサヴァントを可能な限り、4体以下とサイズ合計8以下になるように選ぶ。

選んだサヴァント全ては対象のHEXに移動する。(すでにそこにいるものは移動しない)

\*・「(1+黒1)」：1HEXを対象とする。その周囲2HEX内から味方のサヴァントを可能な限り、4体以下とサイズ合計8以下になるように選ぶ。



選んだサヴァント全ては対象のHEXに移動する。(すでにそこに  
いるものは移動しない)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6712s/>

---

変わらなくちゃね

2011年8月11日03時27分発行